

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第33集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

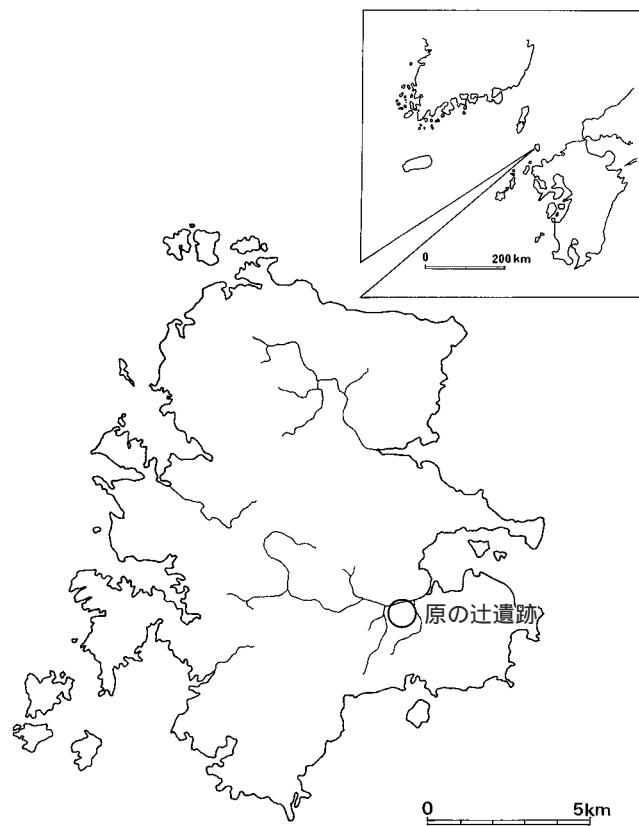
2 0 0 6

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第33集

はる つじ
原 の 辻 遺 跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書





(西から内海を望む)



(北から印道寺港を望む)

原の辻遺跡遠景



不條D～H区河川跡検出状況



不條D区南トレンチ河川跡遺物出土状況

巻頭カラー



船着き場跡 2 区 鋳造鉄斧出土状況



高元 A - 1 区 2 号甕棺墓検出状況

発刊にあたって

本書は、国庫補助を受けて実施した、平成17年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は、長崎県内はもとより、全国でも弥生時代を代表する大規模環濠集落の一つとして周知されている遺跡であり、これまでの調査では、日本最古の船着き場跡をはじめ、大陸との交流を物語る数多くの重要な遺構や遺物が発見されています。これらの調査成果から、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の王都として特定され、平成12年11月には国特別史跡指定を受けました。

平成17年度の範囲確認調査は、以前から確認されていた主要な遺構の性格と規模を解明することを目的として、不條地区・船着き場跡・高元地区の調査を実施しました。

その結果、不條地区では、平成15年度に検出された護岸遺構の対岸の状況を確認するとともに新たな河川の流れも確認できました。また、高元地区では、墓地として周知されていたところに、溝や柱穴などの新たな遺構を検出することができました。

船着き場跡は、平成8年に確認されましたが、範囲や周辺の状況などわからない部分も多く、その全貌解明が待たれておりました。今年度の調査では、船着き場が周りに水路をめぐらした島状の形態であったこと、水路を石組みで構築していたことなどさまざまな成果を上げることができました。

これらの調査成果が学術的な資料として広く活用され、また遺跡の保存整備に大いに役立つことができるよう念願いたします。

最後に、発掘調査の実施に当たり、御理解と御協力をいただきました地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成18年3月24日

長崎県教育委員会教育長 立石 晓

例　　言

1. 本書は、原の辻遺跡調査研究事業に伴って実施した、平成17年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。
2. 本事業は、遺跡範囲内の環濠や河川等の状況調査を目的として、平成14年度から実施している。
3. 本書に収録した調査区の所在地は、長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触字不條・八反、字高元である。
4. 調査は、長崎県教育委員会が主体となり、原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織

調査指導委員会	委員長	西 谷 正（九州大学名誉教授）
	委 員	小 田 富士雄（福岡大学名誉教授）
	委 員	金 関 恕（大阪府立弥生文化博物館館長）
	委 員	工 楽 善 通（大阪府立狭山池博物館館長）
	委 員	沢 田 正 昭（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）
	委 員	日 野 尚 志（佐賀大学名誉教授）
	委 員	松 井 章（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室長）
	委 員	宮 本 長二郎（東北芸術工科大学芸術学部教授）

〔委員記載は50音順〕

原の辻遺跡調査事務所

所 長	安 楽 勉
係 長	村 川 逸 朗
係 長	森 崎 伸 一
主任文化財保護主事	福 田 一 志（調査担当）
文化財保護主事	寺 田 正 剛（調査担当）
文化財保護主事	林 隆 広（調査担当）
文化財保護主事	溝 上 貴 稔（調査担当）

5. 本書で使用した遺構・遺物の実測、製図、および写真撮影は、原の辻遺跡調査事務所が行った。
6. 本書に収録した遺物・図面・写真類は、原の辻遺跡調査事務所で保管している。
7. 本書で用いた座標は日本測地系である。

遺跡内に設置された既存の基準点について、平成14年度4月1日の測量法の改正に伴い壱岐地区に高さの基準である国家水準点が設置され、標高の観測を再度実施したところ、0.417mの比高差があったことが判明した。したがって、平成17年度の調査および報告書から-0.417mの修正をおこなった新しい標高値を採用するものとする。

8. 本書の執筆担当者は、本文目次に（ ）で示している。
9. 船着き場跡の調査に際しては、文化庁記念物課、(財)大阪市文化財協会 趙哲済氏、長崎大学教育学部 長岡信治氏に現地にて御指導いただいた。記して感謝申し上げます。
10. 本書の編集は各担当者の協力を受けて、寺田が行った。

本文目次

I 遺跡の立地と環境.....	1 (寺田)
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
II 調査に至る経緯.....	5 (寺田)
III 調査	
1. 不條地区の調査.....	(寺田)
(1) 調査概要.....	8
(2) 遺構と遺物.....	11
(3) 小結.....	61
2. 不條地区 船着き場跡の調査.....	(福田)
(1) 調査の経緯と概要.....	69
(2) 平成 8 年度の調査成果.....	70
(3) 層位.....	73
(4) 各トレンチの調査成果.....	82
(5) 出土遺物.....	85
(6) 小結.....	87
3. 高元地区の調査.....	(溝上)
(1) 調査概要.....	93
(2) A 区の調査成果.....	96
(3) B 区の調査成果	124
(4) 小結	127
IV まとめ	130 (寺田)

付 編 平成17年度原の辻遺跡（不條地区）における自然科学分析

挿 図 目 次

第1図	壹岐島地質図	1
第2図	原の辻遺跡周辺の弥生時代・古墳時代の主な遺跡(1/25,000)	3
第3図	平成17年度調査研究事業調査区位置図(1/4,000)	7
第4図	不條地区調査区および遺構配置図(1/500)	10
第5図	C区中央トレンチ0号河川跡土層図および遺物出土状況(1/60)	12
第6図	C区中央トレンチ0号河川跡出土土器(1/4, 1/2)	13
第7図	D区北トレンチ0号河川跡出土土器(1/4)	14
第8図	D・E区0号河川跡検出状況(1/100)	15
第9図	D区南トレンチ0号河川跡土層図および遺物出土状況(1/60)	16
第10図	D区南トレンチ周辺出土土器河川II層(1)(1/4)	17
第11図	D区南トレンチ周辺出土土器河川II層(2)(1/4)	18
第12図	D区南トレンチ周辺出土土器河川III層(1)(1/4)	20
第13図	D区南トレンチ周辺出土土器河川III層(2)(1/4)	21
第14図	D区南トレンチ周辺出土土器河川III層(3)(1/4)	22
第15図	D区南トレンチ周辺出土土器河川III層(4)(1/4)	23
第16図	D区南トレンチ周辺出土土器河川III層(5)(1/4)	24
第17図	D区南トレンチ周辺出土土器河川III層(6)(1/4)	25
第18図	G・H区1号河川跡検出状況(1/100)	26
第19図	G・H区1号河川跡・3号河川跡土層図および遺物出土状況(1/60)	27
第20図	G・H区1号河川跡出土土器河川II層(1/4)	29
第21図	G・H区1号河川跡出土土器河川III層(1)(1/4)	30
第22図	G・H区1号河川跡出土土器河川III層(2)(1/4)	31
第23図	G・H区1号河川跡出土土器河川III層(3)(1/4)	32
第24図	G・H区1号河川跡出土土器河川III層(4)(1/4)	33
第25図	G・H区1号河川跡出土土器河川III層(5)(1/4)	33
第26図	F・G区2号河川跡検出状況(1/100)	35
第27図	E区南トレンチ土層図(1/60)	36
第28図	F区2号河川跡中央トレンチ土層図(1/60)	36
第29図	E・F区2号河川跡出土土器(1)(1/4)	37
第30図	E・F区2号河川跡出土土器(2)(1/4)	38
第31図	G区3号河川跡出土土器(1/4)	39
第32図	E区中央トレンチ土層図(1/60)	40
第33図	A区北トレンチ土層図(1/60)	40
第34図	E区1号溝検出状況(1/40)	41
第35図	E区1号溝出土土器(1/4)	42
第36図	G区2号溝検出状況(1/40)	43
第37図	G区2号溝出土土器(1/4)	43
第38図	A区3号溝検出状況および土層図(1/20)	44
第39図	A区3号溝出土土器(1/4)	45
第40図	E区集石遺構(1/40)	46
第41図	E区集石遺構周辺出土土器(1/40)	46
第42図	G区祭祀土坑出土土器(1/4)	47
第43図	石器(1)[旧石器・縄文時代](1/2)	47
第44図	石器(2)[弥生時代](1/3)	48
第45図	石器(3)[弥生時代](1/3)	49

第46図	金属器・骨角器・ガラス玉(1/2・1/1).....	51
第47図	木製品①[D区南トレンチ0号河川跡](1/4・1/10)	52
第48図	木製品②[G・H区1号河川跡](1/6・1/10)	53
第49図	木製品③[G・H区1号河川跡](1/6・1/2)	54
第50図	D～F区河川跡状況図(1/500)	61
第51図	1号河川跡造成状況(1/300)	62
第52図	船着き場跡位置図.....	69
第53図	平成8年度の調査区および遺構配置図(1/1,000)	71
第54図	平成8年度検出の船着き場実測図と今年度の調査区配置図(1/400)	72
第55図	平成8年調査時の土層図(B-5・A-11区)(1/80)	74
第56図	平成8年調査時の土層図(A-12～14区)(1/80)	75
第57図	平成8年調査時の土層図(A-15～17区)(1/80)	76
第58図	1区・2区平面図および土層図(1/80)	78
第59図	3区・4区平面図および土層図(1/80)	79
第60図	5区・6区・7区平面図および土層図(1/80)	80
第61図	8区・9区平面図および土層図(1/80)	81
第62図	出土遺物(1/4, 1/2)	86
第63図	3区出土鋳造鉄斧実測図()	86
第64図	船着き場跡周辺の復元図(1/400)	88
第65図	高元地区調査区位置図(1/2,000)	94
第66図	高元A区遺構配置図(1/100)	95
第67図	1号甕棺墓出土状況(1/20)	96
第68図	1号甕棺実測図(1/5)	96
第69図	2号甕棺墓出土状況(1/20)	97
第70図	2号甕棺実測図(1/5)	97
第71図	A区中央部遺構検出状況および遺物出土状況(1/50)	99
第72図	1号溝平面図および断面土層図(1/20)	100
第73図	トレンチ②2号溝平面図および断面土層図(1/20)	101
第74図	1号溝出土遺物(1/4)	103
第75図	2-b号溝下層出土遺物(1/4)	104
第76図	2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物①(1/4)	105
第77図	2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物②(1/4)	107
第78図	2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物一括(1/4)	109
第79図	A-1区土層図および遺物・遺構検出状況(1/40)	111
第80図	3号溝出土遺物①(1/4)	113
第81図	3号溝出土遺物②(1/4)	114
第82図	3号溝下および南側出土遺物(1/4)	115
第83図	A-4区pit14出土遺物(1/2)	116
第84図	A-4区土層図および遺構検出状況・柱穴断面図(1/40)	117
第85図	整地層出土遺物①(1/4)	119
第86図	整地層出土遺物②(1/4)	121
第87図	整地層出土遺物③(1/4)	123
第88図	高元A区出土石器(1/2・1/4)	125
第89図	B-1区出土鉄器(1/2)	125
第90図	高元B区調査区位置図および土層図(1/120)	126
第91図	内濠・中濠・外濠と1・2号溝対比図	128

表 目 次

第1表	原の辻遺跡周辺の弥生時代・古墳時代の主な遺跡	4
第2表	出土土器観察表①	55
第3表	出土土器観察表②	56
第4表	出土土器観察表③	57
第5表	出土土器観察表④	58
第6表	出土土器観察表⑤	59
第7表	出土遺物観察表	60
第8表	北側丘陵先端部周辺調査報告書対応表	94
第9表	1・2号甕棺観察表	97
第10表	1・2号溝土層観察表	101
第11表	1号出土遺物観察表	103
第12表	2-b号溝下層出土遺物観察表	104
第13表	2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物①観察表	105
第14表	2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物②観察表	106
第15表	2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物(一括)観察表	108
第16表	A-1区土層観察表	110
第17表	3号溝出土遺物①観察表	112
第18表	3号溝出土遺物②観察表	114
第19表	3号溝下および南側出土遺物観察表	115
第20表	A-4区pit14出土遺物観察表	116
第21表	A-4区土層観察表	116
第22表	整地層出土遺物①観察表	118
第23表	整地層出土遺物②観察表	120
第24表	整地層出土遺物③観察表	122
第25表	高元A区出土石器観察表	124
第26表	B-1区出土鉄器観察表	125

図 版 目 次

図版1	D区北トレンチ遺物出土状況 / D区南トレンチ土層堆積状況 / E区0号河川跡検出状況	63
図版2	集石遺構検出状況 / 1号河川跡検出状況 / 1号河川跡遺物出土状況	64
図版3	1号河川跡建築材出土状況 / 1号河川跡短甲出土状況 / 2号河川跡土層堆積状況	65
図版4	3号河川跡検出状況 / 1号溝検出状況 / 3号溝土層堆積状況	66
図版5	祭祀土坑検出状況 / 調査風景(D区南トレンチ) / 調査風景(集石遺構周辺)	67
図版6	1区河川検出状況 / 2区礫検出状況 / 2区礫検出状況	89
図版7	3区落ち込みの断面 / 6区河川の東端検出状況 / 7区北壁の状況	90
図版8	7区礫及び樹木出土状況 / 8区礫検出状況 / 8区礫検出状況近景	91
図版9	8区礫と樹木の状況 / 8区礫・土器出土状況 / 9区礫検出状況	92
図版10	幡鉾川沿道から見た現在の北側丘陵先端部(北 南)	94
図版11	高元地区遺構検出状況	95
図版12	A~B区間に露出する玄武岩層	96
図版13	1号甕棺墓検出状況 / 2号甕棺墓半截状況	98
図版14	1号溝完掘状況 / 貝層断面 / A-2区整地層調査風景	99
図版15	1号溝および2-a・b号溝断面土層(左:1号溝, 右:2号溝)	102
図版16	A-1区東壁 / A-1区完掘状況	110
図版17	A-4区北壁	116
図版18	B区南側より幡鉾川方面を望む(南 北)	125
図版19	B区完掘状況	126

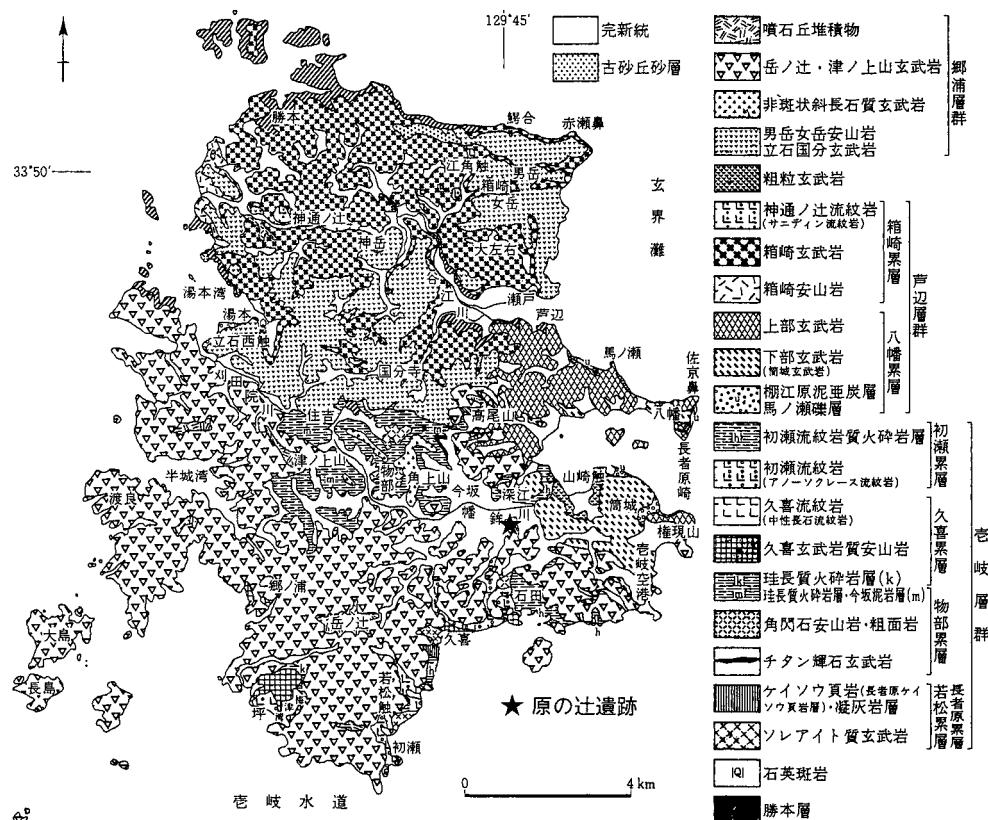
I . 遺跡の立地と環境

1 . 地理的環境

原の辻遺跡が所在する壱岐島は、九州と朝鮮半島との間に位置する東西約15km、南北約17km、面積約139km²の島である。島内で最も高い山は、島南部の岳の辻の標高213mであり、全体的に平坦で起伏が乏しい地形である。島の地質（第1図）は全体の9割以上が玄武岩地域であり、島北部の一部に古第三紀に形成された砂岩・泥岩による勝本層が露出しており、その良質な部分は頁岩として遺跡出土の石器の素材として利用されている。

島の位置としては、佐賀県唐津市までが約30km、対馬市巌原までが約70km、韓国釜山までが約160kmであり、壱岐島北部の勝本町からは対馬を見ることができ、また対馬島北部の上対馬町・上県町からは韓国の島影を望むことができる距離である。

原の辻遺跡は、壱岐島の南東の標高6mの低地部から18mの丘陵部にかけて立地する遺跡である。遺跡の北側低地部には、島内で最も流路が長い幡鉾川が流れしており、この川の流れを利用して、「深江田原」という沖積平野では県内第1の広大な水田地帯が形成されている。また遺跡の東側には内海とよばれる湾入り約3.5km、水深10m以内の比較的浅い湾が入り込んでおり、幡鉾川はこの湾に流れ込んでいる。原の辻丘陵から内海までの距離は約1.5kmであり、比高差は約5~6mで流れはゆるやかである。また、幡鉾川の河口周辺は切り立った崖が両河岸まで迫っている。



第1図 壱岐島地質図

遺跡の中心部の丘陵は玄武岩台地の上に形成された地形で、先端は後世の削平などにより岩盤が露出している。昭和30年ごろまでは、畠土を高く盛り上げた“まんじゅう畠”的風景が見られた地域であり、その名残が遺跡の中でも随所に残っている。一方低地部は、平成4～14年度にかけて幡鉾川流域総合整備事業で広大な圃場が造成されており、当時の景観とは趣を異にしている。

2. 歴史的環境 ~原の辻遺跡周辺の弥生時代・古墳時代の遺跡を中心として~

原の辻遺跡は、旧石器時代、弥生時代前期から古墳時代前期、奈良時代までの遺構・遺物を包蔵する複合遺跡である。特に弥生時代中期から後期にかけての多重にめぐる環濠集落や船着き場跡など、組織力と高度な技術を駆使して構築された遺構や、中国・朝鮮半島をはじめ国内の他地域との交流を物語る豊富な出土遺物は、全国でも類を見ない。

原の辻遺跡が形成された背景について若干ふれるとすれば、壱岐島内での縄文時代の遺跡は20ヶ所ほどあげられるが、弥生時代につながる縄文時代晚期後半の遺物が出土する遺跡はきわめて少ない。またそれら遺跡の分布も壱岐島西側に偏っており、特に原の辻遺跡周辺では今までのところ確認されていない。これらの条件から考えれば、原の辻遺跡の成立は内在的に派生したものとは考えにくく、島外からの移民によるものと考えた方が自然であろう。

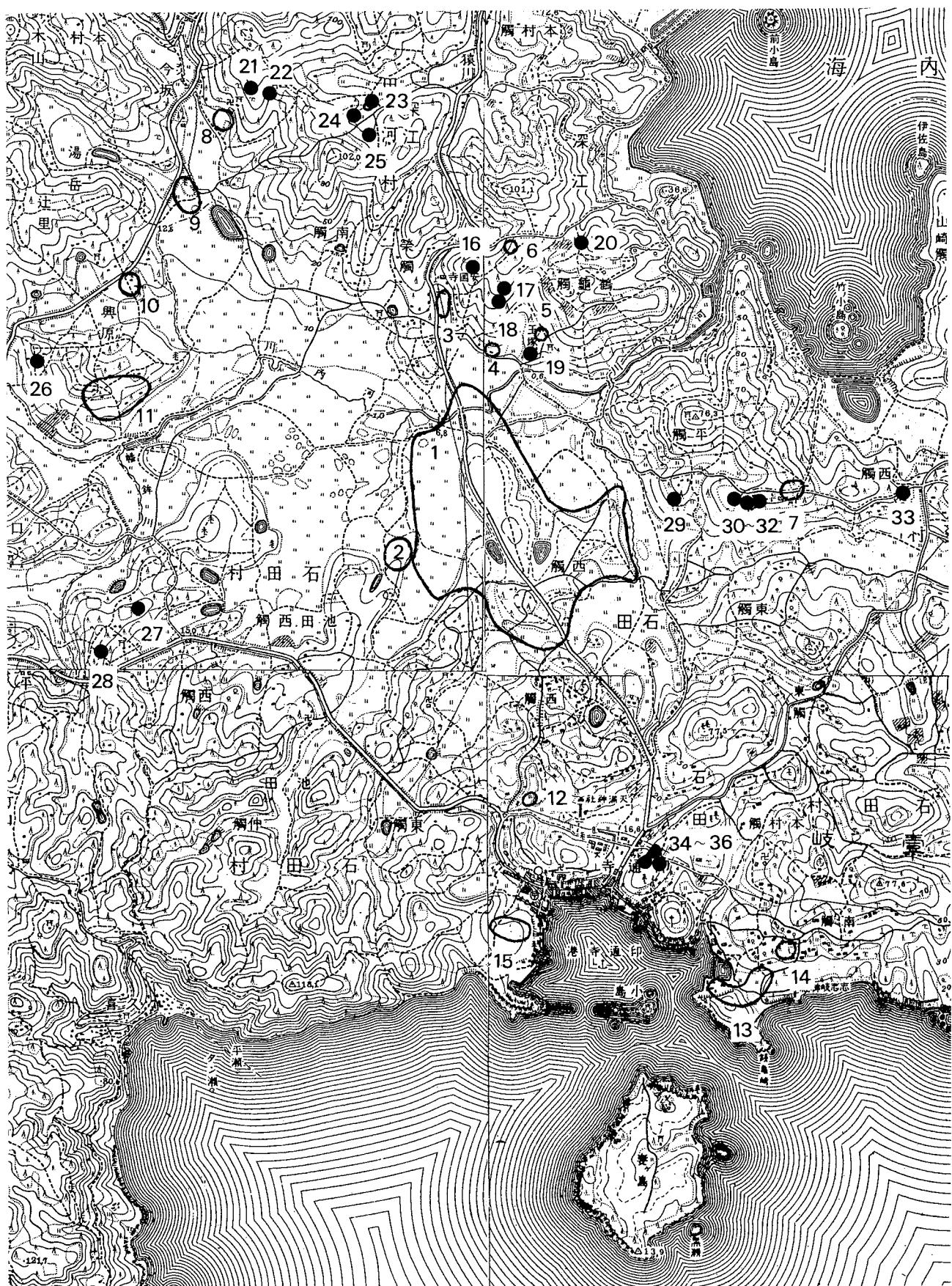
第2図は、原の辻遺跡周辺の弥生時代・古墳時代の遺跡の分布をまとめたものである。原の辻遺跡の性格を考慮した場合、「海の王都」としての機能が備わっていることから、外洋から湾、湾から集落というアクセスがあったことが考えられる。具体的にいうと、海域から原の辻遺跡への導入路としては、第1に内海湾から幡鉾川（第2図では河内川）をさかのぼり直接遺跡の内部まで進入する経路、第2に印通寺港から上陸し陸路で遺跡南側から進入する経路の2つが有力である。

第1の経路は、最も自然な経路であると考えるが、一方ではその経路沿いに弥生時代の遺跡は今までのところ確認されていない。一度、幡鉾川沿いに下流まで分布調査を行ったことがあるが、河口付近で弥生土器の小片を1点を採集した程度で、遺跡を位置づけるほどの成果ではなかった。

第2の経路としては、印通寺港を取り囲むように弥生時代の遺跡が散在しており、弥生時代以来この港が機能していたことが裏付けられる。ただ各遺跡での詳細な調査や遺物の検証は行われておらず、原の辻遺跡との関連や時期的な経路の変遷があったかどうかについては明確ではない。

幡鉾川流域の弥生時代の遺跡の分布では、原の辻遺跡の北側丘陵部の縁辺部に墓地を主体とする遺跡が存在する（4・5・6）。また原の辻遺跡を除く低地部には遺跡の存在は確認されていない。一方、幡鉾川上流部では低地に突き出した丘陵部を中心として散布地があり（8・9・10・11），これらの遺跡は連続して古墳時代の遺物を包蔵している。

原の辻遺跡では古墳時代前期前葉の住居跡が確認されているものの、それ以降の遺構はほとんど見ることができない。ただ、眼下に原の辻丘陵を見渡すことのできる北側丘陵部の山頂部に、5世紀代の竪穴式石室もしくは竪穴系横口式石室を有する古墳（16・17・18）が検出されている。また幡鉾川流域の古墳の立地としては、弥生時代の遺跡が立地する低丘陵よりもさらに高い見晴らしのよい位置



第2図 原の辻遺跡周辺の弥生時代・古墳時代の主な遺跡 (1/25,000)
〔昭和23年発行地形図を使用〕

第1表 原の辻遺跡周辺の弥生時代・古墳時代の主な遺跡

【弥生時代】

番号	遺跡名	種別	立地	標高
1	原の辻遺跡	環濠集落・墓地・水田など	丘陵・平野	6m～18m
2	鶴田遺跡	墓地(甕棺・石棺)	台地	10m～15m
3	安国寺前遺跡	散布地	台地	8m～10m
4	閔縁遺跡	墓地(甕棺・石棺)	台地	10m～15m
5	松尾遺跡	墓地(石棺)	台地	22m
6	清水遺跡	墓地(甕棺)	丘陵	60m～70m
7	イノの辻遺跡	墓地(甕棺・石棺)	台地	50m～60m
8	定光寺前遺跡	散布地	平野	40m
9	覗城遺跡	集落・墓地	丘陵	16m
10	興触遺跡	散布地	丘陵	13m
11	興原遺跡	散布地	丘陵	10m～25m
12	津宮遺跡	墓地(甕棺・石棺)	丘陵	28m～32m
13	池田遺跡	散布地	平野	1m
14	志自岐遺跡	散布地	丘陵	22m～28m
15	中尾遺跡	散布地	丘陵	6m～30m

【古墳時代】

番号	遺跡名	形態・石室	立地	標高
16	大塚山古墳	円墳(竪穴系横口式石室)	丘陵	70m
17	俵山古墳	円墳(竪穴式石室)	丘陵	70m
18	俵山1号墳	円墳	丘陵	70m
19	玉塚古墳		丘陵	23m
20	鶴亀鬼屋古墳	横穴式石室	丘陵	50m
21	覗上山1号墳	前方後円墳(横穴式石室)	丘陵	80m
22	覗上山2号墳	前方後円墳	丘陵	80m
23	堂山1号墳	円墳	丘陵	60m
24	堂山2号墳	円墳	丘陵	58m
25	堂山3号墳	前方後円墳?	丘陵	70m
26	興原古墳	円墳(横穴式石室)	丘陵	30m
27	神の嶺古墳	円墳	丘陵	24m
28	坂本古墳	円墳(横穴式石室)	丘陵	32m
29	柏田古墳	円墳	丘陵	34m
30	平山1号墳	円墳(横穴式石室)	丘陵	50m
31	平山2号墳	円墳?	丘陵	52m
32	平山3号墳	円墳	丘陵	52m
33	西福寺古墳	円墳(横穴式石室)	丘陵	20m
34	小塚原1号墳	円墳	丘陵	30m
35	小塚原2号墳	円墳	丘陵	30m
36	小塚原3号墳	横穴式石室	丘陵	32m

に立地しており、古墳を造成する場所の選定に共通した意識が感じられる。

古墳の形態については、前方後円墳と確認されたものは2基あるが、6世紀後半から7世紀代に国分地区周辺に集中する巨石を用いて石室を構築する大型の古墳群と比較すると、全体的に小規模で簡素な感があり、深江田原地域から国分地域へ移行する過渡的な時期をあらわすものではないだろうか。

【参考文献】

唐木田芳文・早坂祥三・長谷義隆『日本の地質9 九州地方』共立出版株式会社 1993

宮崎貴夫「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古第4号』西海考古同人会 2001

Ⅱ . 調査に至る経緯

原の辻遺跡の調査の歴史は、1904～1905（明治37～38）年の松本友雄氏による表面採集に端を発する。氏が1927（昭和2）年にまとめた『壹岐考古録第一編』では、「深江の弥生土器三個」「深江原の辻は貝塚あらざるか」「深江原の辻採集日録」の中で、田地の灌漑のための開墾工事の際に大型土器2点、小型塊形土器数個を発掘したことや、石斧・石鎌・石錐の採集記録などの記録があり、その中に鳥居龍造氏が原の辻遺跡や出土遺物を実見したことも書かれてある。その報告は『考古学雑誌十二（七？）ノ二』「壹岐國考古通信（一）」にも掲載され、「深江原の辻（田河村）の遺物包含地」として全国に紹介された。鳥居氏のほか、梅原末治氏、中山平次郎氏、森本六爾氏、鏡山猛氏などの研究者たちも来島し調査を行っている。その後、松本氏は1931（昭和6）年の『探古日録第二輯』「原の辻研究」の中で、再度、1923（大正12）年から1927（昭和2）年までの調査報告をまとめている。

1939年、鶴田忠正氏は耕地整理工事で削り取られた原の辻台地北端の東斜面に3層の遺物包含層を確認し、発掘調査を行った。各層から出土した形態や技法の異なる土器の観察により、北部九州弥生土器編年と比較し、中期（須玖式）から後期（高三瀬式）に移行する過程を位置づけた。

1951（昭和26）年から1961（昭和36）年にかけては、東亜考古学会による5次にわたる調査が実施されている。その成果は、水野清一・岡崎敬両氏が『対馬の自然と文化』「壹岐原の辻弥生遺蹟調査概報」で報告され、1層（上層）が須玖式と高三瀬式の中間形式、2層（下層）が須玖式という、「原の辻上層式・下層式」の編年様式が設定された。

長崎県教育委員会が主体となった調査は、1974（昭和49）年の大原地区の調査からである。“まんじゅう畑”の土地基盤整備による削平工事で、甕棺片や石棺材が多量に散乱しているとの連絡が石田町教育委員会を通じてあり、緊急調査を実施することになった。約1,000m²の調査範囲に、甕棺墓51基、石棺墓19基以上、溝4条が確認され、副葬品として戦国式銅剣、トンボ玉、ガラス小玉などが出土している。

これらの幾度かの調査により、遺跡の規模が広範囲に及ぶことが判明し、翌昭和50年度から国庫補助事業による4次にわたる範囲確認調査を実施することになった。大川地区、原の久保A地区、原の久保B地区などの墓域が発見され、大川地区においては、方格規矩鏡や有鉤銅釧などが出土している。また旧石器時代の石器の出土もあり、「原の辻型台形石器」の呼称が設定された。

平成元年度、県営幡鉢川流域総合整備事業の計画が策定された。平成2年度に原の辻遺跡を含む幡鉢川流域の計画区域内320haの分布調査、平成3年度に芦辺町・石田町両教育委員会を調査主体とした計99ヶ所396m²の範囲確認調査を実施した。遺跡西側と北側で弥生時代から中世にかけての溝状遺構、杭列遺構が検出され、遺跡の範囲が約80haの広大な面積に広がることが明らかになった。

平成5年度には、台地の東側の農道建設工事および排水路敷設に伴う緊急調査（本調査）で環濠の一部が確認され、西側の部分においてもその延進の確認のための範囲確認調査を進めたところ、丘陵のまわりを濠がめぐる大規模な環濠集落であることが判明した。

このような経過を受け、原の辻遺跡が大規模な環濠集落であり、大陸との交流を物語る資料が豊富に含まれていることから、平成9年9月国指定史跡に認定され、さらにその後の調査研究により、原の辻遺跡が『魏志倭人伝』の記述の「一支国」の中心集落であることが特定され、平成12年11月国の特別史跡に指定された。また、壱岐市教育委員会を主体とした原の辻遺跡指定地内の史跡整備が進みつつあり、その資料整備の為の調査が年々実施されている。

調査研究事業は、環濠などの状況を確認するという目的で、平成14年度から平成18年度にかけて継続的に実施している。今年度の対象地区は不條地区、船着き場跡、高元地区の3地区とした。

西側低地部の不條地区は平成8年度からほぼ毎年調査が実施された地区であり、弥生時代の河川跡とその内外に数条の溝状遺構が確認されている。さらに平成15年度の主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査で護岸遺構が検出され、その対岸に西に向かう河川の存在が推測されていた。また、河川と船着き場跡との関連も考えられ、船着き場本体についても構造や規模が不確定な部分が多く、その解明が急がれていた。

高元地区は平成16年度に丘陵部の旧地形復元のための確認調査を実施しており、今年度も継続した旧地形の確認と墓域の再確認を含め、調査を実施した。

調査は、平成17年5月9日から12月27日まで実施した。

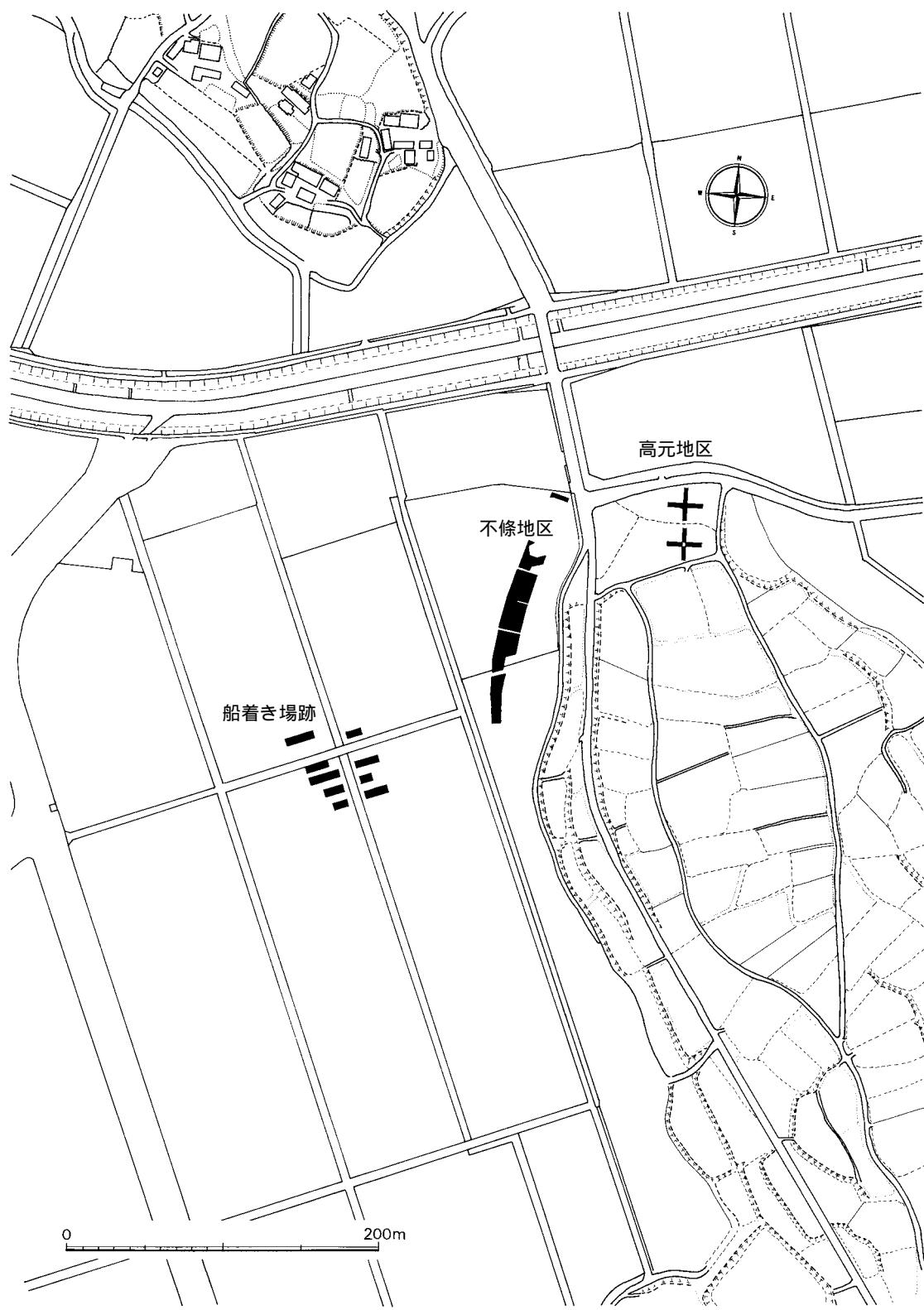
【参考・引用文献】

松本友雄『壱岐考古録第一編』1927

『探古日録（一）』1930

『探古日録（二）』1931

長崎県教育委員会『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 2005



第3図 平成17年度 調査研究事業調査区位置図(1/4,000)

III . 調 査

1 . 不條地区の調査

(1) 調査概要

不條地区では平成15年度の県道改良工事に伴う調査の際、丘陵部西側の低地部に長さ約40m、最大幅5mの護岸遺構が検出されている。

この遺構は、径50cmほどの均一な法量の地元産玄武岩の角礫を利用し、無造作に投げこんで造成された「捨石護岸」であり、川底に向かって緩やかに傾斜している。主軸は北東・南東の方向で、以前から確認されている弥生時代の河川跡の東岸にあたる。護岸の側面はかなり弓なりになっており、護岸が築かれた河川の原形がかなり蛇行していたと推測される。したがって今年の調査では、護岸遺構の対岸の状況確認と、西側に延びる流れがないかどうかの確認が主な目的となった。

また、平成11・12年度の原の辻遺跡特定事業に伴う調査では、八反地区（今年度の不條地区G・H区）で東西に流れる弥生時代中期から後期にかけての河川跡（平成11年度特定調査E区3号旧河道）が確認されている。この河川は「弥生時代後期から古墳時代前期に埋め立てられ、水田として造営された」とまとめられている。根拠としては、埋土の上に溝（同2号溝）があり、水田の用排水路として利用された可能性が強いこと、また足跡が周辺から多数検出されたことである。

この河川の流路を考えた場合、東西方向へ流れをとることから、その西側の延長上には船着き場跡が位置することとなる。船着き場跡へ通ずる河川としては、幡鉢川から南へさかのぼって至る河川（平成10年度特定A区）が確認されているが、一方では東からのルートも視野に入れる必要があるのではないか。それはこの調査区周辺（今年度調査区のG・H区）の河川内から貨泉や大陸系土器が数多く出土し「南北市縄」を裏付けるものとなっており、周辺に市場の存在を想定することも可能である。ただ船着き場が構築された時期は弥生時代中期前葉であり、この河川が流れている時期は中期中葉と若干の時期差がある。こうした理由から、この河川を再度調査することで、河川の埋没時期と整地の状況、船着き場跡との関係が明確になると想え、調査を実施することとなった。

調査は、過去の調査区を外す形で幅約15m×20mのトレーニングを基本として設定し、河川跡を主とする遺構検出を行い、調査区の南側もしくは中央の遺構の層位が明確に確認される位置にサブトレーニングを設定し掘り下げを行った。なお、一部過去の調査の再確認のために旧調査区の掘削も行っている。調査区は北からA～H区と付号し、遺物の取り上げ、遺構の記録を行った。

各調査区で検出された遺構は次のとおりである。なお（ ）は旧調査区での称号である。

A区 3号溝（平成10年度 特定調査事業 C区 1号溝）

C区 0号河川跡（平成10年度 特定調査事業 C区 2号旧河道，平成11年度 特定調査事業
A・C・D区 1号旧河道）

D区 0号河川跡（同上）

- E区 0号河川跡（同上，平成15年度 県道緊急調査 河道3，平成12年度 特定調査事業 D区
 　　1号旧河道，平成12年度 緊急雇用対策事業 旧河道）
 　　1号溝（平成12年度 特定調査事業 C区 1号旧河道西岸部落ち込み）
 　　集石遺構（新規発見）
- F区 2号河川跡（平成15年度 県道緊急調査 SD7）
- G区 1号河川跡（平成11年度 特定調査事業 E区 2号旧河道，平成12年度 特定調査事業 E区 2号旧河道，平成15年度 県道緊急調査河道2）
 　　2号溝（新規発見）
 　　祭祀土坑（平成15年度 県道緊急調査 祭祀土坑）
- H区 1号河川跡（同上）

土層については，調査区のほぼ全域が河川跡内であり，水の流れの影響から均一ではない。したがって層位の付号は各トレンチごとに行い，基本的な層序の位置を確認することとした。

基本層序は以下のとおりである。なお，河川埋没後の堆積層と河川の上層とは共通するため，従来の基本層序を参考に分類した（杉原2001）。

【基本層序】

I層 現在の表土および水田耕作土

II層 黄褐色から赤褐色の粘質土。鉄分の沈着が多く，乾燥するとクラックが生じやすい。
 　　近世から近代にかけての水田耕作土。

III層 灰色から暗灰色の粘質土。クラックを通じて鉄分の沈着があるため，黄褐色や赤褐色が強い部分もある。古代から中世にかけての遺物包含層。水田の造成土と考えられ，かなり広範囲に堆積している。

河川I層 黒色から黒褐色の粘質もしくは腐植土層。植物遺体や炭化物を多く含む。

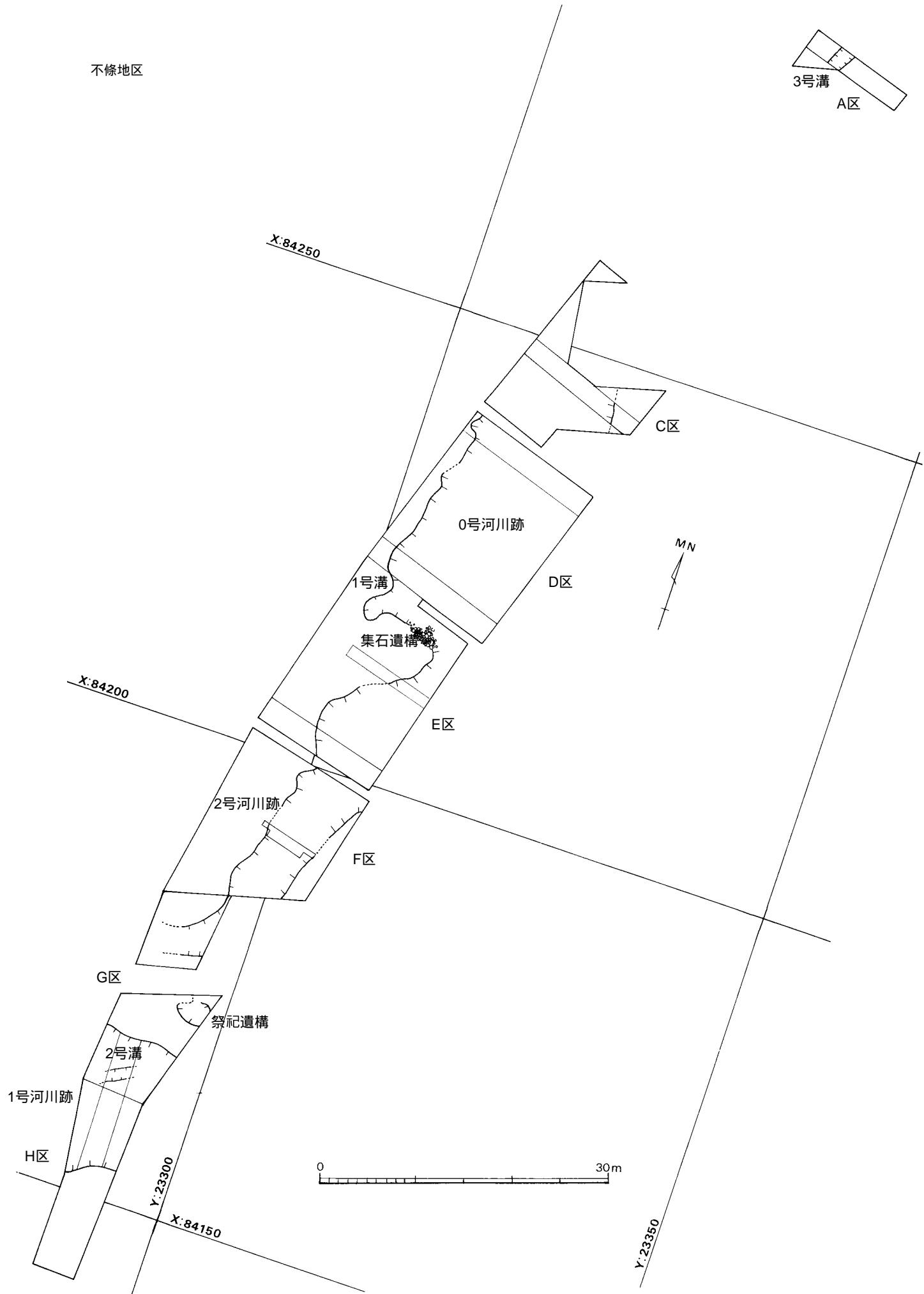
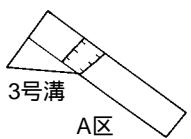
弥生時代終末から古墳時代前期の遺物を主に包蔵する。

河川II層 灰色の粘質土層。粘性が強く，炭化物をわずかに含む。弥生時代後期中頃から後半の遺物を主に包蔵する。

河川III層 褐色から黒色にかけての下層に礫が堆積する層。0号河川跡の最下層と考えられる。弥生時代中期前半から後期前葉にかけての遺物を包蔵する。C区中央トレンチやE区南トレンチでは下層の礫層のみが観察される。

河川IV層 G・H区の弥生時代中期の河川跡の下に確認された埋土であり，灰オリーブから灰褐色粘質土で木質や炭化物を多く含む層。弥生時代前期の遺物をわずかだが含む。E区の中央トレンチや南トレンチでも黒色が強いもののほぼ同質の層が確認されている。

不條地区



第4図 不條地区調査区および遺構配置図 (1/500)

【参考・引用文献】

- 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集 1999
 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集 2000
 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第21集 2001
 原の辻遺跡保存等協議会『原の辻遺跡』原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第2集 2001
 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集 2005

(2) 遺構と遺物

① 0号河川跡

0号河川跡はC区からE区にかけて確認された。この河川跡は平成10年度からの特定調査事業以来確認される弥生時代中期前葉から古墳時代前期にかけての流路で、平成15年度の県道改良工事に伴う調査では河川東側に護岸遺構が検出されており、それより前の平成12年度の特定調査の際にも集石遺構などが確認されている。今年度は流路の検出と同時に、各調査区ごとにサブトレンチを設定し、層位の確認を行った。各トレンチごとの層位の観察と出土遺物については以下のとおりである。土器の時期編年については「原の辻遺跡総集編Ⅰ」(福田編 2005)を参照した。

C区中央トレンチ(第5図)

C区中央トレンチは平成11年度旧調査区を外した位置に2m幅で設定した。0号河川跡の東岸と河川跡の河床面が確認されている。河川内には遺物と同時に自然の流木なども出土しており、川の流れが南北方向へ向いていたことが判断される。土層の堆積状況では、6層に暗灰色の硬質粘土層、7層に青灰色砂質層が見られることから、この層がある時期河岸となっていたことが推測され、時期により河川の流れが変化していることがわかる。河川の基本土層と比較すると、5層までが河川Ⅰ層、それ以下が河川Ⅱ～Ⅲ層に相当し、河床の砂礫層は弥生時代中期河川の最下層と思われる。器形がわかる遺物が少なかったため、遺物による詳細な層位の時期決定には至らなかった。

出土土器(第6図1～6)

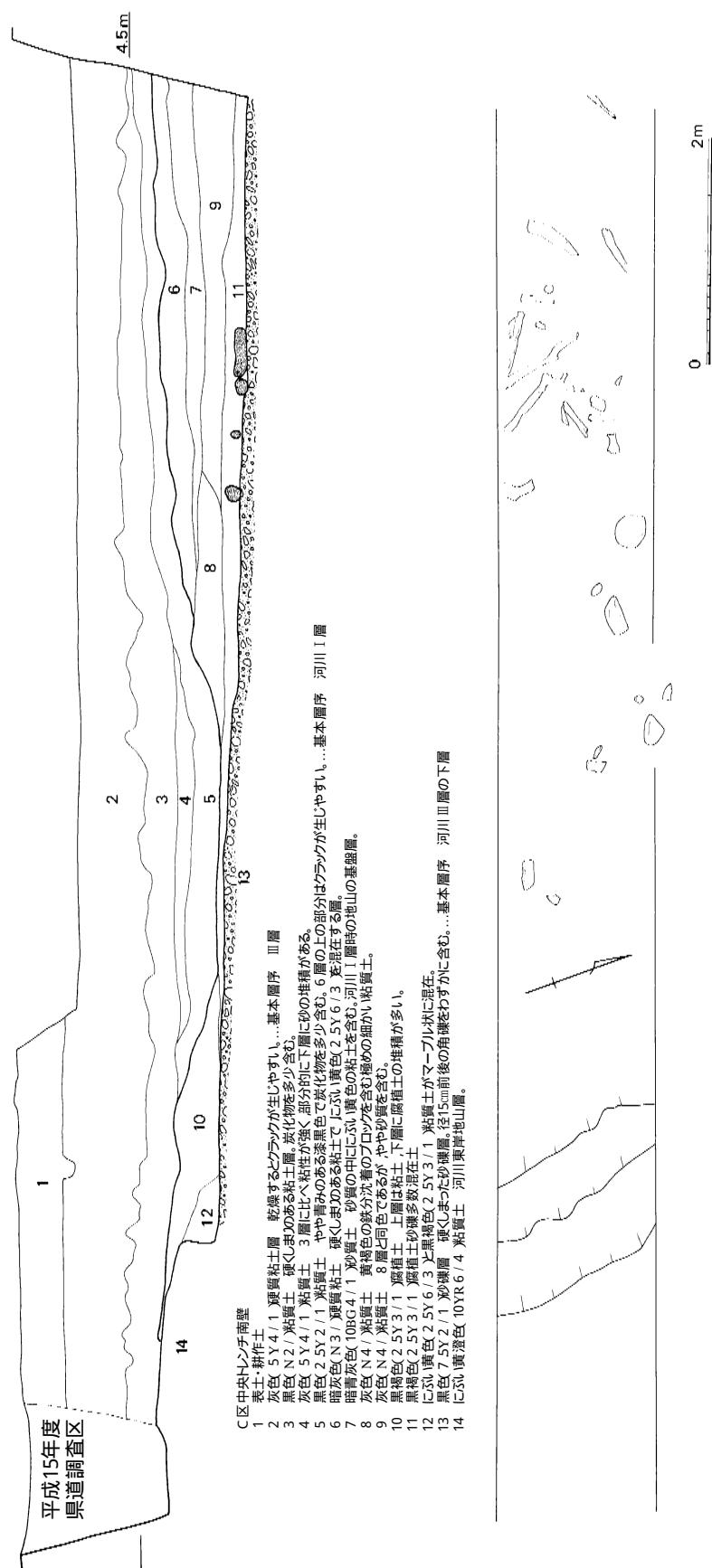
1は河床面より出土した丹塗りの器台で、河床面の時期の基準とした。ただそれ以外の遺物は出土した層位の確認ができていない。弥生時代後期後半から古墳時代初頭の鉢や甕・壺の口縁部(2～3)が出土しており、河川Ⅰ層の遺物と推測される。また、大陸系土器として三韓系瓦質土器(5)や陶質土器(6)の破片が出土する。5は円盤状に加工した土製品として再利用している。

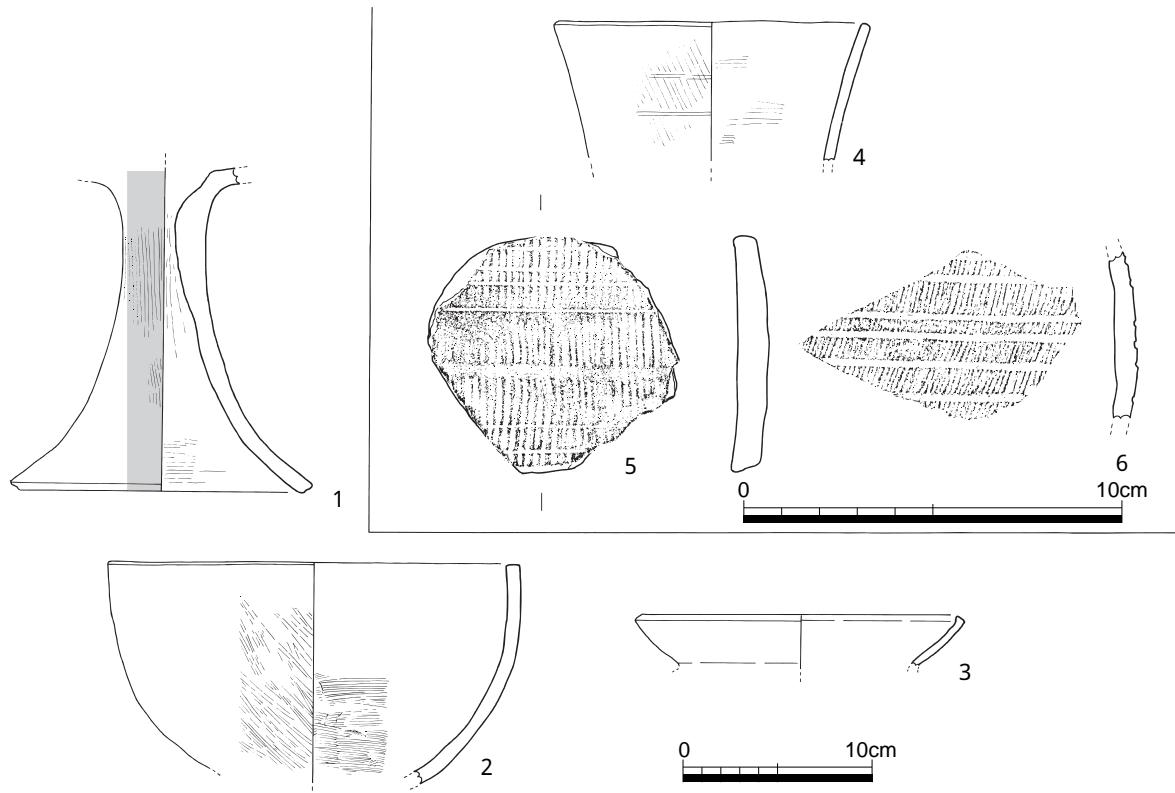
D区北トレンチ

D区の北トレンチでは河川跡のラインの確認にとどまった。河川の西側に明灰色粘土層を基盤としたテラス状の高まりが確認され、細片ではあるが多くの遺物が出土している。このテラス状の高まりは、C区中央トレンチの6層と対応できる。

出土土器(第7図1～12)

弥生時代中期前半から後期後半にかけての遺物が出土しており、河川Ⅰ層とテラス状の粘土層に含まれた遺物を一括した。河床より小型甕、広口壺、丹塗りの高壺などが出土している。7の甕形土





第6図 C区中央トレンチ0号河川跡出土土器(1/4, 1/2)

器は小型であるものの器壁が厚く、外面の調整も丁寧に仕上げられている。また9の広口壺はほぼ完形に近い状態で出土しているが、口唇部に欠損が見られ、外壁が部分的に剥落している。12の高壺は、広口壺の横に据えられた様に脚の上方を上に向けて出土した。

D区南トレンチ(第8・9図)

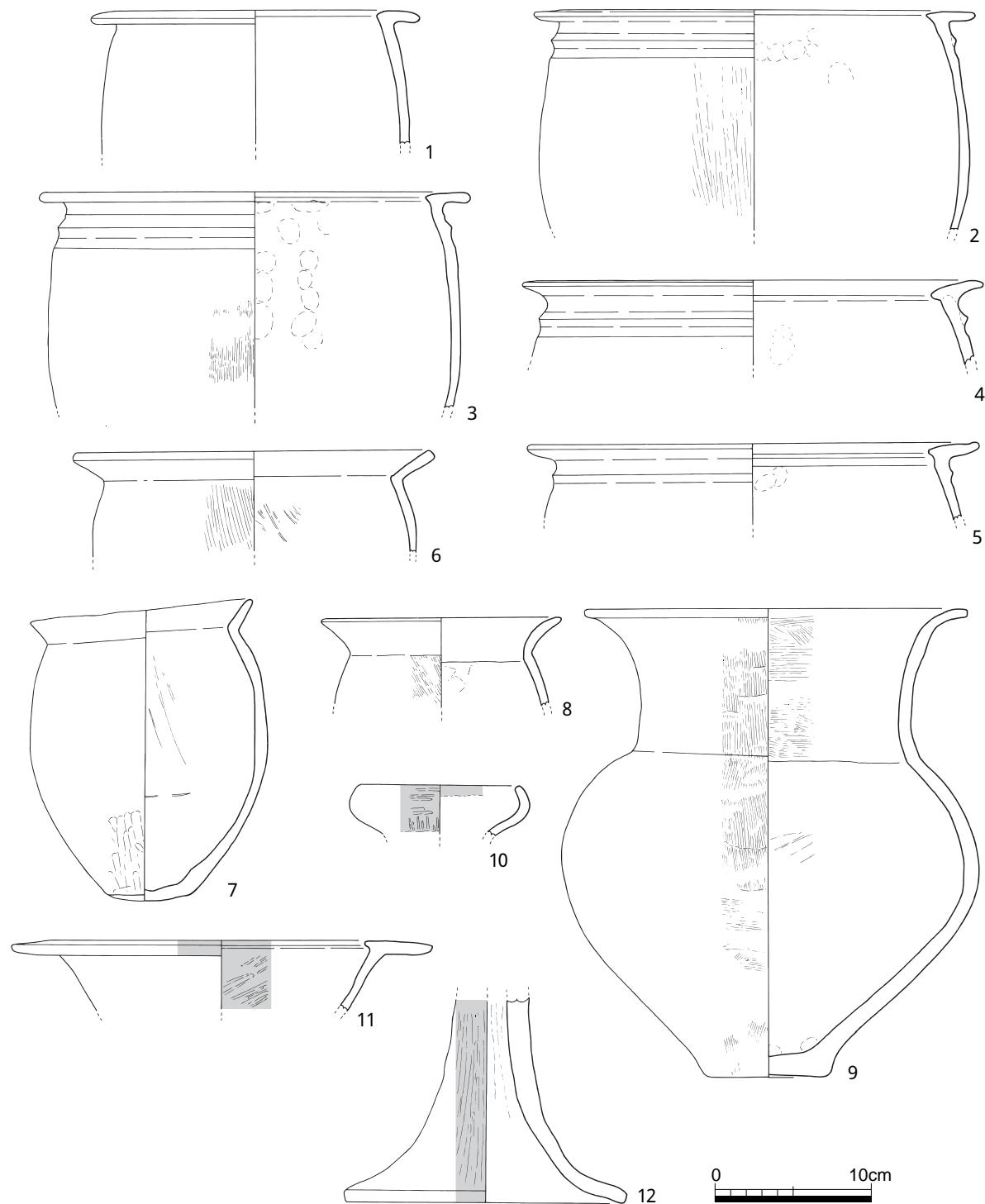
D区からE区にかけては0号河川跡の西側にあたり、東側対岸には護岸遺構が存在する。C区からD区にかけての河川幅は、護岸遺構の延長線と西側河岸を測ると約20mあるが、D区からE区にかけては急激に川幅が狭くなり、10m程度しかない。西側河岸には、護岸遺構と同じ「捨石工法」で築かれた小規模な集石遺構や、河川から5m程度陸に入り込んだ溝状の遺構などがあり、0号河川跡に人工的な造成を行った地域であることが推測される。

南トレンチはD区の南側に2.5m幅で設定し、西側の一部は木製品など遺物が集中したため拡幅して掘り下げた。狭い範囲の調査区ではあるが、弥生時代中期前葉から後期後半にかけての遺物が1,500点以上出土しており、河川の護岸の中でも特別な場所であることを裏付けている。

調査区の層位(第9図)としては大きく3層に分類され、河川の基本層位(河川I～III層)に比定できる。1層から2層は古代から中近世にかけての水田層であり、不條地区のほぼ全域で確認される。河川の埋土としてはそれ以下となる。

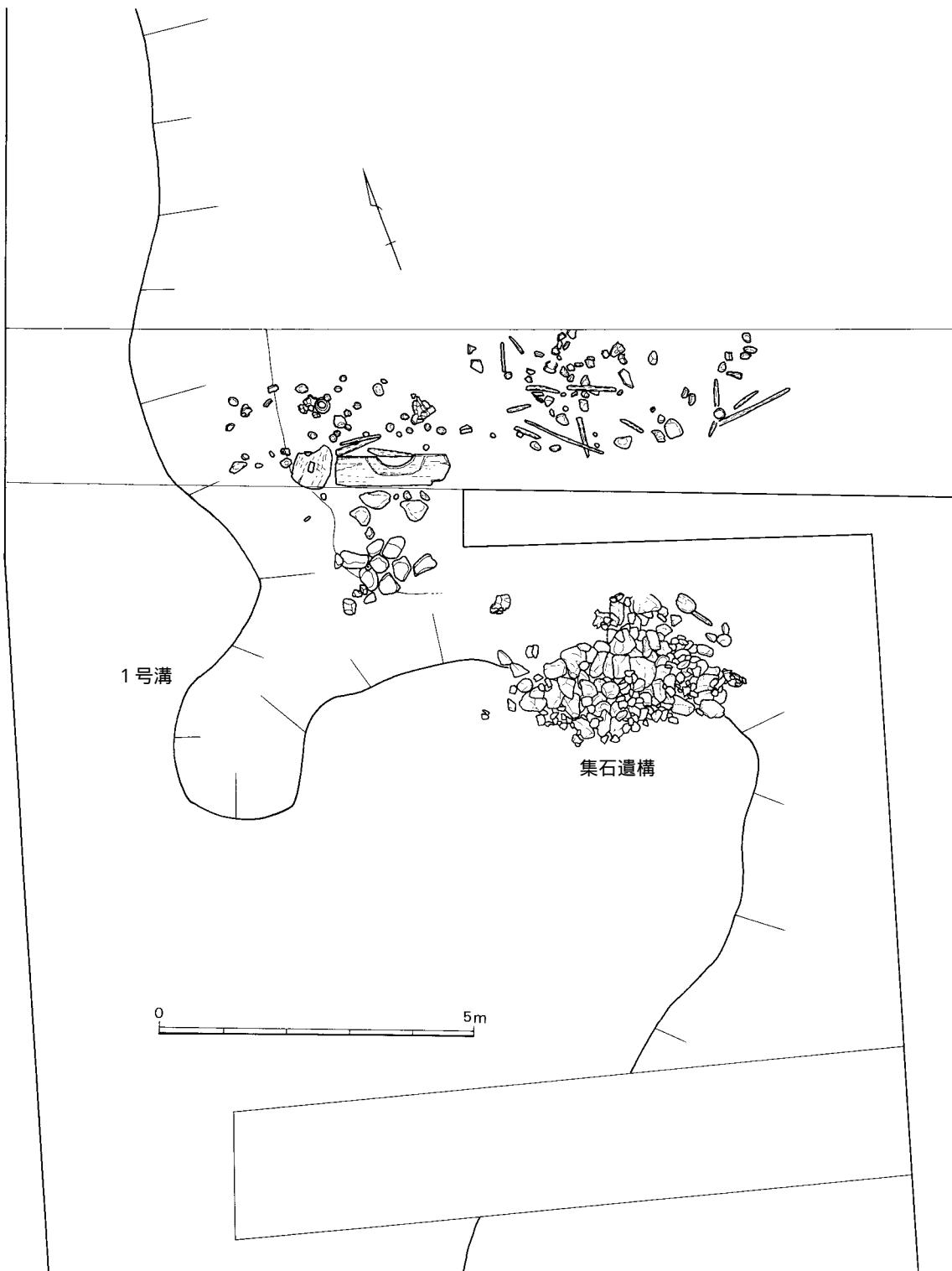
3層は腐植土が混在する黒褐色の粘質土であり、河川跡の上層に共通する堆積土である。場所によってはかなり厚く堆積する場合もあり、0号河川跡が最終的に放置された時期に一斉に堆積した層と考えられる。

不條地区



第7図 D区北トレンチ 0号河川跡出土土器 (1/4)

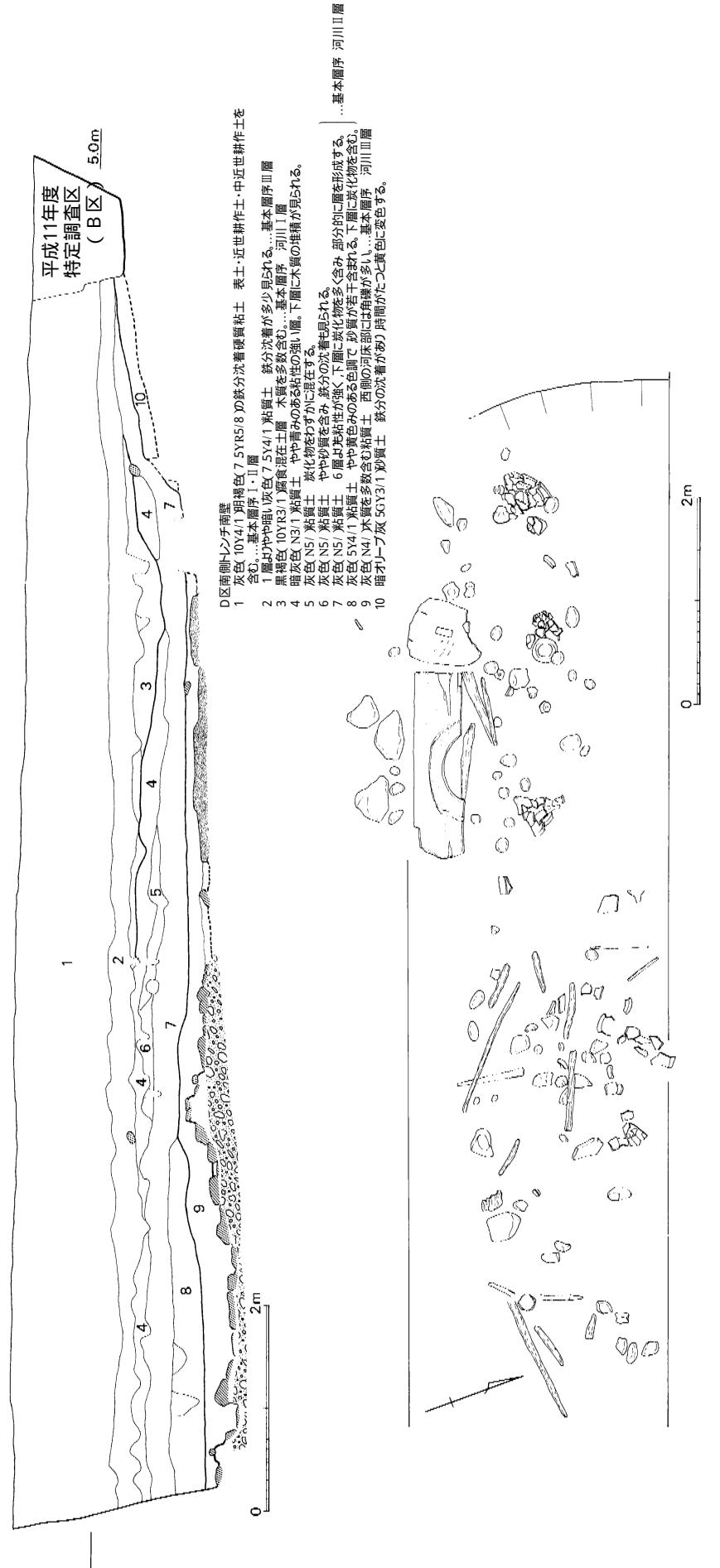
える。船着き場跡にも同層が確認されている。過去の調査から弥生時代終末期から古墳時代前半の遺物を含む層であるが、D区南トレンチではほとんど出土していない。4・5層は下層との漸移層である。6～8層はいずれも灰色の粘質土層であり、各層ともに下層に炭化物の堆積が観察された。非常にきめの細かく不純物の混在が少ない層であり、河川の堆積土としては平坦な堆積状況である。遺物

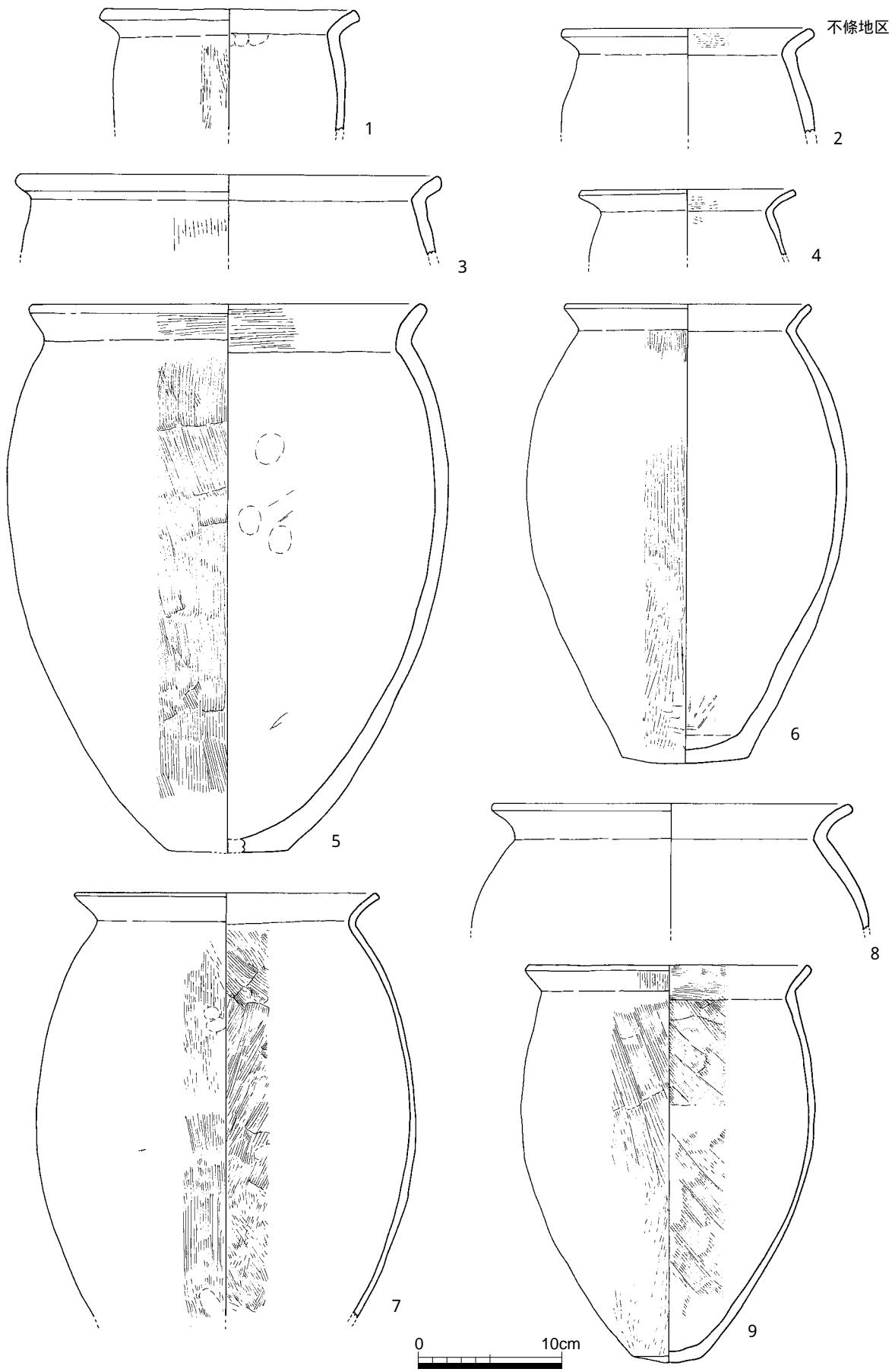


第8図 D・E区 0号河川跡検出状況 (1/100)

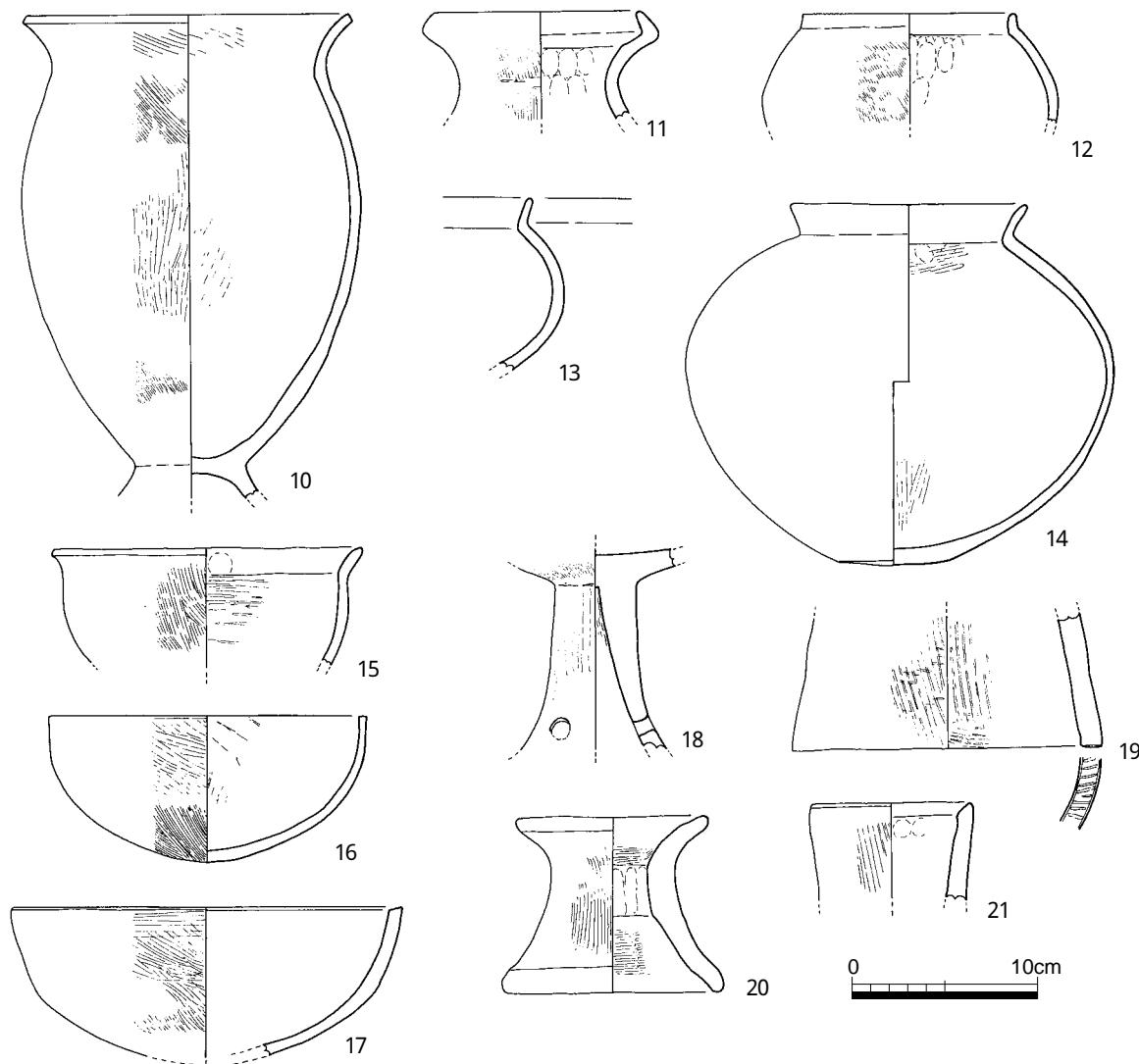
はあまり多くなく、完形に近い土器がわずかに見られた。また、樹皮や横柵（第47図1）が出土しており、樹皮から $BP1855 \pm 20$ （弥生時代後期後半）の年代を得た。9層は河川の最下層の堆積土であり、最も遺物を包含する層である。灰色の色調であるが、木質を多く含み、河床には砂礫の堆積がある。また護岸遺構や集石遺構から流れ込んだものか、人頭大の角礫も多数見られる。遺物は、弥生時

不條地区





第10図 D区南トレンチ周辺出土土器 河川Ⅱ層(1)(1/4)



第11図 D区南トレンチ周辺出土土器 河川Ⅱ層(2) (1/4)

代中期前葉から後期前半までの土器を含み、特に中期前葉から中葉にかけての遺物が多数出土した。大型建築材やねずみ返しもこの層から出土している。

河川Ⅱ層出土土器（第10・11図）

前述した灰色の粘質土層内出土の遺物である。1～9までは「く」の字口縁を有する甕で、5・6・9は底部を有するが、いずれも凸レンズ状の膨らみを持っている。外面の刷毛目が顕著で、刷毛の単位も明瞭である。10は台付甕である。台付甕の分布圏は中九州から長崎県北部を北限とする地域を主体とするもので、原の辻遺跡では非常に珍しい。胎土に金雲母は含まれない。11は複合口縁壺、12～14は短頸壺である。14は胴部が丸く大きく膨らみ、底部もレンズ状に張り出している。器面はヘラナデなどで丁寧に成形されている。15～17は鉢で、口縁を有する物（15）と持たない物（16・17）がある。18は丸い透かし孔をもつ高壊脚部、19～21は器台である。19は器表に条痕を施し、脚の端部に刻みをつける形態。20は器高が低く器壁が厚い。21は直口する形態。いずれも特徴的な遺物である。5・6が後期前葉、7が後期中葉、9・14・16が後期末に比定できる。

河川Ⅲ層出土土器（第12～17図1～70）

1～54が甕形土器である。甕の形式については、突帯の有無、口縁の傾き、底部の形状などを観点に以下の通り分類した。突帯の有無としては、口縁下に突帯をもたないもの[A]、突帯をもつもの[B]、口縁の形態としては、内傾するもの[I]、平坦のもの[II]、外に垂れ下がるもの[III]、底部は上げ底が[a]、平底[b]とする。

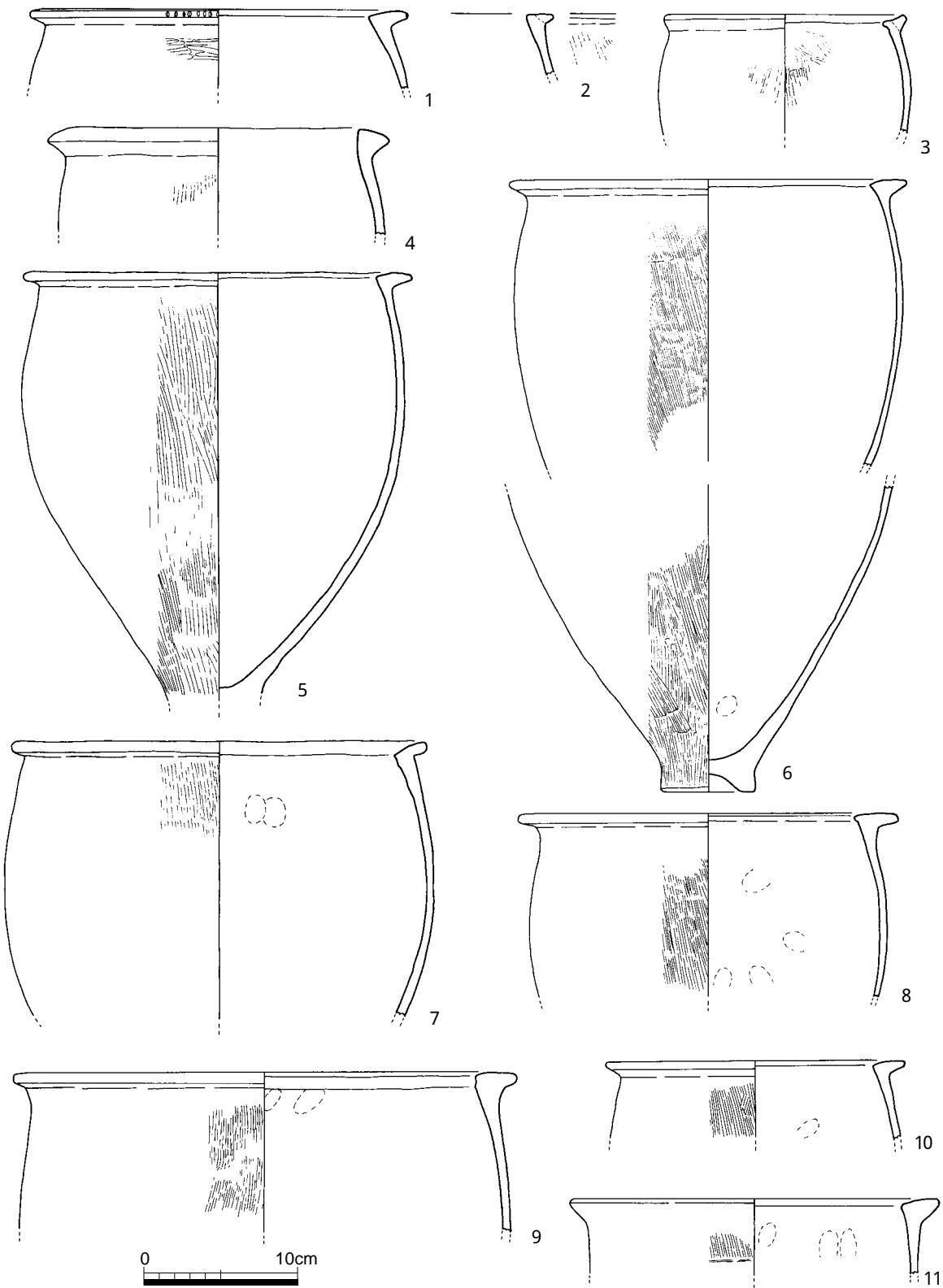
1～20までがA類を一括した。A I類としては、1・3・5～7・10～15がある。口唇が非常に短い形態(1・3・5～7・10・11)と、長く逆L字形に外反する形態(12～15)に細分できる。1は口唇に刻みがあり、外面はヘラミガキ調整を施すため古手の形態である。その他のA I類の特徴としては、口縁内外をヨコナデし、外面はタテ方向の刷毛、内面は指ナデを施す器面調整で、胎土に金雲母を含有する。底部まで残存するものとして6・12があり、いずれも上げ底である。

A II類としては、2・8・9・16～20がある。突帯状の口唇のもの(2)、短い口唇を有し、口縁から胴部にほぼ直角に折れまがるもの(16～18)、鋤先状に内側にわずかではあるが突出部をもつもの(8・19・20)などに細分される。A I類同様、タテ方向の刷毛調整を基本とし、一部ナデ消しが見受けられる(18・19)。胎土としては18・19以外は金雲母がすべて混入する。4はA I・IIのいずれにも該当しないもので、断面三角の口縁部をもち、胴部にかけて如意形に移行する形態である。

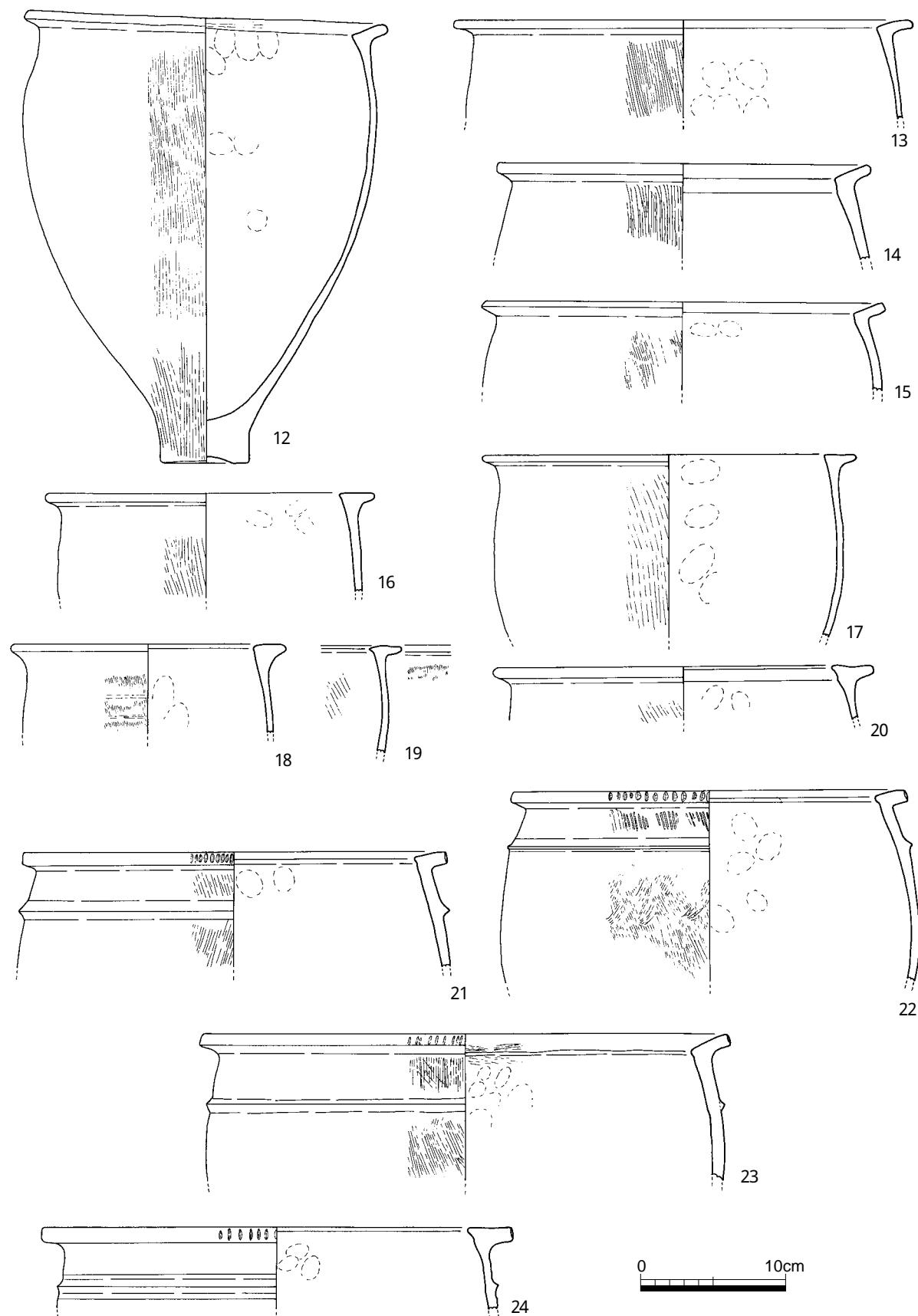
21～35がB類である。B類の特徴としては胴部が丸く上半部に最大径をもち、口縁部と突帯部にヨコナデ、胴部はタテ方向やナナメ方向の刷毛調整が施されている。B I類としては21～23・27・30～35がある。コの字形の口唇に刻みを有するもの(21～23)、鋤先状で内側に突出部をもつもの(27・30・31)、内側に湾曲する口縁で口縁直下に突帯を有するもの(32～35)に細分される。21～23は口縁が非常に厚く重厚な作りであり、胴部の突帯も明瞭で刷毛調整も細かく施されている。特に22については突帯のやや下の部分に装飾的な短いナナメ刷毛目が観察される。32～34はいずれも口径が40～50cmの大型甕であり、口縁の作りも重厚で突帯もシャープである。また橙を基調とする色調で、胎土に金雲母を多含する。35は形態は類似するが焼成が異なることから、模倣品の可能性がある。おなじ出土地点から同質の底部が出土したため、平底の可能性が強い(36)。B II類として24～26がある。24が「コ」の字形の刻み口唇のもの、25・26が鋤先状口縁である。B III類は28・29が相当し、いずれも鋤先状の口縁である。

37～54に甕の底部を一括した。a類として37～52、b類として53・54がある。a類は底部が外側に開くもの(37～46)と直線的に立ち上がるもの(47～52)の主に2つに区分され、後者は比較的重厚で安定感がある。削りなおしにより上げ底をつくりあげた形態(51)も見られる。

甕形土器の時期については、1～4は中期初頭、その他のA I・B I類が中期前葉の古段階、A II・B II類は中期前葉の新段階(中期中葉)、B IIIは中期後葉に相当し、底部はa類が中期前葉の古段階、b類が中期前葉の新段階(中期中葉)以降に比定される。ただし河川内での出土であるため、土層へは反映できなかった。したがって0号河川跡の最も古い時期としては、中期前葉から後葉ということができる。

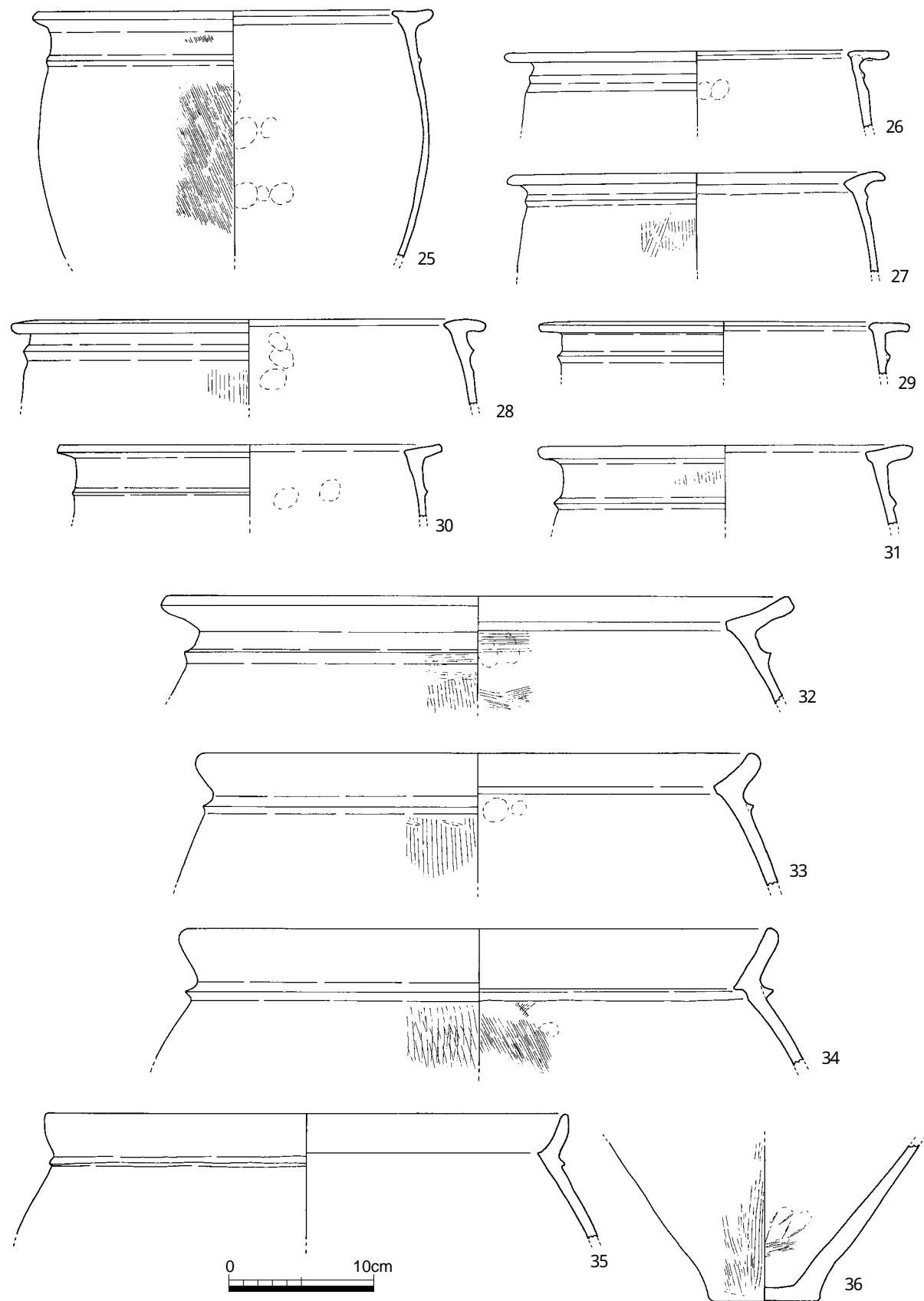


第12図 D区南トレンチ周辺出土土器 河川Ⅲ層(1)(1/4)

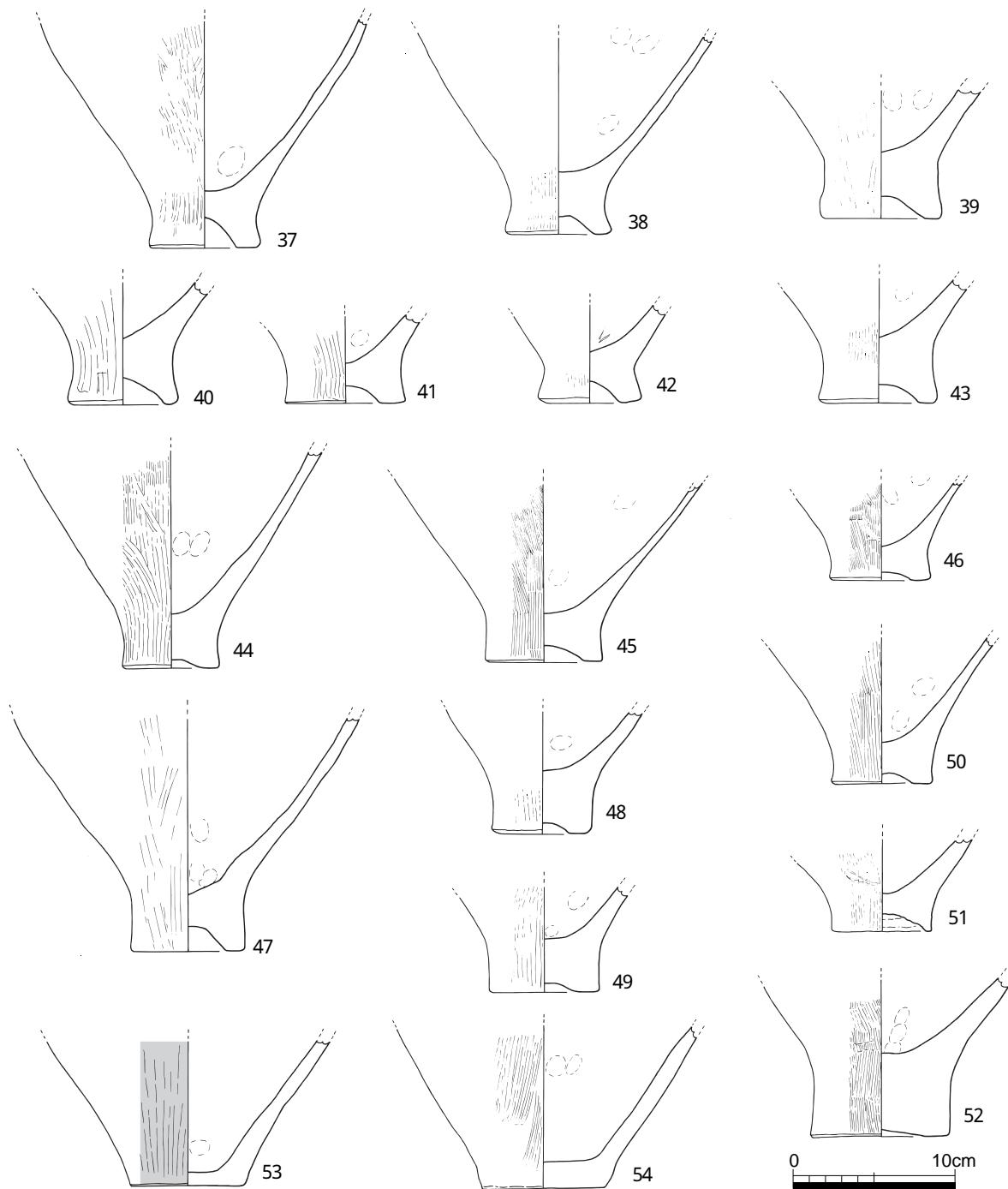


第13図 D区南トレンチ周辺出土土器 河川Ⅲ層(2) (1 / 4)

不條地区

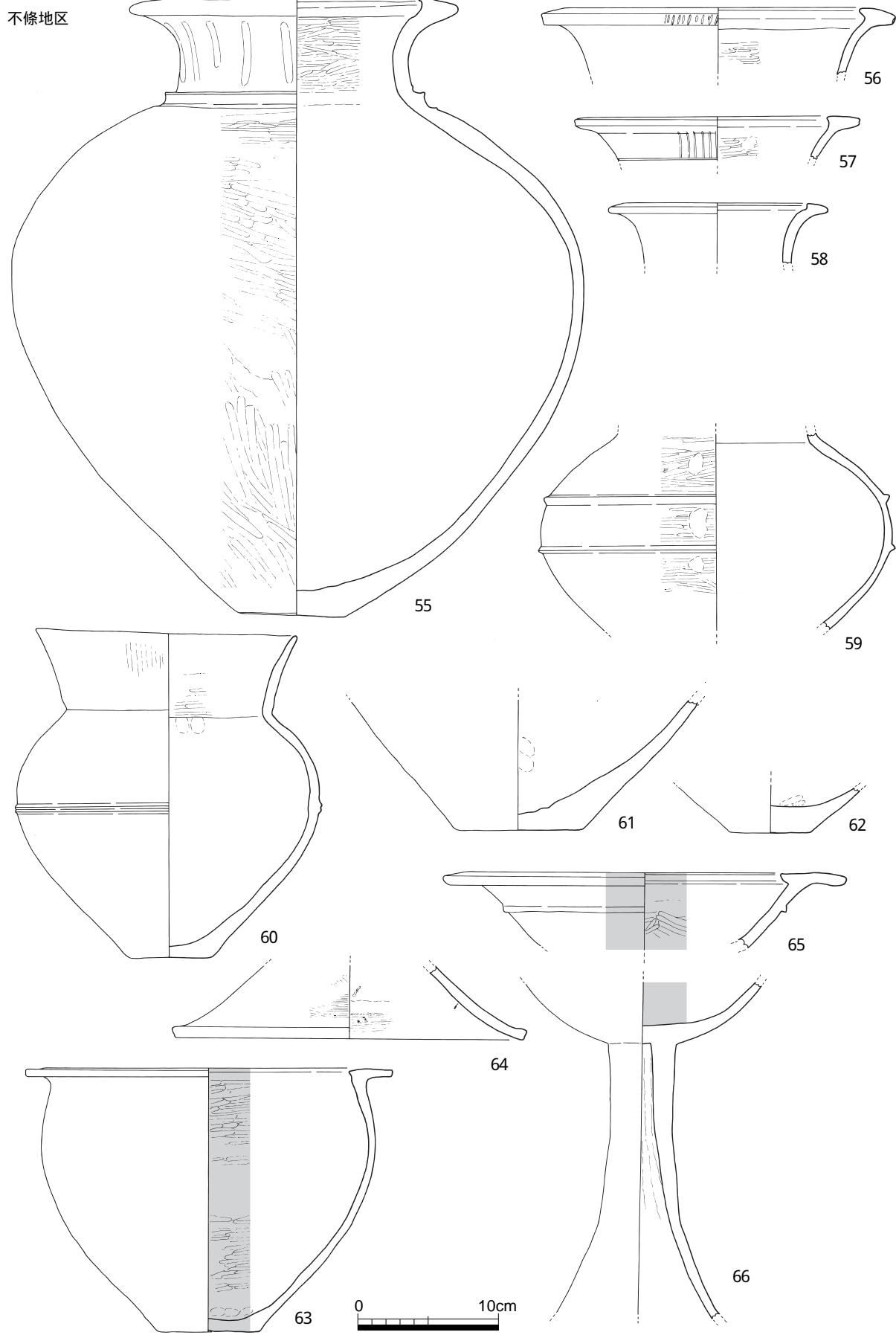


第14図 D区南トレンチ周辺出土土器 河川Ⅲ層(3) (1 / 4)

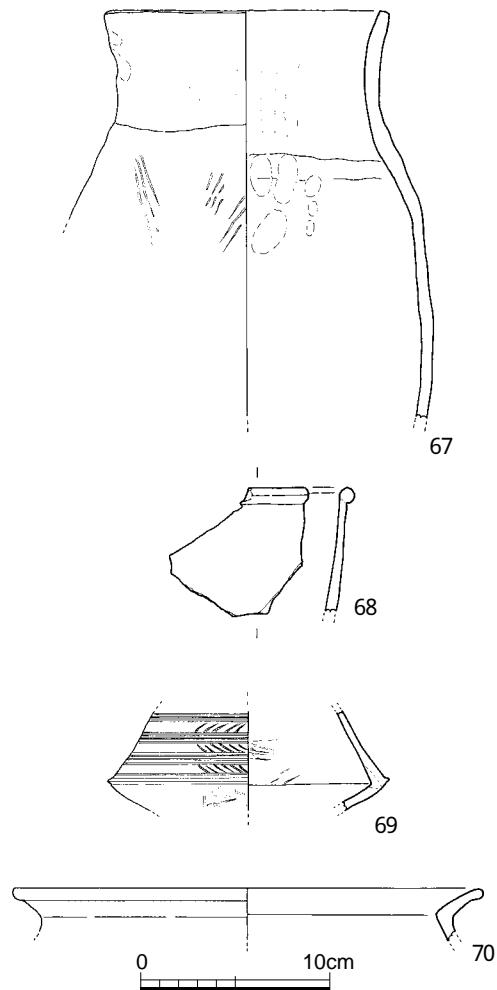


第15図 D区南トレンチ周辺出土土器 河川Ⅲ層(4)(1/4)

55～62は壺形土器である。壺の形態としては突帯の位置や有無、口縁部の形態などに特徴があるが、器形が判断できる点数が限られるため、ここでは鋤先口縁[A]、広口壺[B]の2形態に大別するのみとする。A類では55～58があり、55の大型壺はほぼ完形である。55の特徴は口縁部が短く極端に内湾し、頸から肩への屈曲部に三角突帯を有する。外壁全面と口縁内部にヘラミガキが見られ、口縁部には幅広の暗文が施される。56・58はほぼ同じ形態で、56は口唇に刻みを持つ。57は頸部の屈曲が浅く、暗文と沈線が観察される。59は2条のシャープな突帯と全面に丁寧なヘラミガキが施された胴



第16図 D区南トレンチ周辺出土土器 河川Ⅲ層(5) (1 / 4)



第17図 D区南トレンチ周辺出土土器
河川Ⅲ層(6) (1 / 4)

われる（松井2004）。口縁や底部の形態は不明だが、胴部はそろばん玉状を呈するもので、最大径部分に突帯を持ち、その上方には刷毛目原体の列点による羽状文と4本束の圜文が交互に施文されている。赤彩もわずかだか観察される。70は産地は特定できないものの、同時期の器形・色調が異なるため搬入土器と分類した。口縁部が短く大きく外反する形態で、口唇は丸く玉縁状におさめられる。色調は内外ともに灰白色で胎土中は黒灰色を呈し、胎土に金雲母を含有する。畿内系と思われる。

甕以外の土器については、55の大型壺形土器が中期前葉古段階、60の広口壺が中期前葉新段階（中期中葉）、63の丹塗り鉢形土器が中期後葉に比定でき、無文土器なども同時期に相当することから甕形土器同様、弥生時代中期前葉から後葉の時期におさめられる。

② 1号河川跡（第18～25図）

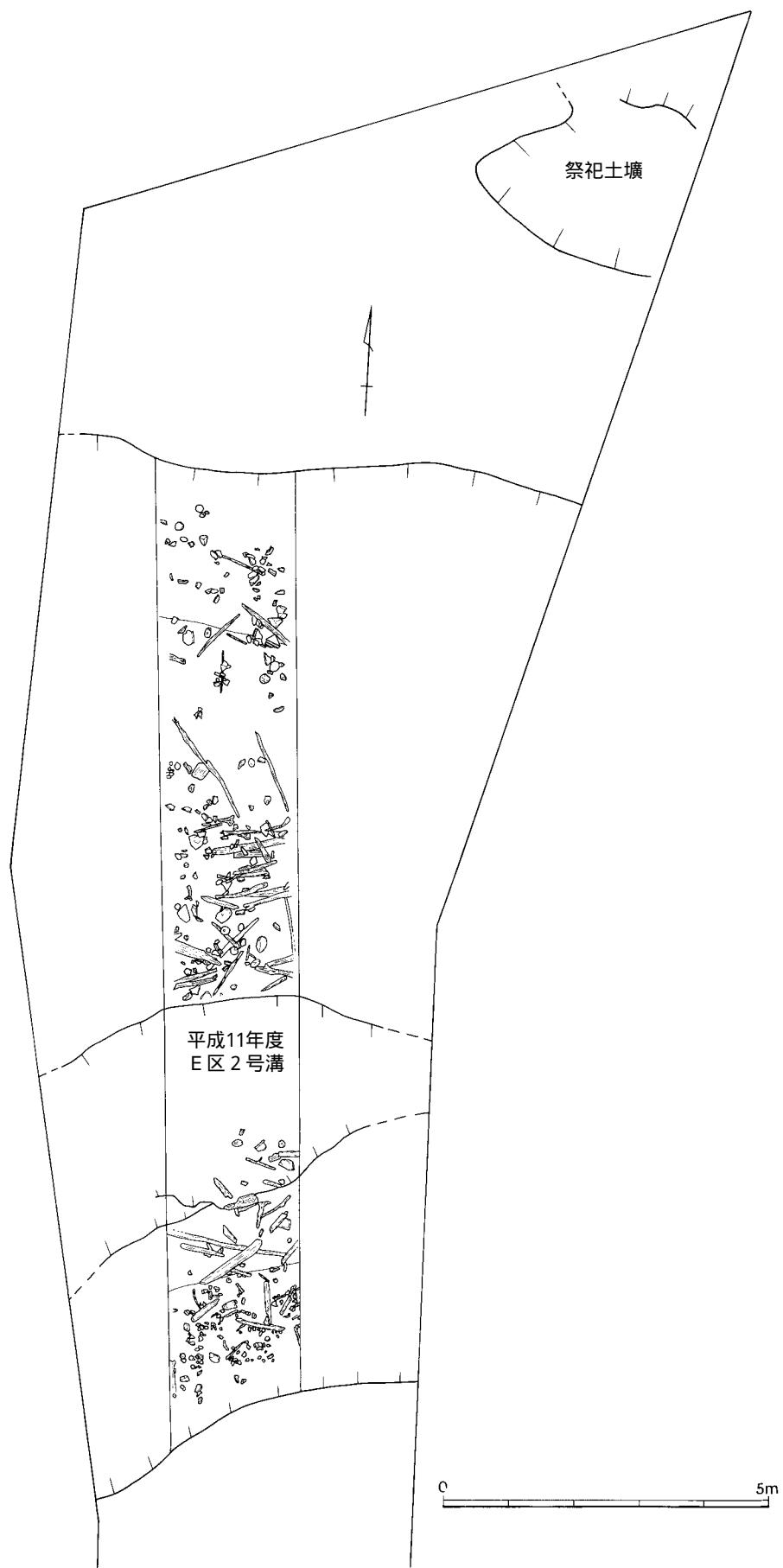
1号河川跡はG・H区にまたがり確認された、東西方向に流路をとる河川跡である。平成11・12年度の特定調査事業や平成15年度の県道拡幅工事に伴う調査の際に検出され、弥生時代後期から古墳時代前期までに埋められた河川としてとらえられていた（杉原2001）。現存幅約13m、深さ0.8mを測る。調査区内の河川跡に横断する形で南北方向の幅2mのトレンチを設定し掘り下げを行った。トレンチ

部であり、器形からA類が推測できる。B類としては60があるが、器壁の風化による摩滅が顕著で器面の調整については明確ではない。61は大型壺、62は小型壺の底部で、いずれも平底である。63は鉢形土器で、外面の器壁は風化で観察できないものの、内面は丹塗りの上からのヘラミガキが観察できる。64は蓋の裾部であり、器幅に比べ器高が高いため古い形態と推測できる。65・66は高壺で、65の口縁部はわずかに外側に傾斜する形態、66の高壺脚部は壺の立ち上がりが丸く湾曲しながら立ちあがる形態である。

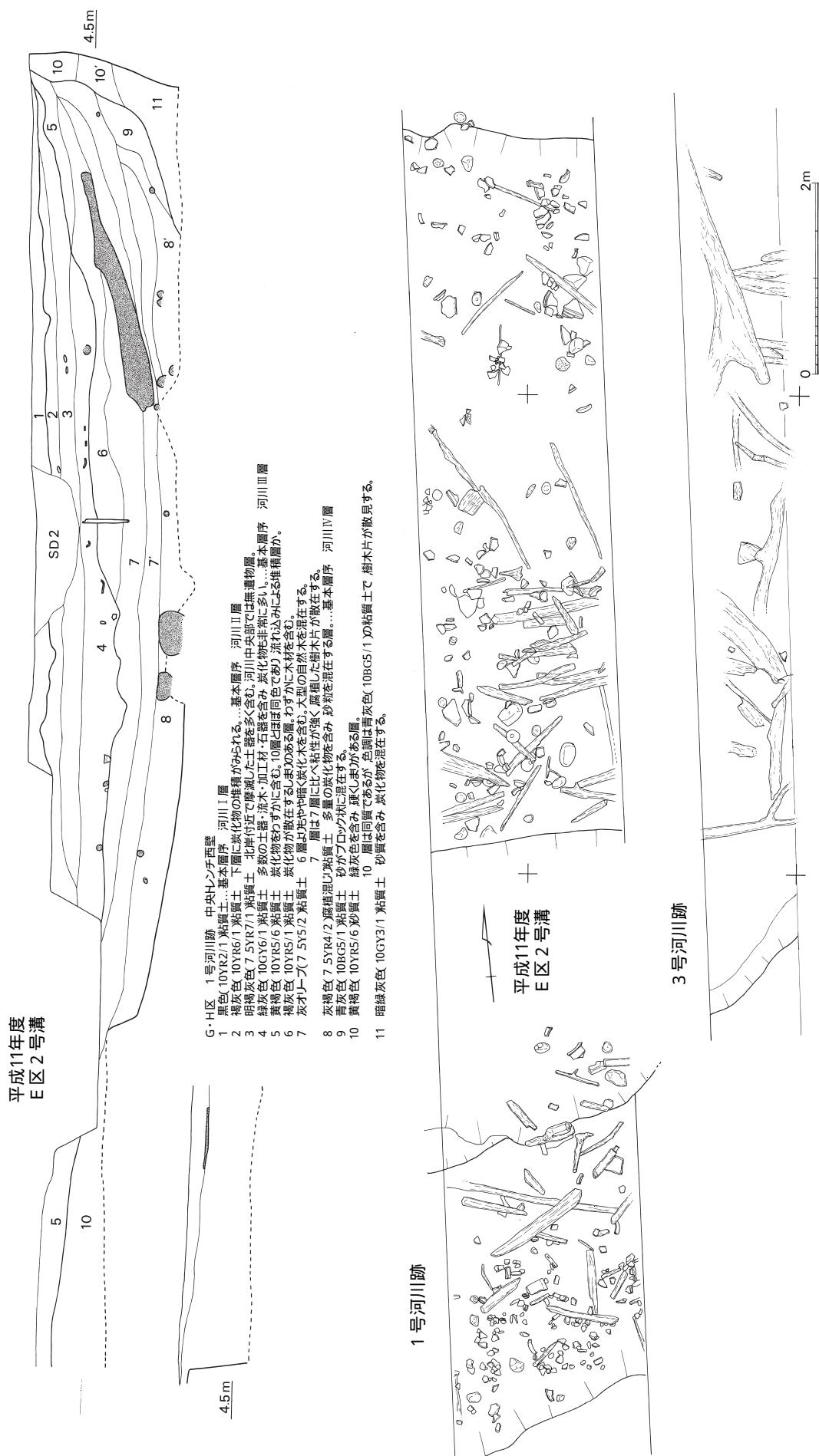
67・68は無文土器である。67は浅く外反しながら長く直口する口縁部で、あまり張りを持たない長胴形の形態である。器壁の表面は凹凸が多く、内外面に指ナデ調整による指圧痕がみられ、胴部下半部に大きな黒斑が残る。肩の部分には掻き傷状の線刻が見られる。形式としては、後期無文土器の「勒島式」以降のもので、弥生時代中期前半以降の時期と推測される（武末1995）。68は粘土帶甕であり、口唇部に径8mm程の粘土紐の貼り付けがある。胎土に金雲母が見らる。中期前葉のものか。

69・70は搬入土器である。69は台付装飾壺形土器の胴部であり、山陰地方東部の因幡地方に所産するものと思

不條地区



第18図 G・H区 1号河川跡検出状況 (1/100)



第19図 G・H区1号河川跡・3号河川跡土壌および遺物出土状況（1/60）

不條地区

内からは、弥生時代中期前葉から後期にかけての土器・石器・木製品等約2,000点が出土している。

1号河川の層位（第19図）は大きくは3層に分層され、その下層からさらに古い河川の流路が確認された（3号河川跡）。設定したトレントの上層は、基本層序Ⅲ層の暗灰色粘質土層の古代から中世にかけての水田層である。したがって河川の上面に多数の人の足跡や蹄の跡などの踏み込み跡が見られた。

トレントの土層はそれより以下の層位である。1層は黒色の粘質土で、河川Ⅰ層の時期に相当する。腐植は少なく木質などもあまり見られないことから、流路であったとは考えにくくわずかな窪地に堆積した層と思われる。平成11年度特定調査E区2号溝（杉原2001）はこの層から掘り込まれた遺構であろう。2層は灰色粘質土であるが、上層からの鉄分の浸透が著しく褐色化している。河川の埋土中からわずかに遺物が出土するが、摩滅が多く現位置をとどめたものは少ない。基本層序の河川Ⅱ層に相当する。3層は2層よりやや明るい灰色粘質土層で、河川の中心部では炭化物は含むが遺物はほとんど見ることがない。ただ河川の北岸周辺に摩滅した土器が土器だまり状に堆積している。4層はやや青みのある灰色粘質土で、下層には多数の土器・木製品を含む層である。1号河川跡の最下層と考えられる。植物珪酸体分析によると、1～4層は試料1gあたり4,800～5,900個の高密度で稻のプラントオパールが検出されており、稻作が行われていたことがわかる。すなわち、1号河川では水田を目的とした造成が行われたことを確認できた。

河川Ⅱ層出土土器（第20図）

1号河川跡の河川Ⅱ層の土器は前述したごとく摩滅が多い。他地域から混入したものと考える。

1～6は甕形土器である。1は「逆」L字口縁、2・4～6は「く」の字口縁、3はね上げ口縁である。いずれも内外面に摩滅が多く、器面調整が不明確である。5は口径が小さく屈曲部が不明瞭である。6は口縁が非常に短い形態である。7～9は壺形土器である。7は内傾する鋤先状の口縁部、8は口唇の屈曲部が短い複合口縁壺の口縁部、9は平底の底部である。10は鉢形土器で、内外面の刷毛目調整が明瞭に観察できる。8・10の2点にかぎり残存状態がよく、1号河川跡河川Ⅱ層の時期を表していると考えられ、弥生時代後期前葉から後期末の時期に比定できよう。

河川Ⅲ層出土土器（第21～25図）

1～40が甕形土器である。D区南トレント河川跡同様、突堤の有無について、突堤をもたないもの[A]、突堤をもつもの[B]、口縁の形態として、内傾するもの[I]、平坦のもの[II]、下に垂れ下がるもの[III]、底部の形態として上げ底[a]、平底[b]と分類する。

1～19までがA類を一括した。A I類としては、3～12・18・19がある。口縁が短い形態(3・5)、口縁が外側に湾曲する形態(4・6～8)、「く」の字形に外向する形態(9・10)、鋤先状に内側に突出部を持つ形態(11・12)、ね上げ口縁をもつ形態(18・19)に分類できる。A I類の特徴として、口縁内外をヨコナデし、外側はタテハケを内側は指ナデの調整を基本とする。また胎土は金雲母を含むものが多い。

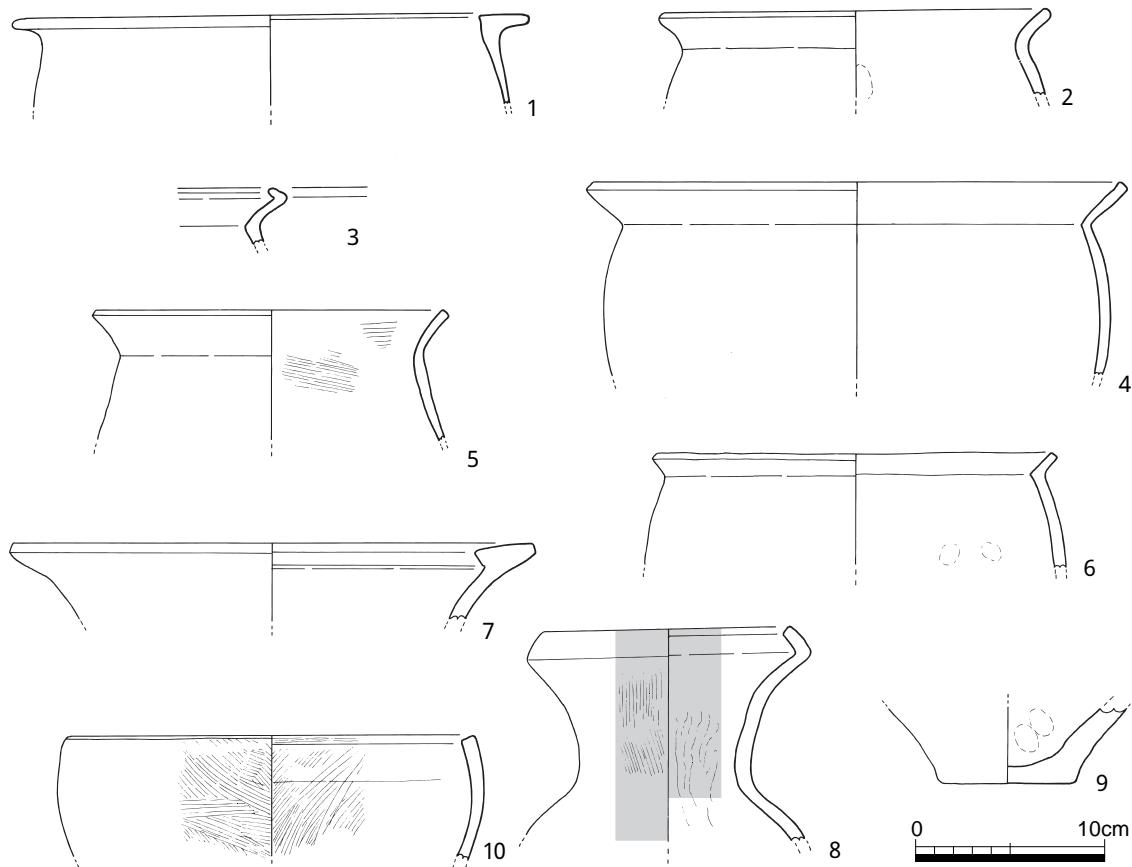
A II類としては1・2・13・14がある。1・2は口唇部が短く胴部が丸く張り出す形態であり、タ

テ方向の刷毛目と一部ナデ消しの痕跡を残す。いずれも胎土に金雲母は見られず、若干古い形態とも考えられる。13・14は平坦な口縁部で内側にわずかに突出する形態で、口縁内外のヨコナデ、胴部のタテハケ、胎土に金雲母を混入するなど共通する。

A III類としては15～17がある。いずれも口唇端部が下に垂れ下がり、内側にわずかに突出する形態である。胎土には金雲母を含み、外壁にはススの付着が観察される。

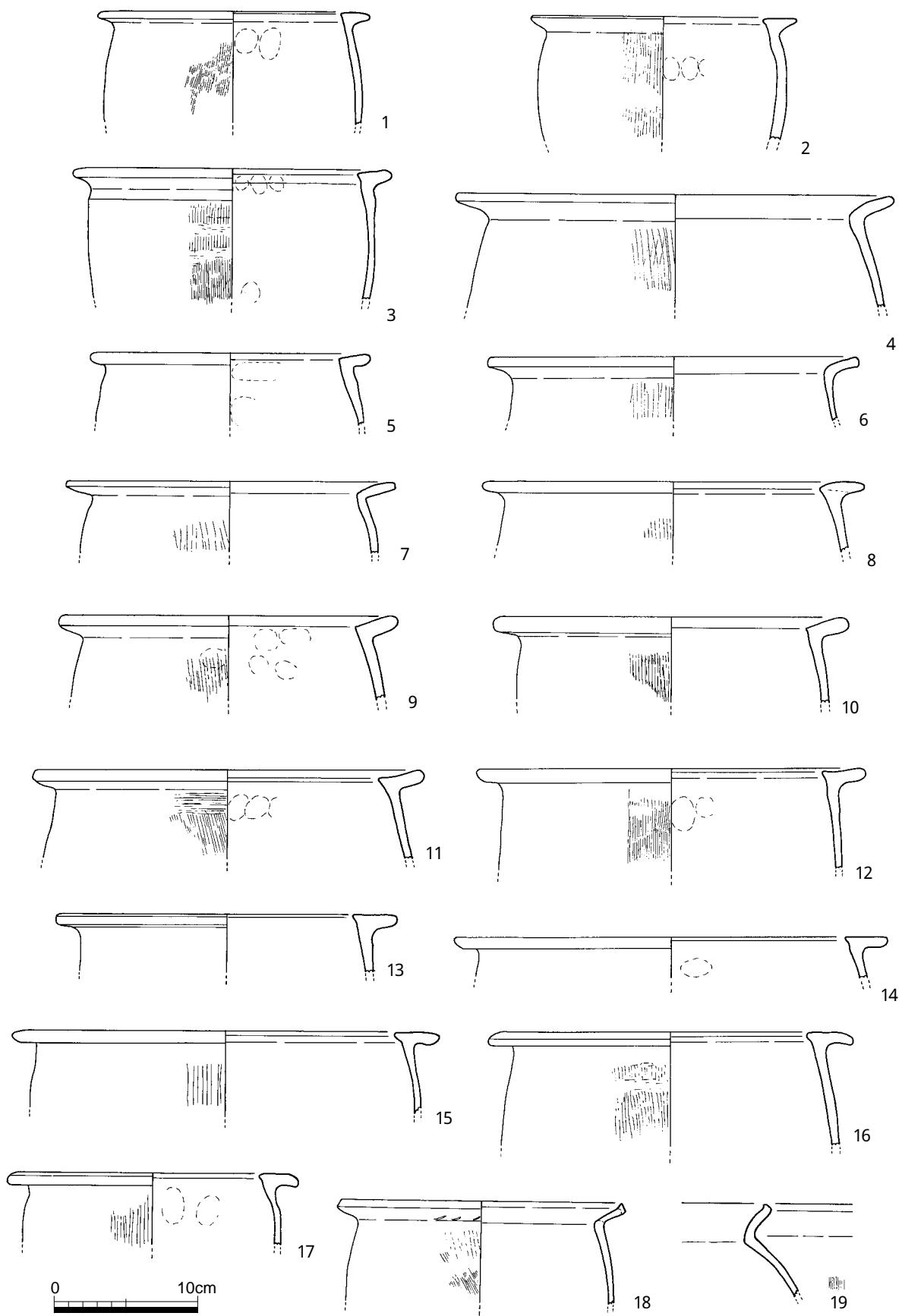
20～36がB類である。B 1類としては21～29、B 2類としては30・31、B 3類としては20・32～35がある。共通した特徴として、口縁内外にヨコナデ、内面に指圧痕を伴う指ナデ調整があり、胎土に金雲母を含むものが多い。突堤は全体的に低く、22についてはほとんど高まりをもたない。20は口唇が短くわずかに外側に下がり、胴部は丸く張り出す形態であり、口径20cmほどの小型甕である。22は全体の形状が復元できる甕である。口縁部は内傾し、口縁直下に低く幅広の突堤をもつもので、胴部最大径がほぼ中心部にある形態である。23は赤みのある色調で、口縁部が厚く重厚感があり、突堤が低いもののシャープである。

36は丹塗りの甕口縁部である。口唇に刻みと一条の沈線を有し、内側に大きく張り出しをもつ形状をしている。37は大型甕の口縁部であり、断面T字形をしている。これらの土器は非常に少なく口径が復元されるものはほとんど見られなかった。



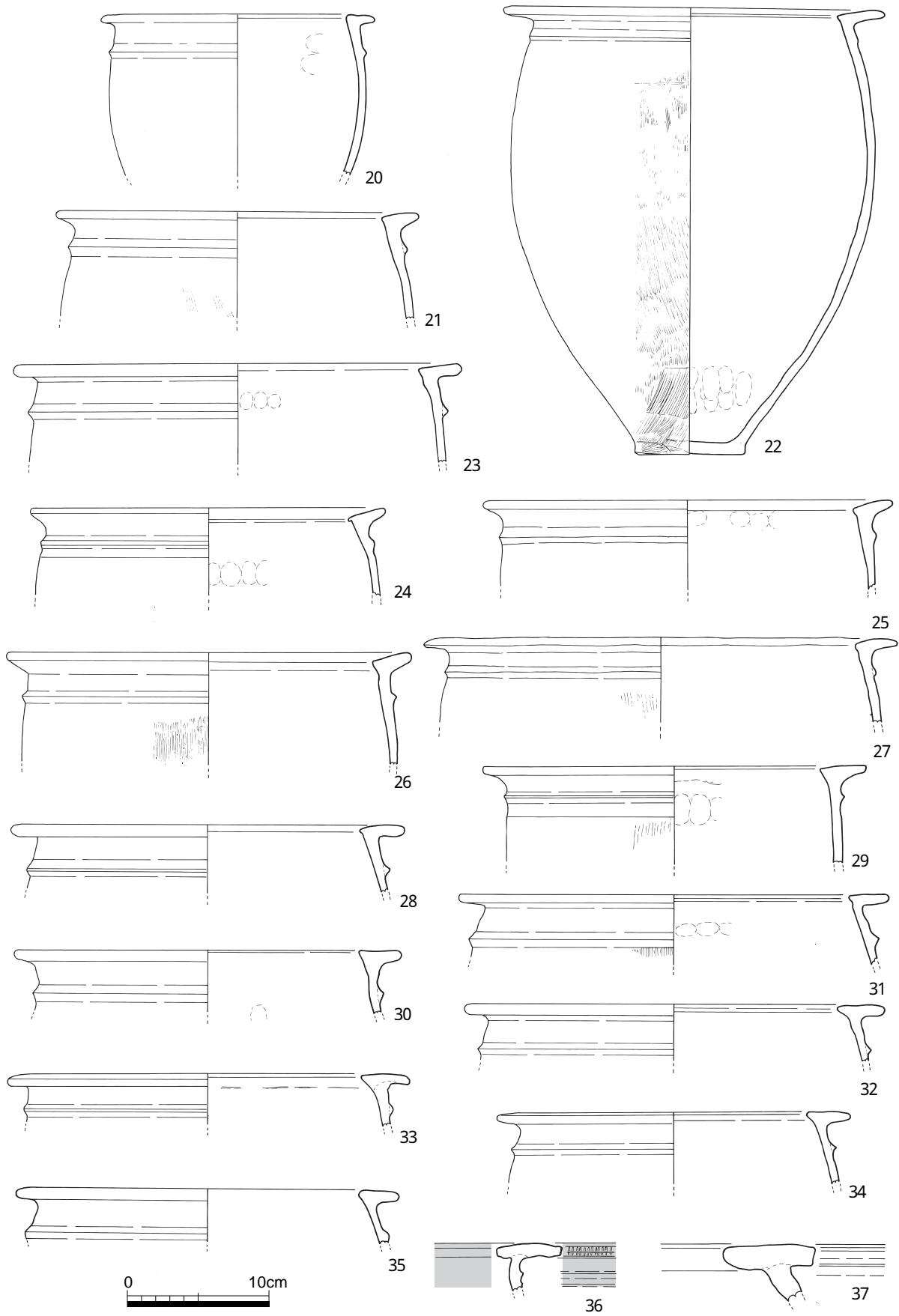
第20図 G・H区1号河川跡出土土器 河川II層(1/4)

不條地区

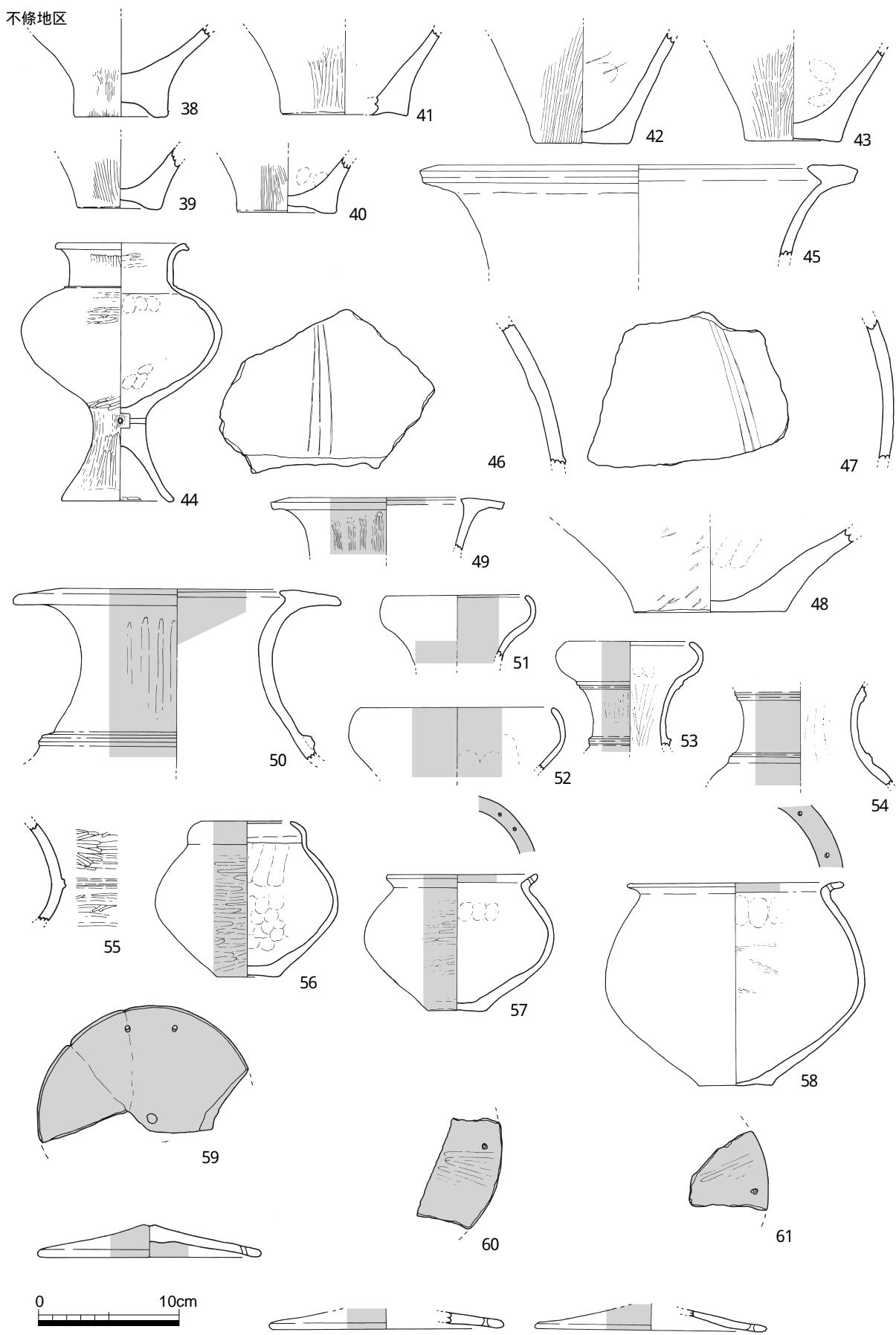


第21図 G・H区 1号河川跡出土土器 河川III層(1) (1 / 4)

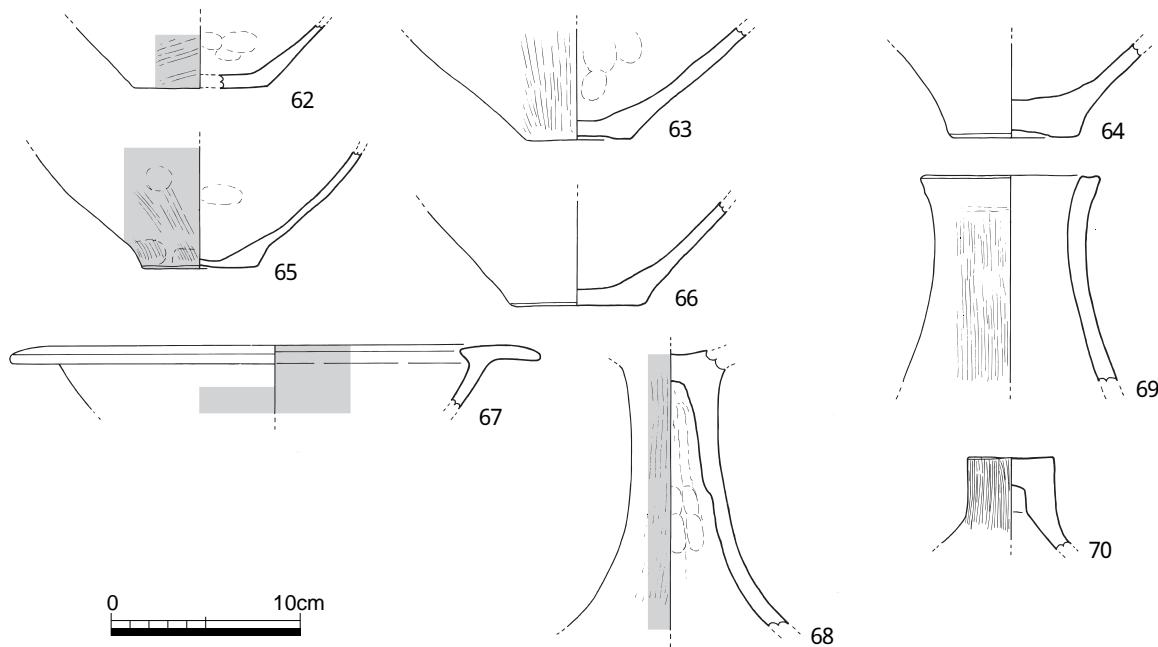
不條地区



第22図 G・H区1号河川跡出土土器 河川Ⅲ層(2)(1/4)



第23図 G・H区1号河川跡出土土器 河川Ⅲ層(3) (1 / 4)



第24図 G・H区1号河川跡出土土器 河川III層(4)(1/4)

38から43は甕の底部である。38～40がa類，41～43がb類で，a類の胎土には金雲母は見あたらなかった。

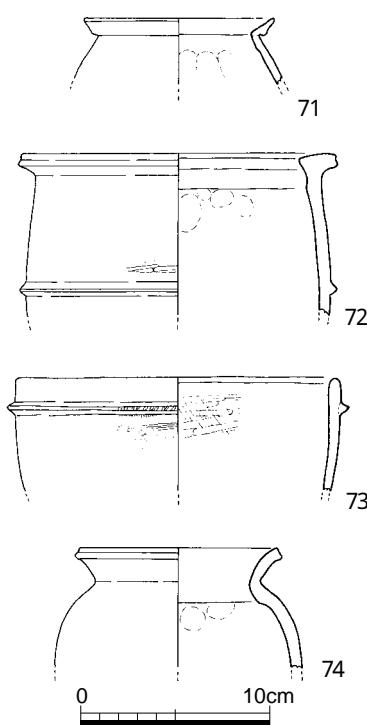
甕A・B類の時期は，D区南トレンチ河川跡出土と同様，AⅠ・BⅠが古くⅡ類からⅢ類にかけて新しくなるという傾向があるが，22の器形をみると，口唇の長さや胴部最大径の位置，平底などの特徴から若干新しくなるようである。22は弥生時代中期前葉の新段階（中期中葉）が想定され，その前後の時期と考えられる。

44から66は壺形土器である。壺の形態としては鋤先状の口縁壺[A]，広口壺[B]，袋状口縁壺[C]，短頸壺[D]その他に分類できる。

A類としては45・49・50があり，大型壺で口唇が短いもの（45），外傾し頸部に暗文を施すもの（49・50）を図化している。49の暗文は細かいヘラナデの束が数カ所にみられる施文方法である。

B類としては44がある。図面上で復元したものであるが，脚台付の広口壺であり，口径が9.5cm，胴部14.3cmと非常に小さい形態である。ただ口縁から脚部にかけて丁寧なヘラミガキや細かいヘラナデが施されており，脚の付根付近には円筒部を貫通した穿孔がある。器形やつくりの丁寧さから特殊土器と考えられ，穿孔は装飾ではなく，機能的なものと思われる。

C類としては51～54があり，口縁直下に突帯を有するもの



第25図 G・H区1号河川跡出土土器 河川III層(5)(1/4)

不條地区

(53・54), やや下位に突帯を施すもの(51)に分けられそうである。いずれも丹塗りであり、時期的な差違は認められない。

D類としては57・58がある。いずれも蓋付の丹塗り短頸壺であり、口縁に紐かけ穴が2穴あけられている。56は袋状口縁をもつ短頸壺で全面に丁寧なミガキ痕があり、内面には指圧痕を多数残す。

59～61は短頸壺の蓋を一括した。いずれも径16cm前後であり、上面に丹塗りが残る。

その他として、46・47はおそらく同一個体であるが、大型壺の胴部である。肩から胴部最大径位に位置すると推測され、上から下へ広がりながら描かれた三条の線刻がある。48はその底部である。55は最大径位に小さなM字突帯を有する胴部であり、全面を丁寧にヘラミガキしている。62～66は壺底部である。63～65は若干上げ底である。

壺形土器の時期としては、丹塗り土器が多数見られることから主体は弥生時代中期後葉である。ただ、44は口縁部の開きや胴部が球形に張る形態から中期初頭と位置づけられる。

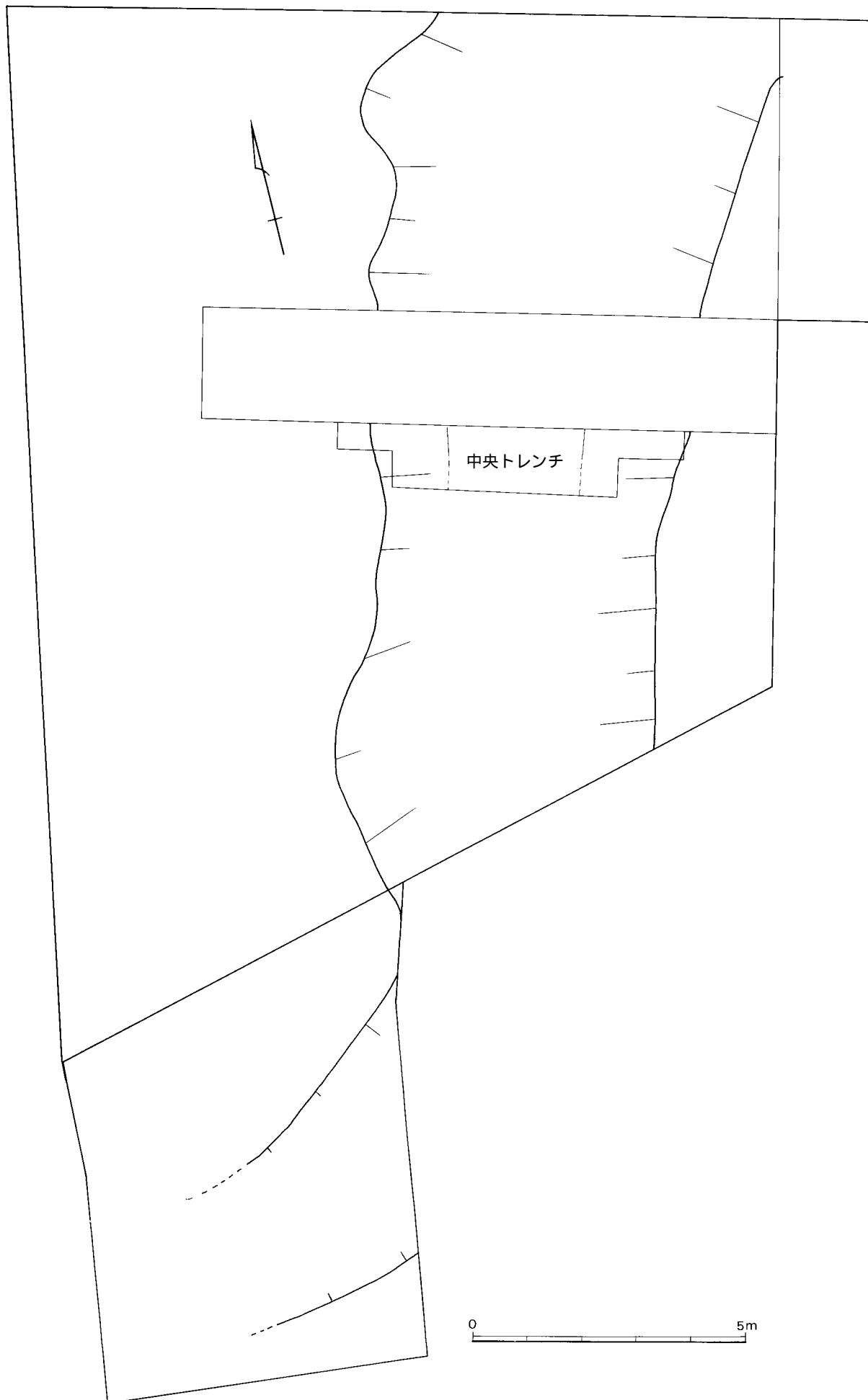
67・68は丹塗りの高壺の口縁部と脚部、69は器台の上半部、70は蓋である。69の器台はくびれ部が胴の上位にあり、器壁はほぼ均一である。

71～74は大陸系土器、搬入土器を一括した。71は粘土紐を貼り付けた断面三角形口縁の甕であり、後期無文土器(勒島式)と思われる(武末1995)。色調は灰黄色で金雲母を含み、内外面ともにナデ調整で何面には指圧痕を残す。72は産地は不明だが、外面や口縁上部を丁寧なヘラミガキで仕上げ、口唇部に浅い沈線を施す甕である。胴部の低い位置にある突帯は非常に明瞭で、中九州系の土器と推測した。73は口縁の下位に断面三角形の刻目突帯を有する甕で、ヨコナデと刷毛を細かく施す東九州系(下條式)土器と判断した。74も産地不明だが、口縁が極端に外反し、口唇に1条の沈線を施すもので、肩は球形に張りだしている。南九州系と推測する。

これらの土器を総じてみると、丹塗りや特殊な特徴を持つ土器が多い。また、甕形土器の中にはスヌの付着とは異なる黒色の塗りを施した土器も多く見られた。これらの遺物の特色から考慮すると、1号河川跡が祭祀などの特殊性を持つ地域であることが推測できる。河川を造成した痕跡と併せて考えれば、豊作を願う水辺の祭祀の可能性もある。今後、同じような性格を有する遺構の検討が必要であろう。

③ 2号河川跡(第26～30図)

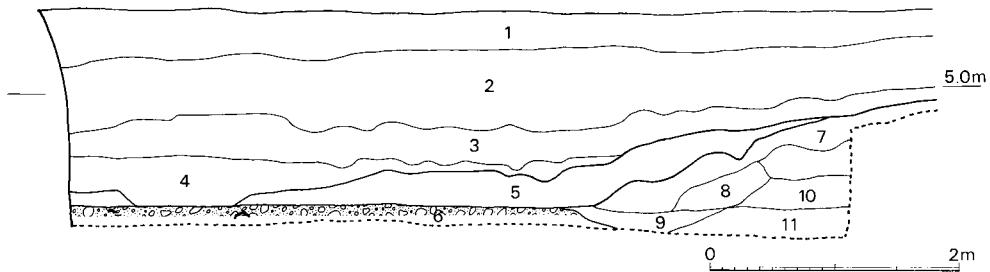
2号河川跡はE区の南トレーニングからF・G区にかけて新しく確認された河川跡であり、幅約6m、深さ1.4mを測る。F区の東側で南北に流れる0号河川跡から分流する状態で検出されており、埋土は種子や葉、甲虫の羽などを含む黒色腐植土であり、河川I層の時期に相当する。E区南トレーニングの層位では(第27図)、4層に2号河川跡の埋土が確認できた。かなり深い位置で確認されており、0号河川跡が古墳時代ごろまで流れを変えながら存在したことがわかる。またこのトレーニングでは弥生時代中期の河川の下層(5層)、さらに1号河川跡の下に確認された3号河川跡の西側への落ち込みも確認されている。F区中央トレーニングでは川幅と深さが確認され、幾層にもわたり腐植が堆積したことが観察された。



第26図 F・G区 2号河川跡検出状況 (1/100)

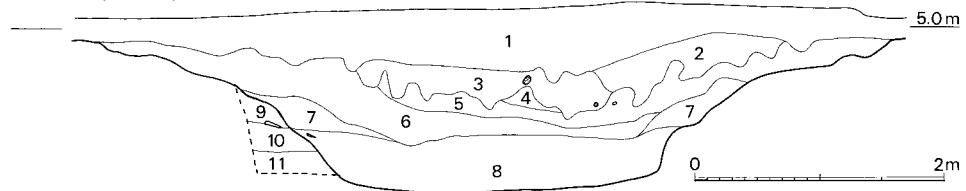
不條地区

- E 区 南トレンチ南壁
- 1 赤褐色(5YR4/6)硬質粘土 乾燥するピクラックが生じやすい。...基本層序 II層
 - 2 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土 赤褐色の鉄分の沈着が多数みられる。...基本層序 III層
 - 3 褐灰色(10YR4/1)粘質土 非常に粘性の強く、不純物などほとんど含まない緻密な粘土層。
 - 4 黒色(2.5Y2/1)腐食混在粘質土 アシ科の植物遺体 種子、玉虫など多数含む植物堆積層。...基本層序 河川 I 層
 - 5 褐灰色(10YR4/1)粘質土 粘性が強く、3 層に比べやや黒色が強い。
 - 6 明褐色(7.5YR5/6)砂礫層 粒径 5mm以下の川砂。...基本層序 河川 III 層の下層
 - 7 黄灰色(2.5Y6/1)粘質土
 - 8 青灰色(5B6/1)粘質土 砂粒をわずかに含む粘質土。
 - 9 黑色(5Y2/1)粘土
 - 10 褐灰色(10YR5/1)砂礫混在粘質土 1 ~ 5 mm 径の白色砂粒を多数含む。
 - 11 黒色粘質土(10YR2/1)砂質を含む粘質土で 植物遺体を含む。...基本層序 河川 IV 層



第27図 E区南トレンチ土層図 (1/60)

- F 区 2号河川跡 中央トレンチ北壁
- 1 褐灰色(10YR5/1)硬質粘土 黄褐色の鉄分沈着が多い。...基本層序 III層
 - 2 褐灰色(10YR5/1)粘質土 1 層とほぼ同色であるが、やや粘性が強い。
 - 3 褐灰色(10YR5/1)粘質土 暗灰色粘土がマーブル状に混在する層。下層との境に凹凸がみられる。
 - 4 黒色(7.5YR1.7/1)腐植土 本来は褐色(7.5YR4/4)であり、空気に触れるとき色調が変化する。植物遺体を多く含む。
 - 5 黒色(7.5YR1.7/1)腐植土 本来は灰褐色(7.5YR4/2)であり、4 層と同様の性質である。4 層よりやや明るい黒色である。
 - 6 褐灰色(10YR4/1)粘質土 植物遺体を多く含み、下層にアシ科の植物が層をなして堆積する。
 - 7 灰色(7.5Y4/1)粘質土 ラミナ状の堆積が観察される。
 - 8 褐灰色(10YR4/1)腐食混在粘質土 植物遺体を多く含む粘質土。
 - 9 灰黄色(2.5Y6/2)粘土
 - 10 灰黄色(2.5Y6/2)粘土 粘性が強く、湧水がある。
 - 11 褐灰色(10YR4/1)粘質土
- ...基本層序 河川 I 層



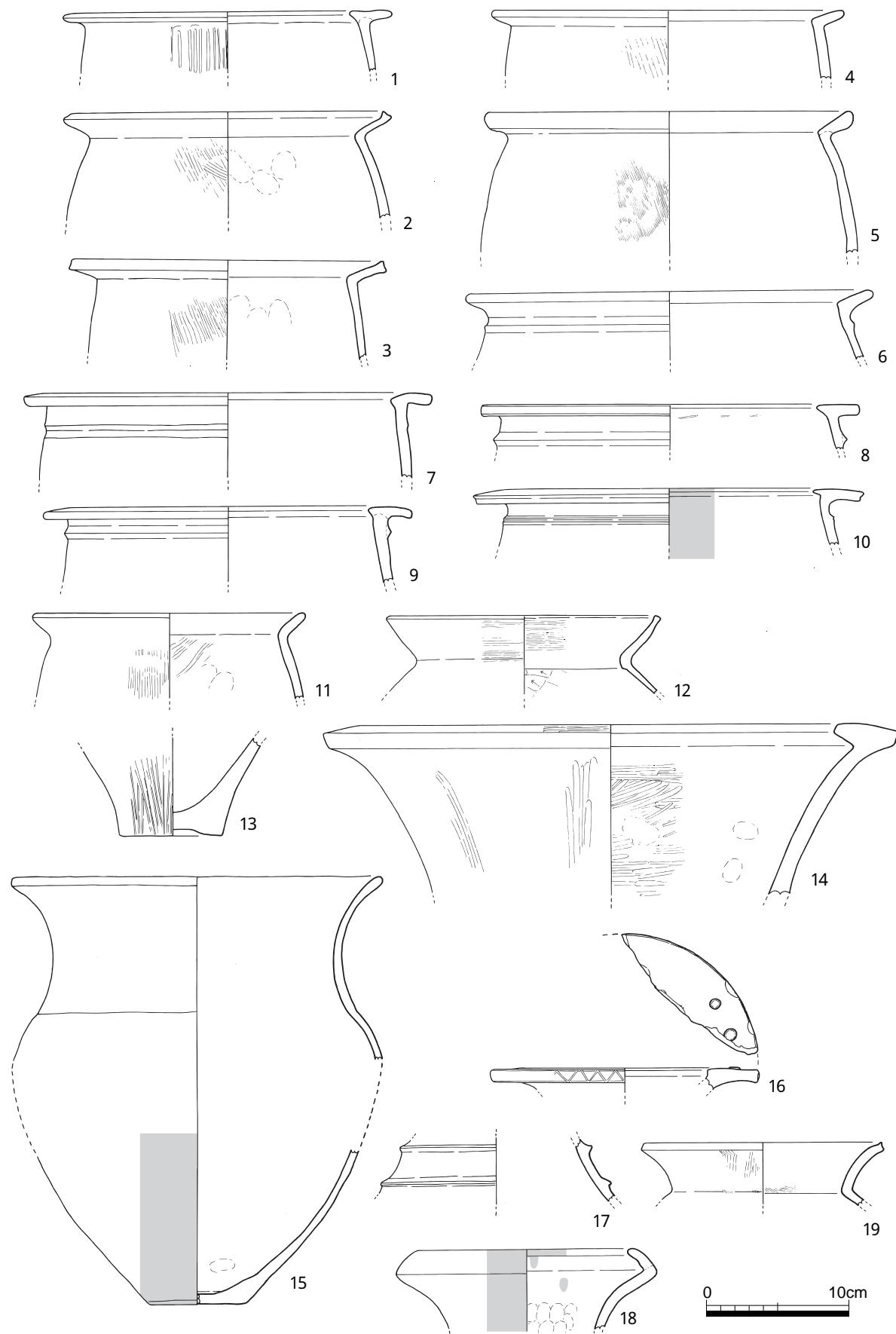
第28図 F区 2号河川跡中央トレンチ土層図 (1/60)

出土遺物は弥生時代中期から後期の土器が河川の両岸に散布しているが、埋土中からはほとんど出土していない。F区からG区へ至ると次第に川の堆積土が薄くなり最終的に消滅した。

2号河川跡出土土器 (第29・30図)

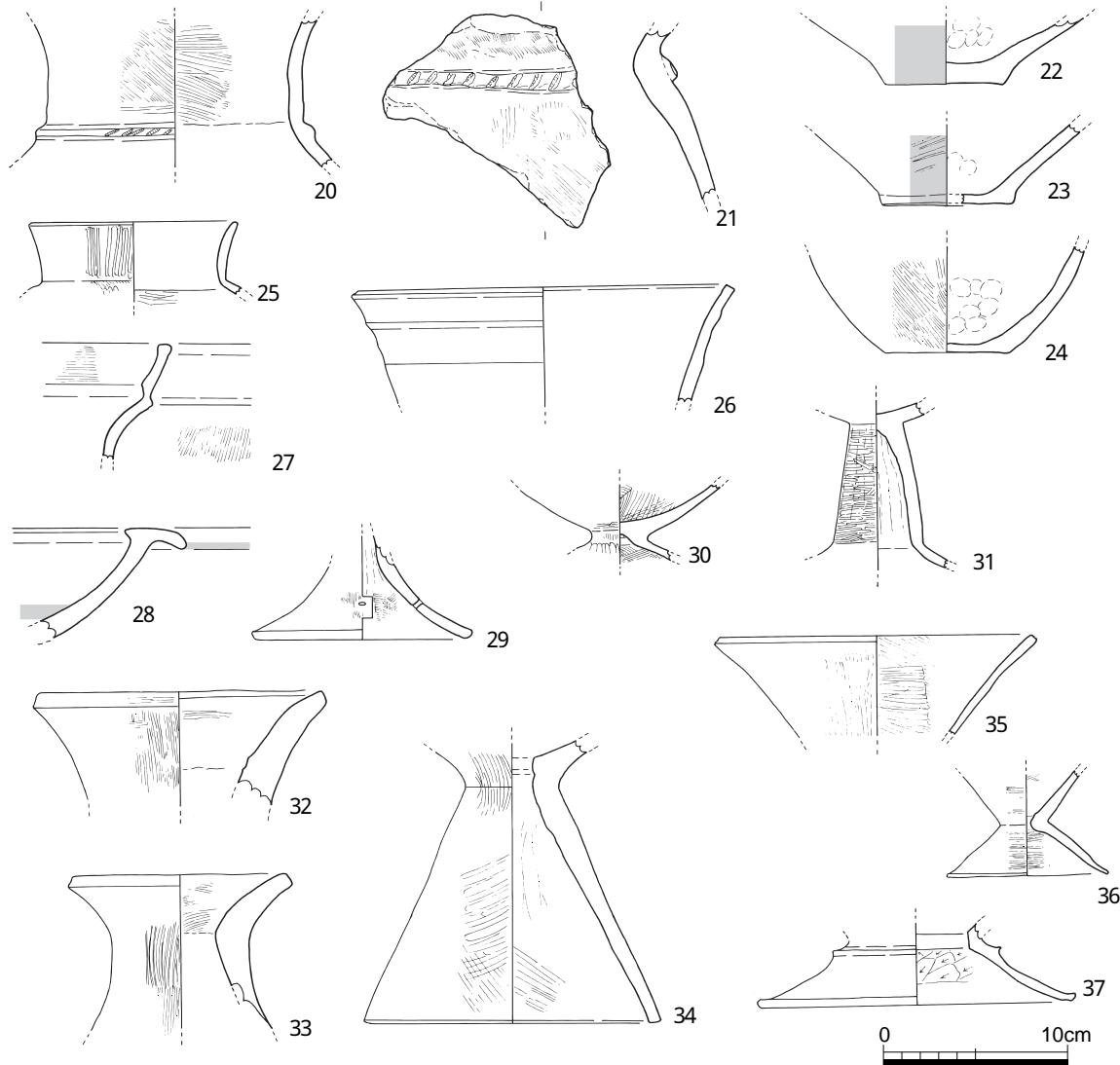
1 から 13 は甕形土器である。1 ~ 10・13 が弥生時代中期中葉から後葉、11 が後期、12 が古墳時代前期である。12 は非常に良好な焼成であり、口縁部が内湾しながら口唇に至り、先端は平坦に仕上げられており、布留式系甕に相当する。

14 ~ 26 は壺形土器である。14 は短く外傾する鋤先状口縁を有する壺である。15 は肩に段をもつ広口壺で、器壁が非常に薄く丹塗りが胴部下半に残る。16 は内側への突出がない鋤先口縁壺で、上面に径 1cm 程度の丸い粘土盤の貼り付け（円形浮文）がある。口唇には鋸歯文が刻まれてあり、一部に赤色顔料が付着している。畿内系の搬入土器か。17 は胎土が緻密な壺の肩部であり、明瞭な 2 条の突帯を有する。18 は丹塗りの複合口縁壺、19 は大きく外反する短頸の広口壺である。20・21 はおそらく複合口縁壺の頸から肩に至る屈曲部で、刷毛目原体の刻みによる幅広の突帯を有するものである。22~23 は丹塗りの壺、24 は刷毛目が顕著で胴部が丸く張り出す壺の底部である。25 は口縁が短く直口する壺、一方 26 は長く直線的に外向する長頸壺、27 は外に湾曲した口縁部にさらに外反する口唇がつく二重口縁壺である。山陰系と思われる。



第29図 E・F区 2号河川跡出土土器(1) (1 / 4)

不條地区

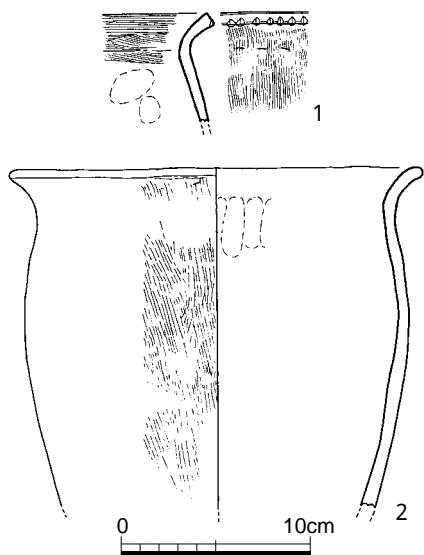


第30図 E・F区 2号河川跡出土土器(2) (1 / 4)

28~31は高坏である。28は弥生時代中期、丹塗り鋤先口縁の高坏である。29は小さな円形透かし孔をもつ脚部で裾の広がりが非常に広い。30は坏から脚へのくびれ部で、坏内部や脚の内外面に細かい刷毛やヘラミガキ痕が観察される。坏は丸く塊形の形状であろう。畿内系と思われる。31はやや膨らみを持ちながら裾部に至る脚であり、裾は屈曲しさらに開く形態である。器面には細かいヘラミガキ痕が観察できる。29~31は古墳時代初頭から前半にかけてのもので、器壁も薄く胎土も緻密な砂粒が混入する。

32~37は器台である。32~34はくびれを胴部上半部にもつもので、器壁が厚く重厚な形態である。35は花弁上に広がる形態で、器壁が薄く内外面の刷毛目が顕著である。36はくびれ部から脚に至るもので、胴部は直線的に立ち上がる。一見脚付き容器に見られるが、底部の位置に0.8cm程の孔があり、器台として分類した。37は山陰系鼓形器台である。底径に比べ器高が低い形態であり、くびれのやや下位にシャープな突帯を有する。32~34は弥生時代後期後半、35~37は古墳時代前期である。

したがって2号河川跡の時期としては、12の甕、26~27の壺、29~31の高坏、35~37の器台を基準



第31図 G区3号河川跡出土土器（1/4） ± 20 の年代値が得られ、弥生時代前期後半に比定できよう。

同質の層はE区南トレンチ9・11層（第27図）、E区中央トレンチ11層（第32図）で確認されており、弥生時代中期の河川跡以前の河川が別の流れで存在することが判明した。なお、同層の珪酸体分析の結果では、近隣で稻作が行われていた可能性が示唆されている。

3号河川跡出土土器（第31図）

図化できる土器は2点である。いずれも如意形口縁の甕形土器であり、1は口唇の下部に刻み目がある。焼成はかなり良好で、暗めの灰褐色の色調、胎土に大きな粒子の金雲母を混入する。器壁は0.5cm程と薄く、外面はタテ方向の刷毛目を一部ナデ消しており、内面は指ナデの痕跡を残している。口縁部の下方を中心にススの付着が見られる。土器の形式では弥生時代前期後葉にあたり、年代測定の時期と符合する。

⑤ 1号溝（第34・35図）

1号溝はE区の北側に検出された遺構であり、0号河川跡から南西側に5m程入り込んだ後、丸くあさまる溝状の落ち込みである。幅は約2.2m、深さは0.7mで、0号河川跡との合流付近には人頭大の角礫が敷かれたような状況で検出されている。埋土は、上層が黒色の腐植を混在する粘質土層で、D区南トレンチに観察される（3層）。層の色調や腐植土の混在から、基本層序の河川I層にあたり、弥生時代終末から古墳時代前葉の時期と思われるが、出土遺物では当該時期の土器を見ることはできない。また、下層は0号河川跡と重なり合っており、混入した遺物も見受けられる。

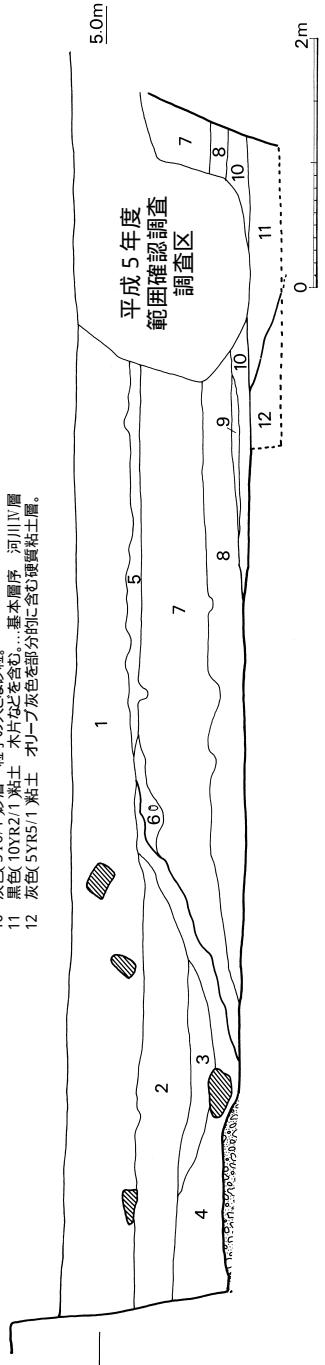
西側低地部には途中で寸断された環濠が今までいくつか確認してきたが、河川と直接合流する溝は確認されていない。また、この遺構の東側には集石遺構があり、またさらに河川跡の東対岸には護岸遺構が検出されており、この周辺で川幅が極端に狭小になっている（第50図）。今後も関連した遺構の資料調査が必要であるが、河川に関連した遺構（簡素な停船場・荷上げ場）なども考慮すべきであろう。

1号溝出土土器（第35図）

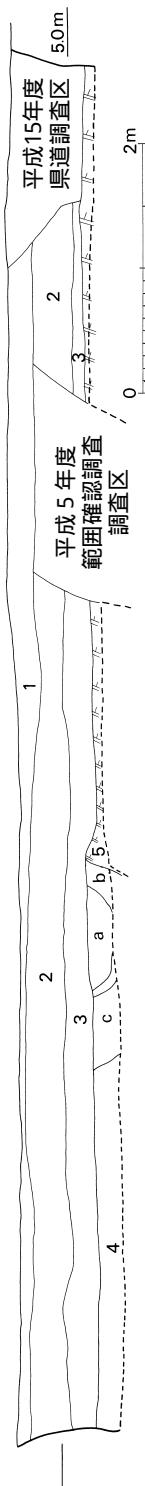
1～6は甕形土器である。突帯の有無や口唇の形状から判断すると中期前葉から後半までの遺物と

不條地区

E区中央Hンチ南壁
 1 暗灰色 N3.1 硬質粘土 にぶい赤褐色(5YR4/4 D)鉄分沈着がある。...基本層序 III層
 2 暗灰色 10YR4/1 順質粘土 部分的に灰白色の粘土をマーブル状に含み、炭化物も若干見られる。
 3 暗灰色 N3.1 沙混じ粘質土 炭化物が多く見られる。
 4 黒色 N2.1 沙質土 下層に礫の堆积...基本層序 河川II層
 5 にぶい黄褐色 10YR6/4 粘質土 粘性が強く、上層の暗灰色土がマーブル状に混在する。
 6 灰色 10Y5/1 彩色混じ粘質土
 7 灰色 10Y5/1 明褐色(7.5YR5/8)粘性のある砂質土 ロココ状の堆积が幾層にも見られる。鉄分多し。
 8 灰色 N5.1 沙質土 黒色(N2)粘土 粒子の大きさが少々粒度で、腐食土を層状に含む。
 9 灰色 N5.1 沙質土 黒色(N2)粘土 粒子の大きさが少々粒度で、腐食土を層状に含む。
 10 灰色 5Y6/1 沙質土 粒子の大きさが少々粒度で、腐食土を層状に含む。
 11 黒色 10YR2/1 粘土 木片などを含む。...基本層序 河川IV層
 12 灰色 5YR5/1 粘土 オリーブ灰色を部分的に含む地質粘土層。

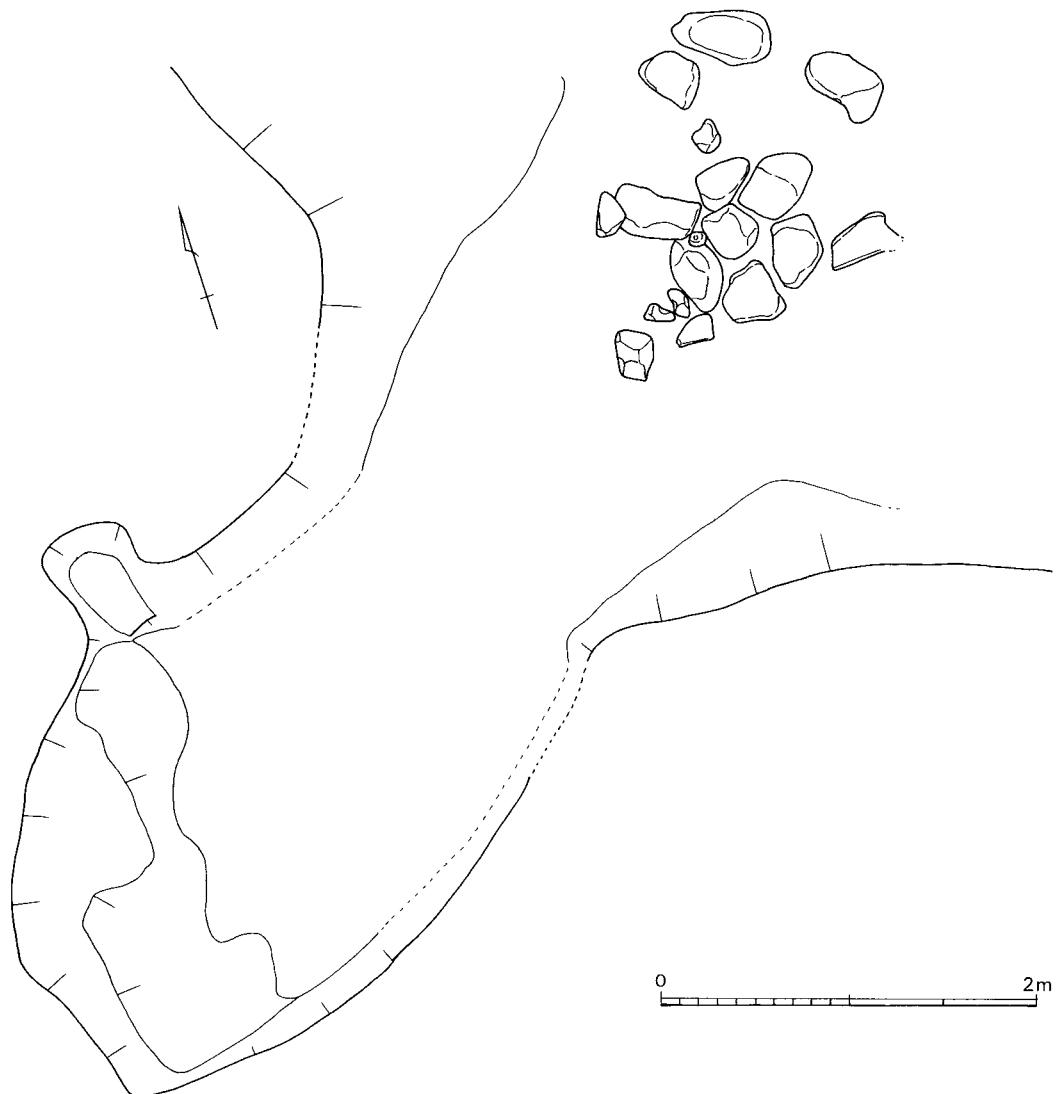


第32図 E区中央トレンチ土壌図（1/60）



不條A区 北壁
 1 粘土
 2 耕作土
 3 灰色(N4)粘質土 鉄分の沈着多し。
 4 灰色(N4)粘質土 鉄分の沈着多し。
 5 灰白(10YR6/2)粘土 5層ばかりやや軟質の粘土。下層に行なつてやや青みをもつ。
 6 黄褐色(10YR8/2)粘土 堅くしまった粘土。黄色の鉄分の沈着あり丘陵部の地山層。

第33図 A区北トレンチ土壌図（1/60）



第34図 E区1号溝検出状況(1/40)

考えられ、河川Ⅲ層の遺物と同時期である。また7はくの字口縁壺であり、河川Ⅱ層の遺物が混入したものである。

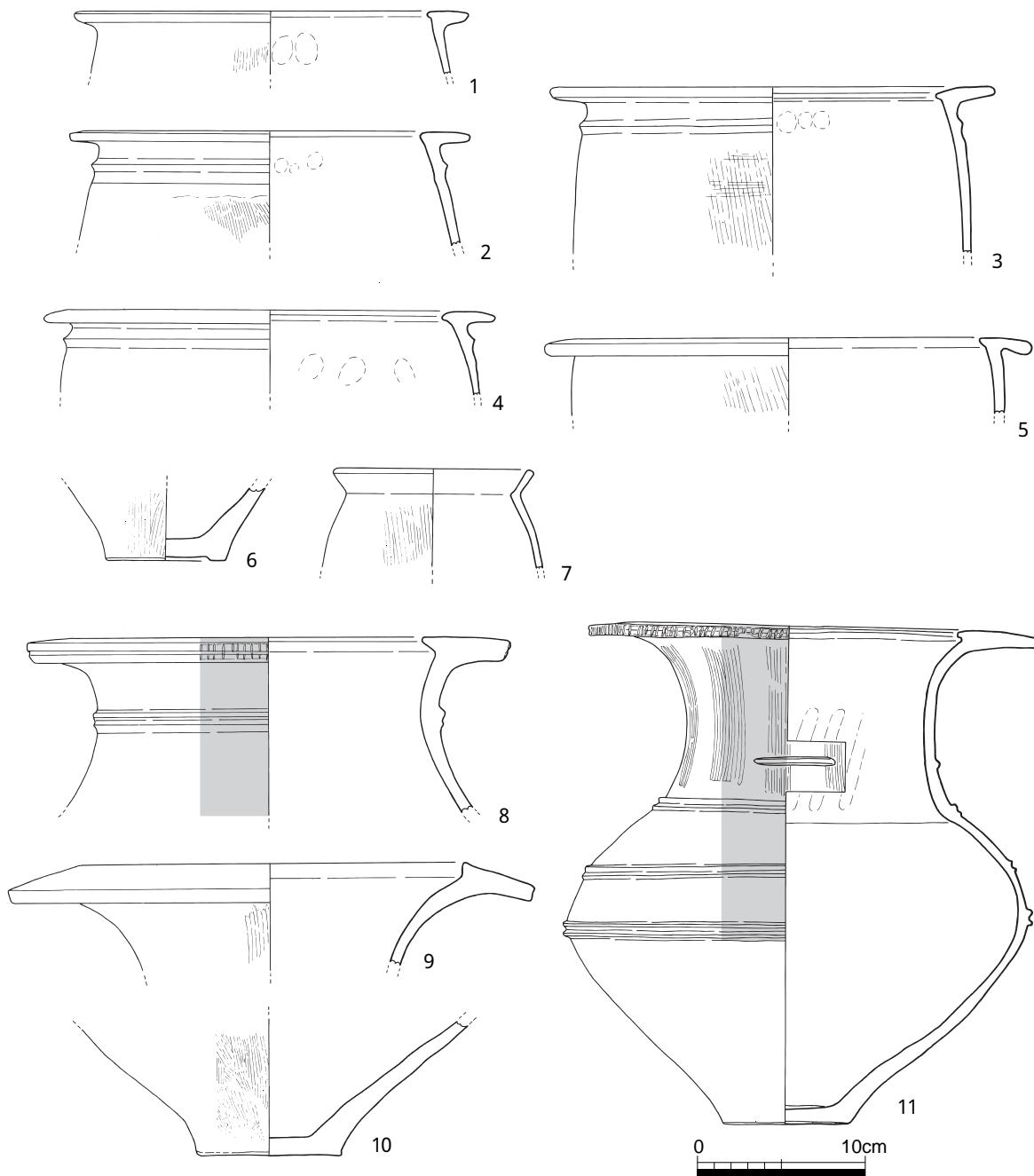
8～11は壺形土器である。甕形土器と同様に河川Ⅲ層の遺物であり、1号溝が0号河川跡に付隨する遺構であったことが推測できる。11は丹塗りの鋤先口縁壺のほぼ完形品であり、河川Ⅲ層の新しい段階の形態である。口唇には刻み目があり、口縁から頸部にかけては暗文が施され、途中約5cmの長さの粘土紐の貼り付けが見られる。肩から胴部最大径部分にかけては3条のM字突帯があり、底部は若干上げ底である。粘土紐の貼り付けの状態から北部九州以東地域のものと推測される。

これらの遺物から、1号溝は原形は弥生時代中期頃から河川の付隨施設として成立し、弥生時代終末期ごろまでその痕跡が残ったということが考えられる。

⑥ 2号溝(第36・37図)

G・H区の1号河川跡の埋土上から確認された溝(第19図)で、流路は北西から南東に向いている。現存幅で1.2m、深さ0.45mを測る。埋土は暗灰色のしまりのある粘質土である。遺構の検出状況か

不條地区

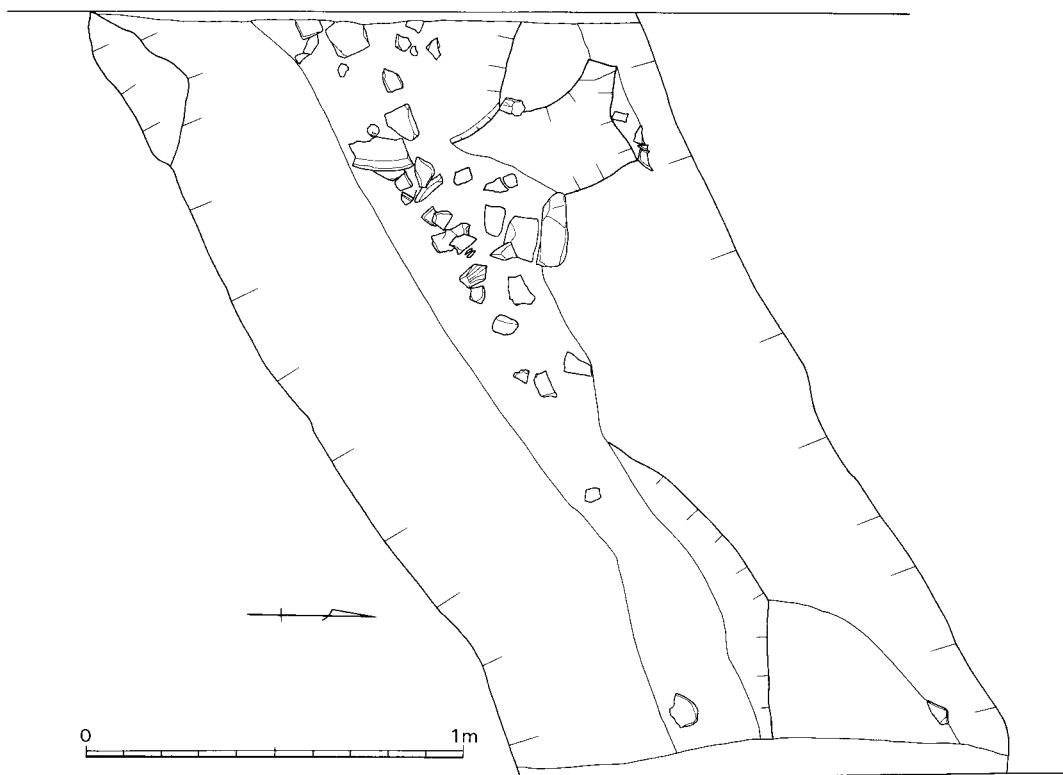


第35図 E区1号溝出土土器(1/4)

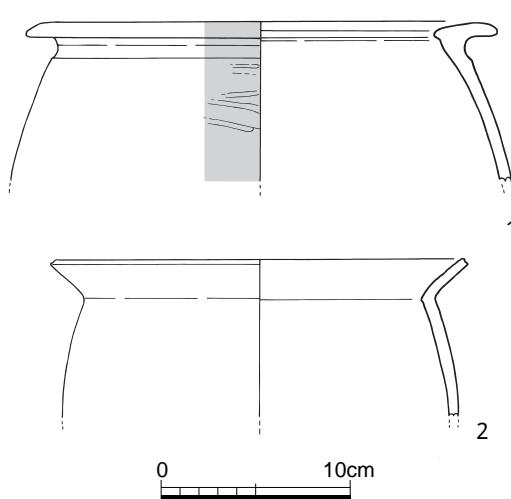
ら考慮すると、1号河川跡の造成土のさらに上から掘り込まれた遺構であり、埋土の特徴からも古墳時代前期以降の遺構の可能性が強い。遺物は溝の底にわずかに出土しているが、いずれの土器も小片で摩滅が著しいため周辺から流れ込んだものと考えられる。1号河川跡の中央サブトレントの西壁に2号溝から打ち込まれた杭が残っており、水田の用水路と考えられる。

2号溝出土土器(第37図)

図化できるもの2点を掲載した。1は丹塗りの甕形土器であり、摩滅はあるものの焼成が良好であるために、ヘラミガキ痕が部分的に観察できる。口縁部は内傾する形態であるが、口唇が外側に垂れ



第36図 G区2号溝検出状況(1/40)



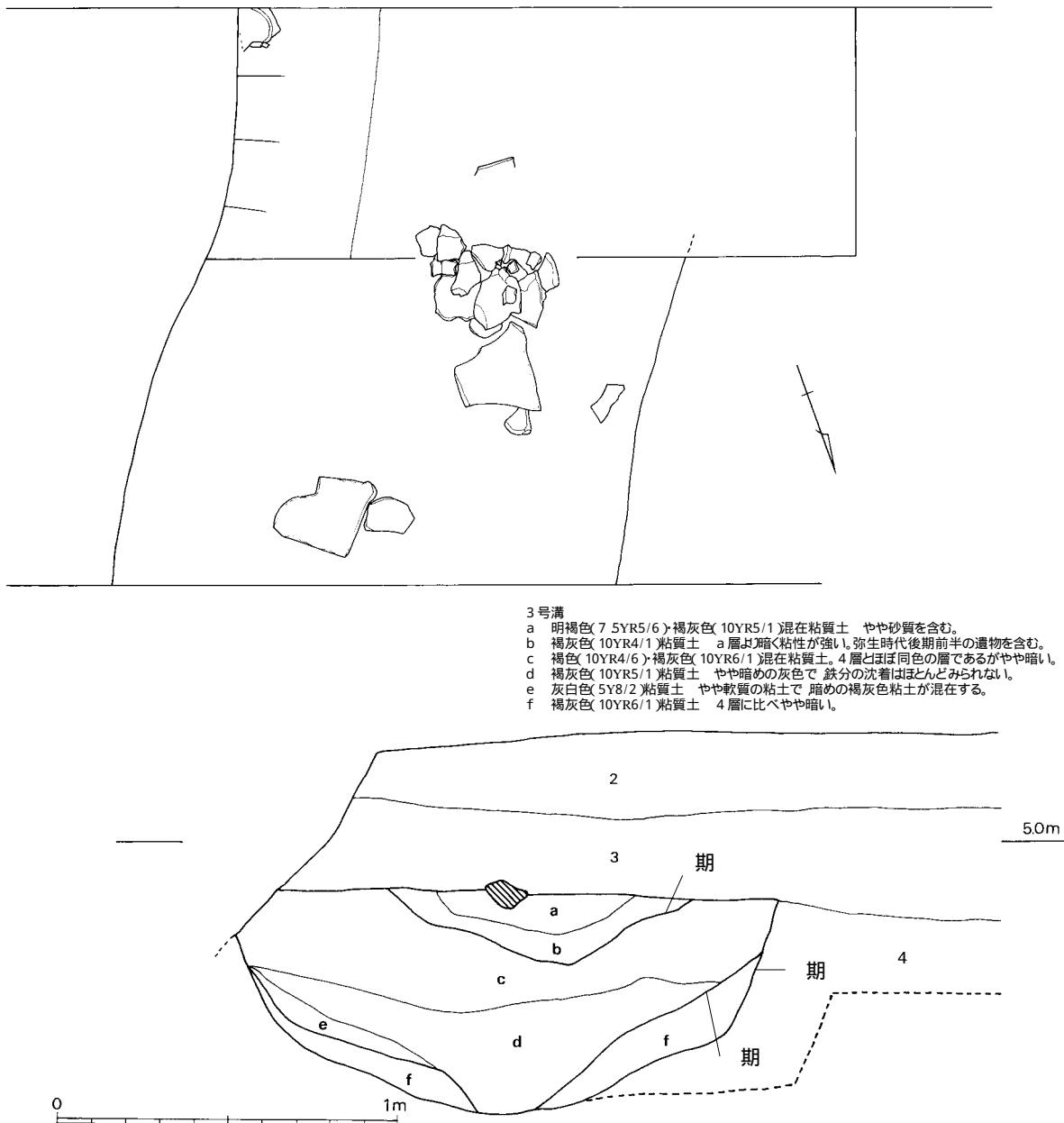
第37図 G区2号溝出土土器(1/4)

さがり、胴部は丸く大きく張り出している。弥生時代中期後半に比定できよう。2はくの字口縁の甕形土器で、口縁部が長く直線的に外向する形態である。内外とも摩滅が顕著で調整痕はほとんど見られない。弥生時代後期後半に比定できる。いずれの土器も流れ込みであり、遺構の時期をあらわすものではない。

⑦3号溝(第33・38・39図)

A区の北側トレーニチに確認された溝であり、幅約1.2m、深さ0.35mを測る。平成10年度特定調査(杉原1999)でC区1号濠と同じ遺構と考えられる。当時の調査結果では、弥生時代中期後半から後期の土器を含んでいて、後期に濠としての機能を失い終末期に埋没した多重環濠の内濠という見解であった。今年度の調査では1.5m幅での検出であり、旧調査区の近隣でもあったことから、土層確認を主体とし調査を行った。不條地区的調査区では唯一の丘陵部に掘り込まれた遺構であり、土層の堆積状況もその他の調査区と異なることから、溝のみの土層観察を行った。

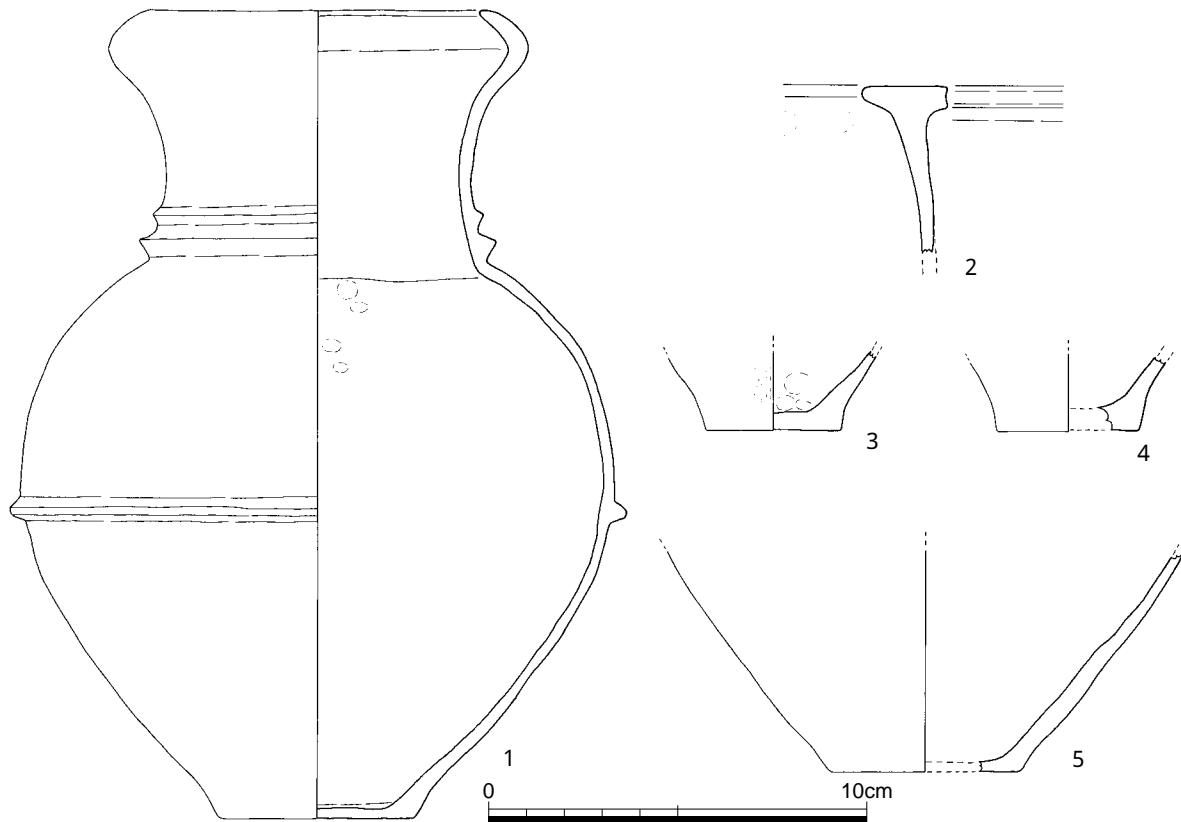
不條地区



第38図 A区3号溝検出状況および土層図(1/20)

第33図はA区北トレンチの北壁の土層である。表土から地山まで0.6m程度しかなく、1~3層までは中近世から現代までの耕作土およびその基盤層である。3号溝の地山として4・5層があるが、土質は全く異なっている。4層は上層に鉄分の沈着が見られる軟質の粘質土で、下層に行くにつれて青みが強くなる特徴がある。一方5層は灰白色で硬質の粘土層で、移植ごての先端では深く掘り下げることができない程である。すなわち5層は高台丘陵部の裾野と考えられ、4層の下に潜り込む真の基盤層と思われる。つまり3号溝は丘陵周縁部にめぐらされた周溝の可能性が強い。ただ防御的な要素があるかどうかについては、おそらく後世の削平によって元来の立ち上がりが残っていないため一概に言えない。

次に溝の層位についてだが、大きく3つに分層できよう。a・b層は最終的に埋没した時期の埋土



第39図 A区3号溝出土土器(1/4)

であり、弥生後期前半の遺物を含む。また、c・d層は褐灰色の地山4層とほぼ同質の埋土であり、遺物はほとんど含まない。e層は5層地山と同色の埋土で、f層は4層に比べやや暗めの粘質土である。この特徴から溝の形成を推測すると、まず丘陵周縁部にU字形の溝が形成された(I期)が、その後何らかの理由でf層が堆積、II期の溝がV字形に掘り直しされる。e層はその当時の流れ込みの層である。その後c・d層(地山4層と同色)により埋められ、平坦な地形がつくり出されかさ上げされた後にIII期の溝が作られた。つまり3度の溝の掘削が行われたことになる。最終的な埋没の時期は弥生時代後期前半以降といえる。

3号溝出土土器(第39図)

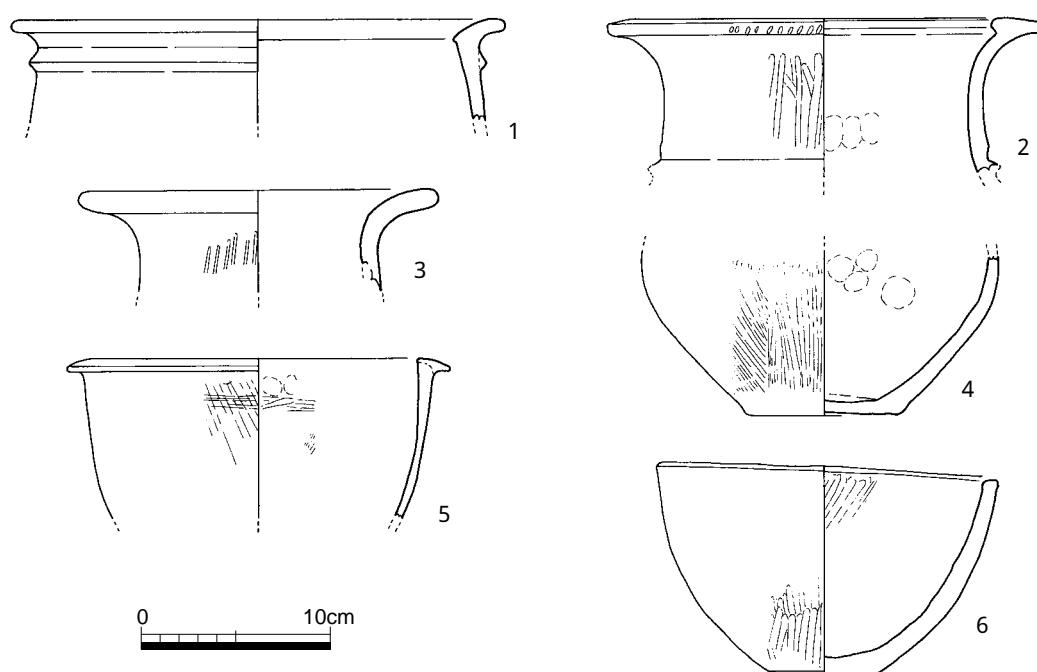
1は袋状口縁の壺形土器である。胴半分が半裁された状況で出土した。器表の摩滅が顕著で器面の調整は観察できないが、口縁部の外側に丹の付着がまばらに見られることからおそらく丹塗りである。頸から肩にかけての屈曲部に2重の突帯、胴部の最大径のやや下位に高めの三角突帯をもち、底部は平底である。a層に含まれていたものであり、遺構の最終埋没時期の時期決定の資料である。2は大型甕(甕棺)の口縁部、3・4は甕底部、5は大型壺底部である。いずれも摩滅が多い。

⑧集石遺構(第40・41図)

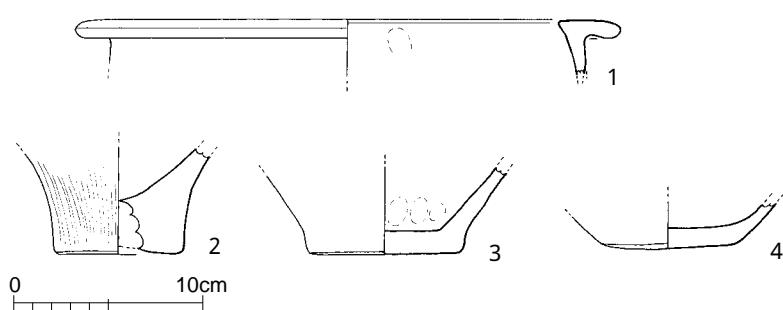
E区の北側の0号河川跡南岸に位置する石積み状の集石である。現存長3.7m、幅1.5m、高さ1.0mである。人頭大の角礫が河岸の傾斜に沿うように積み上げられた形態であり、護岸遺構や船着き場跡と同じ工法で築かれたものである。



第40図 E区集石遺構 (1/40)



第41図 E区集石遺構周辺出土土器 (1/40)



第42図 G区祭祀土坑出土土器 (1/4)

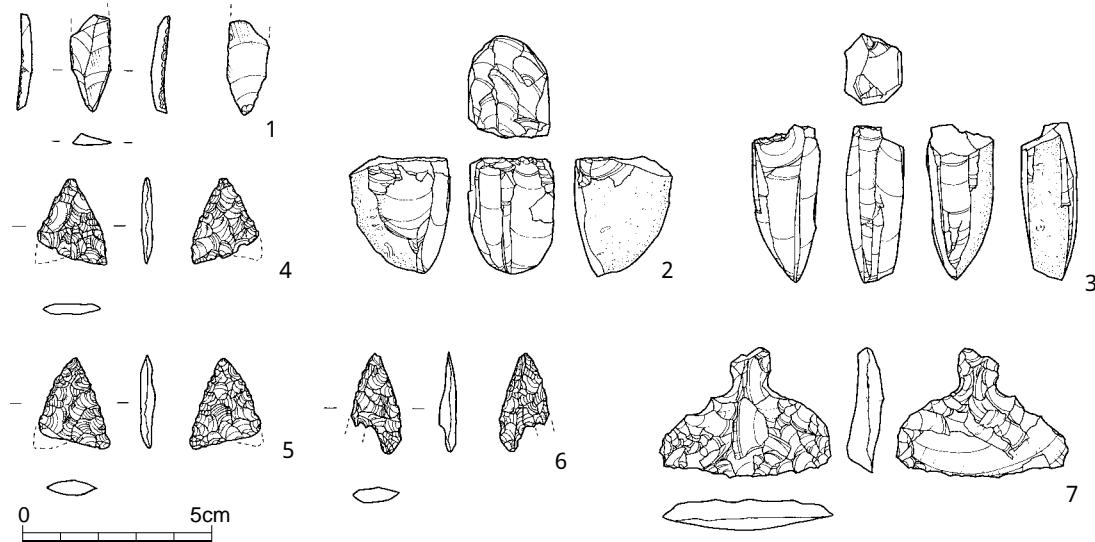
集石の中には弥生時代中期から後期の遺物が混在し、周辺には弥生時代後期後半の遺物が完形に近い状態で出土した（D区南トレンチ周辺の河川Ⅱ層で報告）。1号溝と護岸遺構との間に位置し、0号河川跡がこの地域で急激に狭くなるため、0号河川跡と関連した施設と考えられるが、性格は不明である。

集石遺構出土土器（第41図）

集石遺構の石組みに張り付いた状態で出土した土器を一括した。丹塗り土器が多く、摩滅した土器も多い。1は甕口縁部で内傾する口縁部と口縁下に突帯を有する形態（BⅠ類）である。2は鋤先口縁壺、3は広口壺、いずれも頸部に暗文が見られる。4は壺の底部だが、胴部の上半部を打ち欠き壺状にしたものと思われる。5はⅢ類（口縁が外に垂れる）の鉢形土器で、外面の丹塗りは剥落している。6は口唇の無い鉢形土器で、形態としては4と類似する。時期は、3が弥生時代中期前葉古段階のタイプであり、6が弥生時代後期前葉に編年できることから集石遺構がこの間に存続したことが推測される。

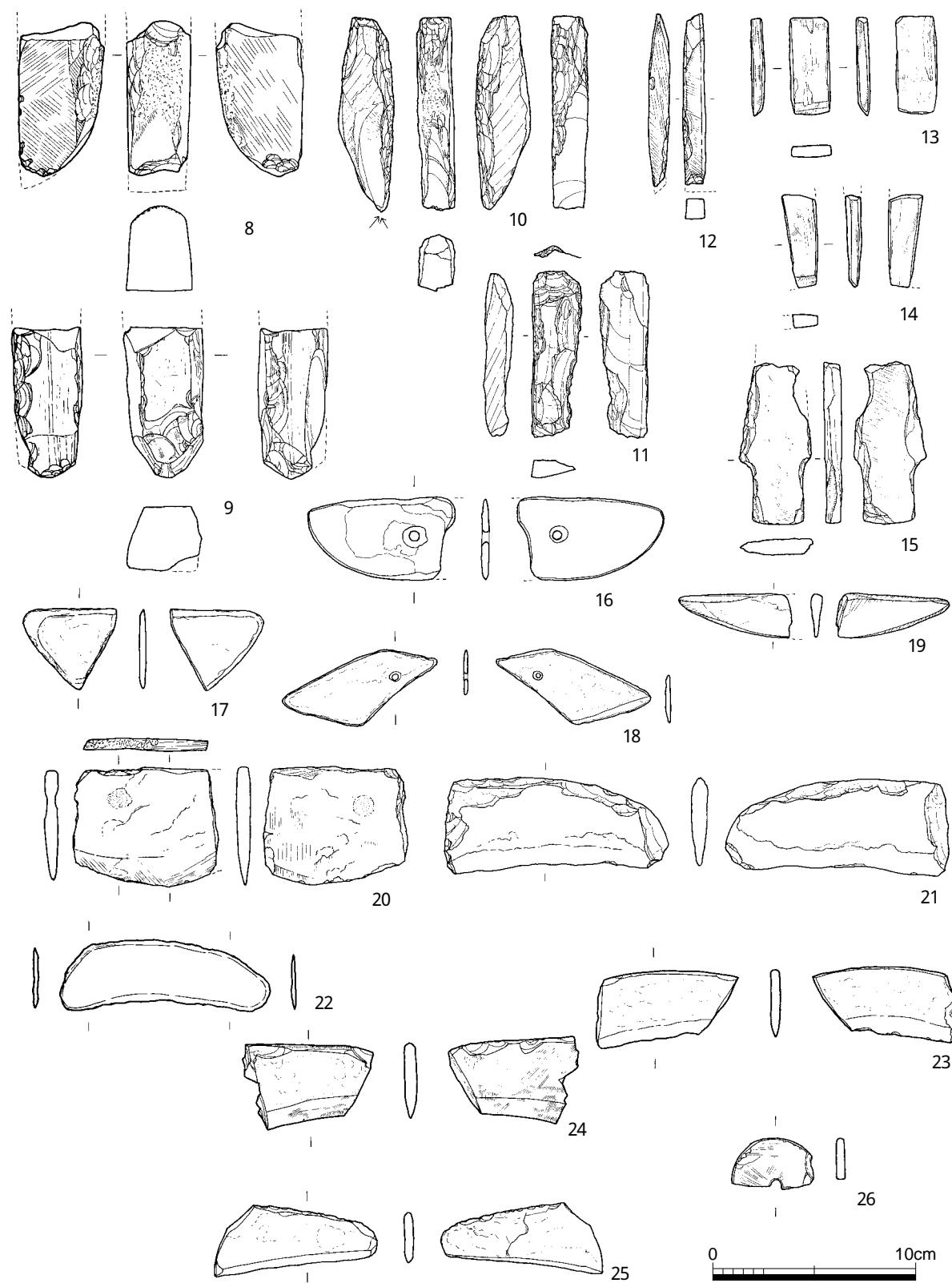
⑨祭祀土坑（第18・42図）

G区の北東側の平成15年度県道改良工事に伴う調査区との境界沿いで確認されたレンズ状に落ち込む遺構である。検出当初は不明遺構として扱っていたが、旧調査区の一部を再掘削したところ、当時の調査で確認された祭祀土坑（林2005）の一部であることがわかり、祭祀土坑とした。今年度の調査では祭祀に関連する遺物は全く出土していない。

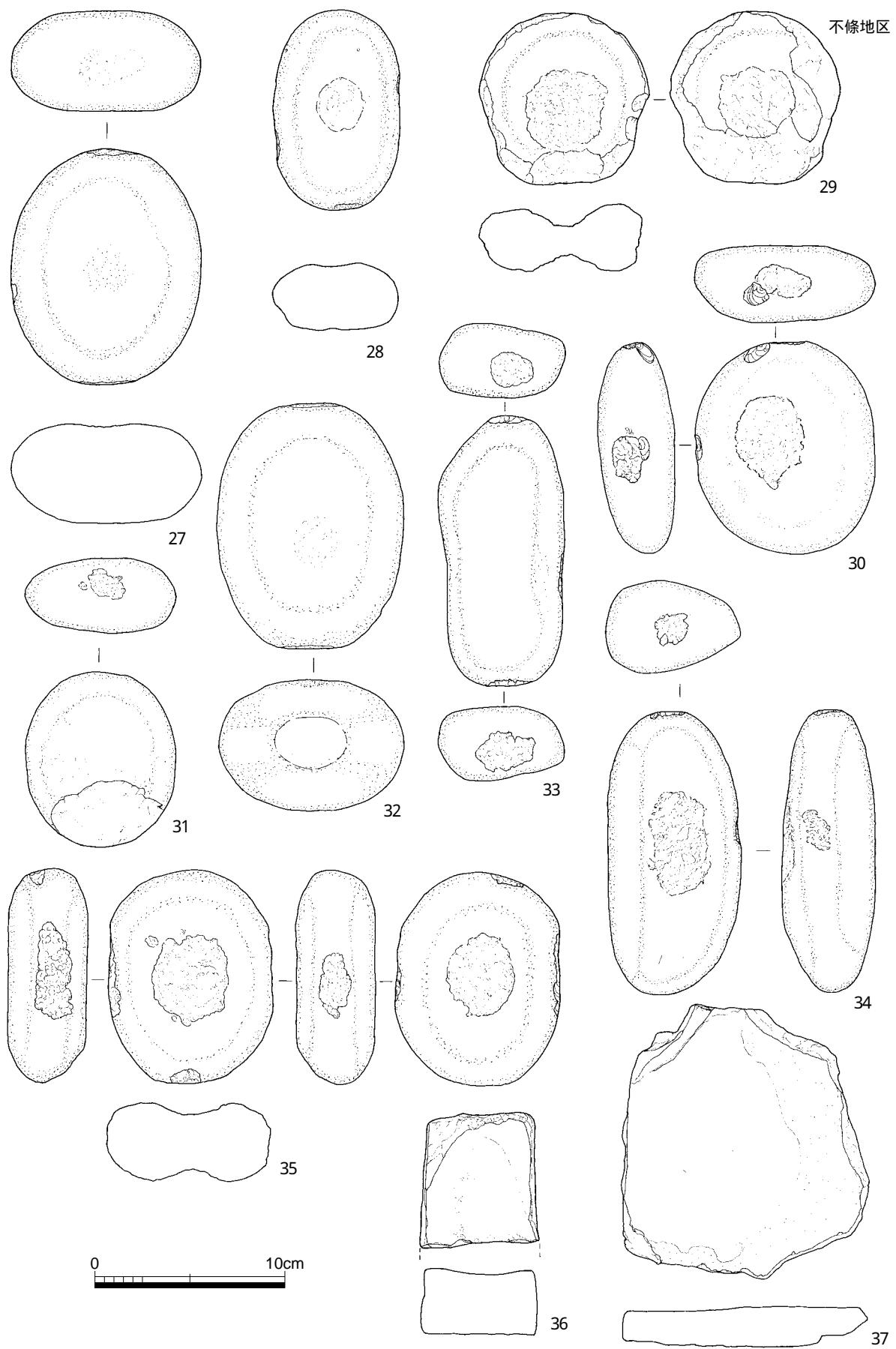


第43図 石器(1) [旧石器・縄文時代] (1/2)

不條地区



第44図 石器(2) [弥生時代](1 / 3)



第45図 石器(3) [弥生時代](1 / 3)

祭祀土坑出土土器（第42図）

1はA I類の甕口縁部で中期後半，2は重厚な平底で中期中葉，3は器壁が薄い平底で後期前半，4はややレンズ状に張り出す底部で後期後葉，さまざまな時期の土器が混入している。いずれも遺構の時期をあらわすものとは言えない。

⑩その他の遺物（第43～50図）

石器（第43～45図）

1～3は旧石器である。1は先端部を欠損するナイフ形石器，2・3は細石核である。いずれも漆黒色黒曜石を素材としている。細石核の石材は円礫で表皮に爪形の傷を持つなどから松浦市星鹿半島（牟田産）と思われる。4～6は石鏸である。4・5は幅広で基部の抉りが浅い形態で，6は縦長で抉りが深い形態である。6はやや古手か，縄文時代後期前半の形態である。7は横型の石匙で，縄文前期の時期か。

8・9は方柱状片刃石斧の未製品で，いずれも基部のみ残し欠損する。8は3側縁に研磨痕が残るが，9は剥離のみで中断している。10は抉入片刃石斧の未製品か。11は石斧の加工材であるが器種は不明。12は石鑿，ほぼ完形品であり，断面は正方形に近い。河川Ⅲ層出土。13・14は小型石鑿である。13は完形で長さは5cm程度である。8～13までは節理のある頁岩を素材としている。

15は石剣未製品で，先端部を欠損。柄部の削りだしは丁寧である。暗灰色の頁岩，勝本層か。

16～20は石包丁である。16～18は砂岩（泥岩）であり，摩滅が顕著である。17・18は再加工の痕跡がみられ，18については剥落した両側片を再度調整し，切り出し形をつくり出す。19・20はごま塙斑がある頁岩で，19は穴がない形態で，かなりの研ぎ直しを行ったもの。20は未製品で，刃部には敲打成形痕が残り，背部は水平に研磨される。穿孔の途中で中断。

21～25は石鎌である。21は玄武岩を素材とする完形品。摩滅により調整痕は不明瞭である。22は砂岩（泥岩）製で全面摩滅が著しい。23も同様に摩滅があり研磨痕が不明瞭，両端を欠損する。24は良質の頁岩を使用し，やや内湾する刃部を刃部に直行する方向の研磨で作り出している。背面には敲打調整痕を残す。25は先端部のみで，摩滅が多く鉄分の付着がある。

26は紡錘車で，径は4.5cm，厚さ0.5cm。玄武岩製で片面に表皮を残す。

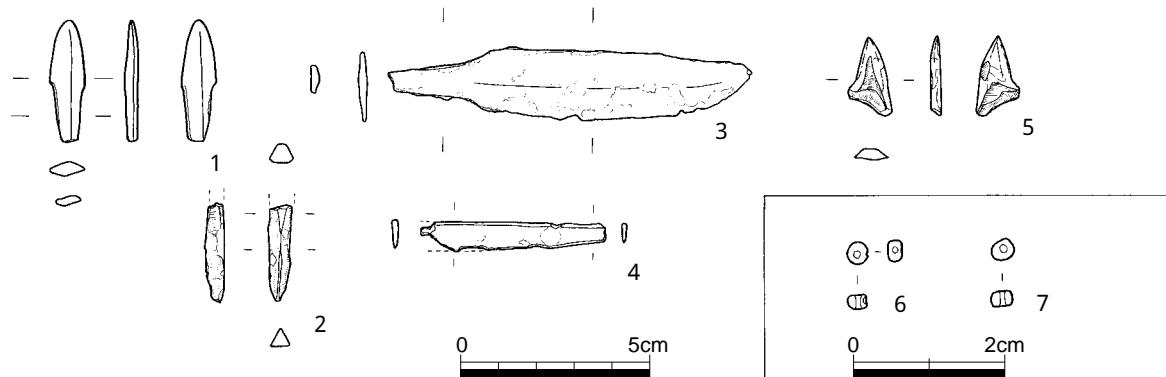
29～35は敲石を一括した。原の辻遺跡出土の敲石は，表裏，両端部，両側縁と可能な限り使用しており，規則性は無いように感じられる。D区南トレンチ0号河川跡内，G・H区1号河川内に特に集中し出土しており，いずれも地元産の玄武岩を使用している。ただ，調査区周辺には円礫は見あたらず，幡鉾川流域にも散布しないことから，島内のどこから持ち込まれたものかは不明である。また敲石の量に比較して石皿の数が非常に少なく，使用方法にも疑問が残る。29はどちらかというと凹石であり，表裏ともに利用され，敲打による剥離も見られる。32は表面と長軸両端を敲打面として利用するが，長軸の一方は擦石として利用している。35は表裏を凹石とし，両端部，両側縁を敲打面として利用している。36・37は砥石である。36は長方形で定型化しており，比較的新しい形態であろう。37は据え置き形の砥石の欠損品であり，片面のみ広く研ぎ面が残る。

金属製品・骨角器・ガラス玉（第46図）

1は銅鏃である。非常に雑につくられたもので、表裏ともに鎧が中心からずれており、断面は菱形がヨコにずれた形態になっている。茎の幅が広く鋭利さを感じられない。2は銅鏃の茎である。1に比べ研磨痕が明瞭に残り、断面は正三角形を呈する。銅鏃の形式分類（福田2005）ではD類に相当する。3は鉄製小型刀子である。鋸化で形状は不明瞭であるが、刀子には珍しく鎧があり、断面は若干菱形をしている。4は不明鉄製品で、片側が肥厚していることから刀子の可能性が強い。ただ身幅が狭く、刃部の研ぎ出しが確認されない。いずれも包含層からの出土で、時期は不明である。

5はサメの鋸歯を研磨して作り出した鏃（歯鏃）である。両側縁はサメの歯の鋭利な部分をそのまま残し、基部の部分のみ表裏ともに厚さを薄くする目的で研磨が行われ、平坦な面を作り出している。1号河川跡河川Ⅲ層の出土であり、弥生時代中期前半から後葉に位置づけられる。

6・7はガラス小玉2点である。いずれもコバルトブルーの色調で、6についてはヨコからの孔があり、中の穴とはつながらない位置でとどまっている。包含層からの出土で時期は不明。



第46図 金属器・骨角器・ガラス玉（1/2・1/1）

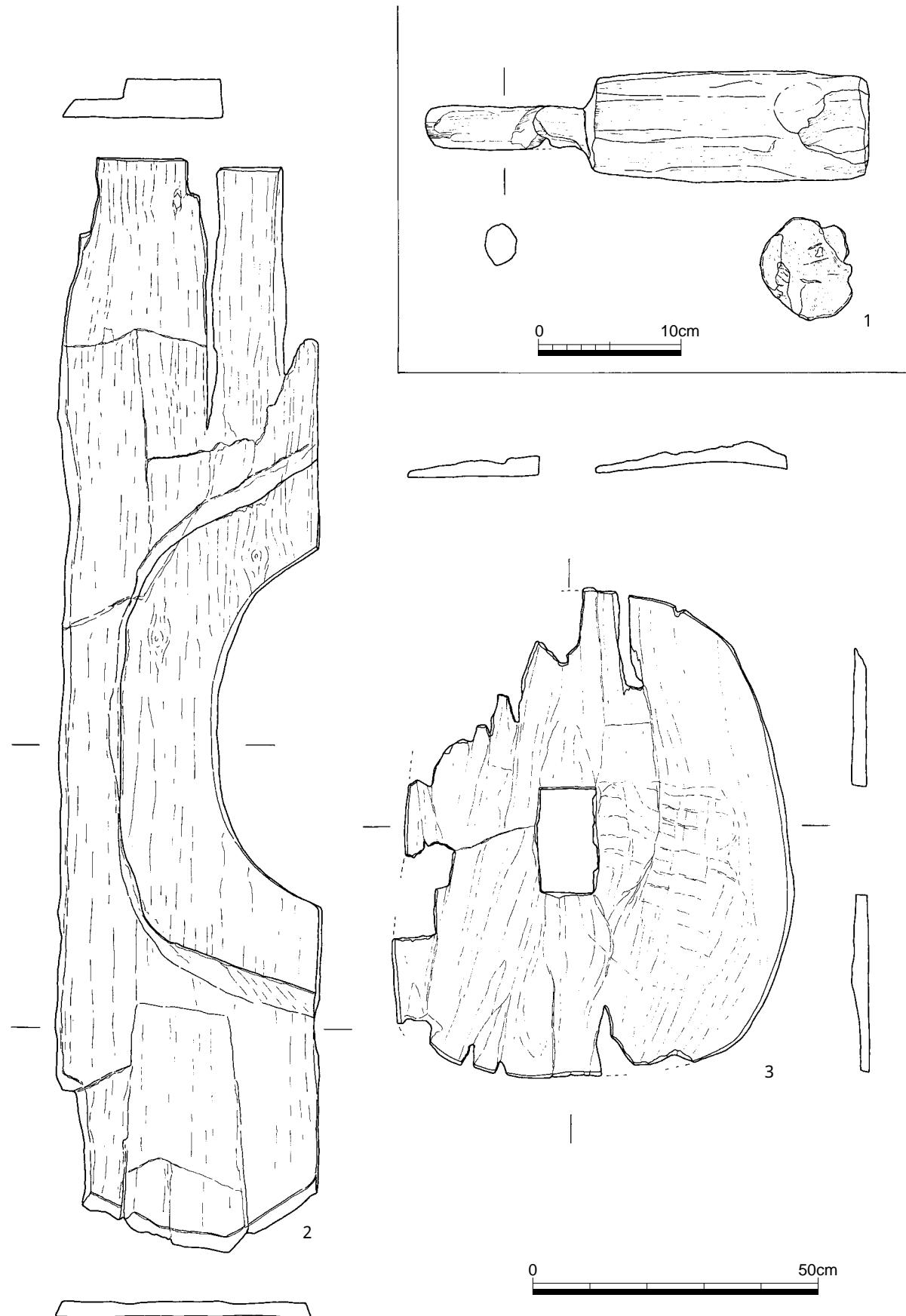
木製品（第47～49図）

木製品は、D区南トレーンチ0号河川跡とG・H区1号河川跡から出土している。

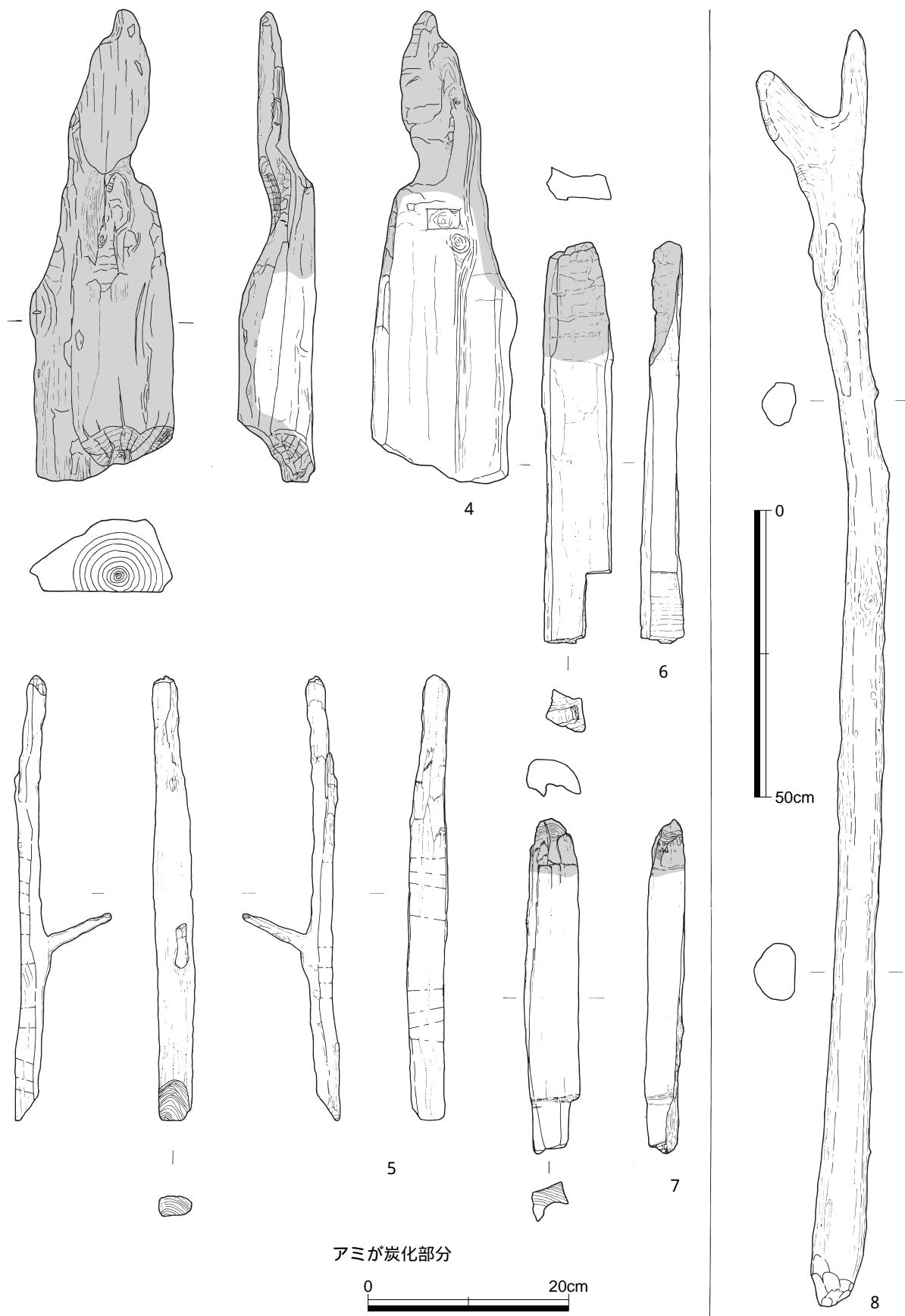
1は横柾である。柾部はほぼ直線的であり、柄は長細い形態である。2は大型の建築材である。長さ193cm、幅46.5cm、厚さ7cmを測る。片側側縁には幅60cm、奥行き20cmの丸い抉り部があり、その周縁部はおもて面だけに肥厚がある。長軸の端部は一方が直線、一方が円弧状の張り出しを持っている。用途は不明。剥落した部分から年代測定を実施したところ、補正年代 1890 ± 20 の年代を得たが、周囲の遺物と比較すると多少時期差を感じられる。河川Ⅲ層出土。樹種はノグルミである。3は2のすぐ隣に出土したねずみ返しであり、一部欠損する。長さ85.6cm、幅67.2cm、厚さ3.6cmで、柄を通す穴の長さ18cm、幅10cmである。樹種はクスノキ科である。

4～11はすべてG・H区1号河川跡から出土したものである。4～7は加工痕のある建築材であり、4・6・7は部分的に炭化している。4は床大引き材の一部と思われる。ほぼ全面が炭化するが、表に平坦面があり、4cm×2cmの棧穴が穿たれていることから推測できる。5は先端が片面から直線的にカットされた枝を伴う加工材で、両側面と裏面にもカット痕が観察される。枝部を利用したもので

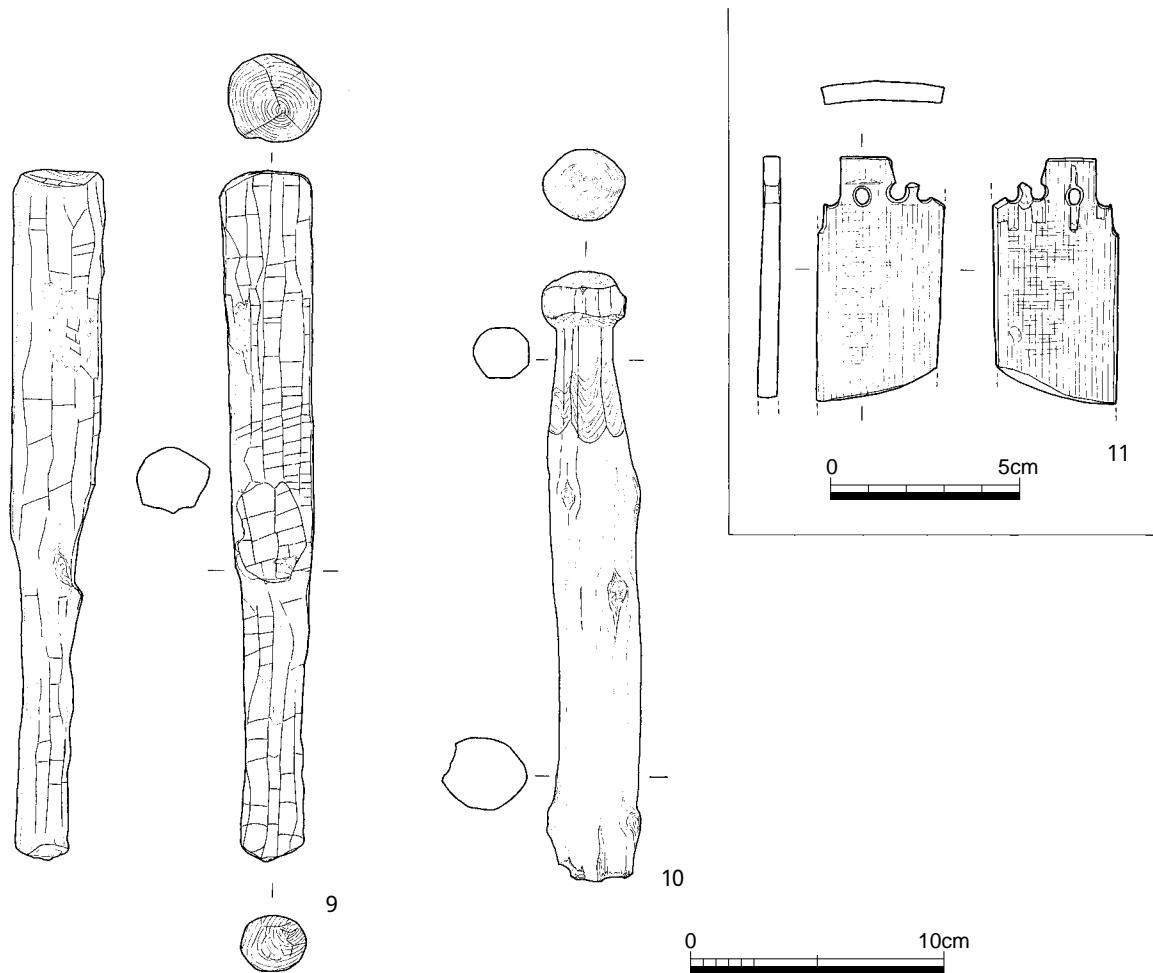
不條地区



第47図 木製品(1) [D区南トレンチ0号河川跡](1/4・1/10)



第48図 木製品(2) [G・H区 1号河川跡] (1 / 6 · 1 / 10)

第49図 木製品⁽³⁾ [G・H区 1号河川跡](1 / 6 · 1 / 2)

あろう。6・7は直線的な加工がある建築材で、いずれも片側に炭化部分がある。6はさらに小口に柄があり欠損している。8は二股の柱材であり、股部に横木をかけるものである。長さは224cmあり、住居柱の可能性もある。9は豎杆状の木製品であり、全面にカット痕が観察される。おそらく未製品であろう。10は陽物形木製品である。片側は欠損していて原形は不明。先端の作り出しのカットは非常に大きく、断面は六角形を呈する。11は短甲の一部である（札甲）。下半分は欠損する。柾目の木口側に4つの丸い穴があり、穴の裏面は紐の掛かりをよくするために浅い溝が彫られてある。また表は浅く胴張りがあり、木目も明瞭である。木目に直行する線も観察され、擦禍痕であろうか。

【参考・引用文献】

- 福田一志・中尾篤志編『原の辻遺跡総集編 I』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会 2005
 武末純一「朝鮮島系の土器」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集 長崎県教育委員会 1995
 松井 潔「土器でみる山陰東部における弥生時代中期後葉～後期中葉の域外交渉について」（第53回埋蔵文化財研究集会『弥生中期土器の併行関係』2004）
 杉原敦史『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集 長崎県教育委員会 1999
 杉原敦史『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第21集 長崎県教育委員会 2001
 林 隆広『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集 長崎県教育委員会 2005
 福田一志「青銅器」『原の辻遺跡総集編 I』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会 2005

(3) 小 結

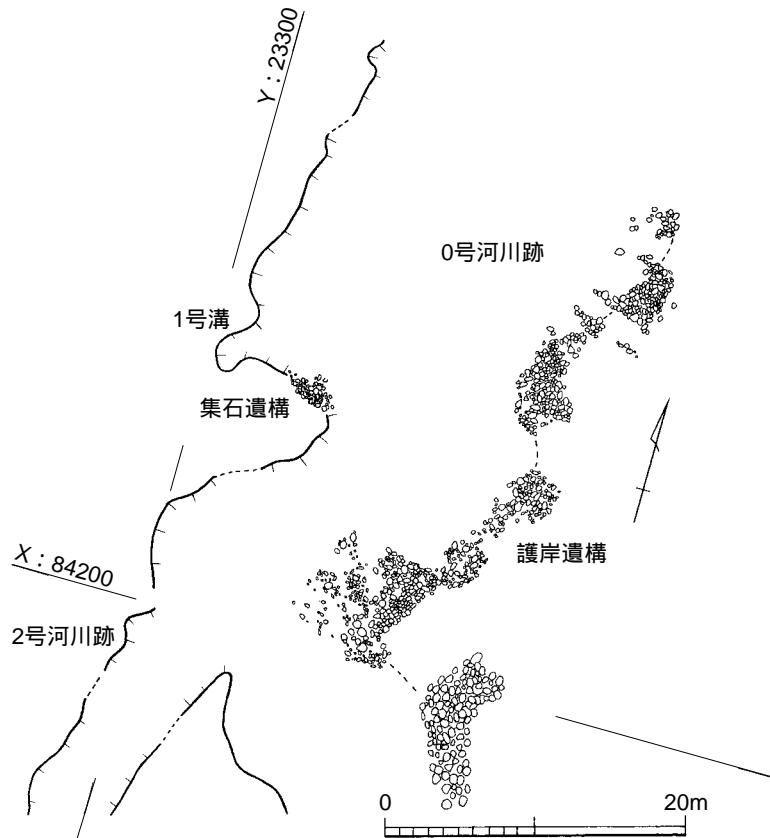
河川跡と護岸遺構について

今年度の不條地区的調査では、護岸遺構に伴う河川跡の流路と、対岸の状況が明らかになった。第50図は不條D～F区にかけて確認された0号河川跡と護岸遺構、集石遺構を合成した図である。本文中にも触れたように、0号河川跡の川幅は護岸遺構周辺で極端に狭くなる。それに付随するように対岸には集石遺構や溝状の落ち込み（1号溝）などの遺構があり、この一帯に河川に関する何らかの施設があったことが推測される。特に集石遺構は下流から上流に向けて上がってきた場合、川の流れが変わる屈曲した位置に当たり、堤防的な要素も考慮される。

0号河川跡は、弥生時代中期前半から古墳時代前期まで蛇行しながら存続したことがわかった。2号河川は古墳時代前期の遺物が伴うことから最後まで残る河川であり、南側の上流部との比高差が1m近くあり、0号河川跡との合流部では急激に下がる。第50図の平面図で見ると、この流域が特に狭小になっているため、そのような現象が起こったとも考える。護岸遺構は2号河川が形成された頃まで残っていた。集石遺構の上端部は、基本層序Ⅲ層（古代・中世遺物水田層）に露頭しており、転用され水田の地境石としても使用されていた。つまりこれらの構造物は古墳時代前期ごろからほとんど現況のまま埋没したことがわかる。2号河川跡はどのようにして0号河川跡の本流から分かれたかは不明である。ただ護岸遺構の南側部分は2号河川方向に向いており、弥生時代中期前半に築かれた護岸遺構が、2号河川形成以後若干

の築き直しを受けた可能性もある。

船着き場跡をはじめ、丘陵西側の低地部にはこのような石組みの構造物が多い。特に河川の地形を利用した施設が目に付く。環濠は丘陵の東側に比べ、規模も小さく防御的な機能は用い得なかったと思われる。したがって河川の役割は非常に大きい。広大な環濠集落が確認された佐賀県吉野ヶ里遺跡においても西側には墳丘墓から北の郭まで縦貫する外堀があるのに対し、東側には田手川を自然の環濠としたという可能性も示唆されている（佐賀県1992）。環濠集落と河川の関係については、機能性も含めて再度検討する必要がある。



第50図 D～F区河川跡状況図 (1/500)

1号河川跡の造成について

1号河川跡では平成11年度の調査以来、河川の造成が指摘されてきた（杉原2000）。その理由としては、溝が掘られていること、足跡状の遺構が多いことなどがある。時期としては弥生時代後期から古墳時代前期にかけてで、目的は水田である。今回の調査ではその造成が裏付けられた。今年度の調査と平成11年度の調査から次のような造成の過程が推測できる（第51図）。

もともと1号河川跡は幅広で浅い流路である。いわば埋め立てるにはそれほど労力がかからない地形であったとも言える。河床の遺物の時期から弥生時代中期中葉から後期初頭の流路である。それが灰色の粘土により埋めたてられたのが後期前葉から末ごろであろう。埋土中にわずかではあるが、その時代の遺物を含んでいる。平成11年度に確認された2号溝が利用されたのが弥生時代後期末から古墳時代前期である。このころ西側低地部の窪地を中心に黒色腐植土が堆積している。この層が2号河川跡をはじめ、あらゆる河川跡が埋没した時期である。その後古代になり大規模な水田開発が実施さ

れ一面広大な水田地帯になった。これが基本層序Ⅲ層である。今年度検出された2号溝は、直線的で幅約1m程と狭く、用水路としての機能が強い。西側土層壁面にある杭は、その矢板止めだろうか。このような過程の中で近現代の水田がつくり上げられてきた。

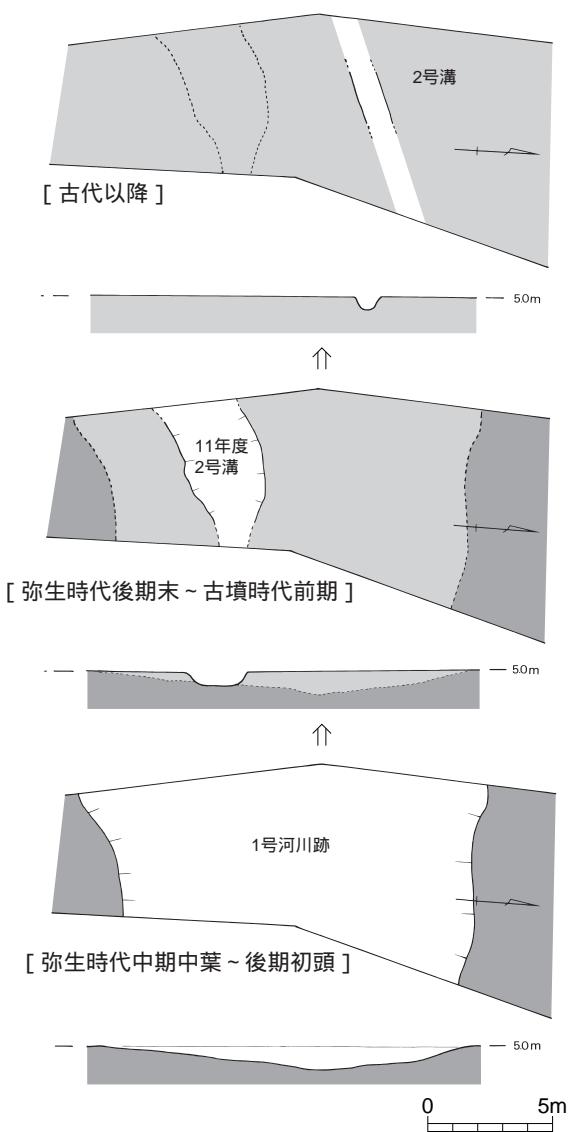
この1号河川跡のもう一つの特徴は、異色な土器が多いことである。第23図44の脚台付壺形土器は他に類例を見ることがなく、独自な器形と言える。平成15年度の県道拡幅工事での調査で「脚付短頸壺」が出土しており、時期は若干後出するものの同じ系譜といえる。また炭化物の多さも気になる。建築材が炭化して出土し、土器にも黒塗りとも思える煤状の付着物が塗られたごとく着床する土器もある。所謂「水辺の祭祀」的な要素がこの河川には多く、その実像の解明が今後の課題となるであろう。

【参考文献】

佐賀県教育委員会「吉野ヶ里」佐賀県文化財調査報告書第113集 1992

長崎県教育委員会「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集 2000

長崎県教育委員会「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集 2005



第51図 1号河川跡造成状況 (1 /300)



D区北トレンチ遺物出土
状況



D区南トレンチ土層堆積
状況



E区0号河川跡検出状況

図版 2



集石遺構検出状況



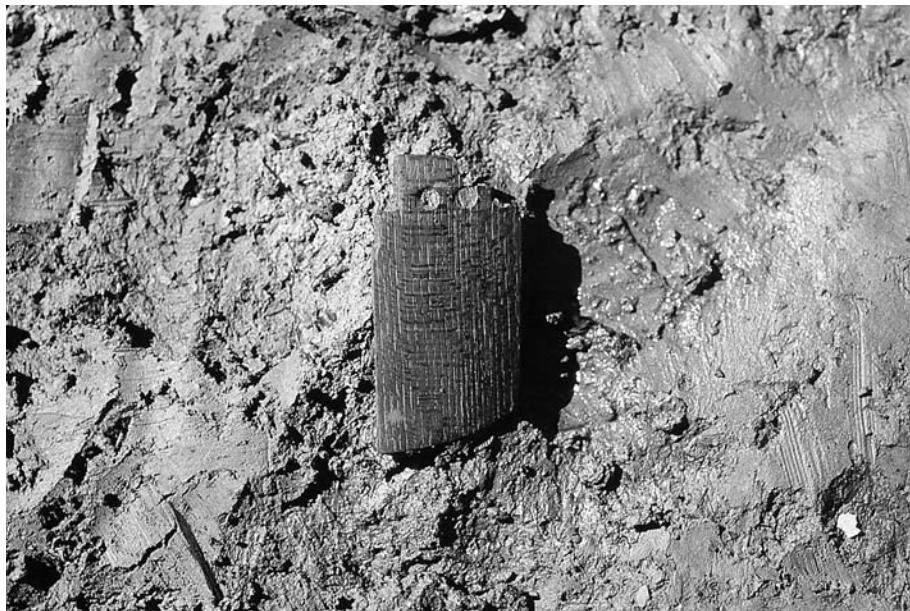
1号河川跡検出状況



1号河川跡遺物出土状況



1号河川跡建築材出土状況



1号河川跡短甲出土状況



2号河川跡土層堆積状況

図版 4



3号河川跡検出状況



1号溝検出状況



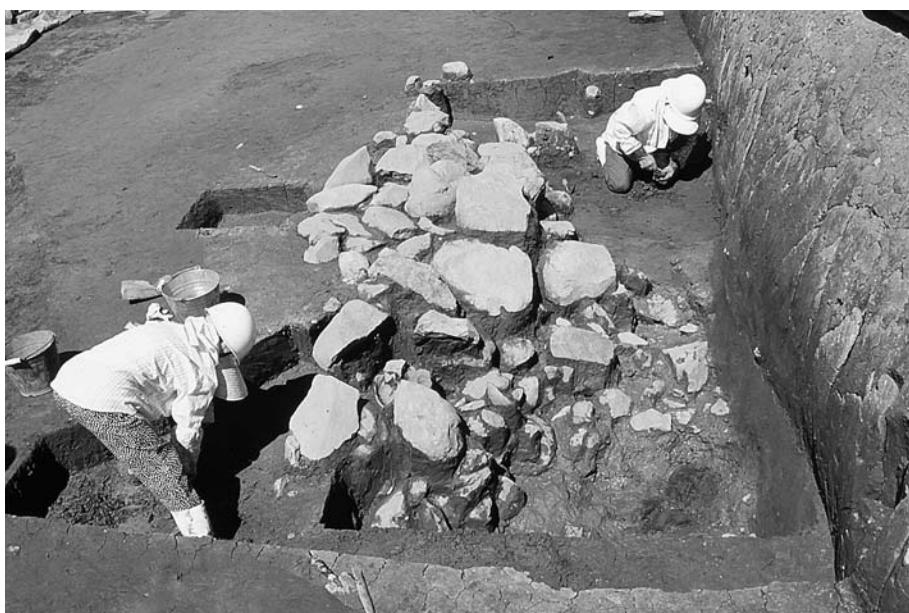
3号溝土層堆積状況



祭祀土坑検出状況



調査風景
(D区南トレンチ)



調査風景
(集石遺構周辺)

2. 不條地区 船着き場跡の調査

(1) 調査の経緯と概要

①調査の経緯

原の辻遺跡は、低地部周辺の圃場整備事業に伴い、平成5年度から大規模な調査を行ってきた。

事業の進展に伴い農道・排水路等の整備も同時に行われたが、圃場整備については、概ね盛り土ということで調査については回避してきたが、道路・排水路については発掘調査をおこなう方向で事業課との協議を進めてきた。平成8年の調査は、農道・排水路計画に伴う調査であったが、この時の調査により、農道計画部分で船着き場遺構が検出され、排水路計画部分で石組遺構が検出された。農道部分の調査では確認された石積みについては、当初堤防状遺構と呼称していたが、石積みが2基検出され、その間を船渠部とする船着き場であることが明らかとなった。発見された2基の突堤は、西突

堤・東突堤と呼ぶことになった。また、船着き場の南側からも、石組み遺構が東西軸に2基検出された。この石組遺構については、船着き場の付属施設として捉えられ、2基の間は通路として利用されていたとの見解に至った。

これらの遺構の存在は、船着き場遺構がかなり大規模な施設であったことを予見させるものであった（1998西）。

ただし、調査範囲が限定されていたことから周辺の状況や、規模については課題を残すこととなった。

その後、船着き場周辺は圃場整備が行われたこともあり、調査については手付かずのままとなった。

平成17年度から原の辻遺跡は本格的な整備に着手す



第52図 船着き場跡位置図

船着き場跡

のこととなつたが、遺跡の整備は丘陵の中心域から行い、環濠・墓地などの整備も順次復元していく計画となつた。船着き場については、特別史跡の範囲外ではあるが原の辻遺跡を代表する重要遺構であることは間違いないため、将来の整備を視野に入れて範囲確認調査を行う必要があるとの声が挙がり、船着き場の調査のための協議を行うこととなつた。調査にあたつては、地元生産組合との話し合いが必要となり、平成17年7月21日に協議を行い、調査についての了解を得た。協議の結果、調査は稻作が終了する9月から11月の間に行うこととなつた。

②調査の概要（第54図）

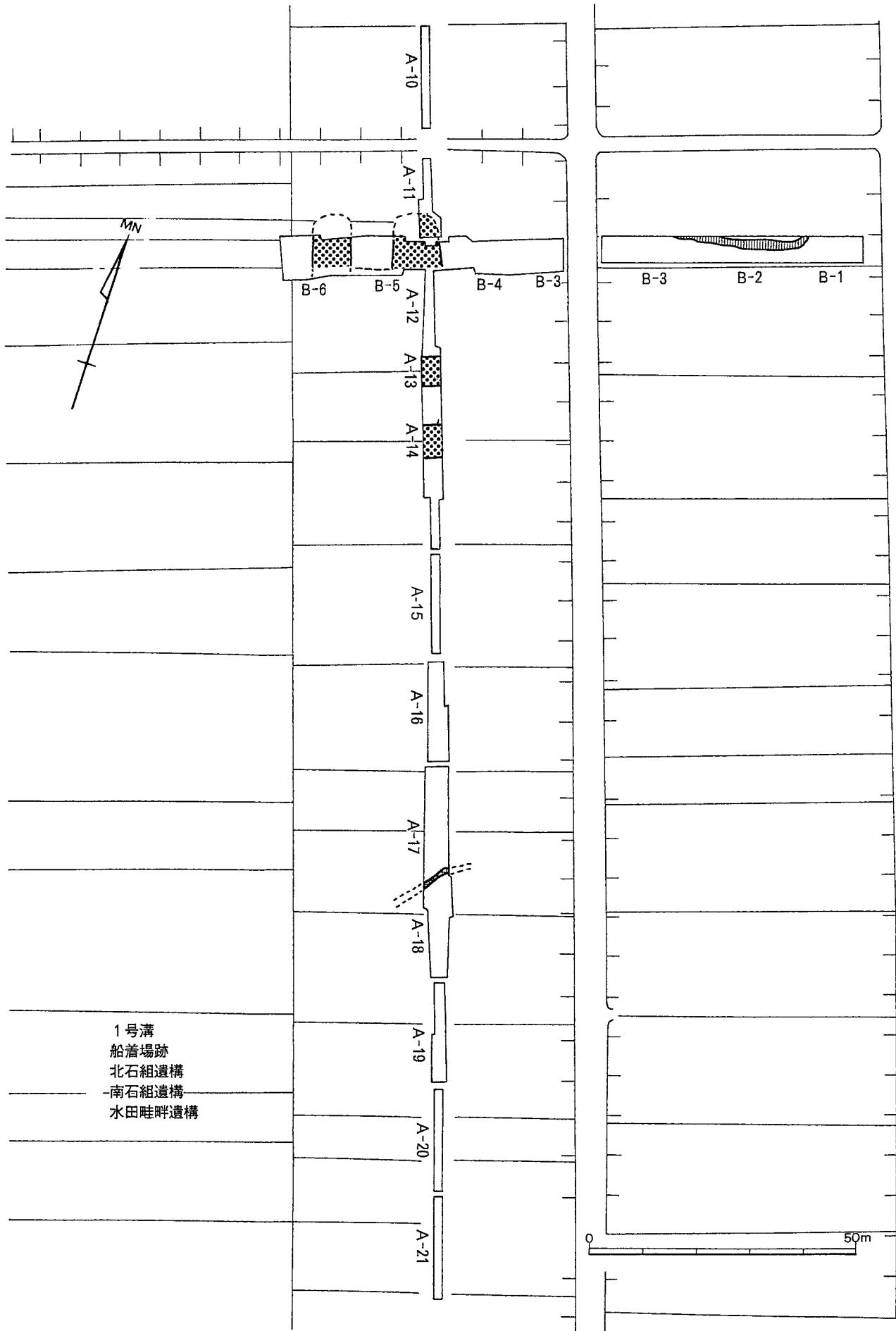
調査は平成17年9月5日から行つた。調査区は第1調査区から第8調査区までを当初設定したが、第9調査区を追加し、総調査面積は630m²となつた。調査区は船着き場を中心に設定し、船着き場に繋がる河道の範囲を知る必要性から、船着き場の北側に第1調査区を設定し、2～9調査区については船着き場の範囲を確認する必要性から東西南北に調査区の設定を行つた。調査区の設定については、10mおきに東西に配置された暗渠排水を考慮して調査区を設定しなければならず、調査区の幅や方向に規制がかかった状態であった。調査区の幅は5mを基本としたが、遺構面まで深いところで3mあることを考慮し、階段状に2段堀りすることとなつた。調査は重機による表土剥ぎを1m行い、その中にさらに調査区を設定した後、手掘りで調査を行つた。水に悩まされながらの調査となり、小さな遺構については断面でしか確認できないものもあった。調査の結果、船着き場に繋がる河川の幅、船着き場の南北軸の大きさの確認、東側に運河状の大溝（水路）を確認するなど、大きな成果を得ることとなつた。調査終了後の埋め戻しについては、調査地の現状が水田であることを考慮し、慎重を期して埋め戻しを行い、11月30日に調査を終了した。

【参考文献】

西 信男『原の辻遺跡・鶴田遺跡』原の辻遺構調査事務所調査報告書第4号 長崎県教育委員会 1998

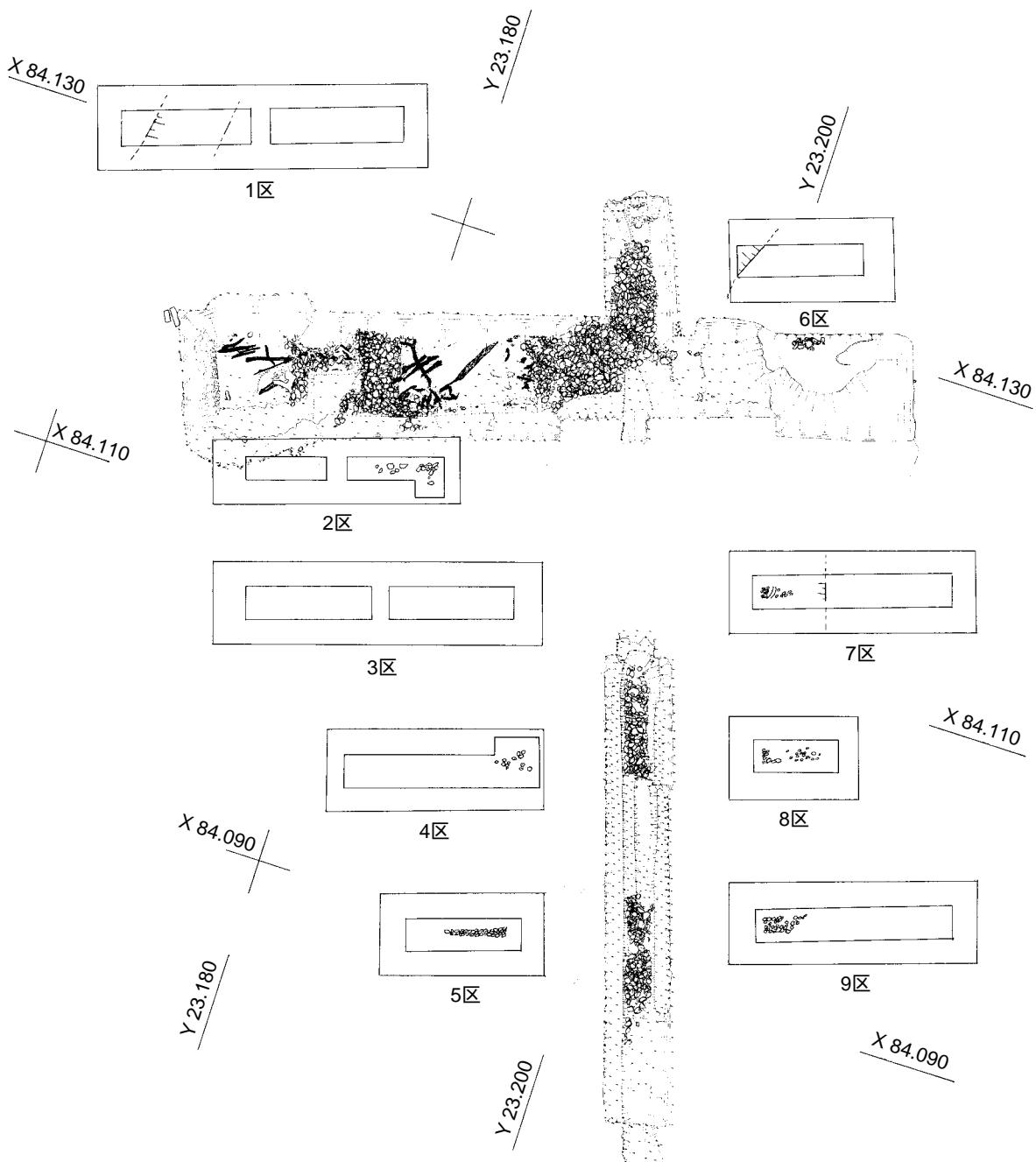
（2）平成8年度の調査成果

平成8年度検出の船着き場と石組み遺構の規模について記載する。船着き場の東側突堤は上面幅約3m、下底面幅約9m、高さ約2m、下底幅約8.8m、高さ約1.6mである。突堤間の船渠部分の距離は、上部で約12m、下部で約8mである。石組遺構は、北側石組が南北に約6m、検出された東西の長さ約1m、南石組は南北に約7m検出され、中央部が低く溝状になっている。北石組と南石組の間は船着き場と、丘陵部を繋ぐ通路と認識され、その幅約8mである（第53図）。船着き場遺構の造営を技術的に見れば、盛り土の間に樹皮を敷いたり、石の崩落を防ぐために杭を打つなど、一定の工法（敷粗朶工法）が見られる。これらの土木技術も中国からの技術の導入があったことが予想される。北石組・南石組については、船着き場の付属施設として捉えられ、特に南石組は溝状遺構であるとしている。船着き場跡の発見は、東アジアの中でも最も古いものであることが判明するとともに、一支国が交易の拠点であったこと、「魏志倭人伝」の中の「・・・南北市羅・・」を証明することとなり、



第53図 平成 8 年度の調査区および遺構配置図 (1 / 1,000)

船着き場跡



第54図 平成8年度検出の船着き場実測図と今年度の調査区配置図(1/400)

原の辻遺跡の中でも代表的な遺構となった。この他、弥生時代前期後葉の畦畔遺構や溝状遺構なども検出され、低地部の重要な施設の存在が確認された。

(3) 層位

①平成8年度の層位

平成8年度の調査ではセクション図が報告されていない部分もあったため、今回の調査区の層位との比較のためにあらためて提示し説明する。なお、平成8年度の調査区については第53図を参照願いたい。また標高については今回の調査で5m前後に弥生時代の生活面があることが理解できたことから、5mのラインをもとに説明を加え、後に検討する。

第55図B - 5区は突堤の南側のセクションである。西突堤の一部がセクション図に投影されているが、これから見れば突堤の高い部分の標高は約4.6m、川底で3.7mを測り、比高差は90cmあまりである。ただし、この断面は高い部分が投影されていない部分にあたり、これより北側ではその比高差は大きくなる。4層は黒色土で有機質土壌である。時期的には弥生時代後期後葉から古墳時代前期の層で、船着き場の構築時期より新しい時期の堆積物であるが、遺跡周辺から確認されることから、鍵層として位置づけられる層である。有機質の粘質土であることから、水生堆積物であると判断される。

第55図A - 11区は東側突堤の南北の断面である。礫の高い部分で標高約5.2m、川底で3.4mを測り、比高差は1.8mである。標高5.2mは、東西の突堤のなかで一番高い部分にあたり、元来の船着き場の標高に最も近い数値であろう。4層、5層は礫と同じような傾斜で堆積している。5層は礫の上部に乗る層で、17年度の調査でも礫の上でも観察された灰白色粘土層である。船着き場の天端の土が流れ込んで堆積した層と判断している。

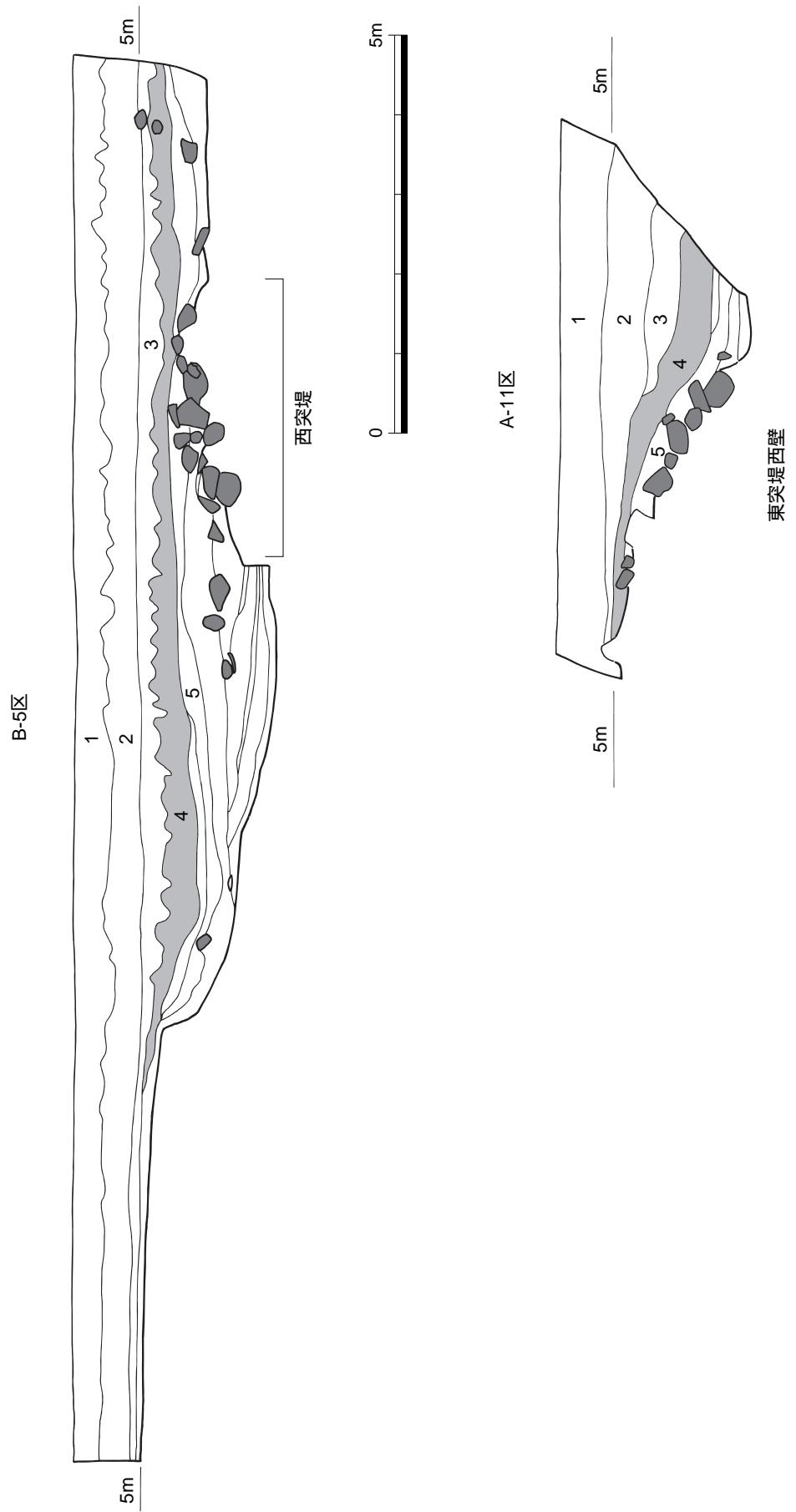
第56図A - 12区は東突堤のすぐ東にあたる部分で、6層の部分が台形状の高まりをみせる。また、両端は緩やかに落ち込んでいる。高まりについては、東突堤の張り出しがこの部分にまで及んでいるものとし、船着き場の天端の一部と考えられる。南側には一部落ち込みが見られ、礫も入り込んでいることから、北石組の礫がこの辺まで入り込んだ結果と考えられる。このことから、北石組の礫は、北側に落ち込んでいることが理解できる。

第56図A - 13区北側に北石組の礫がセクションにかかっており、北側に傾斜している。この北石組と南石組との間は高まりがあり、ここが上場で船着き場から東側に通じる通路となると判断されている。南石組は一端傾斜してさらに立ち上がることから、石敷きの溝と捉えられている。この溝によって船着き場の南北の広がりは捉えられるが、さらに南側に平場が広がることが考えられる。

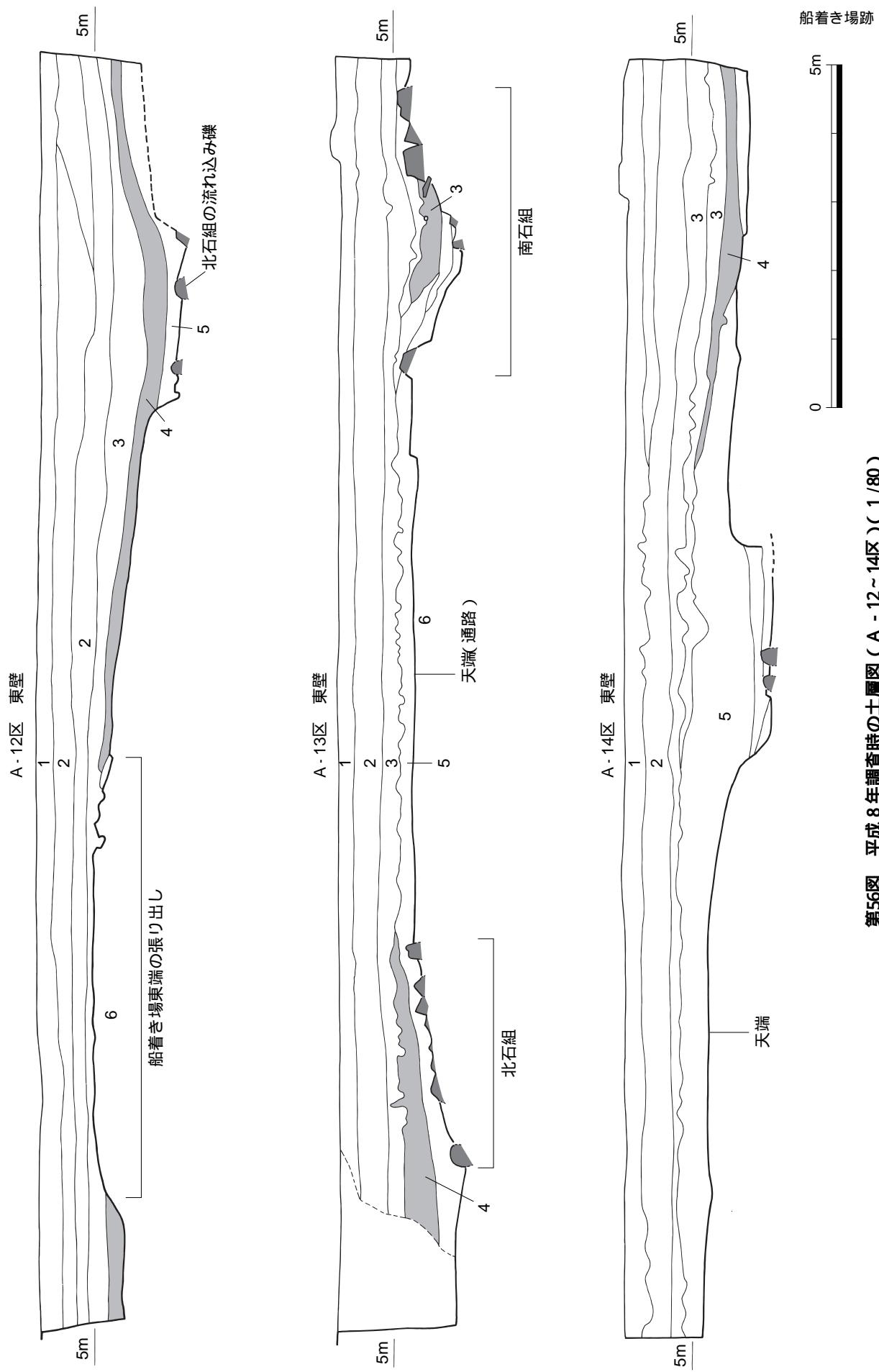
第56図A - 14区では、南側の上場が第5層上面（5mライン）にあたることが予想される。この土層では、南側で傾斜していることから、ここに落ち込みがあったことが捉えられる。

第57図A - 15区では再度立ち上がって幾つかの溝が確認される。この溝については、黒色土が入り込むことから、後期後葉以前に掘られた溝であることは相違ないであろう。

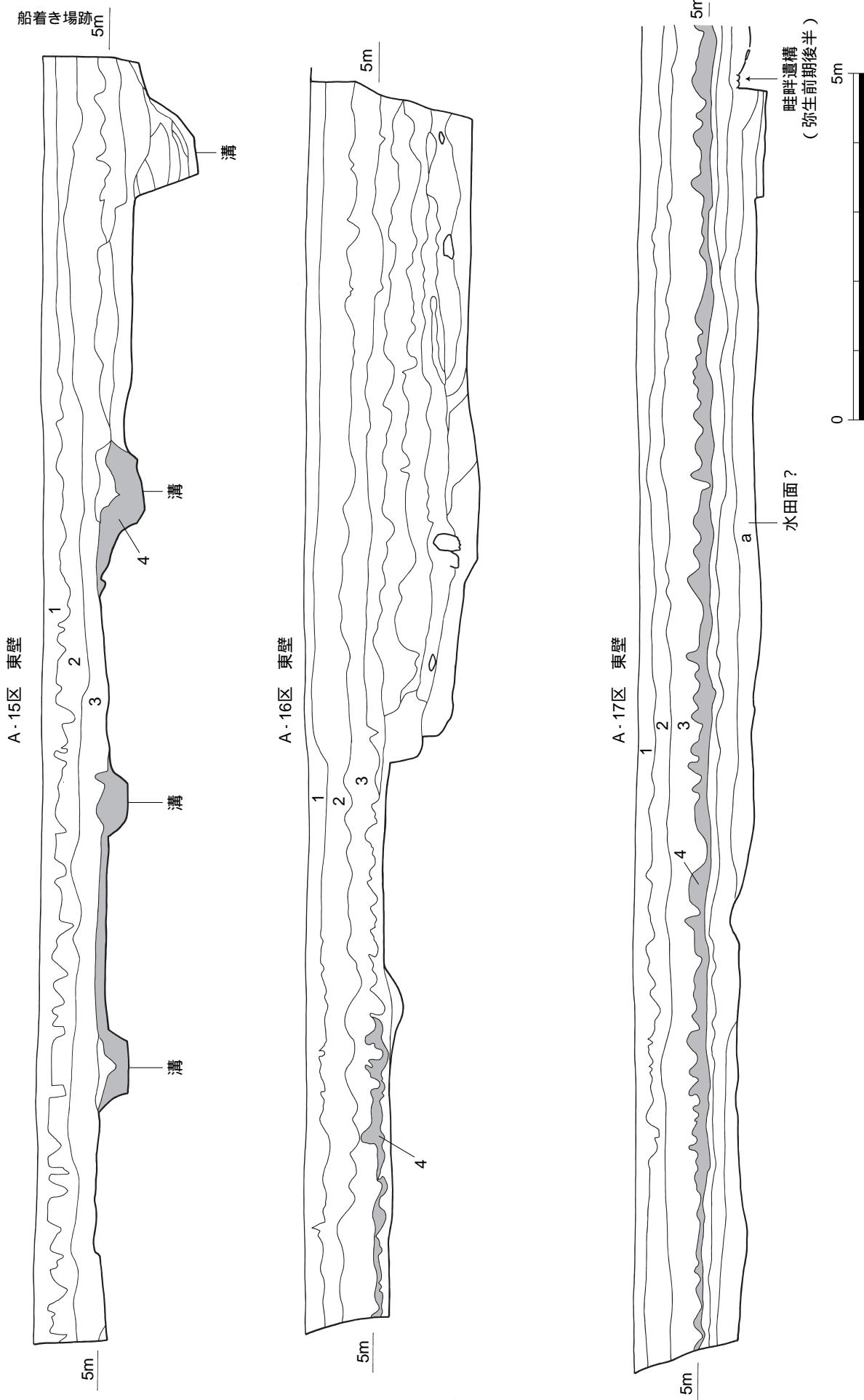
船着き場跡



第55図 平成8年調査時の土層図（B-5・A-11区）(1/80)



第56図 平成8年調査時の土層図(A-12~14区)(1/80)



第57図 平成8年調査時の土層図 (A-15~17区)(1/80)

第57図A - 16区では、黒色土の薄い層が北側で検出される。南側は深堀りした部分で、遺構との関連はない。

第57図A - 17区では全体に4層の黒色土層が観察される。この黒色土層は、上部に踏み込み状に凹凸が著しいことが特徴的である。4層の堆積後に水田化したものと思われる。4層の直下には弥生時代後期以前の生活面が確認される。この区では、弥生時代前期後葉の畦畔遺構を確認している。a層は、畦畔を伴う水田面と解釈されている。

平成8年度の調査区の層位においては、今回5層とした灰白色粘質土層及び、4層の黒褐色有機土層との対応が可能である。また、船着き場の上場が標高約5m前後の位置にあることが理解できた。このことから今回の調査でも標高5mラインを一応の目安として調査を行うこととなった。

②今年度調査区の層位

層位については全体の土層の中で共通する土層について説明し、煩雑な部分については個々に説明を加える。

基本土層

1層～2層 表土 上位にのる層で実測図では層位は書き込んでいない。

3層 灰褐色を呈する古代・中世の水田・耕作土面。土師器等が出土している。

4層 黒褐色有機質土 原の辻遺跡において全体的に見られる有機質土層である。遺物から弥生時代終末から古墳時代前期頃の堆積物と考えられていたが、7区の4層出土の木片の年代測定をおこなったところ、AD80～100年の年代が測定されている。4層は、中期や後期の段階の遺構が埋没する最終段階の堆積物である。河川や濠などの検出はこの層を検出することから始まる。今回の調査では、1区の河川の上位層、3区の西側、5区水路の上位堆積物、6区西側の河川上位堆積物、7・8区の水路上位堆積物、9区では水路上位堆積物と東側で検出している。この層が検出されていない部分は、高台になっていたものと思われる。4層の堆積は、高い所で6区の標高5m付近である。

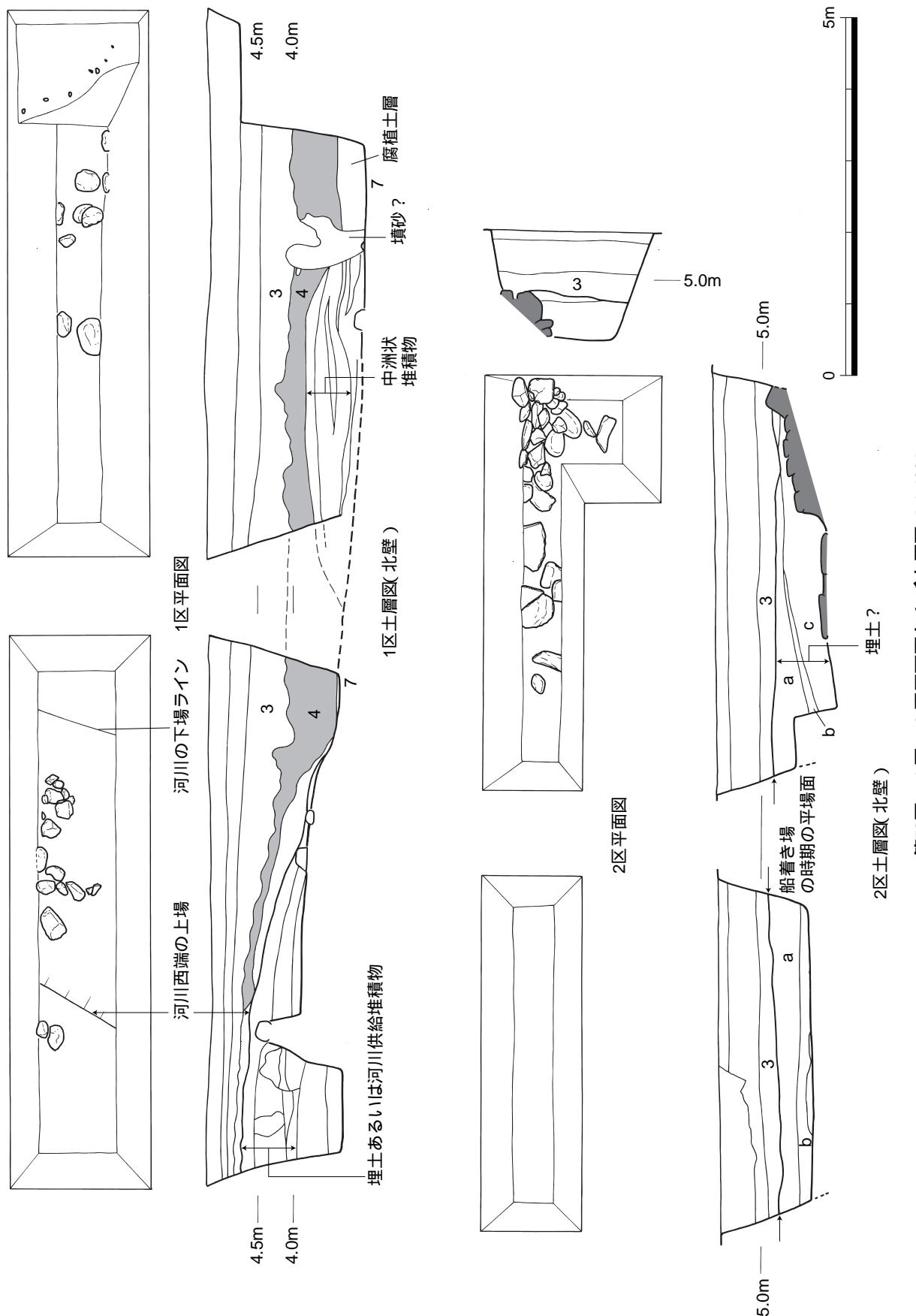
船着き場の時期より新しい堆積物であるが、全体の鍵層として、実測図中では濃いアミかけで示している。

5層 灰白色粘土層 磯直上に乗る層で、船着き場が機能していた時に堆積したものと思われる。この層は磯が検出される水路内の堆積物で、特に5区では5a・5b層に分類できるほどの厚みがある。純粋な粘土層で、カーボン粒を少量含む。

6層 灰黃白色粘質土層 弥生時代の生活面で、ほぼ標高5mライン上にある。3・4区、6・7区で確認しているが本来はもっと高かったのが後世に削平されたものと思われる。実測図中では薄いアミかけで示している。

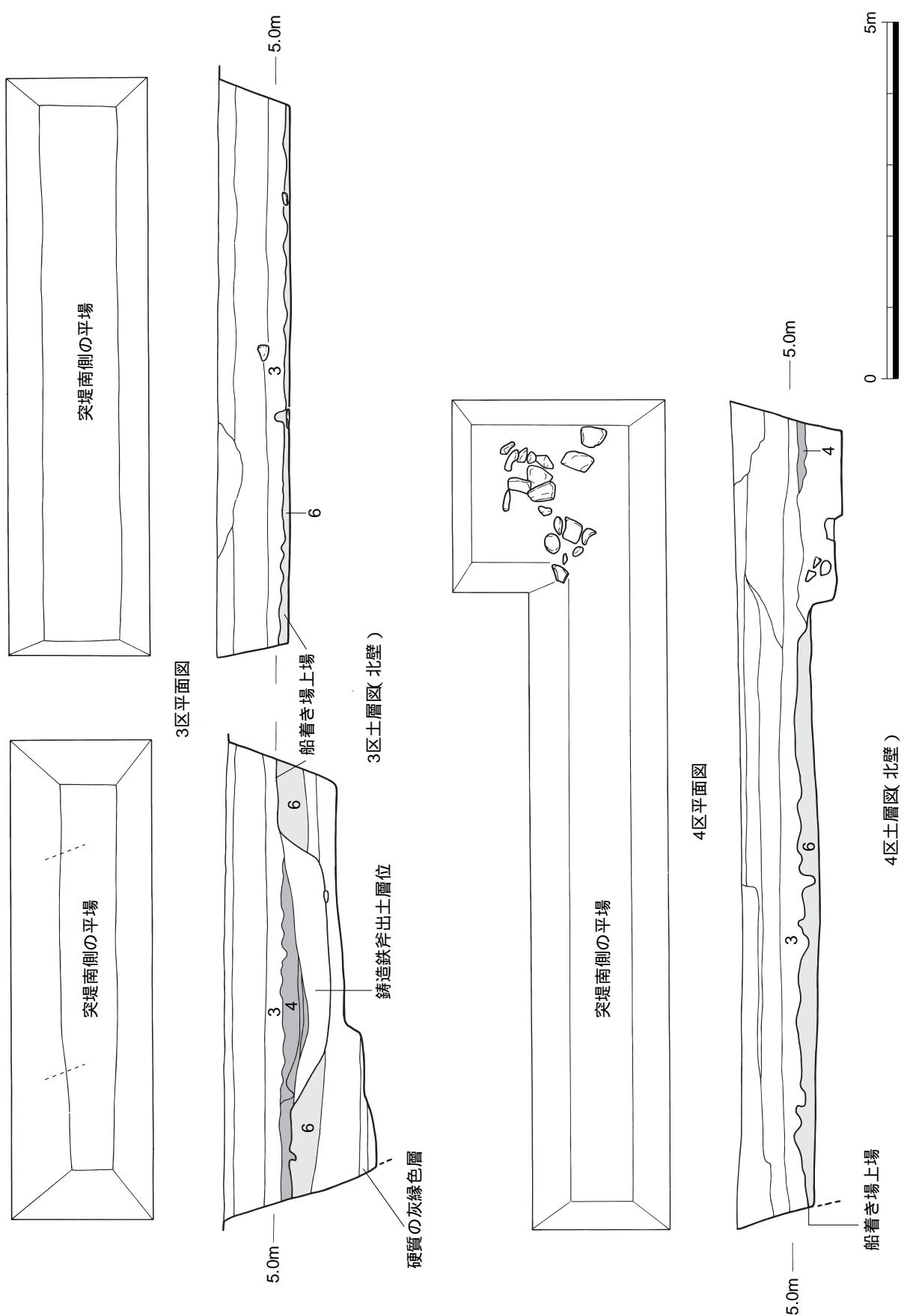
7層 灰青色砂礫層 河川底に当たる部分で、1cm大の小磯と粗い砂とで構成される。7・8区では灰白色を呈し、砂が固結した状態を呈する。この層をもって河川、あるいは水路の基底部と判断している。

船着き場跡



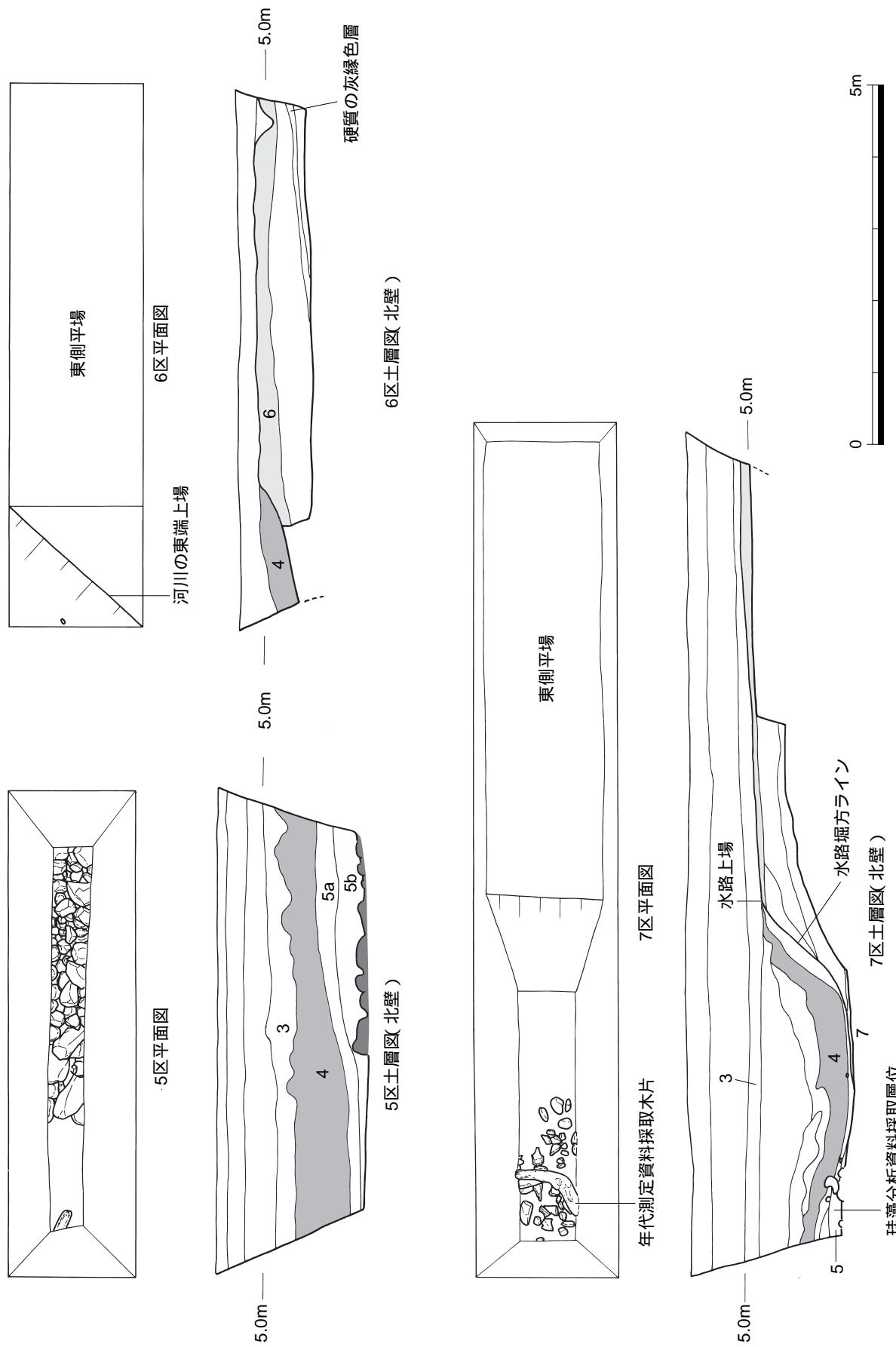
第58図 1区・2区平面図および土層図 (1/80)

船着き場跡



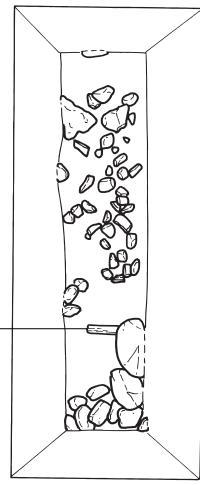
第59図 3区・4区平面図および土層図 (1/80)

船着き場跡

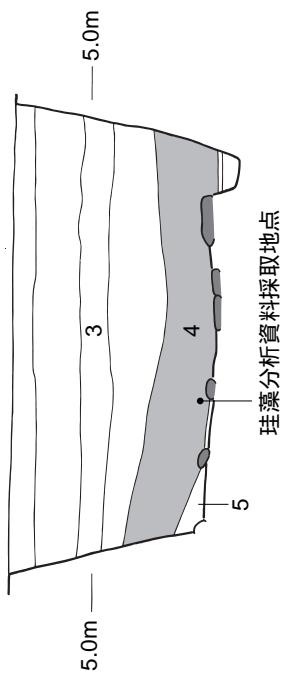


第60図 5区・6区・7区平面図および土層図(1/80)

年代測定資料採取木片

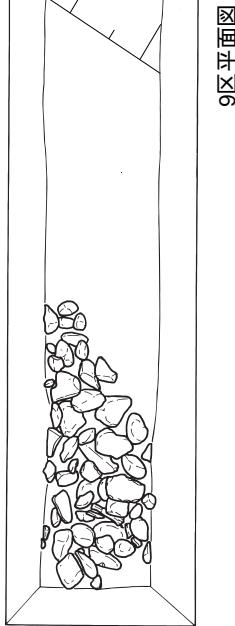


8区平面図

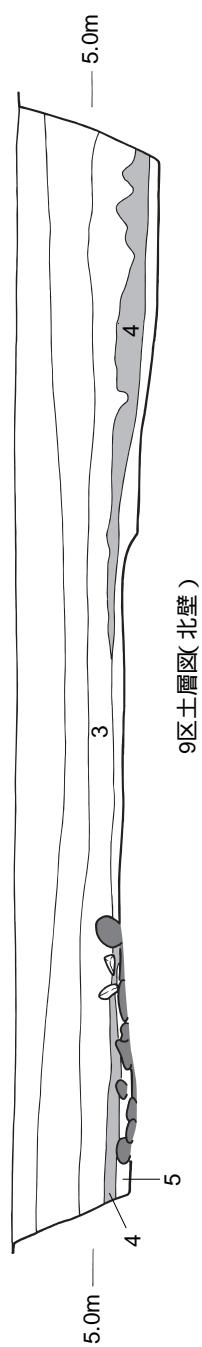


8区土層図(北壁)
珪藻分析資料採取地点

81



9区平面図



9区土層図(北壁)

第61図 8区・9区平面図および土層図(1/80)

船着き場跡

船着き場跡

以上が基本土層の説明であるが、鍵層である4層が堆積する時期である弥生時代後期から古墳時代前期までの時期については、原の辻遺跡の周辺環境が大きく変化する時期であった可能性が高い。環境の変化については、有機質土のゆっくりした堆積から、原の辻遺跡周辺が沼状に常に水が冠水して外に流れ出さないような状況を作っていた可能性が指摘されよう。

土層における自然分析結果について

7区・8区で年代測定及び、珪藻分析を依頼したのでその結果を示してみる。7区では4層出土の樹木について年代測定を行った。4層は先に説明した黒褐色有機質土層で、我々の認識では遺物から弥生時代後葉～古墳時代前期の堆積物との認識をもっていた。分析結果としては、BP1 860±20との結果が出ており、ほぼ認識と同じ様な結果が得られている。また、8区検出の礫直下の樹木について分析を依頼した結果、BP2605±20の結果がでている。分析対象の樹木については礫の下に敷き込んだのではないかとの意見もあったが、分析した樹木が中期の時期に対して古すぎる結果が出ていていることから、礫よりも下の層の樹木が流れ込んだものと判断している。

珪藻分析では7区の5層（第60図）では内湾の海水の影響が示唆されており、海と繋がっていた可能性が考えられるとの結果が出ている。5層は礫直上の粘土で、船着き場が機能していた時代の堆積物と判断していることから、船着き場が機能していた時期には海水が入り込むような環境であったと判断される。これに対し、8区4層の珪藻分析の結果では、直接的な海水の影響はなかったと報告されており、弥生時代後葉～古墳時代前期の段階では、止水域や流水域の影響を受ける湿潤な陸域の環境が示唆されるとしている。この4層と5層の結果からすれば、弥生時代中期の段階では河川に海水が入り込んでいる状況であるが、弥生時代後葉～古墳時代では水の動きは少なく、一帯は沼地化していた時期であった可能性も考える必要がある。珪藻分析の結果は、中期の段階で船着き場の機能が停止するという考え方にも大きなヒントを与えてくれる結果である。このことについては、今後同様な資料を採取し遺跡の環境変化を捉えていく必要がある。

（4）各トレーニングの調査成果

調査区ごとの遺構の状況について説明する。

1区の調査（第58図）

調査区西側で河川の西端を確認した。上場の標高は4.5m、川底の部分は3.0mで比高差約1.5mを測る。川は、船着き場に流れ込む河川の西端と考えられ、河川の方向は北東～南西方向をとり、平成8年確認の河川と繋ぎ合わせると東側から蛇行して西側に入り込む河川の存在が解明できた。川の縁には礫が張り付くように何個か確認されているが、この調査区の礫自体散漫な在り方をしており礫の性格については定かではない。調査区の西側の川底にも礫が数個検出されている。

2区の調査（第58図）

平成8年の調査で、西突堤とした礫群の一部を確認した。礫は突堤の南側を構成するものと思われ、南側に傾斜している。南側に礫が傾斜する状況は、突堤の部分が旧地形とは別に造り出されたことを

裏付けることと考える。つまりは、突堤は自然地形を利用したのではなく、河川に対して西側に張り出していた自然地形に対し、北側に盛り土や礫などで突堤を造り出した状況が想定される。検出の状況から傾斜した礫の層は盛り土の可能性が高く、突堤の部分と自然地形との間に埋め土をしたことが想定される状況であった。

3区の調査（第59図）

船着き場の南側に広がる平場と、落ち込みを確認した。落ち込み遺構は、逆台形になり中に袋状鉄斧が1点出土している。落ち込み全体の様相は掴めなかつたが、南側セクションに幅が狭い落ち込みがあることから、溝状に繋がっていた可能性もある。調査区西側で船着き場の西側の縁が検出されるものと想定していたが、そのラインの検出には至らなかつた。このことから、船着き場の西側の縁はさらに西へ広がるものと判断される。今後、船着き場の東西幅を推定するには、西側の調査が必要となる。

4区の調査（第59図）

3区同様、船着き場の南側の平場に相当する。東側隅に礫を検出したが、これについては平成8年調査の北石組の一部と判断した。土層からも東側隅にのみ河川の堆積土に検出される4層が見られることから、この部分から北側に下がるような傾斜地が存在し、この部分まで水が入り込んでいたものと判断される。

5区の調査（第60図）

平成8年度確認の南石組が西側に延びることを確認した。南石組は平成8年度の調査では、南北幅約5mで、真ん中が窪み北と南を天端とする石組の水路とされていた。石組は西方向にやや傾斜しており、船着き場の西側を流れる河川の水をこの部分に取り込んでいたものと判断される。今回の調査から、船着き場の広がりは5区北側付近を南限とするものと想定される。

6区の調査（第60図）

調査区の西側隅で、河川の東側端と考えられる落ち込みを確認した。1区で確認された河川の西側端と同じ河川の端部と考えられ、1区の端部との川幅約35mの河川が想定される。東側は平場となつてあり、一部にシミ状遺構を確認したが、明確な遺構とはなり得ない状態であった。

7区の調査（第60図）

南北に溝状の遺構を確認した。遺構は東側ではその天端を確認できたが、西側では川底からやや立ち上がった段階までを確認している。東側の立ち上がり方はかなり急激であることから、人工的な溝である可能性が大きい。平場と川底との比高差は約1.3mを測る。東側では礫は確認されていないが、西側寄りに礫の数が多くなる。したがって、船着き場の西側縁は礫を積んでいたものと思われる。

礫の間からは、弥生時代中期の土器が出土していることから、船着き場構築時期と同じ時期にこの溝も掘削されたものと考える。

8区の調査（第61図）

7区へと続く溝が確認されている。7区同様、調査区の西側に礫石組の一部が確認されている。上

船着き場跡

場は確認されていないが、7区と同じ規模であることが想像されることから、この溝は7区から南北に繋がることが想定される。

9区の調査（第61図）

調査区の西側に北東 - 南西方向に礫群を検出した。礫の縁の標高は約4.8mを測り、やや西側に傾斜する。この礫は、平成8年度調査時に確認した南石組に繋がるものと判断され、この付近で急に東側に屈曲するものと考えられる。5区、7~9区の調査、及び平成8年度の南石組の調査から、船着き場の東側には大溝が掘削され、西側に迂回していたことが予想される状況となった。

検出した河川について

今回の調査で、船着き場に取り付く河川の東西幅が確認された。川幅は約35mを測りやや大きな河川であったことが想定される。この川の本流は、平成9年の調査で確認された川と考えられ、現在の川筋に対し、蛇行するように流れているものと考えられている。この川の川幅は35m前後であることから、今回検出した川幅は、本流とほぼ同じ川幅であったことが確認されたことになる。今回検出した川は船着き場付近で蛇行しているが、これはもともと船着き場付近に突き出した自然地形があったことを想像させる。この突き出した自然地形にさらに北側に突堤を構築し、船着き場としたのである。

7・8区検出の溝について

7・8区で検出した溝は、9区・5区の調査で西側に屈曲して西側の河川の水を取り入れるような施設であったと考えられる。検出時には西側で黒褐色の土を確認し、東側で地山との境界ラインが検出された。溝の幅は西側ではラインの検出はなされていないが、8m以上の川幅が想定される。上場の標高は約4.8m、礫を検出した面の標高は3.8mで、比高差1mを測る。溝内部には礫が西側からやや傾斜しながら東側まで検出されたが、西側に厚く、東側では少なくなるという傾向があった。東側での礫の石積みは見られず、そのまま立ち上がって平地に続いている。溝として呼称しているが、この溝によって船着き場が陸地から切り離され独立するようになる。このことから単に溝と考えるよりも水路的な意味合いをもつ遺構として捉えられよう。船着き場の船渠部分とともに、この水路内にも船が引き込まれていたと考えられる。この水路のよって陸地から切り離された船着き場は、どこかに陸地との通路が確保されていたことは想像に難くない。そのためには水路上に橋を渡していたであろうことが推定される。

以上、各調査区の調査成果について記載したが、今回の調査によって、船着き場がさらに西側に広がる可能性があるということが判明し、さらに課題を残すことになった。ただし、調査区の位置において制約があったものの、東側水路の確認や船着き場の南北の規模、船着き場に取り付く川の流れを確認することができたことなど一応の成果をあげることもできた。

(5) 出土遺物

土器（第62図）

遺物は7・8区の礫とともに出土した土器を主体とするが、他の調査区からも帰属時期不明の土器の小片や石器が出土している。この中から帰属時期が判明するものや、船着き場の造営時期に関連する遺物を中心に説明を加える。

1は、1区の黒褐色粘質土層直上である3層から出土した土師器壊である。調査段階から古代・中世の時期の層位と判断していた層である。口径14.6cm、器高2.4cmを測る。器面・胎土とも灰黄褐色を呈し、体部は丸く立上げ口唇部を丸く摘み出している。底部は板起こしである。10世紀代のものか。2～4は、2区の礫と同じ層位から検出した、須玖Ⅱ式の甕の口縁部である。船着き場の礫が積み上げられた時期を特定できる資料で、平成8年の調査時よりやや新しい時期のものである。5は6区で出土した須玖式土器の底部である。6区は船着き場の東の対岸にあたる部分で、大溝を挟んで東側の平地部分にあたる。調査区では、シミ状の遺構を検出したがその性格までは把握できなかった。6～8は7区出土で、7・8については2～4と同様に船着き場関連の礫と同じ層位から出土し、6は表土からの出土で台付甕の脚の部分にあたる。9～12は8区の礫と同層から出土している。12については内部にススが付着していることから、船着き場と言えども生活感にあふれた空間であったことを意味するのではないだろうか。

石製品（第62図）

石器は2区と7区から1点ずつ出土している。2区出土の石製品14は頁岩製で、全体を研磨しており、一端は抉りをいれて糸巻き状に仕上げている。このような石製品は、平成11年の調査で1号濠（弥生時代中期前葉）から出土したものに類似品がある（2000、杉原）。本例は、上部を欠損しているが、上下対称になるようなものと考えられる。使用法については不明。7区出土の13は、頁岩製の磨製鎌である。厚さ1mm前後と、かなり薄く仕上げている。

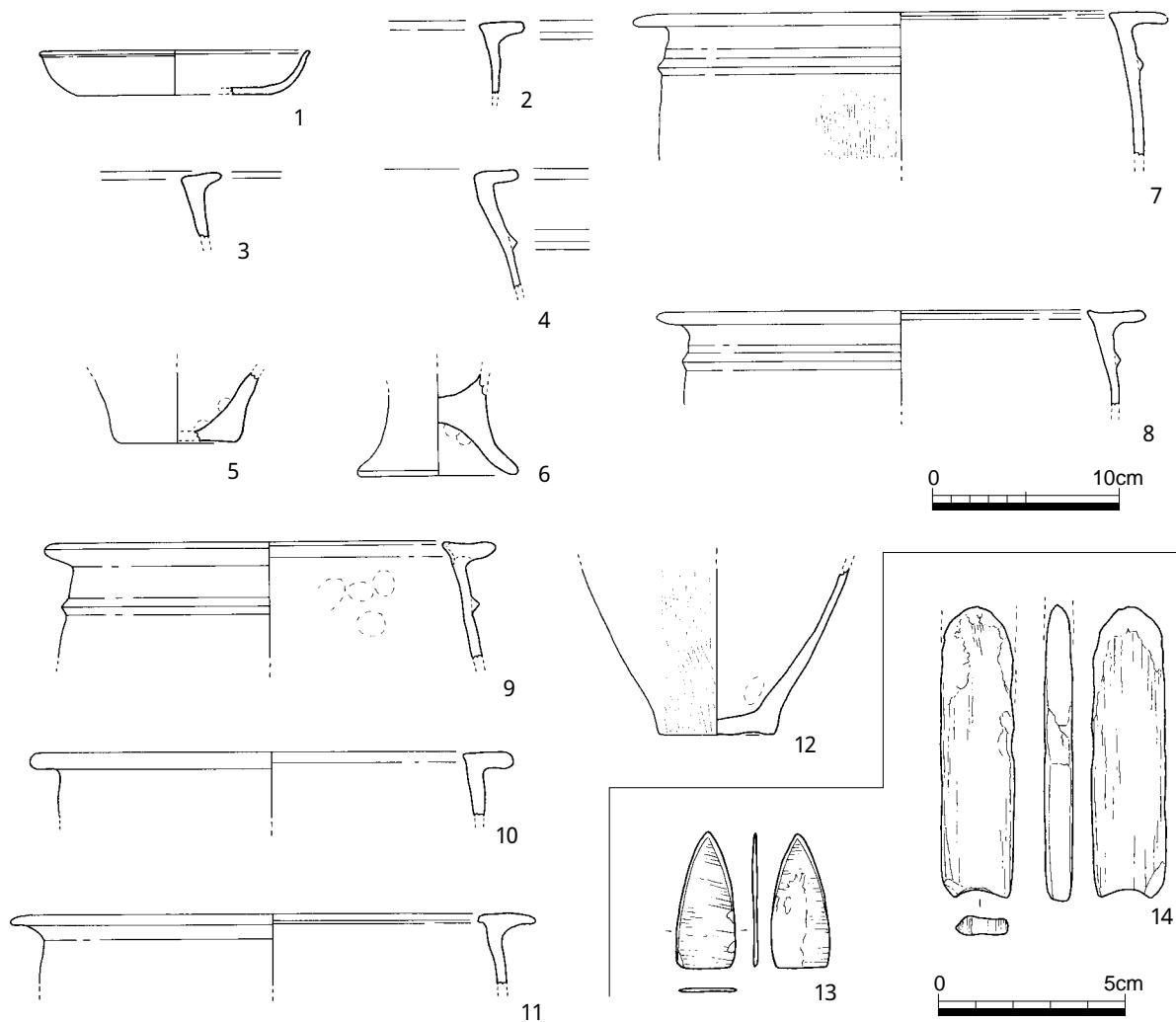
金属製品（第63図）

3区の落ち込みから、鋳造鉄斧片が出土している。鉄斧は、体部の一側片部を残し、袋部の片面はほぼ剥落している。基部直下に2条突帯を有し、断面は側面がやや屈曲していることから菱形を呈しているものと思われる。刃先はやや裾広がりで、全体形は台形状を呈している。刃部は再加工されて段を有しており、再加工された刃先全体は逆凹字状になっていた可能性もある。特筆すべきこととして、刃先や、体部の一部に朱状の赤い顔料が塗布されていることがある。本来は全体に塗布されていた可能性もあり、塗布の意味などについて考えなければならないであろう。時期的には中期前葉から中葉にかけてのものと判断する。落ち込みから出土したということと、再加工をおこなっていること、さらには朱を全体に塗っていた可能性があることなどから、かなり特別な使用法を考える必要がある。船着き場における特別な儀式等に使用されたものであろう。

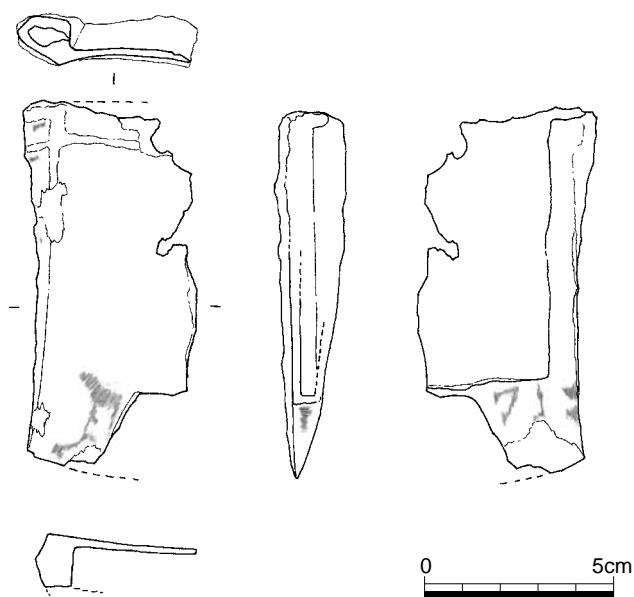
【参考・引用文献】

杉原敦史 『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所報告書第19集 長崎県教育委員会 2000

船着き場跡



第62図 出土遺物 (1/4, 1/2)



第63図 3区出土鉄斧実測図 (1/2)

(6) 小 結

今回の調査はトレンチ調査で、前回確認した船着き場の範囲を確認することが主な目的であった。

トレンチの設定にあたっては、暗渠排水が東西に敷設されていたこともあり、東西軸にしか設定できないという規制もあって思うような調査区が設定できなかつたが、それぞれの調査区ではそれなりの成果を見出すことができた。今回の調査成果について、以下に箇条書きでまとめてみる。

調査成果

- ・船着き場の北側には川幅約35mの河川が流れていたことが確認された。船着き場に流れ込む川は、遺跡の北側を流れる本流に南西側から蛇行しながら合流するものと思われる。支流といえども川幅が約35mもあり、かなり大きな川であったと言える。
- ・船着き場の東側には水路を構築していたことが確認された。水路には河川の水を西側から引き込み、逆L字状に迂回させて東側に流れるようにしていったと考えられる。水路の幅は約9m、深さは約1.2mを測る。やや大形の船でも碇泊可能な規模である。水路の構築に際しては、礫を多用しており大掛かりな土木工事となっている。
- ・水路を巡らすことにより、船着き場を島状に区画する意識がはたらいていたものと思われ、船着き場と丘陵側とは木橋などを利用していたものと考えられる。
- ・船着き場の南側は平場となっているが、南側では水路によって区画されることから、船着き場の南北の大きさは南石組の北側までということになり、南北の長さ約38mの規模であったと考えられる。

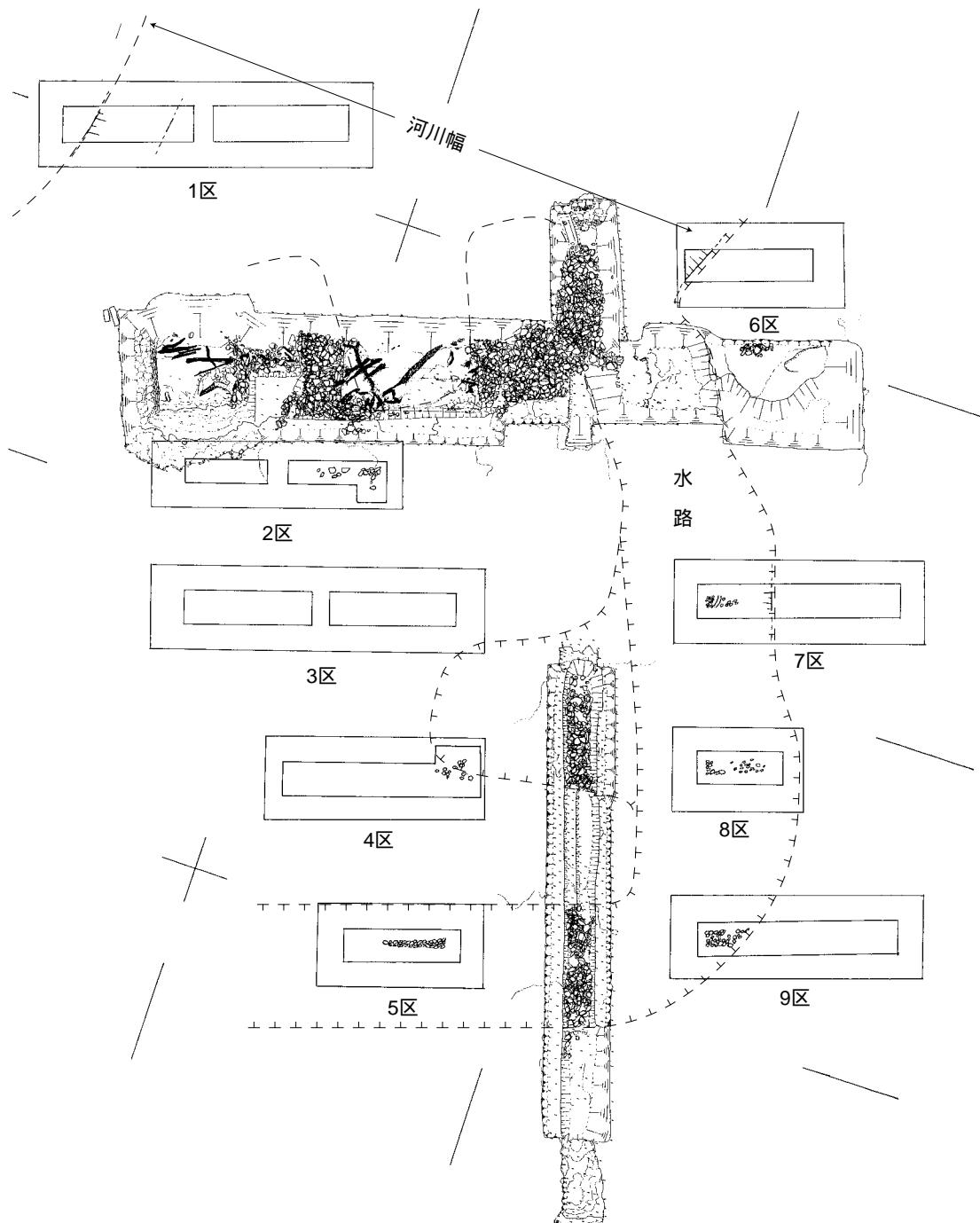
今後の課題

- ・船着き場の形状を確認することが大きな目的であったが、西側の範囲については今回の調査では確認できていない。さらに西側の調査が必要となろう。
- ・9区で礫を確認したが、この礫の傾斜が確認しただけの範囲では傾斜度が少なく、平成8年度に確認した南石組との繋がりや、今回7・8区で確認した水路との整合性を考えるうえで周辺の精密な調査をする必要性がある。
- ・今回の調査でも船着き場が弥生時代中期前葉から後葉の間利用されていたことが追認できた。その後機能しなくなるのは、4層の堆積や、物の出土から判断される。中期以後、船着き場がどのようになったのかについて丘陵を中心とする東西低地部の中で追跡する必要がある。

調査の意義

船着き場は「交易都市」原の辻遺跡の象徴的存在である。今回の調査で船着き場の南側の範囲が想定され、さらに水路が設けられていたことが確認されたことで船着き場の形状をより具体的に示す結果となった。船着き場の突堤や水路は礫を多用しているが、弥生時代あるいはそれ以降の土木事業において石を積極的に利用する行為はあまり知られていない。原の辻遺跡では、丘陵の西側の調査で護岸構造が検出されたが、これについて多くの玄武岩礫が使用されるなど、原の辻遺跡では土木事業、特に河川に対する土木事業に石を多用することが追認された。

船着き場跡



第64図 船着き場跡周辺の推定復元図 (1/400)



1区河川検出状況



2区礫検出状況



2区礫検出状況

図版 7



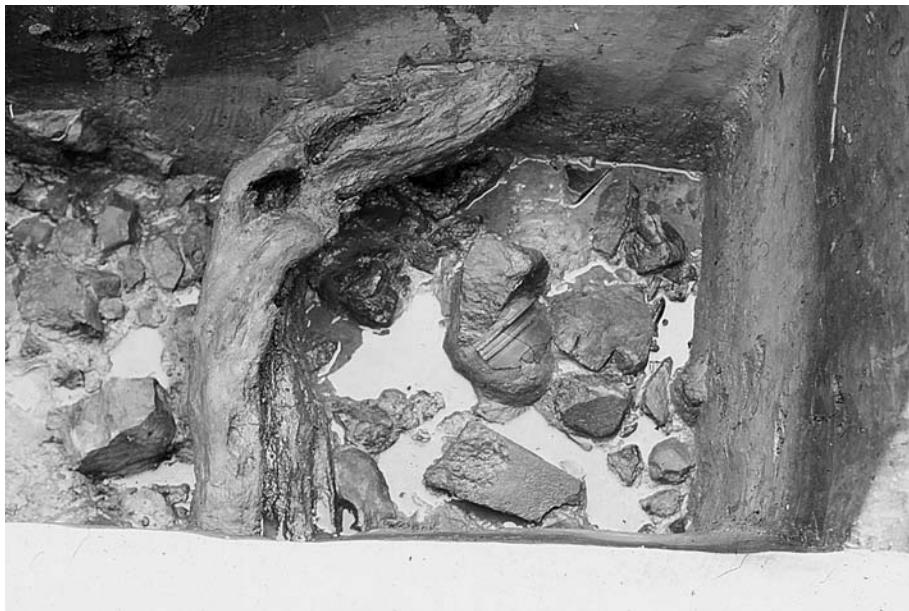
3 区落ち込みの断面



6 区河川の東端検出状況



7 区北壁の状況



7区 磁及び樹木出土状況

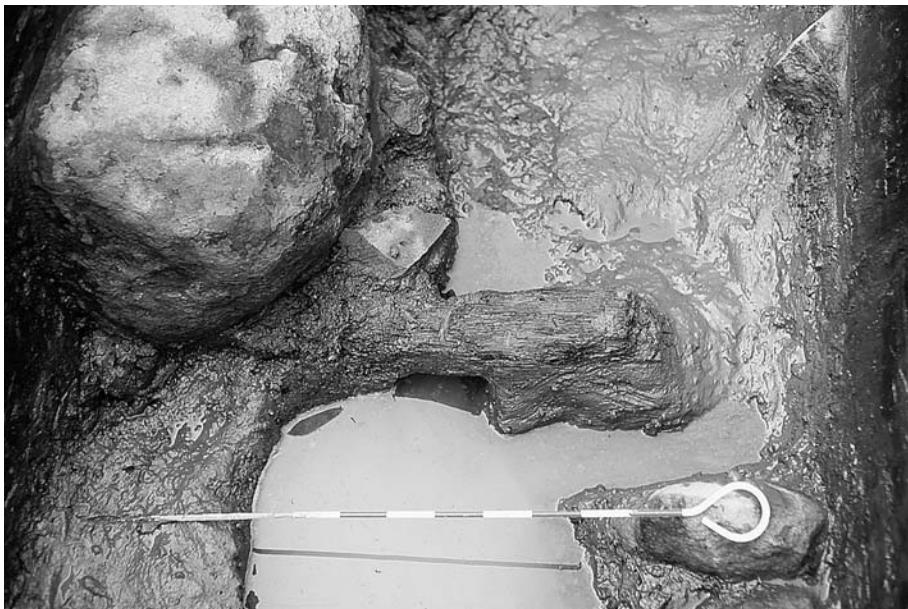


8区 磁検出状況

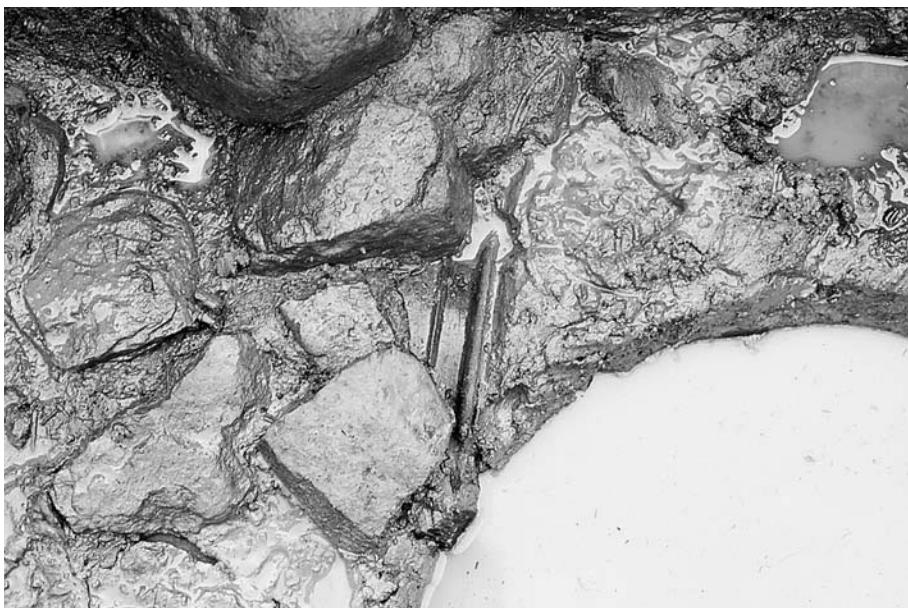


8区 磁検出状況近景

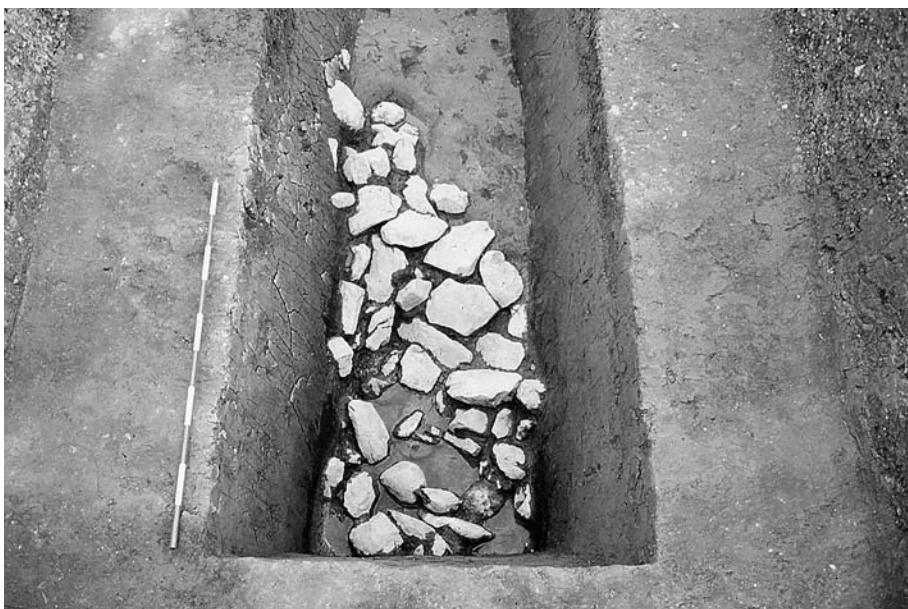
図版 9



8区碟と樹木の状況



8区碟・土器出土状況



9区碟検出状況

3. 高元地区の調査

(1) 調査概要

高元地区では、これまで推定されていた原の辻遺跡の北側丘陵先端部における墓域の存在と、平成16(2004)年度に続く丘陵部の旧地形の確認を目的として調査を実施した。現在の丘陵先端部は、県道に直行して東に伸びる市道(国分・深江線)によって区切られ、市道北側は2mほど下がって水田面となっているため、旧地形の傾斜面は残されていない。丘陵先端部は昭和12年より行われた耕地整理の際、かなりの規模で削平されたことが知られており(註1)，それ以前の丘陵は緩やかな傾斜をもって幡鉾川に接続していたと考えられる。

丘陵先端部周辺については、これまで数次にわたって調査が行われてきた。まず昭和50(1975)年度の調査において、2m×2mのトレンチを1箇所設定し(第1試掘坑)，掘り下げを行った結果、3層の黒褐色弱粘質土層に遺物の包含が確認され、弥生中期～後期にかけての多数の遺物が出土している(註2)。このトレンチは座標が残っていないため正確な位置は不明であるが、本年度のA調査区にほぼ隣接しており、この時検出された遺物包含層は、本年度検出の3号溝へとつながるものと考えられる(第65図)。

平成6(1994)年度の重要遺跡範囲確認調査では、本年度のA調査区の西側に1箇所(TP.1)，B調査区の東西にそれぞれ1箇所(TP.2, TP.3)の計3箇所が高元地区に設けられたが、いづれも後世の削平を受けており、摩滅した土器の小片は出土するものの、遺物包含層や遺構は確認されていない(註3)。また、平成7年度に芦辺町教育委員会と長崎県教育委員会が行った緊急調査では、前述の市道に沿って北側に412m²の調査区を設け、5つの溝を検出しているものの、現在の丘陵の延長上は後世の削平が行われて地山に耕作土と床土層がのっている状況であった(註4)。

このように、原の辻遺跡の北側丘陵先端部については、過去の報告や調査で大まかな状況は掴めているものの、墓域として判断するには材料が乏しく、具体的にいつの時期にどのような遺構が存在したのかを解明できずにいた。そこで本年度は、レベルの異なる南北2段の圃場のほぼ中央部に座標軸に沿った方向で2m幅の十字トレンチを設定して調査を開始した。調査区は北の十字トレンチをA区、南をB区とし、出来上がった各マスを北側から反時計回りに1, 2, 3, 4区とした。調査の結果、B区からは遺構が検出されなかったが、A-2区からは表土を10cm程取り除いた段階で礫に混じって多数の土器片が出土し、A-4区からは同レベルで貝層が検出されるなど、土層観察用に残しておいた中央部のマスの下にも遺構が存在することが判明したため、その部分も掘り下げて便宜上A-5区として遺物・遺構を整理した(第66図)。調査面積は部分的に拡張した部分も併せてA区79m²、B区76m²の計155m²である。

(註1) これについては山口麻太郎氏の報告がある(山口麻太郎『壹岐國史』,1982年)。氏の記述によれば、「昭和十二年河内川の立替工事から、それに伴う耕地整理が行われ、その際私は石棺が出たという報知を受け、以後毎日出て行って直接現場を見、遺物を採集し」、その資料の中には石棺や甕棺が含まれていた。また、昭和14年に埋立用の土を取るために行われた丘陵東側の斜面を切り崩し工事の際、獸骨とともに人間の

高元地区

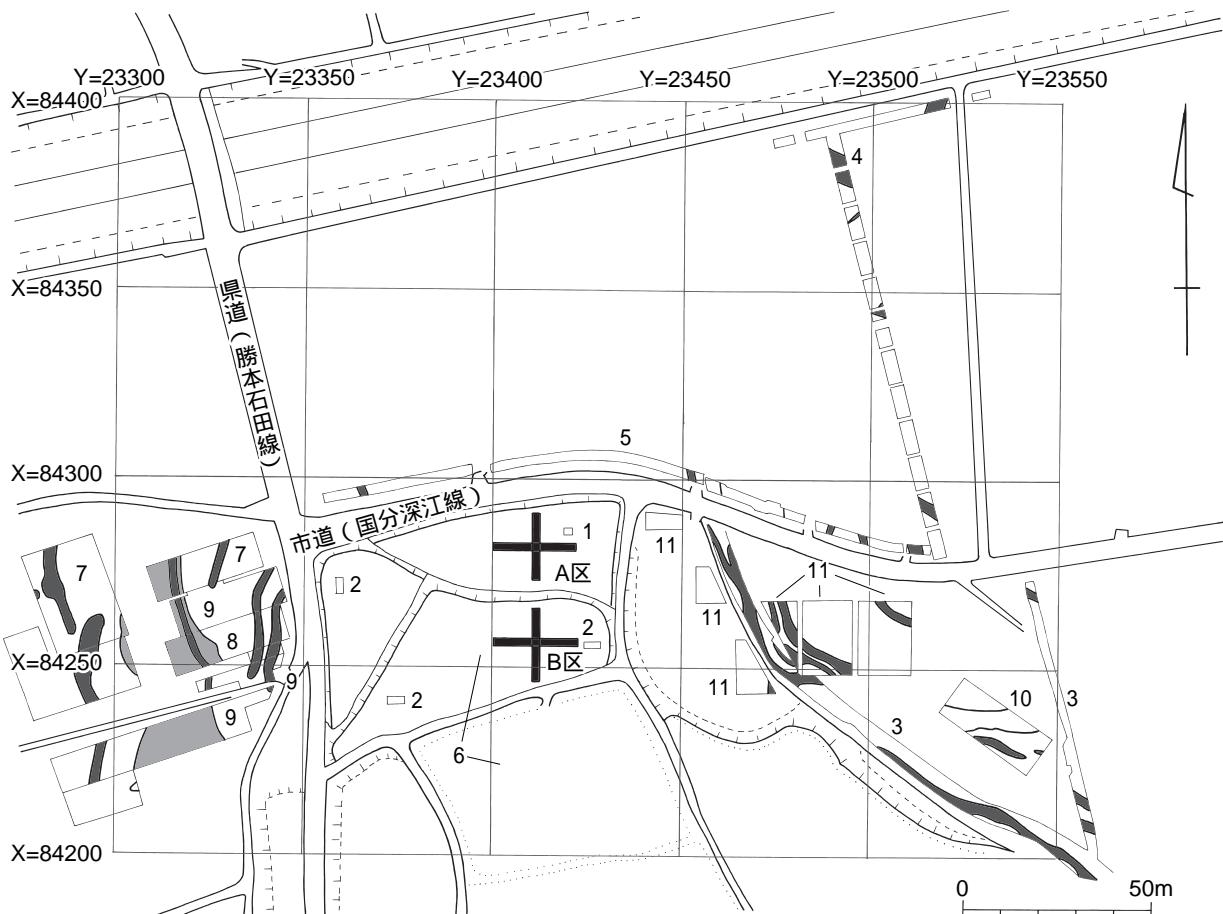
後頭部頭蓋骨残片が発見されている（鶴田忠正「長崎縣壹岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」〔『日本文化史研究』星野書店、1944年〕）。これらのことから高元地区に墓域の存在が想定されるようになったのであろう。（註2）第8表-1（註3）第8表-2（註4）第8表-4



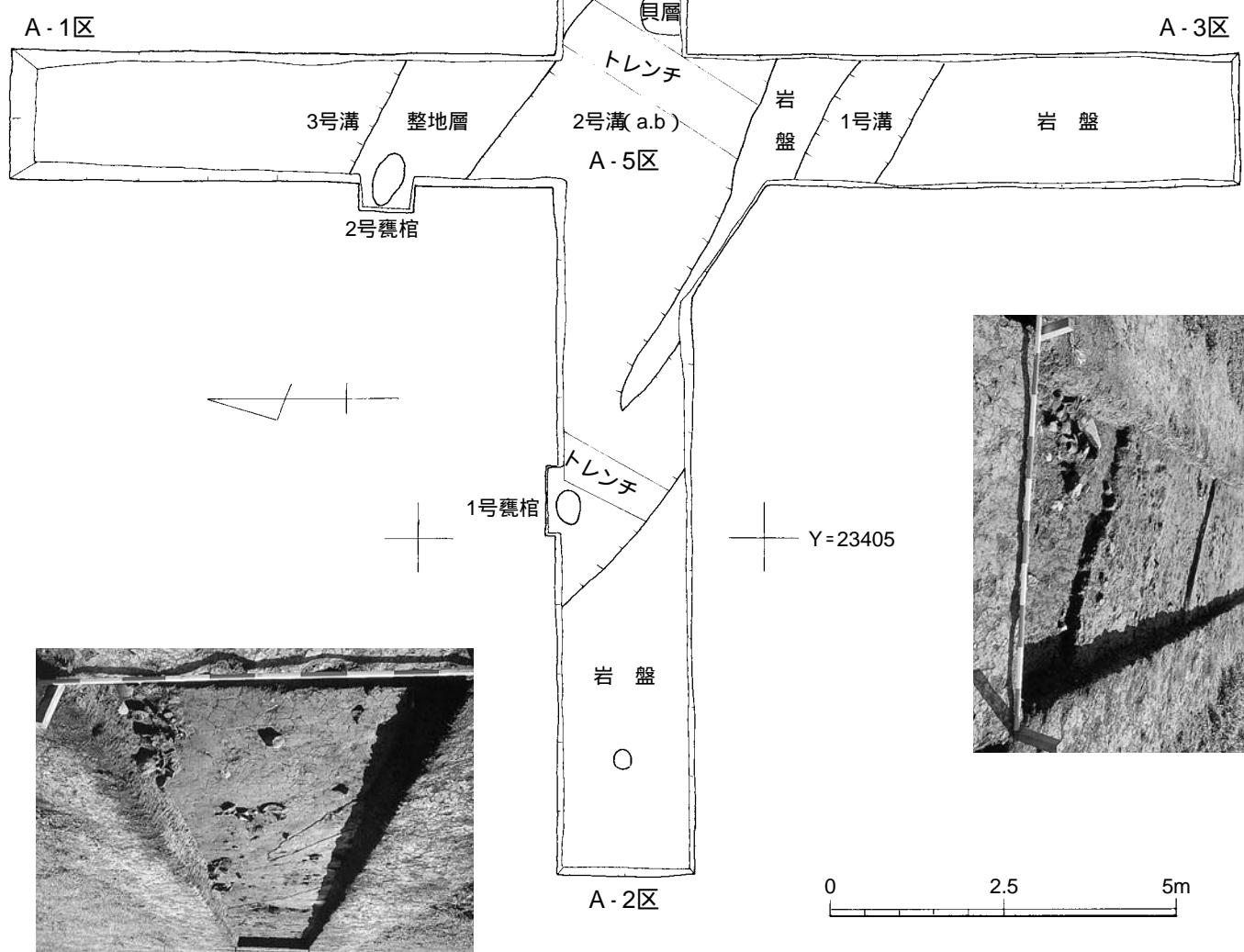
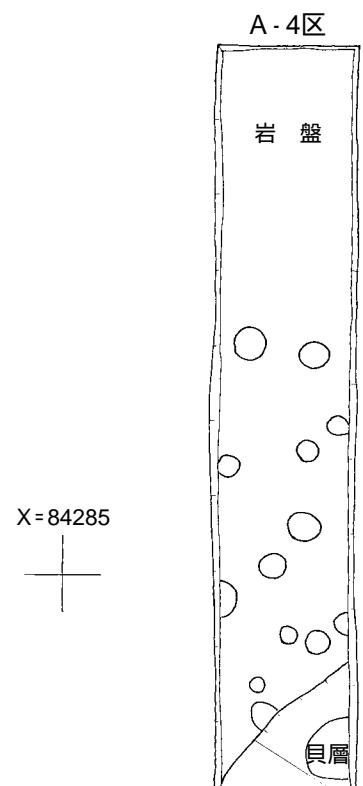
図版10 幡鉾川沿道から見た現在の北側丘陵先端部（北 南）

第8表 北側丘陵先端部周辺調査報告書対応表

番号	報告書名 サブタイトル	タイトル	発行
1	長崎県文化財調査報告書第26集 長崎県壹岐郡所在の弥生遺跡	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(1976)
2	長崎県文化財調査報告書第130集	県内重要遺跡範囲確認調査報告書	長崎県教育委員会(1996)
3	長崎県文化財調査報告書第124集 幡鉾川流域総合整備計画(圃場整備事業)に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(1995)
4	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集 幡鉾川流域総合整備計画(圃場整備事業)に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・ 安国寺前B遺跡	長崎県教育委員会(1997)
5	"	"	"
6	原の辻遺跡調査事務所報告書 第11集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る発掘調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(1999)
7	原の辻遺跡調査事務所報告書 第16集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書 (船着き場付近水路等状況調査)	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(1999)
8	原の辻遺跡調査事務所報告書第18集 原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2000)
9	原の辻遺跡調査事務所報告書第19集 原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書 (環濠等状況調査)	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2000)
10	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2003)
11	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集 原の辻遺跡調査研究事業調査報告書	原の辻遺跡	長崎県教育委員会(2005)



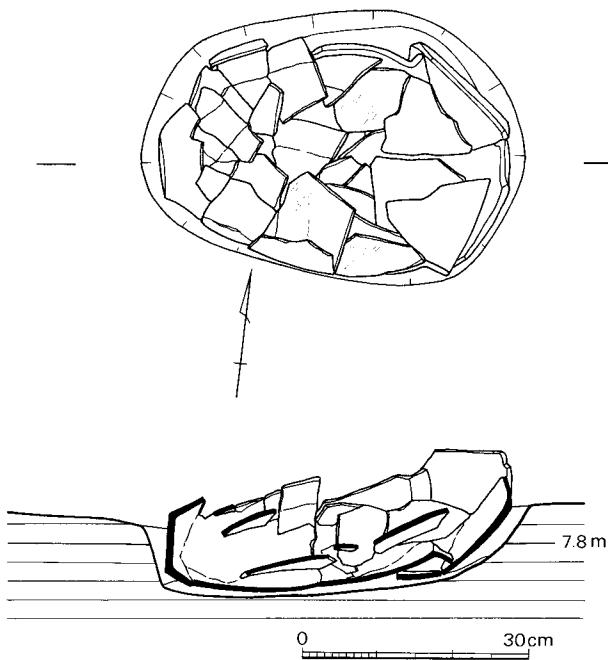
第65図 高元地区調査区位置図 (1/2,000)



第66図 高元A区遺構配置図 (1/100)

(2) A区の調査成果

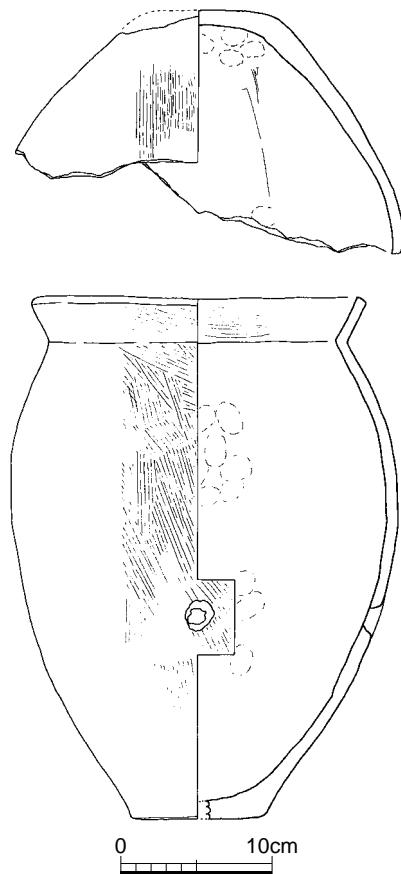
A区では、前述したように表土から10cmほど掘り下げた段階で礫とともに多数の土器片が出土した。A区からB区に至る段差には板状節理の玄武岩が露出しており、A～B区の比高差も2m以上あることから、当初、遺構のほとんどが削平を受けているであろうと考えていた。事実、A-2区の東半部、A-3区南半部、A-4区西端からは表土剥ぎ後すぐにそれぞれ色の異なる岩盤が露見したが、中央のA-5区に近づくにつれて土質は粘性を帯び、中には多量の土器片が含まれていた。それらの土器は一見して弥生時代中期のものであったが、A-2区ではほぼ同レベルから後期前半の形状と思われる甕棺が出土したため（1号甕棺墓）、中期の土器片が後世の土地改変に伴って搅乱を受けたものか否か、判断しかねた。その後、A-4区で貝層とピット群が、A-1区の北半部から完形のものを含む土器溜りが検出され、更に土層を精査すると、南東から北西に向かう溝状のプランが幾筋か現われた。ここに至って、A区が時期を違えて複雑に遺構が折り重なっている地区であることを確認した。最終的にはA区の中でも2基の甕棺墓、貝層、4条の溝、及びピット群が検出された（第66図）。以下、各遺構の詳細と出土した遺物について報告していく。



第67図 1号甕棺墓出土状況（1/20）



図版12 A～B区間に露出する玄武岩層



第68図 1号甕棺実測図（1/5）

①甕棺墓

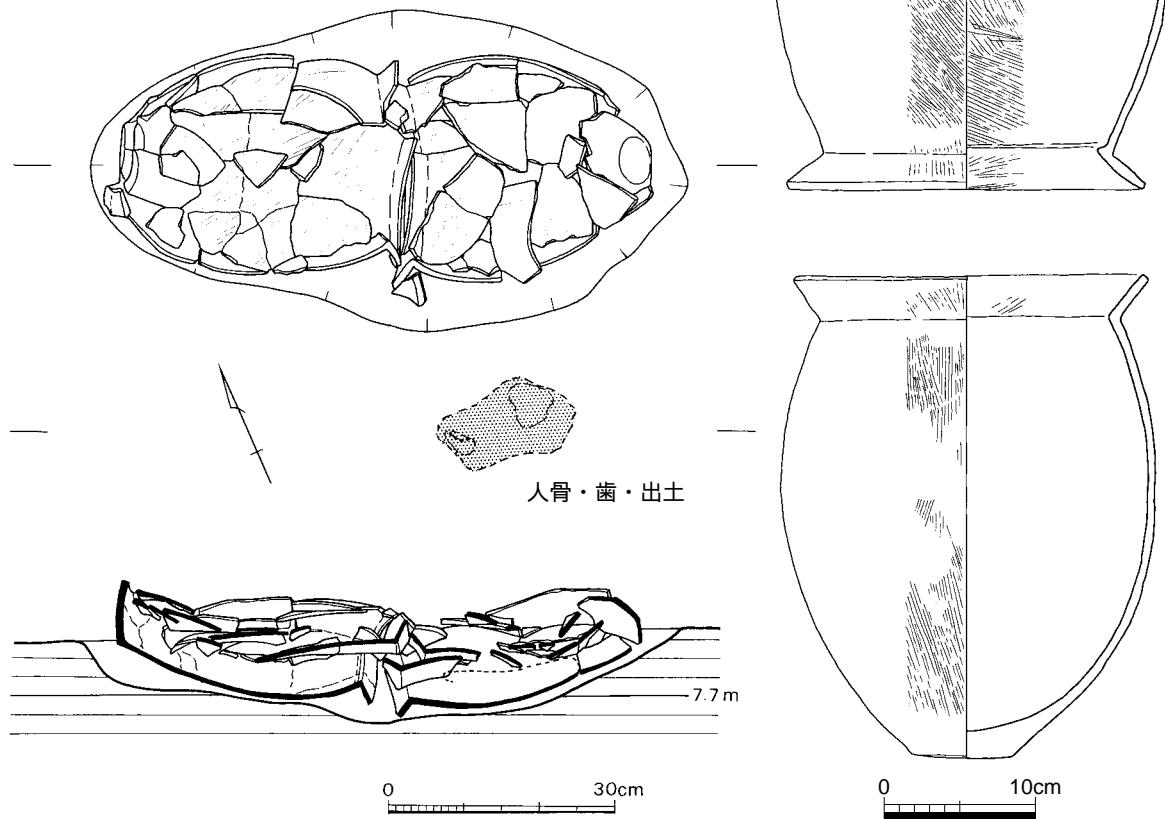
1号甕棺墓（第67・68図、第9表）

1号甕棺墓はA - 2区中央部北端の標高7.9m地点で検出された。合わせ口で、下甕は甕形土器、上甕は壺形土器の胴下半部を使用している。墓壙の長さは52cm、幅36cm、深さ現存で11cm、甕棺の長さ45cm、最大幅30cmを測る。主軸はほぼ東西方向で、頭位は東に向くと推測される。若干上甕が高いものの、ほぼ水平に近い状態で埋納されており、中には何も残っていなかった。この甕棺の墓壙は2 - a号溝の埋土上に掘り込まれたものであり、後述するように2 - a号溝の上面には整地の痕跡が見られることから、この甕棺墓は2 - a号溝の埋没後、地表面を平坦に整地した後に形成されたものであると考えられる。

土器の観察は第9表に示すとおりである。上甕は壺の上部を不均整にうち欠いたもので、底部は凸レンズ状の平底である。日常土器を転用したものであろう。内面にはヘラあて痕が多く見られる。

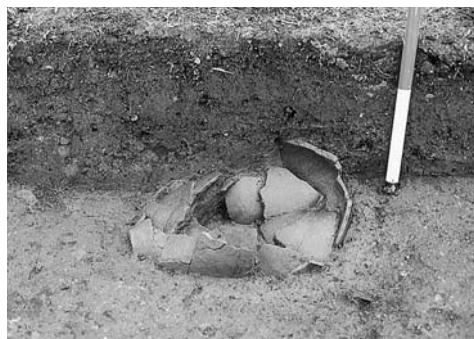
第9表 1・2号甕棺観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第68図	A - 2区 ・甕棺墓	上甕	SYR6/6 橙	SYR6/6 橙	石英・長石 ・金雲母	壺胴部～ 底部	ハケメ	指押さえ ・ナデ・ヘラ痕	表面スス痕(使 用痕)・風化
第68図	A - 2区 ・甕棺墓	下甕	SYR6/6 橙	7SYR6/6 橙	石英・長石 ・金雲母	ほぼ完形	ハケメ	指押さえ ・ナデ	水抜き孔・一部 スス痕・風化
第70図	A - 1区 ・甕棺墓	上甕	2SYR6/8 橙	2SYR5/8 明赤褐	石英・長石・金 雲母・赤色土粒	完形	ハケメ ・ナデ	ハケメ・ナデ	両面スス痕
第70図	A - 1区 ・甕棺墓	下甕	2SYR5/6 明赤褐	SYR5/6 明赤褐	石英・長 石・金雲母	完形	ハケメ	ハケメ	両面スス痕

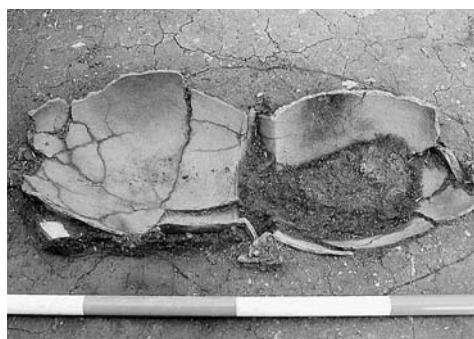


第69図 2号甕棺墓出土状況（1/20）

第70図 2号甕棺実測図（1/5）



1号甕棺墓検出状況



2号甕棺墓半截状況

下甕は底部が平坦な「く」の字口縁の甕である。胴部には水抜き用の穿孔を外側から施している。刷毛目とともにスス痕が広くあり、内面底部付近にもスス痕が見られるところから、やはり日常土器を転用したものと考えられる。弥生時代後期前葉の土器であろう。

2号甕棺墓（第69・70図、第9表）

A - 1区中央部西端の標高7.8m地点で検出された。2号甕棺墓と同じく合わせ口であるが、上甕、下甕ともに完形の甕形土器である。墓壙の長さは79cm、最大幅42cm、現存の最大の深さ12cm、甕棺の長さ70cm、最大幅30cmを測る。主軸は北西 - 南東の方位であり、頭位は北西に向くと推測される。甕棺の傾斜角はほぼ水平で、若干上甕が上がる程度である。下甕からはほとんど粘土化した人骨と歯の一部が出土した。この歯は左上の犬歯の歯冠部分で、歯根部分は朽ちて無くなっている。表面に磨滅の後が全く見られ

ず、溝がきれいに残っていることから、生えて間もないか、あるいはまだ生えていなかった子どもの永久歯であったと考えられる。1号・2号甕棺墓は、ともにその大きさを見ても小児甕棺墓の可能性が強く、歯の出土はこれを裏付けるものである（註1）。この甕棺墓はA - 1区9層を掘り込んで形成されたものである（第79図）。後述するように、9層は岩盤の風化礫が混入する造成土であり、1号甕棺墓と同様、意図的に整地を行い、その上で2号甕棺墓が埋められた可能性がある。この2基の甕棺墓の検出により、これまで墓域として捉えられてきたこのエリア一帯に対する認識に誤りがなかったことが証明された。

土器の観察は第9表に示すとおりである。上甕・下甕ともにやや胴部が張り、中位に最大径がある。底部は凸レンズ状の形体をとり、口縁部の稜は明確で、上甕には内部に突き出しが見られる。弥生時代後期中葉の土器であろう。

（註1）歯の形状については、壱岐市芦辺町の百田歯科にご教示を頂いた。記して感謝申し上げる。歯の大きさだけでは個人差があるため、第何番目の大臼歯であるか判断できず、その場所によって歯根の完成時期が異なるため（第6番目より第8番目が遅い。第8番は一般的に言う親知らずに相当し、弥生人は現代人より頬が大きく、ほぼ親知らずが生えていたと考えられる。）、一本だけの資料では被葬者の年齢の特定は難しい。可能性としては2歳～20歳頃までの年齢幅で考えられる。

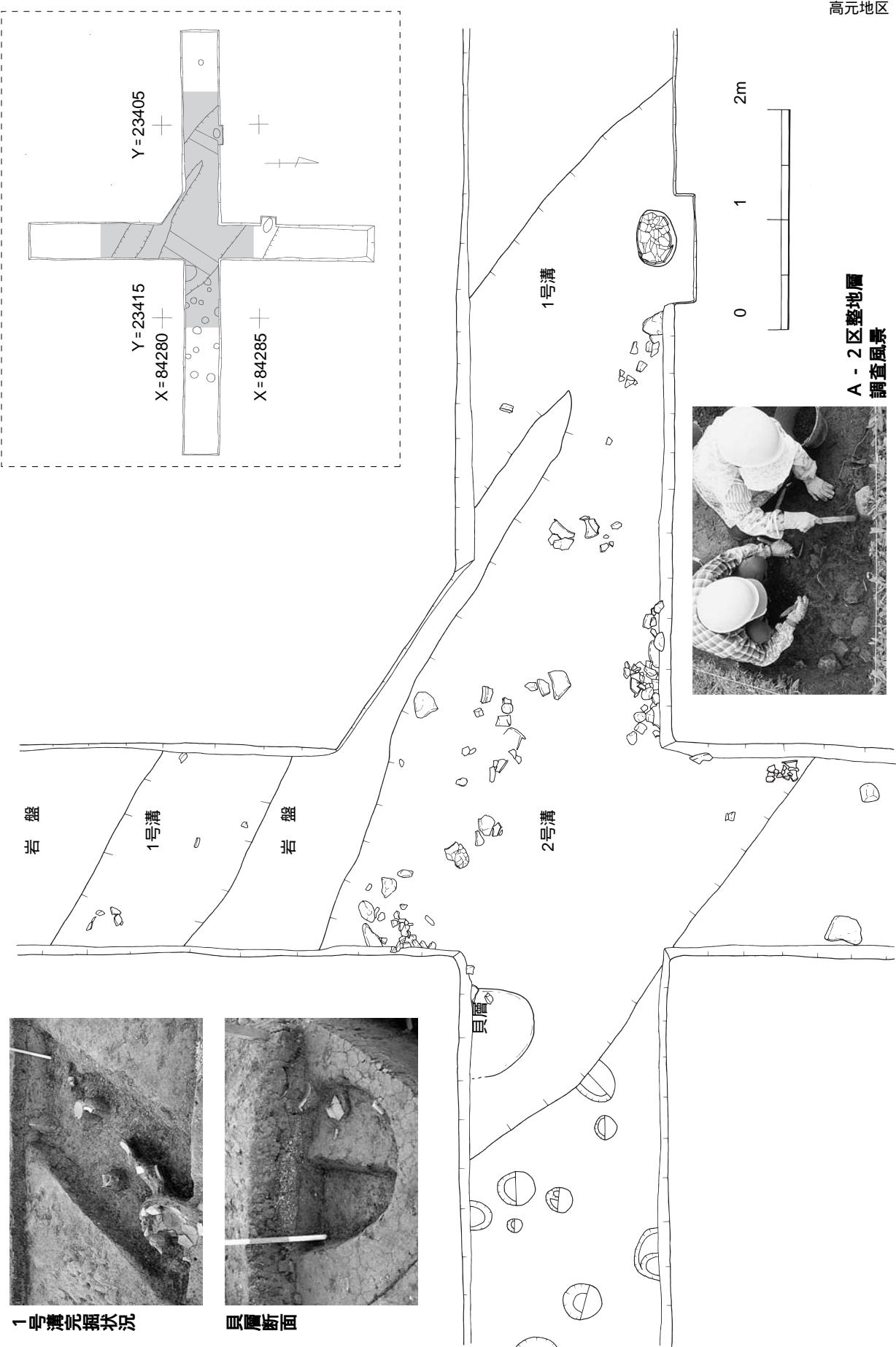
②貝層（第7・16図、写真11）

表土下約10cmの地点で検出され、2号溝の上面に直径75cmの円形状に堆積していた。厚さは約5cmであり、カキ・ミナ・サザエなど岩礁性の貝類が主に観察され、獸骨も多少混在していた。遺物は南東から北西方向に捨てられたと考えられる。

高元地区

A - 2区整地層
調査風景

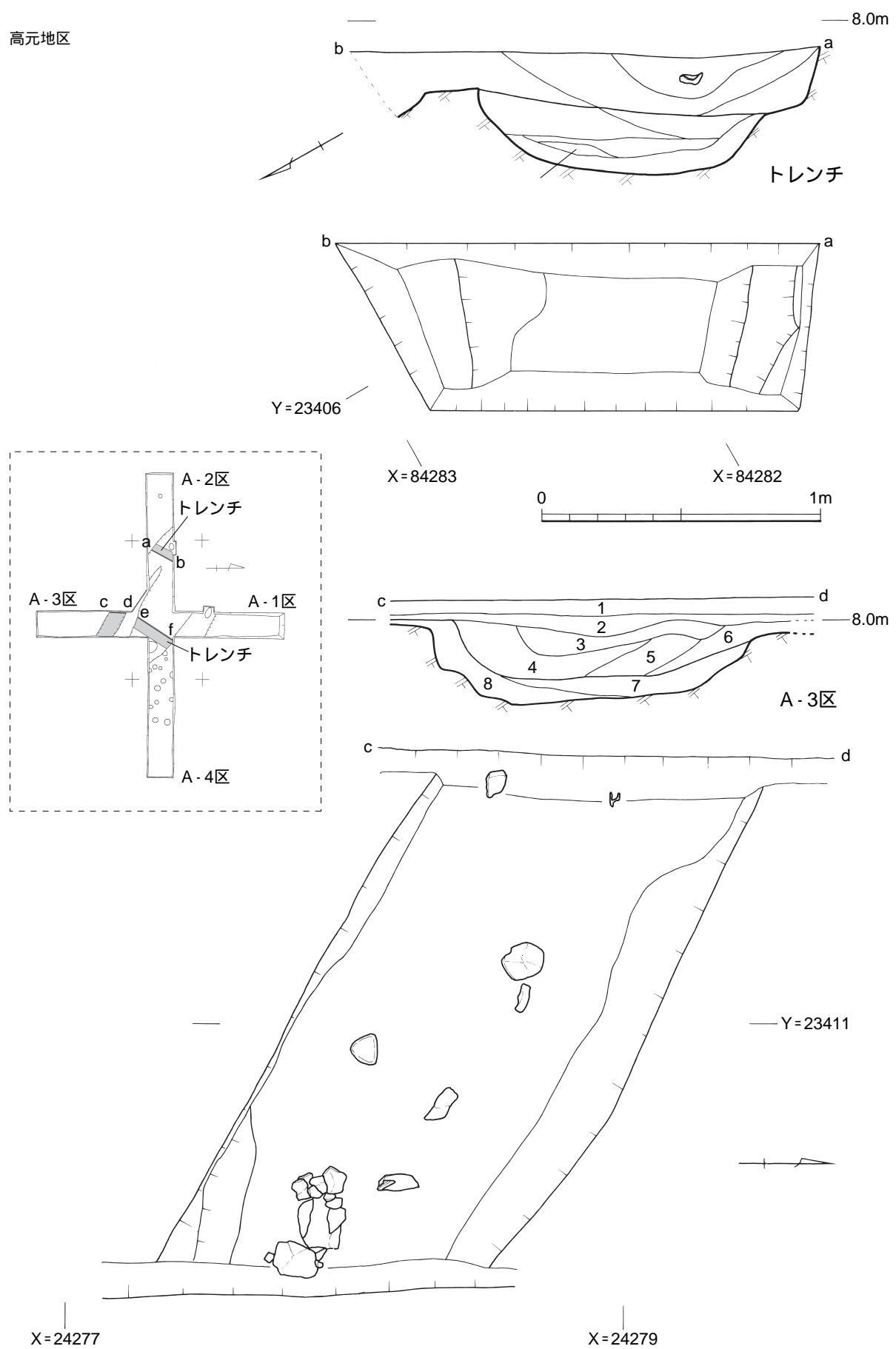
第71図 A区中央部遺構検出状況および遺物出土状況(1/50)



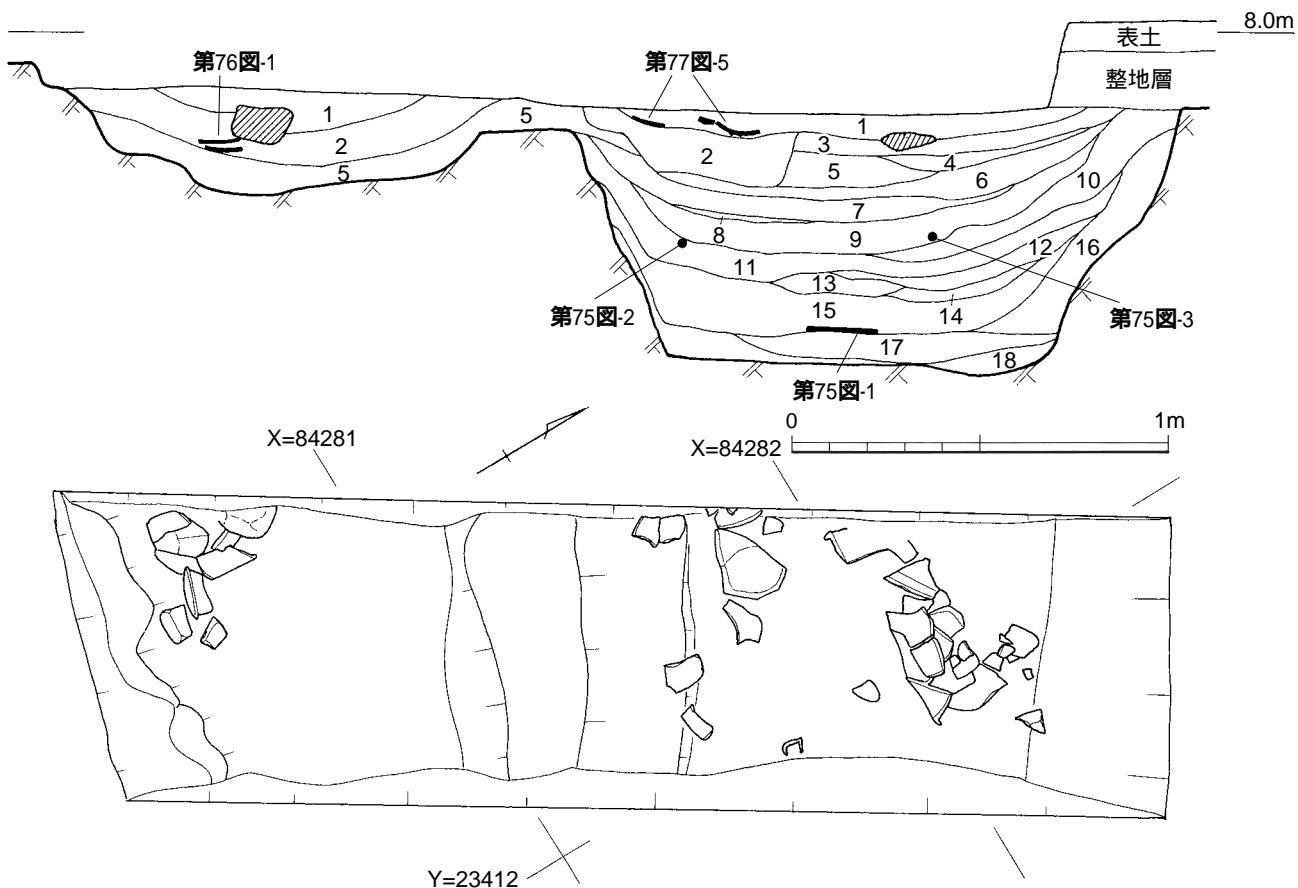
1号溝実掘状況

貝層断面

高元地区



第72図 1号溝平面図および断面土層図(1/20)



第73図 トレンチ② 2号溝平面図および断面土層図 (1 / 20)

第10表 1・2号溝土層観察表

1号溝(トレンチ①・A - 3区を合成 ①~⑨層: トレンチ①, 1~8層: A - 3区西壁)	
層位	色調・土質 所見
1	表土
① 暗褐色硬質土(10YR3/4)	明灰色土粒、風化礫を多く含む。
2 褐色硬質土(10YR4/4)	白色土粒が多く見られる。
② にぶい黄褐色土(10YR4/3)	黄色土粒を多く含む。白色土もわずかに含む。
上層 3 にぶい黄褐色土(10YR4/3)	黄色土粒を多く含む。
③ 褐色硬質土(10YR4/4)	明赤灰色土粒を多く含む。
4 暗褐色硬質土(10YR3/4)	かたくさがある。炭化物を含む。2号溝2層と同じ。
5 4層とほぼ同色で黄色土粒を多く含む層。	
6 暗褐色硬質土	4層と同色・同質の層。
④ にぶい黄褐色土(10YR4/3)	黄色土粒を多く含む。
⑤ にぶい黄褐色土(10YR4/3)	ほぼ④層と同色であるが黄色土は含まず。炭化物が目立つ。下層には白色土粒がある。
⑥ 黄褐色砂質混在土(10YR5/8)	黄色土粒を多く含む。
下層 ⑦ にぶい黄褐色土(10YR4/3)	わずかに炭化物ラミナが見られる。
7 にぶい黄褐色土(10YR5/4)	黄色土粒を多く含み、炭化物のラミナ状堆積が見られる。2号溝13層と同質。
⑧ にぶい黄褐色土(10YR5/3)	明赤灰色風化礫土粒が多く混在する。
8 にぶい黄褐色土(10YR5/3)	明赤灰色土粒を多く含む。2号溝16層と同質。
⑨ にぶい赤褐色土(7.5YR5/3)	地山。

層位	色調・土質 所見
1	黒褐色粘質土(7.5YR3/2)
上層 2	にぶい黄褐色硬質土(10YR4/3) 明赤色(10YR7/1)~灰赤色(10R6/2)の岩盤のブロックを多数含む層。周辺にも確認されておりこの一帯の整地層と考えられる。
3	暗オリーブ褐色硬質土
4	明黄褐色(10YR6/8)の砂粒を多く含む層。ベースとなる土の色調は5層に同じ。
5	褐色硬質土(10YR4/4)
6	褐灰色硬質土(10YR5/1)
7	灰黄褐色硬質土(10YR4/2)
8	赤褐色(5YR4/8)の砂粒を含む
9	褐灰色硬質土(10YR5/1)
10	にぶい黄褐色土(10YR4/3)
下層 11	褐灰色硬質土(10YR5/1)
12	明赤褐色土(2.5YR5/8)
13	明黄褐色(10YR6/8)の砂粒を多く含む砂質土。
14	褐灰色砂質混在土(10YR5/1)
15	褐色土(10YR5/1)
16	にぶい黄褐色硬質土(10YR4/3)
17	明赤褐色土(2.5YR5/8)などさまざまな色調の土粒を多く含む。2-b号溝の最下層。
18	赤色土岩質(7.5R4/6)の表面の層。地山。

③溝

1号溝（第71・72図、第10表）

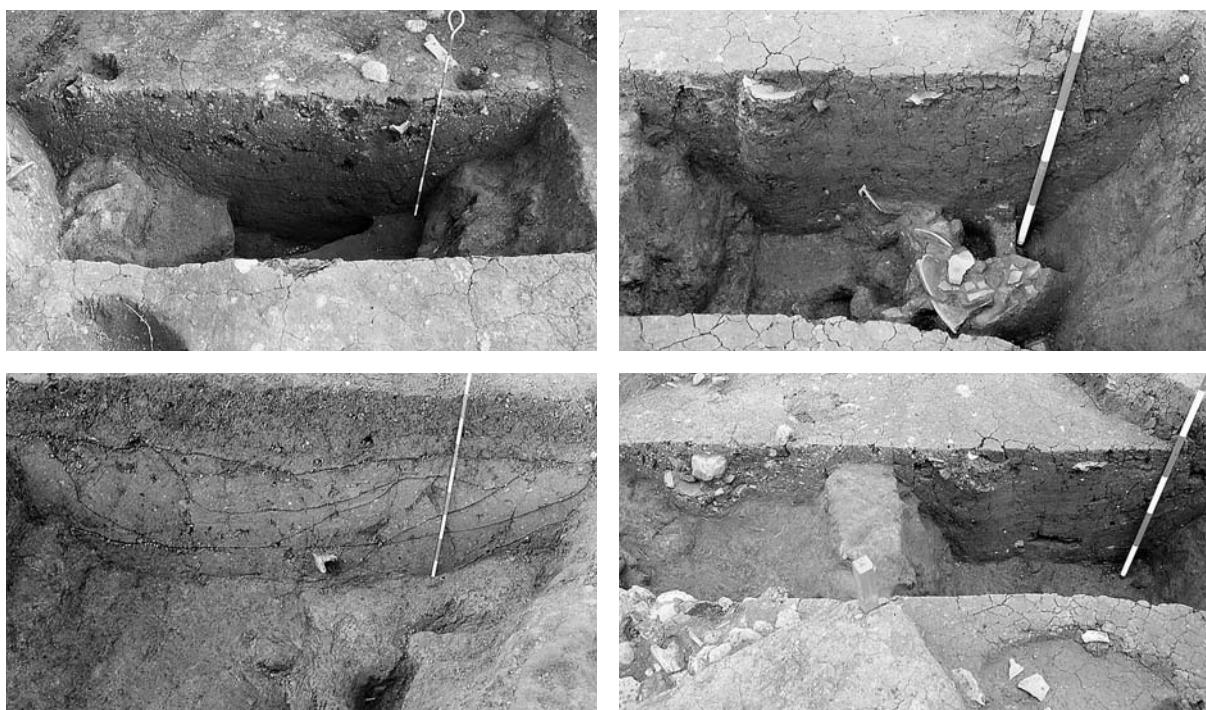
A - 2・3区で確認された北西から南東に伸びる溝であり、幅は1.0m～1.2m、深さは0.3mを測り、断面は逆台形状である。南東から北西方向にかなり傾斜している。岩盤を掘り込んで構築された遺構であり、上面に1号甕棺墓があることから弥生時代後期前半には埋没していたことが分かる。トレンチ①の④層およびA - 3区西壁の7層以下が溝の自然な埋土で、それより上層は礫や摩滅した土器片を多く含み、その後の土地改変によって整地された層と考えられる。幅が狭く、A - 2区とA - 3区の溝の床部で比高差があることから環濠とせず、排水や区画を意図した溝として捉えた。

2 - a号溝（第71・73図、第10表）

A - 2・3・5区で確認された、1号溝とほぼ同じ方向へ伸びる溝である。幅は約1.1m、深さはA - 5区で約0.25mを測り、幅に比べ非常に浅い。今回の調査の範囲では、1号溝および2 - b号溝との切り合い関係は不明であるが、1号甕棺墓の存在や出土遺物の状況から1号溝と同様、弥生時代後期前半には既に埋没した状態であったと思われる。また、1号溝や2 - b号溝の下層と共に通する層が見られないことから、この2本の溝よりも後に掘り込まれた可能性もある。

2 - b号溝（第71・73図、第10表）

A - 1・2・4・5区で確認された、1号溝および2 - A号溝とほぼ同じ方向に伸びる溝である。幅は1.6m、深さはA - 5区で約0.7mを測り、他の溝に比べ幅・深さともに規模が大きい。溝の断面は逆台形状をしており、岩盤を掘りぬいて築いている。層位は18層に細分され、途中に砂粒が多く混在する層が2層（第8層・第13層）が確認されることから、6層以下の下層は自然に埋没していったことが推測される。また、最下層のやや上面の15層からは、弥生時代中期中葉の甕形土器がほぼ完形



図版15 1号溝および2 - a・b号溝断面土層
(左上：トレンチ①、左下：A - 3区、右上：トレンチ②2 - b号溝、右下：トレンチ②全体)

に近い形で出土したため（第75図1），この遺構が最初に築かれたのはそれ以前であることが明らかになった。上層（1～5層）の埋土中には弥生時代中期の土器片が礫とともに多く含まれており，更に上面には獸骨片や貝層の堆積も見られることから，最終的には溝の落ち込みが廃棄場所として機能していたことが確認できた。

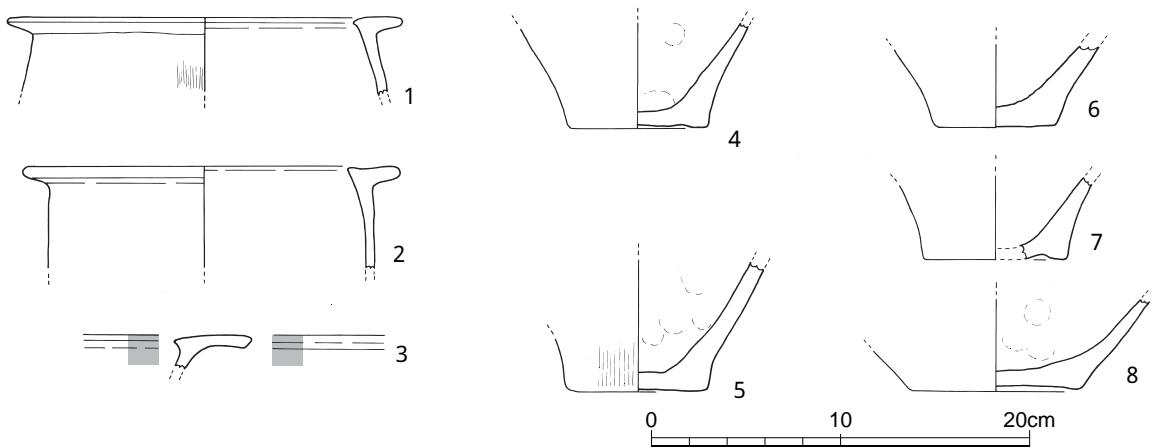
1・2号溝出土遺物（第74～78図，第11～15表）

1号溝，および2-a号溝，2-b号溝から出土した土器をまとめた。全般的な傾向として上層部分に遺物が集中しており，拳大の礫も多く混じることから磨滅している土器が多く，細かな調整方法が窺える資料は多くはない。時期的には弥生時代中期後半～後期前半の範囲でまとまっており，2号甕棺より新しい形状のものは見当たらない。このことは，一旦埋没した後，更に掘り直されて存続する低地部の溝・濠に比べ，1・2号溝の溝としての機能が長期にわたらず，比較的短命であったことを示すと言えよう。以下，1号溝・2-b号溝下層・2-a号溝および2-b号溝上層出土土器の順で稿を進める。

第74図は1号溝出土の土器である。1・2はやや内傾する甕の口縁部片で，2は内側が上にあがる特異な形状をもつ。3は鋤先形の高坏の口縁部片で，全面に丹塗り痕が見えるが風化のため部分的にしか残っていない。口唇は若干内傾・湾曲している。1～3は弥生時代中期中葉の土器と考えられる。4～8は甕および壺の底部である。4・7には底部下面に凹みが認められるが，5・6はほぼ平坦な底部である。5はハケメ目が底部末端まで及び，立ち上がりは内湾気味のカーブを描く。6は風化もあって内面に石粒が目立ち，胎土が非常に粗い。8は若干上げ底の様相を呈し，胎土に赤褐色の土粒

第11表 1号出土遺物観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第74図 1	トレンチ①1号溝	甕	5YR4/3 にぶい赤褐	2.5Y5/2 暗灰黄	石英・長石・金雲母	口縁部	指押さえ・ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	
第74図 2	A-3区1号溝	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ナデ	ナデ	一部剥落
第74図 3	トレンチ①1号溝	高坏	10Y5/8 赤	10Y5/8 赤	石英・長石・金雲母	口縁部破片			両面丹塗り
第74図 4	A-3区1号溝	甕	10R6/6 赤橙	10YR6/4 にぶい黄橙	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ消し	指押さえ	
第74図 5	A-3区1号溝	甕	10YR6/6 赤橙	7.5YR7/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ	表面一部風化
第74図 6	A-3区1号溝	甕	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	底部	ナデ・指押さえ		裏面風化
第74図 7	A-3区1号溝	甕	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/1 褐灰	石英・長石・金雲母	底部	ナデ		
第74図 8	A-3区1号溝	壺	5YR6/6 橙	2.5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母・赤色土粒	底部		指押さえ	



第74図 1号溝出土遺物（1/4）

高元地区

が混ざる。4～8の資料は弥生時代中期後半～後期前葉の幅で捉える必要があろう。

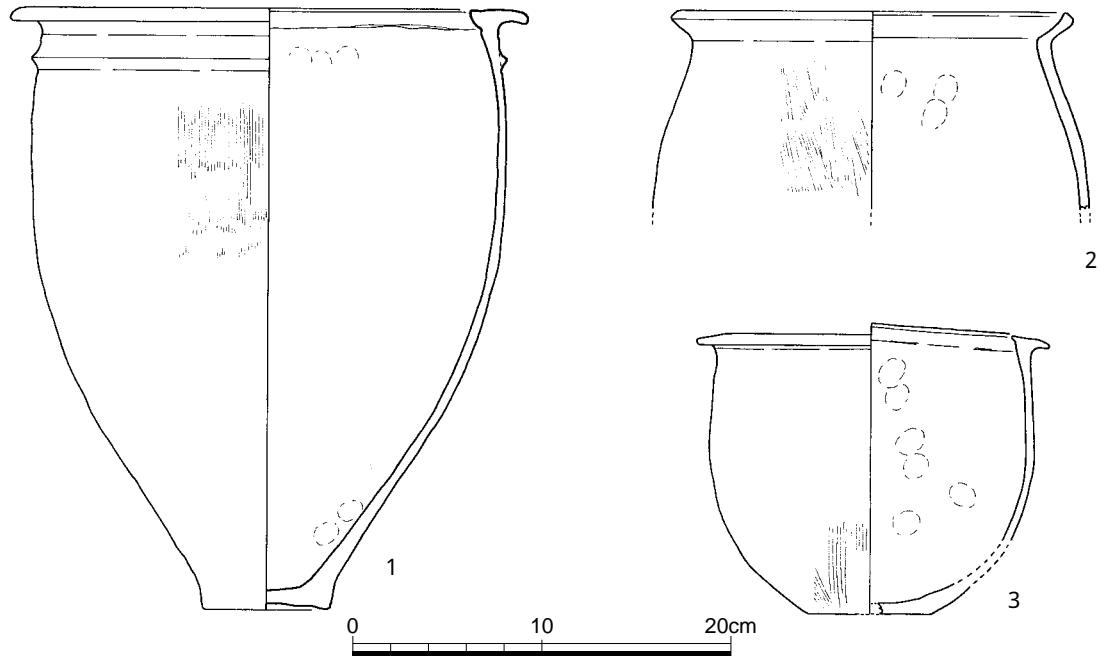
第75図1～3は2-b号溝下層出土の土器である(第73図参照)。1は溝の掘削の下限を考える上で貴重な資料である。口縁はほぼ平坦であるが若干垂れ気味で、内面には粘土を指押さえによって接合した痕跡がはっきりと残る。底部は底面に凹みがみられ、若干上げ底で薄く仕上げられている。胴部はあまり張らずに砲弾形のプロポーションを持つ。また、胴部の表裏ともに煮炊きに伴うスス痕が見られ、表面は下半部が剥落しているが、上半部は縦方向に目の細かいハケを入れたのち、口縁部付近をヨコナデした様子が観察できる。このヨコナデによって突帯は非常に鋭角に成形され、内面もハケとナデにより薄く仕上げられている。全体的に丁寧な成形であり、均整のとれた甕としての印象を受ける。弥生時代中期中葉の須玖I新段階に相当する。

2は跳ね上げ口縁の甕である。胎土はきめ細かく、表裏ともにナデ成形されているが表面にはハケメ痕が残る。内面の稜は顕著で、口縁はやや外湾する。3は甕で、底部や口縁のつなぎ目部分がはっきりしており、裏面は指押さえによる凹凸が激しい上、底部と口縁部が平行でなく、不均整な形をしている。表面には底部付近にハケメが残り、それより上部はヨコナデしている。口縁は若干垂れ下がる。弥生時代中期後葉の資料であろう。

第76図2～4および第77図5～11は2-b号溝上層(1～5層)出土の土器である。2～4は逆L字形の甕の口縁部片で、いずれも口縁上面から突帯部分にかけて強くヨコナデしており、2・3の突帯および4の内面突き出し部分は鋭く尖っている。5は三角突帯を二条施す壺の胴～底部である。内

第12表 2-b号溝下層出土遺物観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第75図 1	トレンチ②2-b号溝下層	甕	2 5YR6/3 にじい橙	5YR6/4 にじい橙	石英・長石・金雲母・赤色土粒	ほぼ完形	ヨコナデ	指押さえ・ヨコナデ	両面スス痕あり
第75図 2	トレンチ②2-b号溝下層	甕	5YR6/6 橙	2 5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	
第75図 3	トレンチ②2-b号溝下層	甕	2 5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にじい赤褐	石英・長石・金雲母	口縁部～底部	ヨコナデ・ハケメ	指押さえ	



第75図 2-b号溝下層出土遺物(1/4)

面にはヘラ痕がみられ、丁寧にナデ成形されている。底部はほぼ平底で緩やかに内湾して胴部へ広がる。6は高壺の脚部で表面に暗文調のヘラミガキ痕が見られる。2~5は中期後半の資料である。

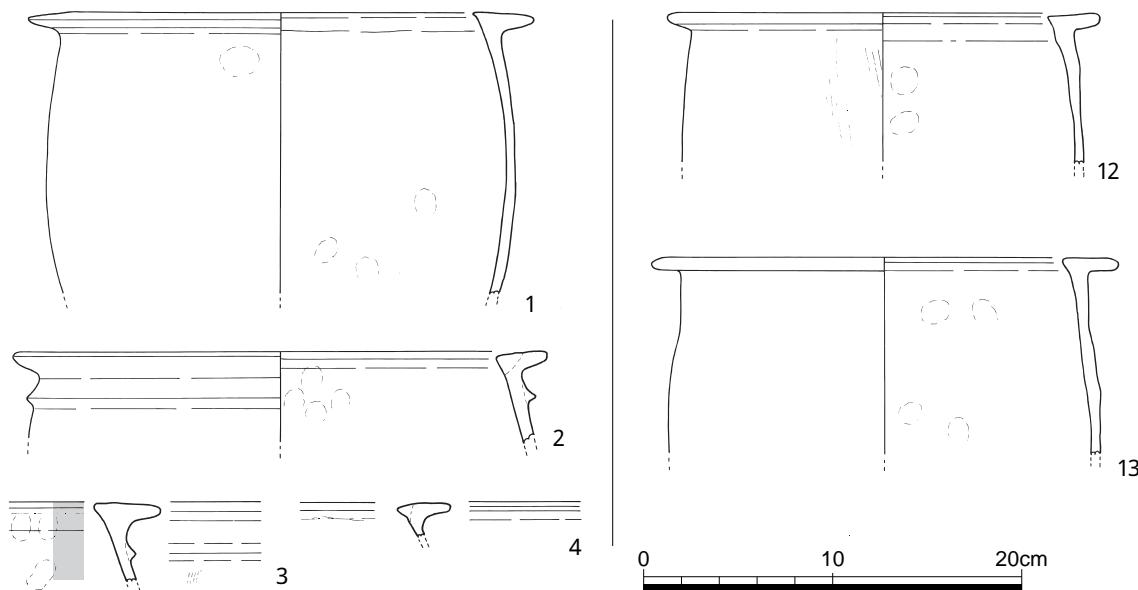
7~11は底部片でいずれも摩滅が激しい。7はやや厚底のスタイルで、風化しているがハケメが観察される。8と11はハケメ痕が強く残り、底部の直上に僅かな凹みが観察できる。10は平坦な底部と胴部の接合部分が確認できる。7は中期前半、8~11は中期後半~後期初頭までの資料であろう。

第76図1・12・13および第77図14~30は2-a号溝出土の土器である。2-a号溝の1・2層は特に礫の混入度合いが高く、多くの土器は摩滅して破損部が丸みを帯びていたり表面が剥落するなどして細かな調整は確認できない。だが時期的にはある程度のまとまりを持っており、2-a号溝そのものが浅い落ち込みの廃棄場所として機能していた可能性が考えられる。

1・12~18は口縁下に突帯が付かないタイプの逆L字形口縁の甕である。1は断面が鋭い三角形の口縁で、若干外傾している。胴部は少し膨らみを見せて底部へと向かう。口縁真下には焼成破傷痕と思われる楕円形および不正な円形の凹みが3箇所見られる。胎土には石粒とともに赤色土粒が混入するのもこの土器の特徴である。2層の床面から出土した、弥生時代中期後半の資料である(第73図)。16は口縁上面が平坦で内側にもかなり突起し、胴部径が口縁部とほぼ等しく張り出している。胎土は緻密で丁寧にナデ調整されている。1と同じく中期後半の資料である。18は内面に厚めの粘土を貼り付けた鋤先形口縁で、口縁そのものは外傾する。口縁真下のナデ調整は指ではなくヘラ状のものをあ

第13表 2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物①観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第76図 1	トレンチ② 2-b号溝上層	甕	10YR2/3 黒褐	10YR3/2 暗褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁部	ナデ	ナデ・指押さえ	表面スス痕
第76図 2	トレンチ② 2-b号溝上層	甕	2.5YR6/6 橙 2.5YR5/2 灰赤	7.5YR5/3 にぶい褐	石英・長石・金雲母(多)	口縁部	ヨコナデ	指押さえ	表面スス痕
第76図 3	トレンチ② 2-b号溝上層	甕	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ後ナデ消し	指押さえ・ナデ	
第76図 4	トレンチ② 2-b号溝上層	甕	2.5YR4/3 にぶい赤褐	2.5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第76図 12	トレンチ② 2-a号溝	甕	2.5YR6/6 橙	7.5YR4/2 灰褐	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	
第76図 13	トレンチ② 2-a号溝	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	石英・長石	口縁部	ナデ	ナデ・指押さえ	



第76図 2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物①(1/4)

てて行った痕跡が残る。内面も同様にヘラ痕が見られる。

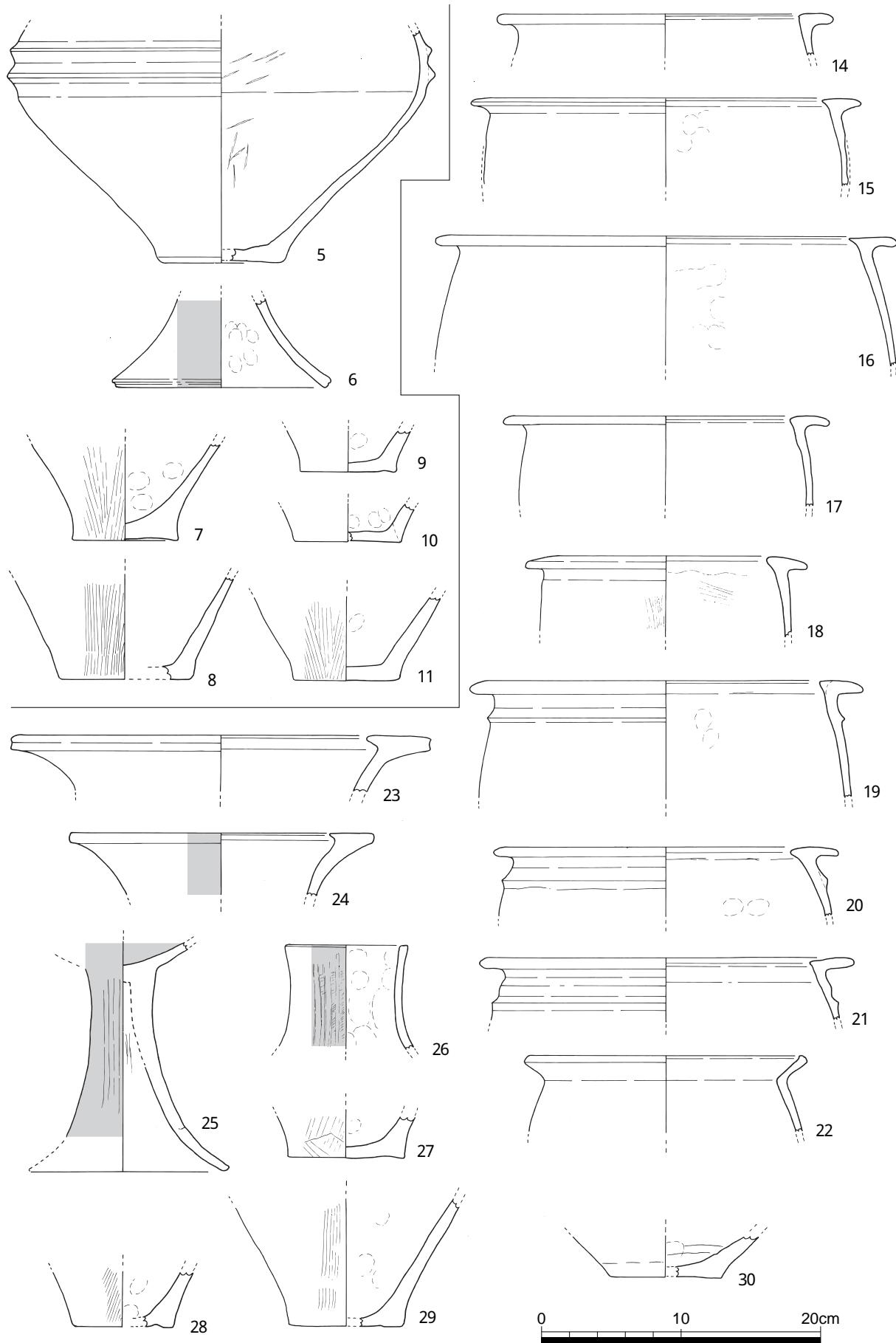
19～21は三角形の突帯が貼り付くタイプの甕である。19は表面が丁寧にヨコナデされており、ハケメ痕は見られない。裏面もヨコナデされているが、内側への飛び出し部分には粘土の貼り付け痕がしっかりと観察できる。20も19と同様の調整、形状であり、18～20はいずれも赤色土粒を含み、中期後半の中でも同時期のものと考えられる。21は胴部が張るタイプで16と共通するが、胎土には金雲母や角閃石が目立つ。やはり中期後半の資料である。22は跳ね上げ式の「く」の字口縁部をもつ甕で、内外面ともに緩やかに屈折し、若干外湾して頂部に至る。

23・24は鋤先口縁の壺である。23の口唇部分には粘土を貼り重ねたような凹みがあり、ほぼ平坦だがわずかに外傾する。外面には丁寧なナデ調整の痕跡がある。24は焼成のスス痕が目立つが、外面には丹塗り痕があり、焼成後に丹を塗ったことが観察できる。口唇はほぼ水平であり、色調は23の明赤褐色に対し、にぶい黄橙色をしている。これらは弥生時代中期中葉段階の資料であろう。

25は高坏の脚部である。坏部内面に丹塗り痕があるが、外面は風化のため観察できない。ハケメ痕は残る。内面にはシボリ痕とナデ痕が見られる。26は直口壺である。外面は横方向にハケメを施した後、縦方向にヘラミガキを入れて暗文としている。北部九州以東系の資料であろうか。27～29甕の底部である。いづれも底部末端までハケメが入る。27の外面の傷は土器廃棄時のものであろう。28の底面の凹みは顕著であるが、製作技法は27～29と同じで、胴下半部にあたる円筒形の中に、底部にあたる粘土円盤を内側から接合したものであろう。29の30は壺の底部で、内外面に粘土のつなぎ目と思われる段差がある。底部端はナデ調整されている。

第14表 2 - a号溝および2 - b号溝上層出土遺物②観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第77図 5	トレンチ② 2 - b 号溝上層	壺	7 5YR6/3 にぶい褐	10YR4/1 褐灰	石英・長石・金雲母(少)	底部～胴部	ヨコナデ	ヘラナデ	
第77図 6	トレンチ② 2 - b 号溝上層	高坏	2 5YR4/8 赤褐	5YR7/6 橙	石英・長石	脚部	ハケメ・ヘラ磨き	指押さえ・ヨコナデ	
第77図 7	トレンチ② 2 - b 号溝上層	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐	石英・長石	底部	ハケメ・ヨコナデ	指押さえ	表面風化・裏面スス痕
第77図 8	トレンチ② 2 - b 号溝上層	甕	2 5YR5/6 明赤褐	2 5YR5/8 明赤褐	石英・長石・金雲母・角閃石	底部	ハケメ	ナデ	
第77図 9	トレンチ② 2 - b 号溝上層	甕	7 5YR5/3 にぶい褐	7 5YR6/3 にぶい褐	石英・長石	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	
第77図 10	トレンチ② 2 - b 号溝上層	甕	7 5YR4/2 灰褐	10YR6/4 にぶい黄橙	石英・長石・金雲母(粒小)	底部	ナデ	指押さえ	
第77図 11	トレンチ② 2 - b 号溝上層	甕	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	ナデ・指押さえ	
第77図 14	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	7 5YR5/4 にぶい褐	7/5YR6/4 にぶい橙	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図 15	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	7 5YR5/2 灰褐	2 5Y7/2 灰黄	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ	表面剥離
第77図 16	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	7 5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ	一部欠損・指押さえ	
第77図 17	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	5YR5/8 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	石英・長石	口縁部	ナデ	ヨコナデ	
第77図 18	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	2 5YR6/8 橙	2 5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁部	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	
第77図 19	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	7 5YR4/6 褐	5YR5/6 明赤褐	石英・長石・赤色土粒	口縁部	ヨコナデ	強いヨコナデ・指押さえ	
第77図 20	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	5YR5/6 明赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	石英・長石・赤色土粒	口縁部	ヨコナデ	指調整	
第77図 21	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	7 5YR6/4 にぶい橙	7 5YR7/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母・角閃石・赤色土粒	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図 22	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	2 5YR6/8 橙	7/5YR7/6 橙	石英・長石	口縁部	ナデ	ヨコナデ	
第77図 23	トレンチ② 2 - a 号溝	壺	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	石英・長石・金雲母(少)・赤色土粒	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第77図 24	トレンチ② 2 - a 号溝	壺	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	表面丹塗痕・ほぼ剥落・スス痕
第77図 25	トレンチ② 2 - a 号溝	高坏	2 5YR4/6 赤褐 5YR6/6 橙	7 5YR7/6 橙	石英・長石・金雲母	脚部	ハケメ・ナデ	シボリ・指押さえ・ナデ	両面丹塗痕
第77図 26	トレンチ② 2 - a 号溝	壺	2 5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	長石・金雲母	口縁部	暗紋様・ハケメ	指押さえ	表面丹塗痕
第77図 27	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	7 5YR7/6 橙	7 5YR7/4 にぶい橙	石英・長石	底部	ハケメ	ナデ・指押さえ	
第77図 28	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	2 5YR5/6 明赤褐	2 5YR5/6 明赤褐	石英・長石	底部	ハケメ・ナデ消し	ナデ・指押さえ	
第77図 29	トレンチ② 2 - a 号溝	甕	5YR7/6 橙		石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・スス痕	表面風化
第77図 30	トレンチ② 2 - a 号溝	壺	2 5YR5/6 明赤褐	10YR6/3 にぶい黄褐	石英・長石	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	



第77図 2 - a号溝および2 - b号溝上層出土遺物②(1/4)

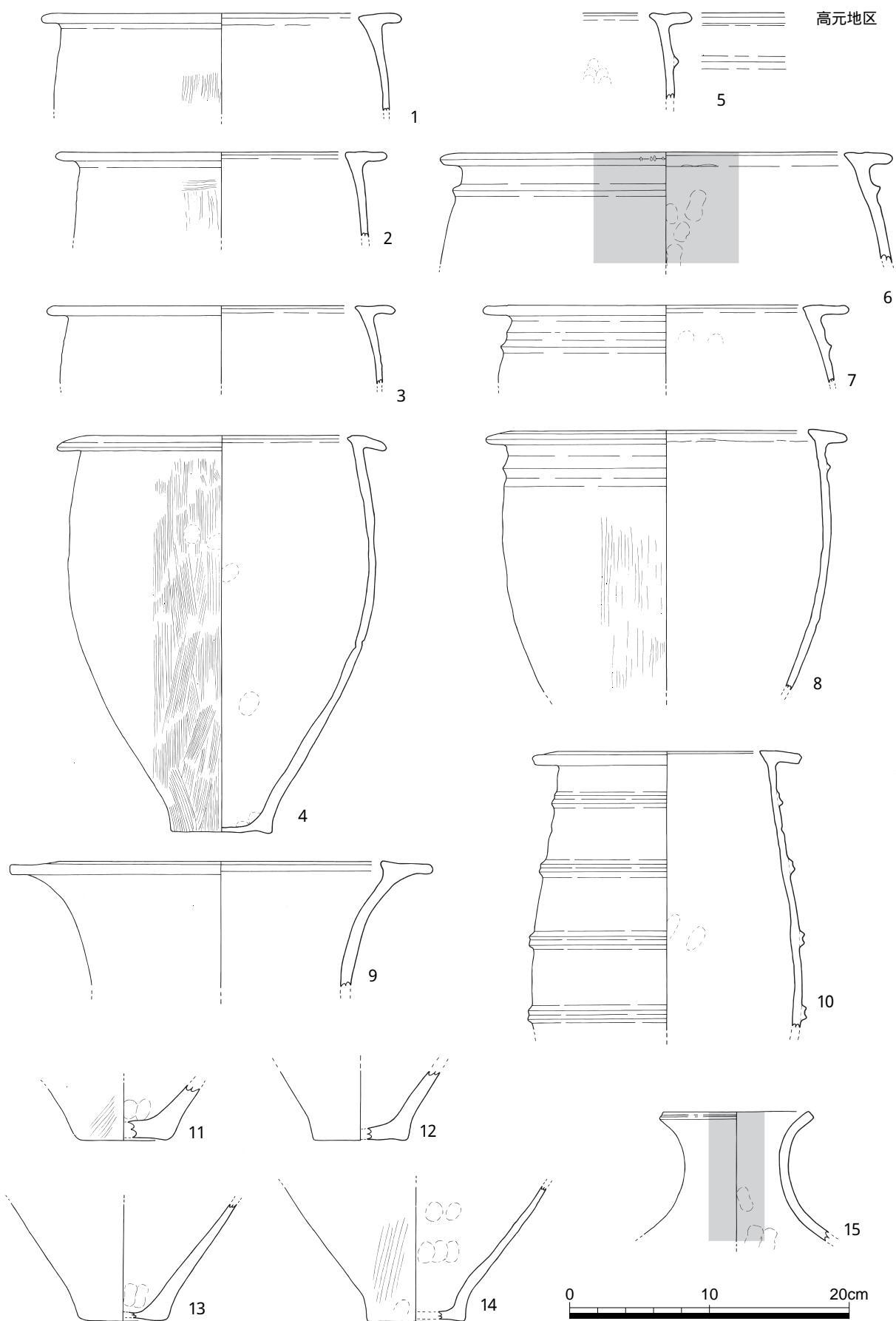
高元地区

第78図はa・bの区別をせず2号溝一括として取り上げた遺物である。ほぼ、1層からの出土であるが、後述する第85～87図の整地層出土遺物との層位的な差は明確でない。1～4は突帯が付かず、5～8は口縁直下に突帯が付くタイプの逆L字形口縁の甕である。1・2はいずれも口縁部付近をヨコナデし、胴部はあまり張らない点が共通しているが、2には胎土に赤色土粒と金雲母が非常に多く含まれている。3は表面が剥落しているため外面の調整は確認できないが、内面はナデ調整されており、一部にスス痕が残る。4は口縁直下から底部までの胴部全体にかけてタテ方向の細かいハケメが施されており、内面も丁寧にナデ調整されている。口縁は若干垂れ下がり気味で底部は非常に薄く、胎土も細かい。2-b号溝下層出土の甕（第75図1）と比較すると、こちらの方が若干胴部が張り、大きさはやや小ぶりであるが、口唇部分の長さは同じかやや長めで薄い。これは時期的な差を反映していると思われ、こちらは弥生時代中期後葉段階の資料と言えよう。

5・6の胎土および色調は同じであるが、6の方がかなり胴部が張る。また、6には口唇部端にわずかではあるが刻み目が4箇所観察できる。同様の資料が他にもいくつか見られ、必ず4箇所存在する。5～8にはいずれも多量ではないが赤色土粒が含まれる。9は鋤先口縁の壺である。内面の一部が剥落しているが、内外面とも丁寧にナデ調整されている。10はM字突帯を多用した長胴型の甕である。口縁はやや垂れ下がり、口唇端に凹みがある。胎土は緻密で、内外面とも丁寧にナデ調整されている。北部九州以東系の弥生時代中期後半の資料であろう。11～14は甕の底部である。いずれもナデ調整されており、ハケメ痕はほとんど観察できない。14はユビオサエにより底部直上がやや凹み、内面もユビオサエの痕が多く見られる。15は内外面とも丹塗りされた壺の口縁部と思われる。口縁端にはわずかな凹みがあり、頸をすぼめた後、胴部にかけて大きく広がりを見せる。内部にはユビオサエ痕が見られ、外面はナデ調整されている。10と同じく北部九州以東系のものと考えられるが、原の辻遺跡のこれまでの調査報告書では同様のタイプは報告されていない。

第15表 2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物(一括)観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第78図 1	トレンチ②2号溝一括	甕	10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	石英・長石・角閃石	口縁破片	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	風化
第78図 2	トレンチ②2号溝一括	甕	5YR6/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	石英・長石・金雲母 多)赤色土粒	口縁破片	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	ナデ・指押さえ	
第78図 3	トレンチ②2号溝一括	甕	7.5YR7/4 にぶい橙 10YR3/1 黒褐	7.5YR4/1 褐灰 10YR7/4 にぶい黄橙	石英・長石・金雲母	口縁破片	ヨコナデ	指押さえ・ナデ	風化・剥落
第78図 4	トレンチ②2号溝一括	甕	5YR7/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	ヨコナデ・ナデ	ユビナデ	
第78図 5	トレンチ②2号溝一括	甕	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁部破片	ヨコナデ	指押さえ・ナデ	
第78図 6	トレンチ②2号溝一括	甕	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁破片	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・指押さえ有り	両面丹塗り
第78図 7	トレンチ②2号溝一括	甕	7.5YR6/4 にぶい橙 2.5YR7/8	7.5YR6/3 にぶい褐 2.5YR7/8 橙	石英・長石・金雲母・角閃石・赤色土粒	口縁破片	ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ有り	
第78図 8	トレンチ②2号溝一括	甕	2.5YR6/3 にぶい橙	2.5YR5/6 明赤褐	石英・長石・金雲母 少)赤色土粒	口縁部	ヨコナデ・うすくハケメ有り	ヨコナデ	
第78図 9	トレンチ②2号溝一括	壺	5YR6/4 にぶい橙 5YR3/1 黒褐	5YR5/6 明赤褐	石英・長石・金雲母 多)	口縁部破片	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・風化・剥落	
第78図 10	トレンチ②2号溝一括	甕	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁・胴部	ヨコナデ・	ヨコナデ・ユビナデ	
第78図 11	トレンチ②2号溝一括	甕	5YR5/6 明赤褐	10YR6/6 明黄褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒	底部破片	ハケメ・ナデ消し	指押さえ	
第78図 12	トレンチ②2号溝一括	甕	5YR5/6 明赤褐	7.5YR4/3 褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒	底部破片	ナデ	ナデ	
第78図 13	トレンチ②2号溝一括	甕	5YR5/6 明赤褐 7.5YR3/1 黒褐	7.5YR6/4 にぶい橙	石英・長石含む金雲母	底部破片	ナデ	指押さえ・スス痕	
第78図 14	トレンチ②2号溝一括	甕	5YR5/6 橙	5YR5/3 にぶい赤褐	石英・長石・金雲母	底部破片	ハケメ・指押さえ・ナデ	ナデ・指押さえ	
第78図 15	トレンチ②2号溝一括	壺	2.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	石英・長石・赤色土粒	口縁破片	ナデ	指押さえ	両面丹塗り痕



第78図 2-a号溝および2-b号溝上層出土遺物一括(1/4)

3号溝（第79図）

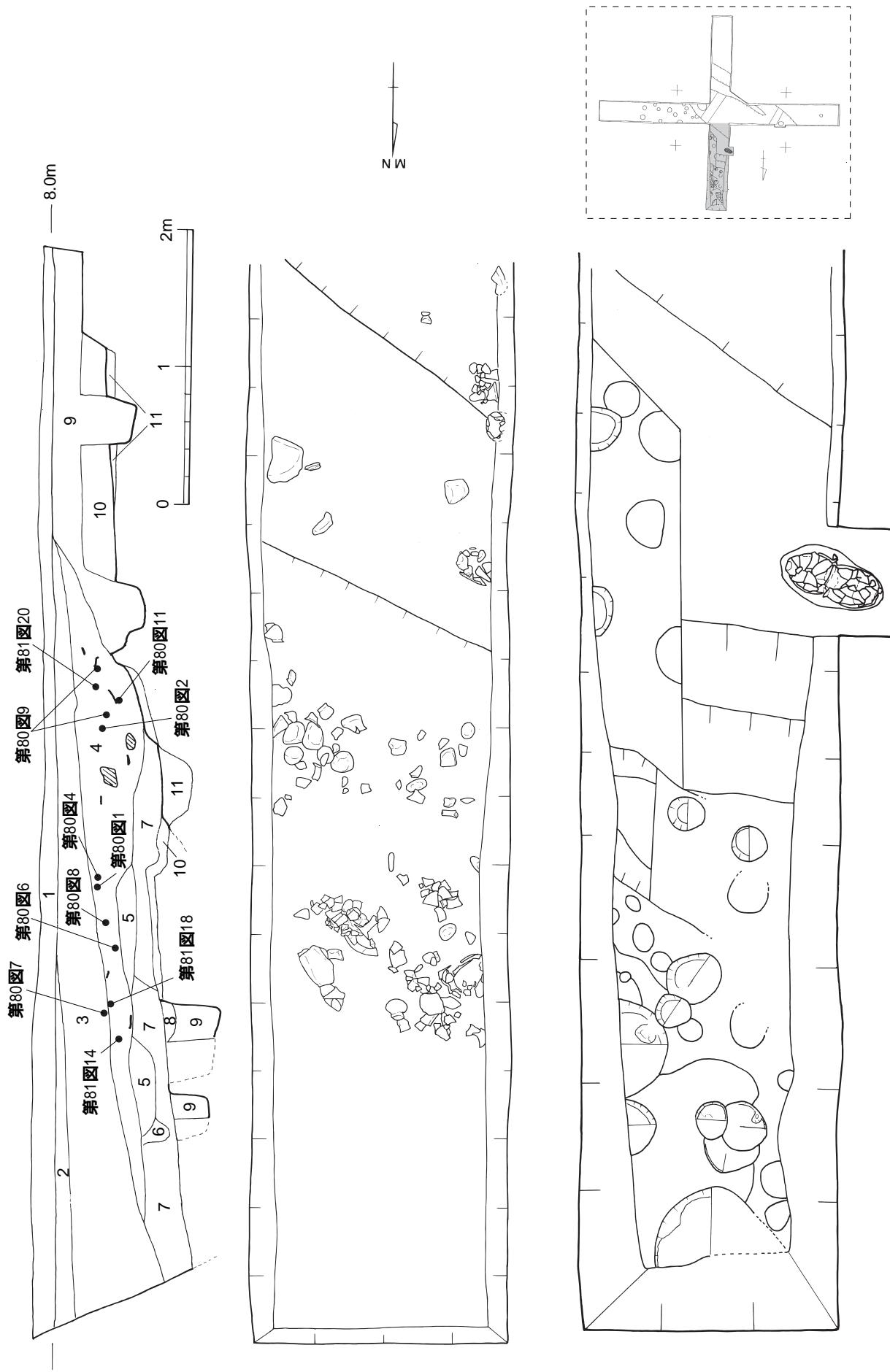
A - 1区中央部に東西方向で確認された溝である。丘陵の北側傾斜部を利用して形成されたものと考えられ、溝の埋土からは完形の高壙を含む多量の土器片が出土したため、最終的には土器や石器の廃棄場所として機能したことが分かる。遺構が後世の畑作によって削平を受けていることもあり、北側の立ち上がりが不明確で、溝ではなく単なる窪地であった可能性もあるが、遺構の底からは細かい土器片が床に張り付いた状態で検出され、西へと続くことから、ここでは溝として報告しておく。A - 1区の東壁土層を観察する限り、幅は約1.5m、断面は逆台形に近いV字形を呈し、深さは約0.65mと推測される。埋土は黒褐色粘質土であり、含まれる土器片は弥生時代中期後半～後期後半にかけての資料である。

この溝の下面、および南側からは、造成面と考えられる風化礫土粒を多く含んだ暗赤灰色砂質混在土を検出した（9層）。さらに9層下からは多数の柱穴群が検出された。詳細については他の地区の柱穴群とともに後述する。この地区に複数の建物が時期を違えて建てられたことを示しているが、2m幅のトレンチの中では建物のプランを確認することができなかった。

**A - 1区東壁****A - 1区完掘状況****第16表 A - 1区土層観察表**

層位	色調・土質	所見
1	表土	
2	暗赤褐色土(2.5YR3/6)	風化礫が混在する整地層。
3	黒褐色土(7.5YR3/2)	整地層。鏡頭畠落ち込み埋土。
4	黒褐色土(5YR2/1)	遺物多数混在。
5	暗褐色(10YR3/4)	黄色・白色土粒混在。
6	暗赤色土(10YR3/6)	と5層が混在する層。
7	5層と同色ではあるがしまりがなく、土粒も少ない層。	
8	褐色粘質土(10YR4/4)	やや明るい褐色。
9	暗赤灰色砂質混在土(2.5YR3/1)	風化礫土粒を多く含む。A - 1区の整地層。
10	褐色硬質土(10YR4/4)	白色土粒と黄色土粒を含む。
11	赤褐色土(2.5YR4/8)	地山。

第79図 A-1区土層図(上段)および遺物(中段)・遺構(下段)検出状況(1/40)



3号溝出土遺物（第80・81図、第17表）

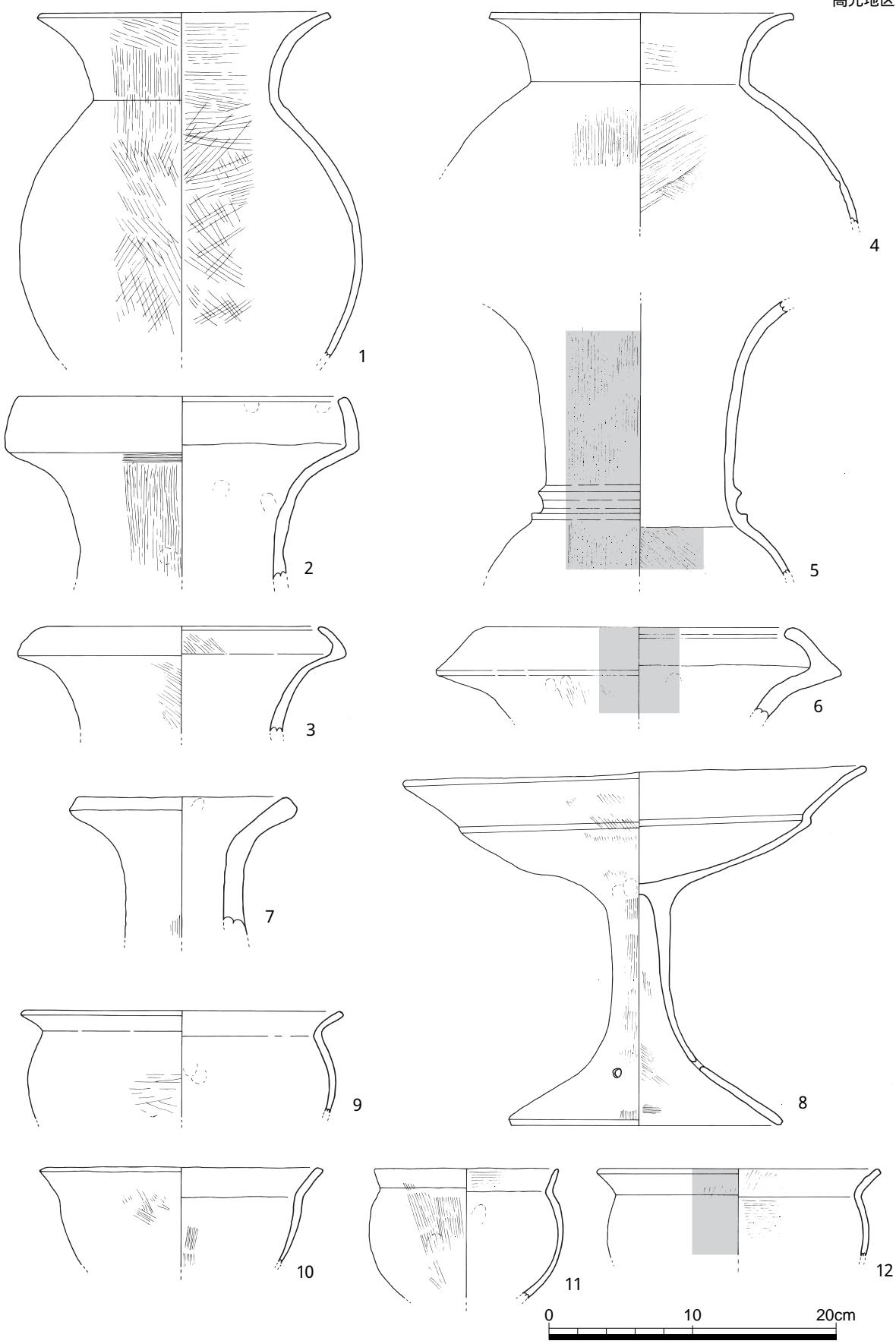
第16図1・4は球胴型の広口壺である。1は内外面ともに複雑に交わる目の大きいハケメ痕を残している。4は頸部がやや短く、ハケメは1より細かく薄い。弥生時代後期中頃～後半にかけての資料である。2・3および6は口縁部が逆「く」の字形を呈す複合口縁壺である。2は内外面ともに反転部分にしっかりと稜線をもち、やや外湾しながらも直立気味に立ち上がる。頸部にはタテハケが施され、口唇部はヨコナデされている。口唇端は「コ」の字形に調整されている。3は外面の反転部にしっかりと稜があるが、内面は目立たず、ナナメ方向のハケメ痕がある。2よりもさらに外湾し、口唇端はやや丸みを帯びている。頸部は、外面にナナメからタテ方向の、内面に横方向のハケメがあり、ナデ消されていると思われる。6は反転部の角度が鋭く、外面はやや直線的なラインを描き、末端がやや膨らんで緩やかに内傾する。口唇端は厚みをもち、丸みを帯びている。反転部付近はヨコナデされ、頸部に向かってタテ方向にハケメがあり、その上に丹が施された痕がある。内外面とも風化しており、この丹は現在赤みのないくすんだ褐色となっている。

5は長頸の壺である。頸部は上部にかけて開き、その先は欠損して不明だがおそらく反転するであろう。頸部と胴部の接続部には突堤が2条施されており、それをはさんでやや目の大きさの異なるタテ方向のハケメ痕が観察できる。内外面ともに丹が塗られており、褐色だが4よりやや赤みがかっている。内面頸部にはハケメがなく、頸部と胴部を別々に作った後、合体させたものと思われる。7は器台である。外面は緩やかに開くが、内面は屈曲部に緩く稜が付く。外面はナナメからタテ方向にハケメ痕が残り、内面は指おさえにより成形している。胎土は粗く、石粒が目立つ。8はほぼ完形の高坏である。杯部から屈曲して口縁部がわずかに外反する。脚部には穿孔が3箇所施されており、目の細かいハケメ痕が残るが裾部にかけて丁寧にナデ調整されている。胎土は緻密で角閃石が多く含まれる。後期後葉の資料であり、3号溝が埋没した時期の指標となる資料である。

9～10は口縁が「く」の字に屈曲する鉢である。9・12は口縁がやや内湾気味に広がるのに対し、10・11は直立に近い形に立ち上がる。成形痕は11によく残っており、外面は屈曲部から胴部中ほどにかけてタテ方向に、下半部はナナメやヨコ方向に目の細かいハケメ痕が残る。また、内面は口縁部にヨコ方向のハケメがあるがナデ消されており、胴部はユビオサエとナデにより、膨らみのある形状に

第17表 3号溝出土遺物①観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第80図 1	A-1区3号溝	壺	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/2 明褐灰	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ	ハケメ	表面全体的に風化
第80図 2	A-1区3号溝	壺	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ・指押さえ・ハケメ	指押さえ・ハケメ	
第80図 3	A-1区3号溝	壺	10YR7/4 にぶい黄橙 5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR6/8 橙 5YR5/4 にぶい赤褐	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ヨコナデ・ハケメ後ナデ調整	ハケメ・ヨコナデ	
第80図 4	A-1区3号溝	壺	5YR7/2 明褐灰	5YR7/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	全体的に風化
第80図 5	A-1区3号溝	壺	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR7/3 にぶい橙	石英・長石・金雲母・角閃石	胴部	ハケメ・ヨコナデ	ナデ	表面丹塗り風化・部分的に剥落
第80図 6	A-1区3号溝	壺	7.5YR8/4 浅黄橙 5YR5/6 明赤褐	7.5YR8/6 浅黄橙 5YR5/4 にぶい赤褐	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	ヨコナデ	両面丹塗り
第80図 7	A-1区3号溝	器台	2.5YR7/8 2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙 7.5YR4/2 灰褐	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ後ナデ・指押さえ	指押さえ・シボリ	
第80図 8	A-1区3号溝	高坏	5YR7/3 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	石英・長石・金雲母・角閃石	完形	ハケメ・ナデ消し・指押さえ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ消し・シボリ	
第80図 9	A-1区3号溝	鉢	7.5YR5/2 灰褐 2.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ一部ナデ消し	指押さえ・ナデ	
第80図 10	A-1区3号溝	鉢	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ハケメ後ナデ調整	ヨコナデ・ハケメ	表面風化
第80図 11	A-1区3号溝	鉢	5YR6/6 2.5Y4/1 橙 黄灰	5YR5/6 明赤褐	石英・長石・金雲母	口縁部・胴部	ヨコナデ・ナデ消し・ハケメ・指押さえ	ナデ・指押さえ	表面スス痕
第80図 12	A-1区3号溝	鉢	2.5YR6/8 5YR7/6 橙	2.5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ハケメ後ナデ調整	ナデ・ヨコナデ・ハケメ	



第80図 3号溝出土遺物①(1/4)

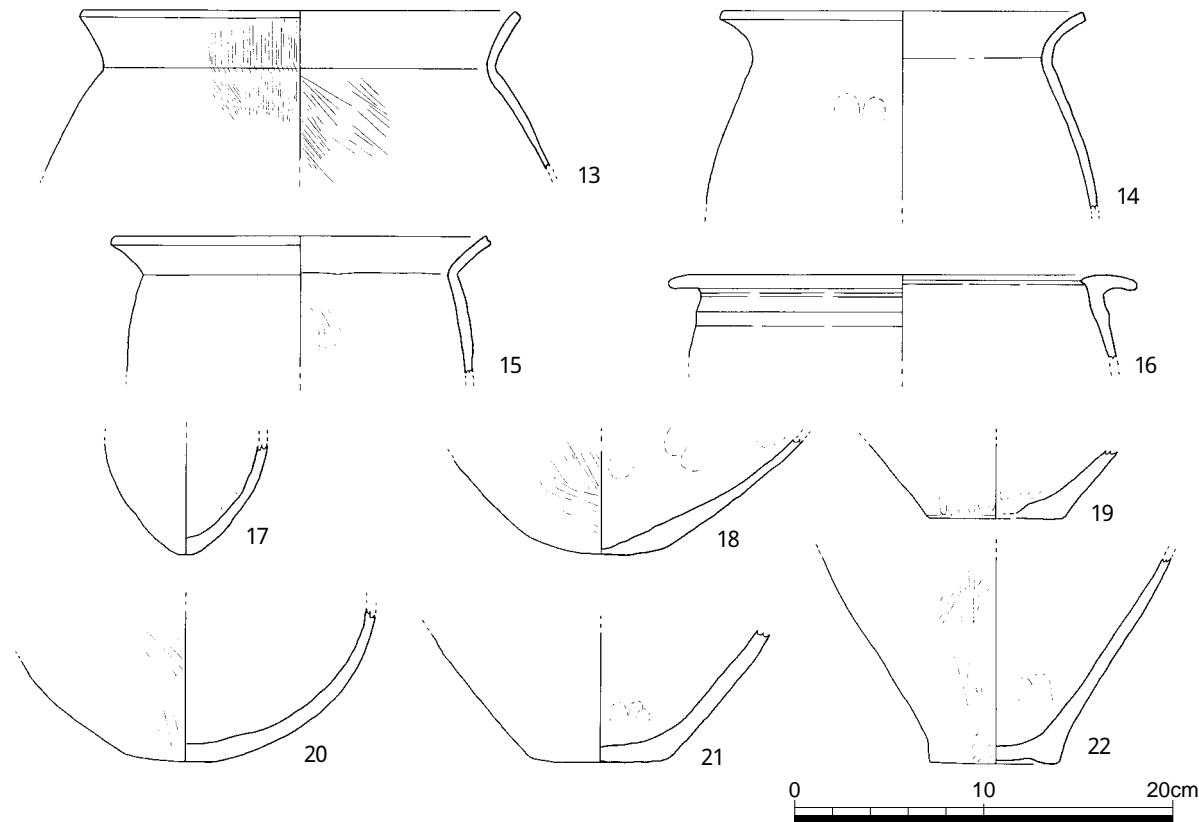
仕上げられている。

第81図13～15は「く」の字に屈曲する口縁を有する甕である。13と15は外面に明瞭な稜をもってまっすぐに口唇が立ち上がるが14の屈曲部はやや緩やかで、内湾している。14・15の口唇端には凹みが見られ、13は口縁そのものが長い。また13の外面は、石粒が目立たぬようきめの細かい粘土を塗布し、丁寧にナデ調整している。16は弥生時代中期後半の甕で胎土は細かく、全面が丁寧にナデられている。

17～22は底部である。17はラグビーボール状の尖った底部を持つ小型の鉢である。18・20は凸レンズ状に底部が丸みをもつ壺で、その前段階にあるのが21である。19・22は弥生時代中期後半の資料で、いづれも風化している。19はタテ方向にヘラミガキ状の筋があり、丹塗りの土器であったと思われるが赤色顔料は残っていない。

第18表 3号溝出土遺物②観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第81図 13	A - 1区 3号溝	甕	7 5YR7/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ナデ消し・ハケメ	ナデ	表面一部剥離
第81図 14	A - 1区 3号溝	甕	7/5YR8/6 浅黄橙	10YR6/2 灰黄褐 5Y5/1 灰	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	裏面スス痕
第81図 15	A - 1区 3号溝	甕	5YR7/8 橙	5YR7/6 橙 10YR4/1 褐灰	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁部	指調整・ナデ	ヘラナデ	
第81図 16	A - 1区 3号溝	甕	7 5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第81図 17	A - 1区 3号溝	鉢	2 5YR6/6 橙	2 5YR7/6 橙	石英・長石・金雲母	底部	指ナデ	ヘラ・指押さえ	裏面一部剥落
第81図 18	A - 1区 3号溝	壺	5YR6/6 橙 7 5YR5/2 灰褐	5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	指押さえ	表面スス痕
第81図 19	A - 1区 3号溝	壺	2 5YR5/6 明赤褐	2 5YR6/8 橙	石英・長石	底部	ヘラミガキ		表面丹塗り
第81図 20	A - 1区 3号溝	壺	2 5YR6/8 橙 7 5YR5/3 にぶい褐	2 5YR5/8 明赤褐	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	ナデ・指押さえ	
第81図 21	A - 1区 3号溝	壺	10YR6/3 にぶい黄橙 2 5Y8/4 淡黄	2 5Y5/2 暗灰黄 10YR8/4 浅黄橙	石英・長石・金雲母	底部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・指押さえ・指調整	
第81図 22	A - 1区 3号溝	甕	2 5YR5/6 明赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐 5YR3/1 黒褐	石英・長石・金雲母・角閃石	底部	ハケメ・ナデ消し	指押さえ	表面一部剥離

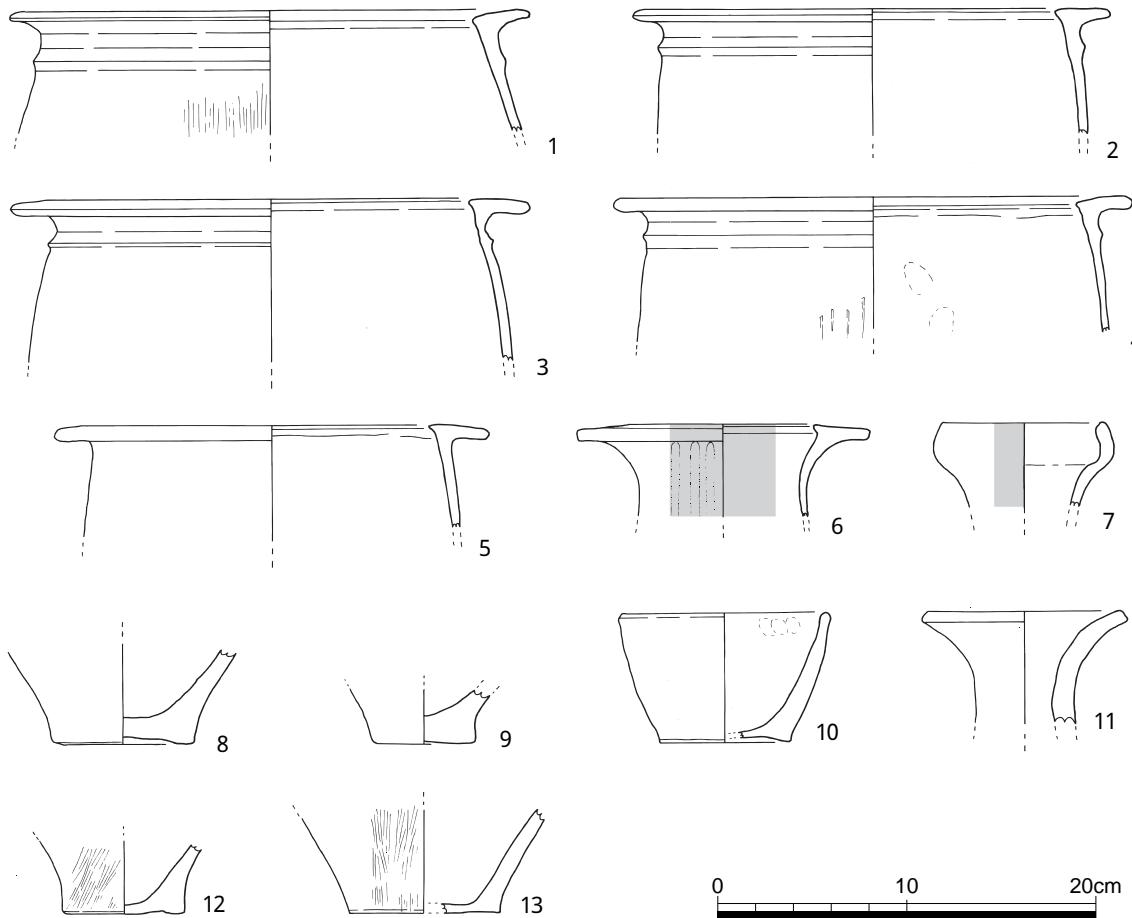


第81図 3号溝出土遺物②(1/4)

第82図は3号溝下および3号溝の南側から出土した遺物である。土層の層位としては9層に相当し、一部5層と7層の遺物が含まれる。時期的には弥生時代中期後半にほぼまとめられる。1～5は逆L字形口縁の甕で、1～4には口縁直下に突帯が貼りつく。3は突帯が非常に小さく、石粒が目立つ胎土や灰白色の色調は弥生時代後期によく見られるものである。6は暗文状のヘラミガキ痕がある鋤先口縁の壺、7は袋状口縁の壺である。8～13は底部で、9は平底であるが厚みがある。10は小型の鉢で、口縁部は粘土を繋ぎ足した痕が残る。表裏ともにハケメの痕は見られない。11は円筒形の器台で、

第19表 3号溝下および南側出土遺物観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第82図 1	A-1区整地層	甕	7 5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	石英・長石・金雲母・角閃石少	口縁部	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ	
第82図 2	A-1区整地層	甕	7 5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母・粒子極小	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第82図 3	A-1区整地層	甕	7 5YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	石英・長石・金雲母(少)	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	
第82図 4	A-1区整地層	甕	2 5YR6/6 橙	2 5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ナデ消し	指なで	
第82図 5	A-1区整地層	甕	10YR5/4 にぶい黄褐	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第82図 6	A-1区整地層	壺	2 5YR6/6 橙	2 5YR5/6 明赤褐	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ヨコナデ・暗文		表面丹塗り
第82図 7	A-1区整地層	壺	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	表面丹塗り
第82図 8	A-1区整地層	甕	2 5YR5/8 明赤褐	7 5YR5/2 灰褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒	底部	ナデ調整	指調整	
第82図 9	A-1区整地層	甕	7 5YR8/4 浅黄橙	7 5YR7/3 にぶい橙	石英・長石・黒雲母	底部	ヨコナデ	ヘラケズリ	
第82図 10	A-1区整地層	鉢	10YR4/2 灰黄褐	2 5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母・黒雲母・赤色土粒	底部～口縁部	ナデ・指調整	ツメ痕・指押さえ	表面スス痕
第82図 11	A-1区整地層	器台	7 5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母(少)	口縁部	ハケメ	ヨコナデ・ナデ・しばり	裏面一部スス痕
第82図 12	A-1区整地層	甕	7 5YR7/3 にぶい橙	7 5YR6/2 灰褐	石英・長石	底部	ハケメ		
第82図 13	A-1区整地層	甕	5YR7/4 にぶい橙	7 5YR7/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	ナデ	



第82図 3号溝下および南側出土遺物(1/4)

高元地区

稜を持たず、緩やかに開く。内面には絞り痕が、外面にはハケメ痕が残る。

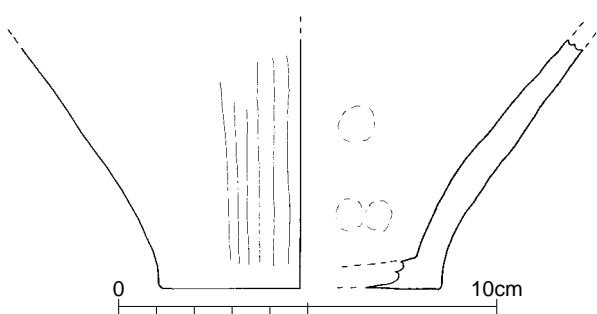
⑧柱穴群（第79・83・84図）

柱穴はA - 1区に26基、A - 2区に1基、A - 4区に16基検出された。すでに述べたように、A - 1区では風化礫土粒を多量に含んだ造成と思われる層があり（9層）、柱穴はいずれもその造成面の下に存在した。柱穴の埋土として、黒褐色土・赤褐色土・褐色土が観察され、激しく切りあっている様子が確認された。柱穴の径は15~70cmと様々であり、埋土による径の差は判別できず、含まれる遺物は小片であり時期的な差異を判別できなかった。

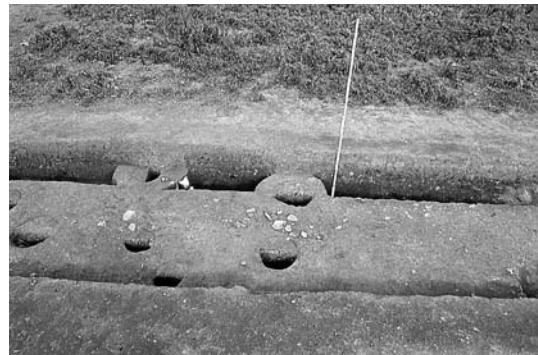
一方、同レベルであるにもかかわらず、A - 4区ではA - 1区の9層に相当する層が見られず、柱穴がいずれも岩盤や地山に直接掘りこまれていることから、後世の土地改良に伴って上面がかなり削平されたことが考えられる。埋土はA - 1区とほぼ同色・同質である。柱穴の埋土には遺物がほとんど含まれておらず、時期は明確でないが、A - 1区に比べると径が均一であり、柱穴同士の切り合いも見られないことから、ほぼ同時期に形成されたものであろう。この中で赤褐色の埋土をもつPit 1は2号溝によって切られており、溝が掘り込まれる以前に、この地区に何らかの建物が存在したことを示している。同じ赤褐色の埋土をもつPit 14から出土した土器が第83図である。平底の甕の底部で、末端までハケメ痕がある。粘土円盤の上に胴部下半部にあたる粘土を接合してつくられたものであり、非常に薄手である。弥生時代中期後半の資料であろう。このことを踏まえれば、2号溝と赤褐色の埋土をもつ柱穴との間にはほとんど時期差は存在せず、比較的短期間のうちにこのエリアの土地改変が

第20表 A - 4区 pit14出土遺物観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第83図	A - 4区 Pit14	甕	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	底部	ナデ消し・ヨコナデ	指揮され	



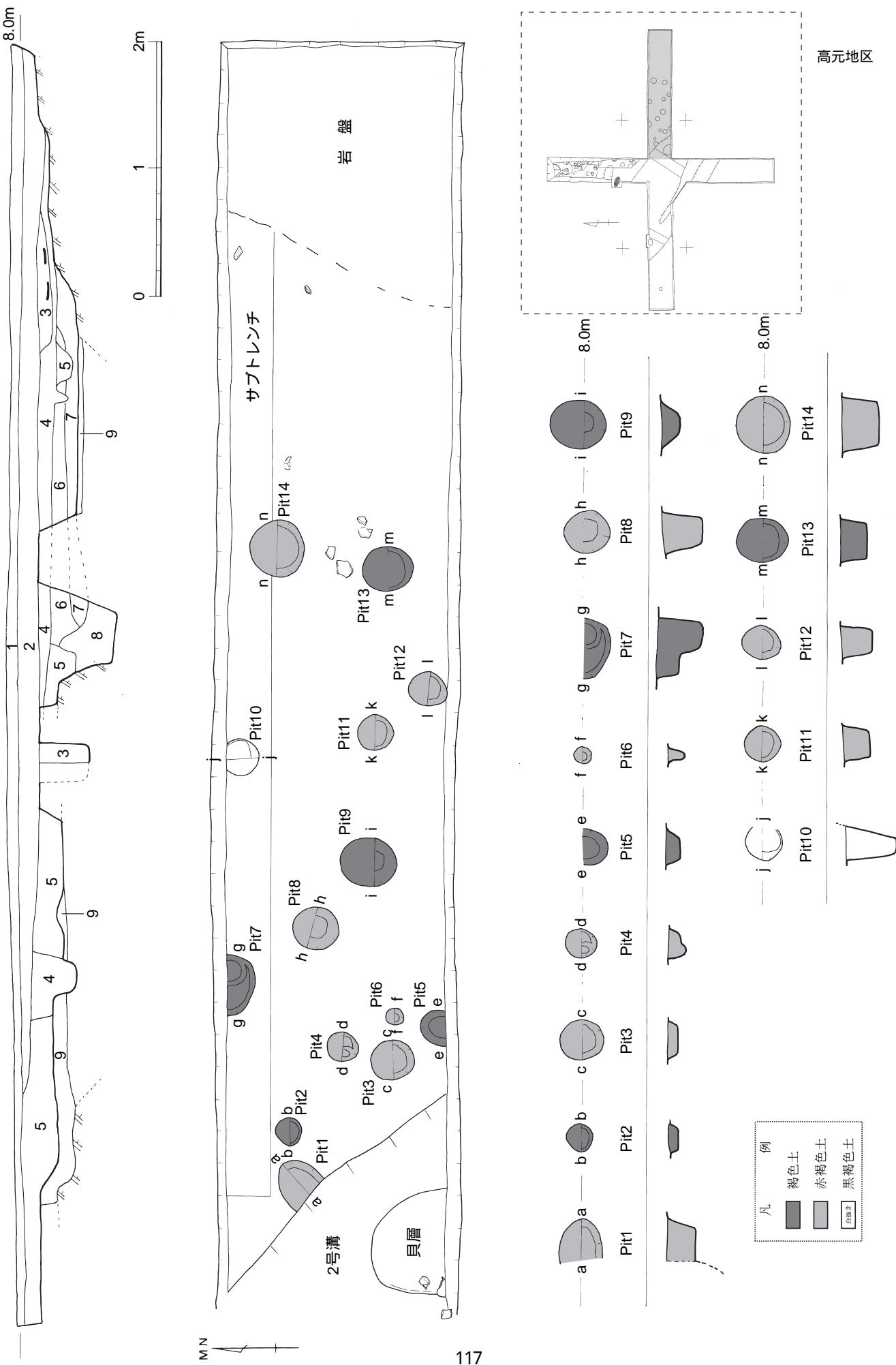
第83図 A - 4区 pit14出土遺物 (1/2)



図版17 A - 4区北壁

第21表 A - 4区土層観察表

層位	色調・土質	所見
1	表土	
2	黒褐色土(7.5YR3/2)	白色・赤色土粒が混在する整地層。
3	暗褐色土(10YR3/4)	クラックが生じやすく炭化物含む。遺物が多く、高元地区に広く存在する遺物包含層。
4	橙色(2.5YR6/8)~にぶい赤褐色(7.5R5/3)の土粒(地山ブロック)が多く混在する層。	
5	にぶい赤褐色土(5YR4/4)	岩盤・風化礫土粒を多数含む。遺構に伴う可能性もあるが、土器が混入しない。岩盤が遊離し、一部は風化して粘土化した層と考えられる。
6	にぶい黄褐色硬質土(10YR4/3)	黄橙色(10YR7/8)の3mm程の粒子を多く含む。
7	灰色風化礫土粒(7.5Y6/1)が多数混在する硬質土。	6層とともにA - 4区にのみ見られる。
8	にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)	
9	赤褐色粘質土(2.5YR4/8)	地山。



第84図 A - 4区土層図(上段)および遺構検出状況(中段)・柱穴断面図(下段)(1/40)

行なわれたと考えられよう。一方、褐色土の埋土をもつ柱穴からは遺物が出土せず、2号溝や赤褐色土の埋土の柱穴との時期差は不明である。

⑨整地層（第71・79図）

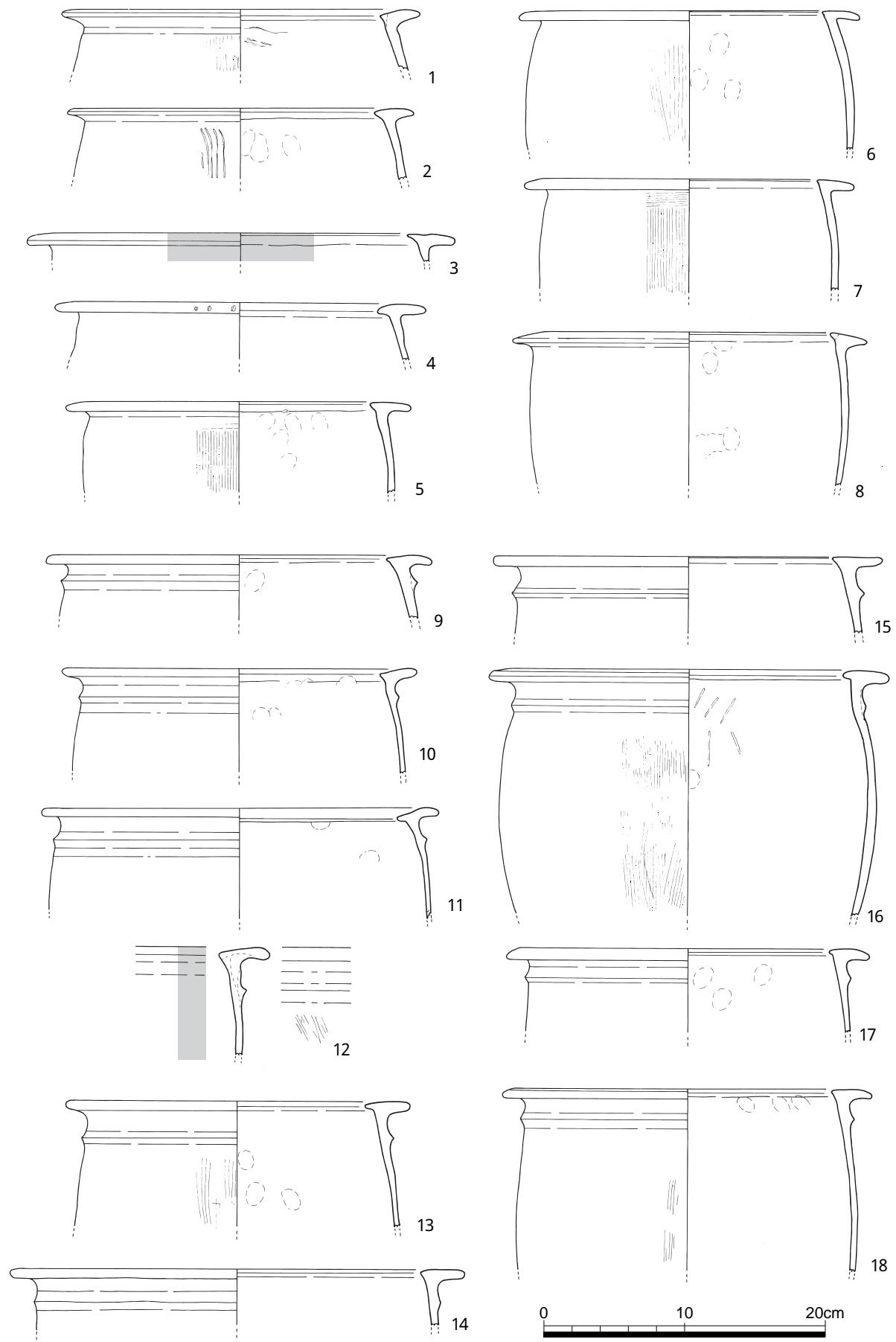
1号溝・2号溝の上面および3号溝南側には多くの風化礫や白色の土粒などを含む硬質の土層があり、それに混じる形で多量の土器片が検出された。調査当初、水田に土地改良する際の床土と考えたが、この層を掘り込んだ形で1号甕棺墓・2号甕棺墓が構築されており、意図的に平坦な地形を作り出した整地層であることが判明した。また、整地層でも1・2号溝上面の層と3号溝南側の層（A-1区9層）との間には、切り合い関係が存在すると思われる。非常に不明瞭であるが、9層を切る形で2号溝のプランは検出された。9層に含まれる風化礫は特に粒が大きく、2-b号溝を掘り込んだ際に排出された土を北側へ廃棄してできた層とも解釈できるが、A-4区にはこの9層に該当する層が存在しないため、断定はできない。いずれにしても、それ以前に存在した建物はすべて放棄され、1・2号溝埋没後から甕棺墓が構築されるまでの間にこのエリアの機能に大きな変化がおこったことは確かである。以下、整地層から出土した遺物を整理し、その時期の特徴を探る。

整地層出土遺物（第85～87図、第22～24表）

第85図1～18および第86図19・20は逆L字形口縁の甕である。1～8は口縁直下に突帯が付かず、9～18は突帯が付く。1の外面の口縁接合部は強くヨコナデされ、わずかな凹みとなっている。その下にはタテ方向の均一なハケメ痕がある。内面には内側に突き出す粘土帯の接合部がよく観察でき、ヘラ痕も残っている。2は胎土が非常にきめ細かく、内外面の調整も非常に丁寧である。風化しているが、丹塗り土器であった可能性が高い。3は内側への突き出しが大きく、T字形を呈する口縁である。4は口唇端が一部欠落しているが、少なくとも3ヶ所の刻み目状・凹みが観察できる。5は1と色調が似ているが赤色土粒を含み、口縁が長く若干垂れ気味である。6・7は更に口縁が下がり、胴部も張る。8は口唇部がかなり尖り、断面がはっきりとした三角形の形状をしている。

第22表 整地層出土遺物①観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第85図 1	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラ押さえ	
第85図 2	2号溝上面・整地層	甕	2.5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ナデ・指押さえ	
第85図 3	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁破片	ヨコナデ	ヨコナデ	丹塗り
第85図 4	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ	ヨコナデ	刻み目状の凹み・一部剥落
第85図 5	2号溝上面・整地層	甕	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁・胴部破片	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・指押さえ	
第85図 6	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母(多)	口縁・胴部破片	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・指押さえ	丁寧な調整
第85図 7	2号溝上面・整地層	甕	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	石英・長石・金雲母	口縁・胴部破片	ハケメ・スス痕・ヨコナデ	ヨコナデ	
第85図 8	2号溝上面・整地層	甕	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ	
第85図 9	2号溝上面・整地層	甕	5YR5/6 明赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁部	ヨコナデ	指押さえ	刻み目状の凹み
第85図 10	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ	裏面スス痕
第85図 11	2号溝上面・整地層	甕	2.5YR6/8 橙	10YR2/1 黒	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ	両面スス痕
第85図 12	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙 2.5YR5/8 明赤褐	石英・長石・金雲母(多)	口縁破片	ヨコナデ・ハケメ・ナデ調整	ナデ調整	丹塗り痕
第85図 13	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	石英・長石・金雲母	口縁・胴部破片	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・指押さえ	
第85図 14	2号溝上面・整地層	甕	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母(多)	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	表面摩滅・裏面剥落
第85図 15	2号溝上面・整地層	甕	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/2 黄褐	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ・一部欠落	表面スス痕
第85図 16	2号溝上面・整地層	甕	5YR6/3 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母	口縁・胴部	ヨコナデ・ハケメ・ナデ消し	ヨコナデ・ヘラ消し	
第85図 17	2号溝上面・整地層	甕	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁破片	ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ	
第85図 18	2号溝上面・整地層	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙 10R6/8 赤橙	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁・胴部	ヨコナデ・ハケメ・ナデ調整	ヨコナデ・ナデ・指押さえ有り	



第85図 整地層出土遺物①(1/4)

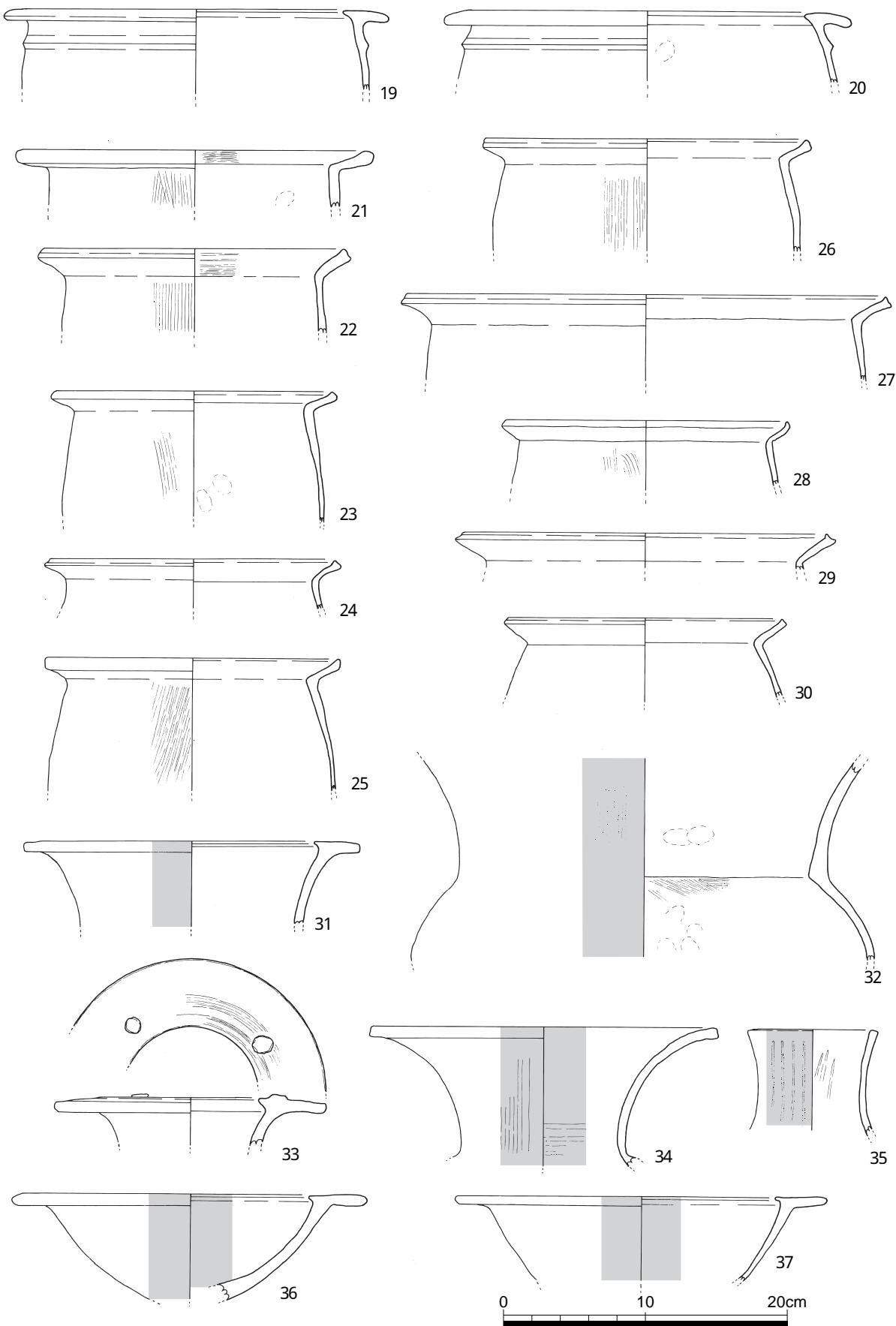
高元地区

9は内側の突き出し部分に4つの刻み目状の凹みがある。10は表面の胎土はきめ細かく、丁寧なナデ調整が施されている。11・13は内側の突起が強く、胴部に対し垂直に近い。また、11外面は化粧土を塗り付けたような仕上がりであるのに対し、内面はユビオサ工痕が目立ち、黒く煤けて手触りもザラザラとしている。12は上面と内面に丹塗りが施されており、口唇端が厚みをもつ。14は内外面とも剥落が激しく、成形も粗雑である。焼成の失敗により廃棄されたものであろうか。15は胎土がきめ細かく、丁寧なナデ調整が施されている。外面にはスス痕か、黒塗り痕と思えるシミがある。16は11・13と同じく口縁部の内側への突き出しが顕著で、内面には1.5~2cm幅のヘラ痕が多く見られる。外面は突堤直下から膨らみを見せるが胴部はさほど張らず、タテ方向に目の細かいハケメ痕がある。17・18は口唇部が水平に伸び、残り3分の1程で下がる点が共通している。18には胴部にかけてタテ方向のハケメが入る。19・20は口唇部が垂れ下がる形態で20は胴部が張る。胎土・色調はほぼ同じであるが19には赤色土粒が混じる。1~19は弥生時代中期中葉~後葉にかけての資料である。

21~30は「く」の字形の跳ね上げ式口縁の甕である。21は跳ね上げには至らないが、口唇部に粘土を継ぎ足し、端部は厚みを持っている。外面については、口縁の屈曲部の稜が明瞭で、ほぼ直角に折れる。胴部のハケメは強く、内面は口縁部に強いヨコナデが見られる。22は21とプロポーションや調整・胎土が似ているが、口縁がやや立ち上がり、口唇端部に凹みが見られる。23は口縁部内面を強くヨコナデして跳ね上げ状に仕上げている。22よりも口縁屈曲部の稜が明確で胴部は非常に薄い。24は口縁部の外面がやや外湾し、頂上部を跳ね上げている。内面には口縁の屈曲部にはっきりと稜が入る。25・26は胎土・色調・調整が23と共通するが、内面の稜が明確で、口縁頂上部をややつまみ上げている。27はさらに内面の稲が強く、口縁頂上部の跳ね上げがしっかりしている。28は胎土がきめ細かく、丁寧にナデ調整を施している。外面胴部にはタテ方向のハケメ痕が見られ、上から化粧土を塗布して

第23表 整地層出土遺物②観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第86図 19	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図 20	2号溝上面・整地層	甕	5YR5/6 明赤褐	10YR4/2 灰黄褐	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	指押さえ	裏面一部剥落
第86図 21	2号溝上面・整地層	甕	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ・指押さえ・ハケメ	ヨコナデ・指押さえ	
第86図 22	2号溝上面・整地層	甕	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR4/2 灰褐	石英・長石・金雲母(多)	口縁部	ヨコナデ・ハケメ	ナデ	表面スス痕
第86図 23	2号溝上面・整地層	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5YR6/8 橙 7.5YR7/4 にぶい橙	石英・長石	口縁破片	ヨコナデ・ハケメ後ナデ調整	指押さえ・ナデ調整・ヨコナデ	
第86図 24	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図 25	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙	石英・長石・金雲母	口縁・胴部破片	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・指押さえ	
第86図 26	2号溝上面・整地層	甕	10YR4/7 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英・長石・金雲母	口縁・胴部破片	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ	風化
第86図 27	2号溝上面・整地層	甕	5YR6/8 橙	5YR7/6 橙	石英・長石	口縁部	ヨコナデ・ハケメ		
第86図 28	2号溝上面・整地層	甕	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	石英・長石	口縁部	ヨコナデ・ハケメ	ナデ	
第86図 29	2号溝上面・整地層	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第86図 30	2号溝上面・整地層	甕	7.5YR8/4 浅黄橙 2.5YR6/8 橙	10YR8/4 浅黄橙 2.5YR5/8 明赤褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁破片	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ調整	
第86図 31	2号溝上面・整地層	壺	7.5YR4/4 褐	7.5YR4/6 褐	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	表面丹塗り
第86図 32	2号溝上面・整地層	壺	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR5/4 にぶい赤褐	石英・長石・金雲母	胴部			表面丹塗り痕
第86図 33	2号溝上面・整地層	壺	5YR7/6 橙	5YR7/2 暗灰黄	石英・長石・金雲母・赤色土粒	口縁破片	ヨコナデ	ユビナデ	浮紋あり
第86図 34	2号溝上面・整地層	壺	2.5YR5/8 明赤褐	10YR5/8 赤	石英・長石・金雲母	口縁	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ナデ調整	丹塗り痕
第86図 35	2号溝上面・整地層	壺	10YR5/8 赤	2.5YR4/6 赤褐	石英・長石・金雲母	口縁部	ヘラミガキ	シボリ	表面丹塗り・風化
第86図 36	2号溝上面・整地層	高坏	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	石英・長石・金雲母	口縁・胴部破片	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	丹塗り痕・両面摩滅
第86図 37	2号溝上面・整地層	高坏	5YR6/6 橙	2.5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母(多)	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	



第86図 整地層出土遺物②(1/4)

高元地区

仕上げている。29は口唇端が2本に枝分かれするようにつまれてあり、上への跳ね上げ部は内面を強くヨコナデすることによってより強調されている。胎土は緻密で内外面とも調整は丁寧である。30は口縁の屈曲部の稜が内外面ともはっきりしており、「く」の字形を呈す。21~30は北部九州東部系の資料である。一見すると弥生時代後期の甕であるが、やはり弥生時代中期中葉~後葉にかけての範囲の資料としてまとめられる。整地層からは逆L字形口縁の20片に対し10片が出土した。

31は鋤先口縁の壺である。内外面ともに丁寧にナデ調整されており、外面には暗褐色の丹が施されている。口縁はほぼ水平で、頸部はさほど広がらない。32は扁球状の胴部をもつ丹塗りの広口壺で、外面胴部にはヨコ方向のハケメ痕が見える。内面にはユビオサ工痕が目立つ。33は上面に浮文が施された鋤先形の壺で、口縁は若干垂れ下がる。上面から内面にかけてのヘラナデ痕の線は、歪みなく円を描いており、回転台を用いて調整されたと思われる。口縁外面には粘土を繋ぎ合わせた部分が観察される。北部九州東部系の資料であろう。34は広口の壺で、胎土が細かく成形も丁寧である。頸部には外面にタテ方向の、内面にヨコ方向のヘラミガキ痕が見られ、褐色系の丹が塗られていた可能性が高い。35は丹塗りの直口壺で、風化が激しいがタテ方向に暗文状のヘラミガキ痕が見える。内面には絞り痕がある。36・37および第87図38~40は鋤先口縁をもつ丹塗りの高坏である。36・37の口縁部はほぼ水平で、杯部はやや深めである。38は胎土が非常にきめ細かく、褐色系の丹が施されている。39・40の口縁部は若干垂れ気味で、40の杯部は深いが39は浅めである。39の胎土には赤色土粒が含まれている。40は高坏の脚部で、外面に暗文状のヘラミガキ痕が見られる。丹は赤褐色である。これら壺や高坏もやはり弥生時代中期中頃~後半の範囲内の資料である。

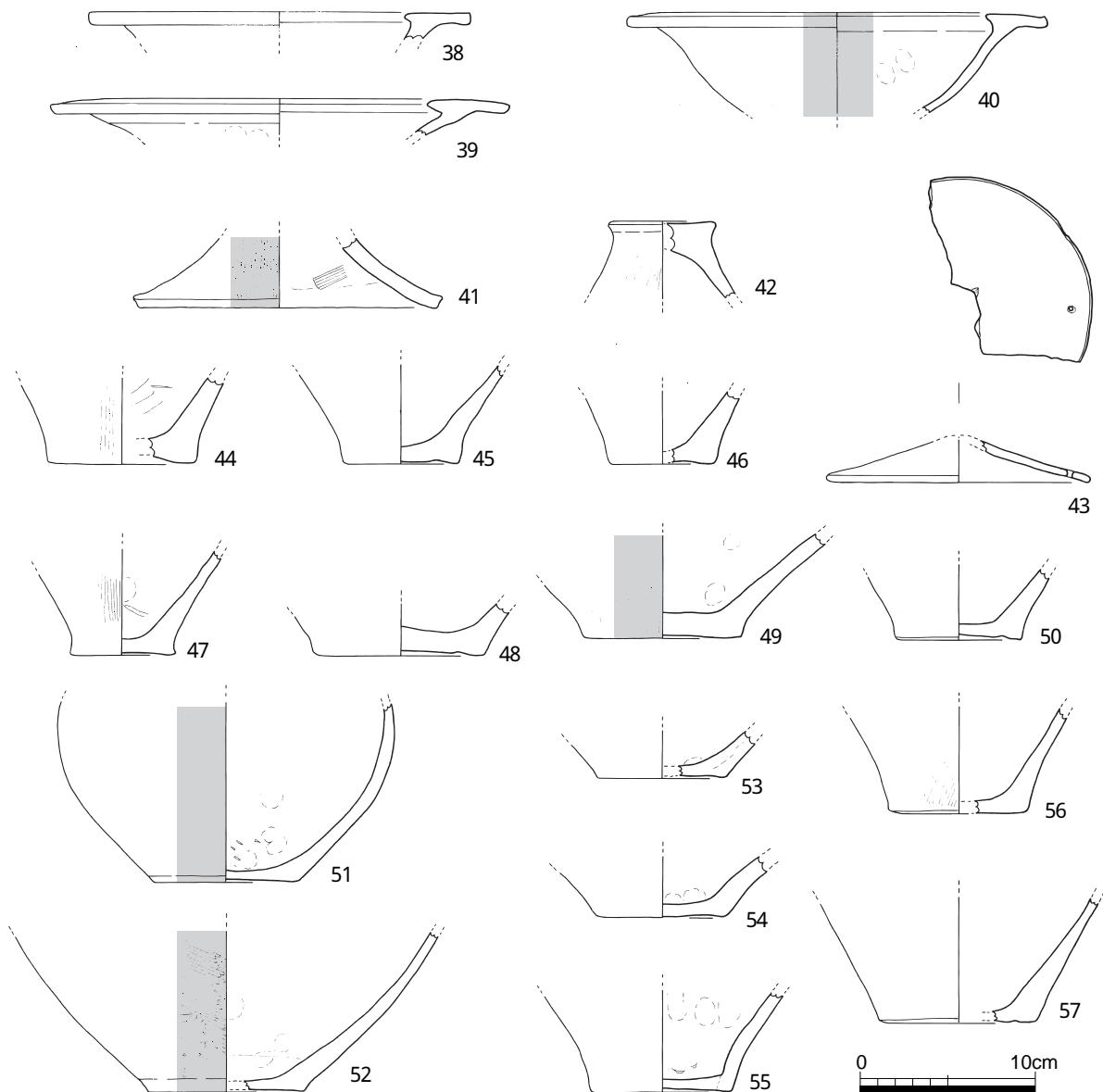
42は蓋のつまみ部ととらえた。内面には厚く粘土が貼り付けてあり、天部から一旦内湾して広がる。

第24表 整地層出土遺物③観察表

報告番号	遺構名	種類	色調(表)	色調(裏)	胎土	残存状況	調整手法(表)	調整手法(裏)	備考
第87図 38	2号溝上面・整地層	高坏	2 5YR5/6 明赤褐	2 5YR5/6 明赤褐	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	両面丹塗り
第87図 39	2号溝上面・整地層	高坏	5YR6/8 橙	2 5YR6/8 橙	石英・長石・赤色土粒	口縁部	ヨコナデ・指押さえ	ナデ	表面風化
第87図 40	2号溝上面・整地層	高坏	7 5YR8/6 浅黄橙 2 5YR5/8 明赤褐	5YR7/4 にぶい 橙 2 5YR4/6 赤褐	石英・長石	口縁破片	ヨコナデ	ヨコナデ・指押さえ	両面丹塗り
第87図 41	2号溝上面・整地層	高坏	2 5YR5/6 明赤褐	10YR7/4 にぶい 黄橙	石英・長石・金雲母	脚部	ヘラミガキ痕	ヨコナデ	
第87図 42	2号溝上面・整地層	蓋	10YR6/N にぶい 黄橙 暗灰	10YR6/4 にぶい 黄橙	石英・長石・金雲母	つまみ部	ハケメ後ナデ		
第87図 43	2号溝上面・整地層	蓋	2 5YR6/6 橙	10YR5/3 にぶい 黄褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒		タテナデ		
第87図 44	2号溝上面・整地層	裏	2 5YR6/6 橙	10YR4/1 褐灰	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	ハケメ・ヘラ押さえ	
第87図 45	2号溝上面・整地層	裏	10YR6/2 灰黄褐 2 5YR4/4 にぶい 赤褐	2 5YR5/6 明赤褐	石英・長石・金雲母・赤色土粒	底部	ナデ	指調整・指ナデ	表面一部風化
第87図 46	2号溝上面・整地層	裏	2 5YR5/6 明赤褐	7 5YR4/3 褐	石英・長石・金雲母(小)	底部破片	ナデ	ナデ	風化
第87図 47	2号溝上面・整地層	裏	5YR6/6 橙	2 5YR5/2 暗灰黄	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ・ヨコナデ	ナデ・指押さえ	裏面スス痕あり
第87図 48	2号溝上面・整地層	壺	7 5YR7/6 橙	5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	風化・摩滅
第87図 49	2号溝上面・整地層	壺	2 5YR5/6 明赤褐	2 5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母	底部	強いハケメ	ナデ・指押さえ	表面丹塗り
第87図 50	2号溝上面・整地層	裏	10R5/ 10YR5/2 赤 灰黄褐	2 5YR6/8 橙	石英・長石・金雲母・赤色土粒	底部破片	ナデ	ナデ	全体摩滅
第87図 51	2号溝上面・整地層	壺	10YR4/ 5YR7/6 赤 橙	5YR7/6 橙	石英・長石・金雲母・赤色土粒	底部~胴部	ナデ調整	指押さえ・指調整・ヘラ痕	表面丹塗り・表面摩滅
第87図 52	2号溝上面・整地層	壺	2 5YR5/8 明赤褐 N3/ 暗灰	5YR6/6 橙	石英・長石・金雲母	底部	ヘラミガキ・指調整	指押さえ・調整	表面丹塗り
第87図 53	2号溝上面・整地層	壺	7 5YR6/4 にぶい 橙	5YR7/6 橙	石英・長石・金雲母	底部	ヨコナデ	指押さえ	裏面ツメ痕
第87図 54	2号溝上面・整地層	壺	5YR6/6 橙	10YR5/2 灰黄褐	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ヨコナデ・指押さえ	風化
第87図 55	2号溝上面・整地層	裏	7 5YR6/4 にぶい 橙	10YR6/3 にぶい 橙	石英・長石・金雲母・角閃石	底部	ヨコナデ・ツメ痕	指押さえ・ツメ痕	
第87図 56	2号溝上面・整地層	裏	2 5YR6/6 橙	2 5YR6/7 にぶい 橙 7 5YR7/4 にぶい 橙	石英・長石・黒雲母	底部破片	ハケメ後ナデ	ユビナデ	風化
第87図 57	2号溝上面・整地層	裏	2 5YR5/8 明赤褐	10YR4/1 褐灰 10YR5/3 にぶい 黄褐	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ	全体摩滅・一部剥落

43は無形壺の蓋である。穿孔が1つ確認できる。風化のためか、丹塗り痕は残っていない。

44～57は底部である。49・56はいづれも底面までハケメ痕が残り、49は特に目が大きく強い。51は袋状口縁壺の底部であろうか。内面の底部付近にツメ痕が多く残る。52は広口壺の底部と思われる。底面直上に粘土接合部分の稜があり、外面にはヘラミガキ痕が見られる。これら底部はすべて平底の類であり、口縁部の形状を鑑みればやはり弥生時代中期中頃～後半の範囲におさめられよう。



第87図 整地層出土遺物③ (1/4)

その他の遺物（第88図、第25表）

A区で出土した遺物として、土器以外には石器があげられる。金属器は出土しなかった。1は全体を緻密な剥離によって成形した石鎌である。原の辻遺跡の石鎌は総じて緻密な加工が施され、素材は黒曜石に限られるという特徴をもっている。2・3は円礫の中央部に敲打痕を残すもので、どちらも重量感がある。4は、玄武岩製の円盤状石製品で、周縁加工により円盤状に仕上げている。一部に使用のためか、摩滅した部分が認められる。5は左側片に使用痕が残る剥片で、素材としては打面部に最大厚をもつ横広の剥片を使用している。打面は調整打面である。旧石器時代の所産であろう。6は先細りの円筒形を呈する自然礫を素材とした敲打具である。先端部の潰れ具合から、かなり使用頻度が高かったものと判断される。7・8も敲打具であるが、7は6面に敲打痕が観察され、特に上下部分の敲打による剥落痕は著しく、かなりの作業量があったことを示している。8は磨り面があり、敲打具とともに磨り石としても利用されていたことがわかる。9は玄武岩製の石鎌である。刃部は直刃であるが、かなり風化しており剥離痕、研磨痕も観察できない状態にある。

第25表 高元A区出土石器観察表

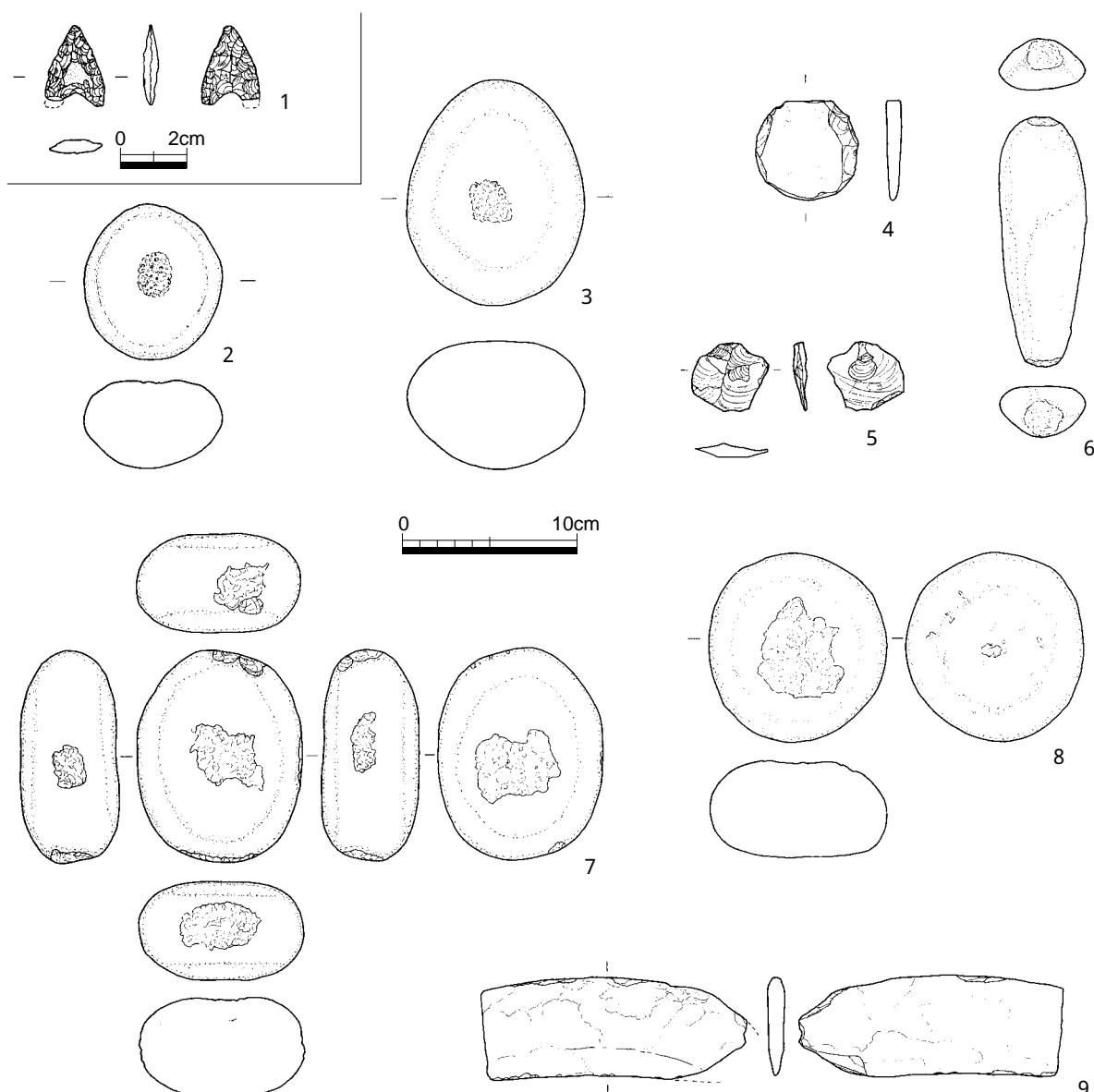
報告番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
第88図 1	トレンチ②2-a号溝	石鎌	2.30	1.70	0.40	0.90	黒曜石
第88図 2	トレンチ②2-a号溝	敲石	9.00	8.00	5.10	565.80	玄武岩
第88図 3	トレンチ②2-a号溝	敲石	13.05	10.30	7.45	1391.20	玄武岩
第88図 4	A-1区3号溝	円盤状石製品	5.25	5.90	0.5~0.8	47.80	玄武岩
第88図 5	A-1区3号溝	剥片	3.90	4.20	0.80	10.60	黒曜石
第88図 6	A-1区3号溝	敲石	14.30	5.00	3.00	325.50	玄武岩
第88図 7	A-1区3号溝	敲石	12.20	9.50	5.70	1082.90	玄武岩
第88図 8	A-1区3号溝	敲石、擦り石	10.90	10.25	5.60	1015.80	玄武岩
第88図 9	A-2区整地層	石鎌	16.20	5.70	1.10	140.50	頁岩

(3) B区の調査成果（第89図）

B区では、表土下から土器小片がわずかに出土するものの、遺構と思われるプランは確認できず、調査区のほぼ全面にわたって礫と岩盤があらわれた。A区で遺構が確認されたため、B-1区でも遺構の検出を期待したが、饅頭畠の落ち込みを検出したのみであった。このエリアの遺構が完全に削平された結果と考えるのが妥当であろうが、冒頭で述べたとおり、A~B区間には現地形で2mほどの比高差があり、途中に玄武岩が露出していることから、もともと遺構自体の存在が希薄であった可能性がある。A区1・2号溝の掘削は、丘陵の地形が大きく変化する地点に、その内側と外側を区画しようとする意図が強く働いた結果と見ることができ、また防御的にも十分機能し得る遺構である。その意味で、1・2号溝は丘陵部の内濠として捉えることもできよう。

B区出土遺物（第90図、第26表）

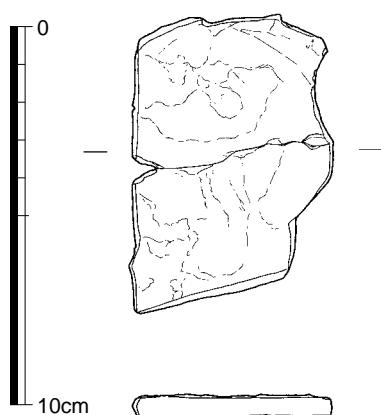
B-1区表土から出土した板状鉄製品である。ほぼ均一の厚さであり、2側面は原形をとどめる。上辺はやや弧状に丸く張り、左辺はほぼ直線である。用途は不明で、弥生時代の遺物とは思われるが詳細な時期は確認できない。



第88図 高元A区出土石器(1/2・1/4)

第26表 B - 1区出土鉄器観察表

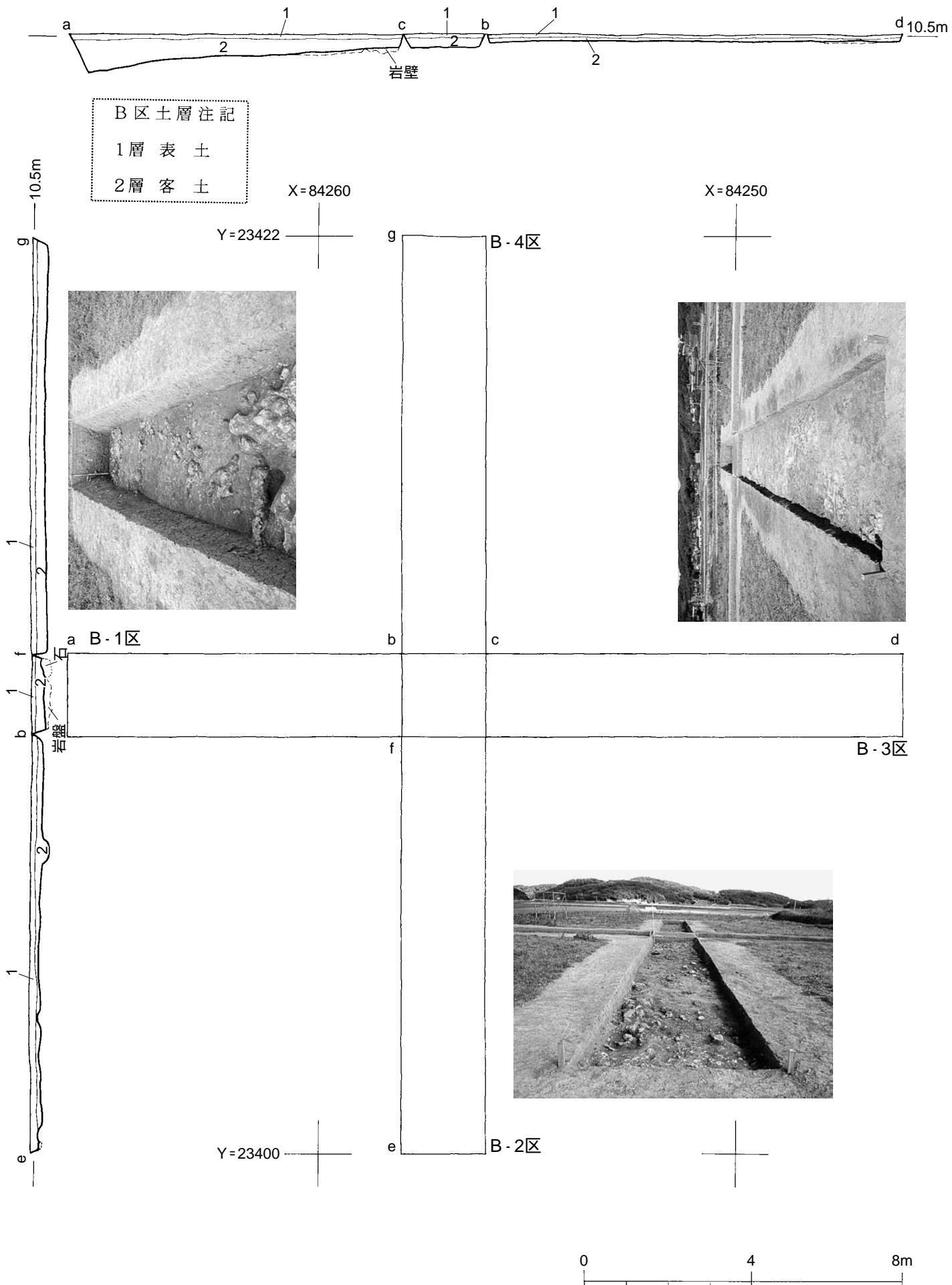
報告番号	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
第90図	高元B - 1区表土	板状鉄製品	7.80	5.40	0.60	74.00



第89図 B - 1区出土鉄器(1/2)



図版18 B区南側より幡鉾川方面を望む(南北)



(4) 小 結

以上述べてきたように、高元地区ではA区で弥生時代中期後半から後期後半にかけての多量の遺物と、多数の遺構が検出された。平成16年度の高元地区の調査において、北側A区から南側I区までの約200m間にかけて、ほぼ満遍なく黒褐色粘質土が検出されているが（第1文化層）、そこに含まれる遺物は大局的には弥生時代終末～古墳時代前期であった（注1）。今回の調査ではその時代のものは検出されておらず、A-1区3号溝より南から出土する遺物は中期後半のものが中心となることから、まずはこのエリアが後世にかなりの削平を受けたと考えるのが妥当であろう。このことを踏まえ、今回の調査から判明した事実をもとに遺構群の変遷を考察するとともに、周辺の遺構群とのつながりや今後の課題について整理してみたい。

遺構の切り合い関係や出土遺物から、遺構群の変遷は以下のように考えることができよう。

<集落形成～弥生時代中期前半>

- ①掘立柱の建物が建てられる。何度も建て直しが行われ、それらは丘陵先端部という立地から物見櫓であった可能性もある。
- ②丘陵と低地部の区画あるいは丘陵から低地部への排水を目的として1号溝と2-a・2-b号溝が掘り込まれる。その直前か同時期にA-1区9層が形成され、柱穴を塞いでテラス状の平坦な地形が形成される。

<中期後半～後期初頭>

- ③1号溝および2-b号溝の下層が埋没する。
- ④南側の斜面を削って造成が行われ、1号溝および2-a・2-b号溝が完全に埋没する。しかし、これらの溝の中央部には浅い凹みが残り、やがて土器片や礫・獸骨などが廃棄される。更には貝層が形成され、このエリアが生活遺物の廃棄場所として機能する。

<後期前半>

- ⑤造成面に対し、小児甕棺墓群が構築される。

<後期後半>

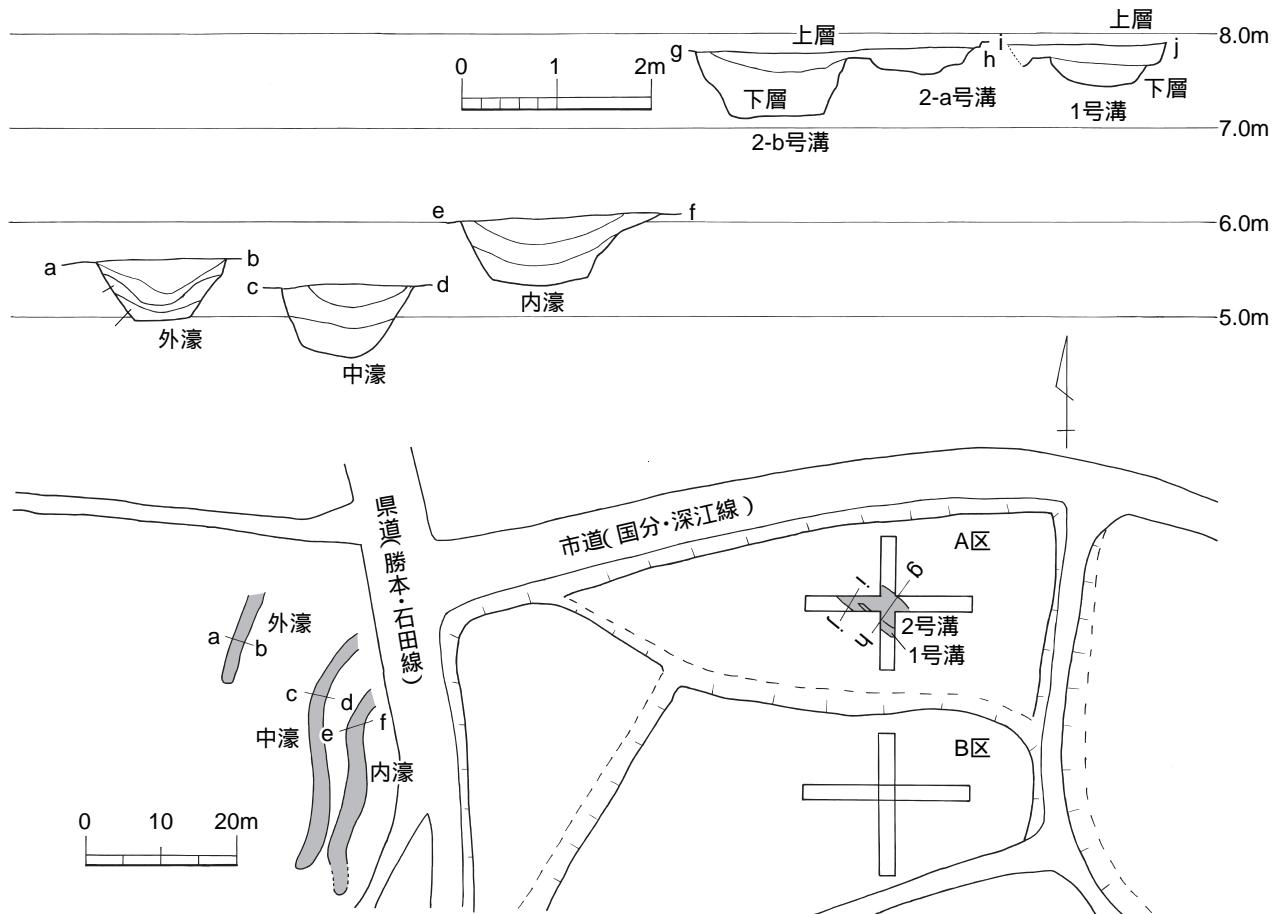
- ⑥甕棺墓群の北側に浅いV字形の3号溝が掘り込まれる。

<後期後葉～末>

- ⑦3号溝に多量の礫や土器が廃棄される。

このような時期的な遺構の変遷の中で、1号溝と2号溝の新旧関係、および2-a・2-b号溝の新旧関係は今回の調査では明らかにすることことができなかった。今後の調査で北西方向への展開を追い、切り合い関係を確認すれば判明すると思われる。現段階の調査結果としては、同じ北西方向に傾斜する3本の溝がほぼ同時期に掘り込まれ、さらにはほぼ同時に埋没していくものと解釈しておく。また、造成が甕棺墓群の構築を目的としたものなのか、それ以外の土地利用を意図したものなのかも定かで

高元地区



第91図 内濠・中濠・外濠と1・2号溝対比図（上段：土層図、下段：平面プラン）

はない。3号溝も、甕棺墓群の区画や排水溝を目的として築かれた可能性もある。3号溝の下に存在する柱穴群が面的にどれほど広がるか、どのような建物だったのかも不明である。これらの解明が今後の課題である。

最後に、1・2号溝と北側丘陵先端部の遺構群とのつながりについて考察する。1・2号溝は、これまで確認された北側丘陵周辺の溝・濠の中で最も内側を巡ることは明らかである（第65図参照）。東西に展開する溝・濠の中で、1・2号溝と接続する可能性のあるものは丘陵西側低地部で確認されている3本の濠である。第91図でこの3本の濠と1・2号溝のプランを対比してみた（注2）。この中で、外濠は幡鉾川方面傾斜して伸びており、今年度の不條地区の調査でもこの続きと思われるプラン（第38図3号溝）が確認されていることから1・2号溝とは接続しないことは明白である。では中濠・外濠はどうか。平成7年度の芦辺町教育委員会の調査（注3）では、丘陵先端の延長上にある現市道の深江・国分線下的低地部を調査しているが、自然流路以外の溝を検出していない。このことから、中濠・外濠は東に折れて市道よりも南側を通って西側に接続することが想定される。出土遺物を見ると、内濠Ⅲ層から弥生時代中期前半、中濠Ⅱ層および内濠Ⅱ層から中期後半、内濠Ⅰ層および中濠Ⅰ層から中期後半～後期初頭の土器がそれぞれ出土しており、このことは2-b号溝のⅠ・Ⅱ層の層序とほぼ共通している。断定はできないが、1・2号溝は西側へと傾斜を続けながら市道・県道の

下へ潜り、内濠・中濠へと接続するものと考えられよう。またそうであれば、1・2号溝の掘削時期もやはり内濠・中濠と共通するであろうから、弥生時代中期前半の段階に想定される。

一方、東側については、昨年度の低地部の調査で、丘陵裾部を南北に走ると思われる6号溝が検出されているが、西側への展開は確認できなかった。このため、1・2号溝は低地部へ下ることなく、現在の農道と同方向に南へ伸びるか、あるいは途中で途切れる可能性があるが、詳細については今後の調査に委ねられる。

西側低地部の内濠・中濠は一旦埋没した後、再度掘り直されて古墳時代前期まで存続するが、1・2号溝の埋没後は墓域へと変化する。丘陵上と低地の機能の分化を示すものであり、すでに指摘されているように（注4）、原の辻遺跡の集落の構成が中期末～後期初頭の間で大きく変化することが今回の調査でも追認されることとなった。

（注1）第8表-10

（注2）第8表-6・7・8

（注3）第8表-5

（注4）宮崎貴夫「原の辻遺跡における歴史的契機について」（『西海考古』第4号 西海考古同人会 2001）

【高元地区参考文献】

- 橋口達也「甕棺の編年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XXXI 中巻』福岡県教育委員会 1979
- 田崎博之「須玖式土器の再検討」『史淵』第122輯 九州大学文学部 1985
- 常松幹雄「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢』Ⅲ 早稲田大学出版部 1991
- 『弥生文化の研究』4～弥生土器Ⅱ～ 雄山閣出版 1994
- 武末純一「九州地方の土器」『考古資料大觀』第1巻～弥生・古墳時代 土器Ⅰ 小学館 2003
- 福田一志・中尾篤志編『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第30集 長崎県教育委員会 2005

IV . ま と め

平成17年度調査研究事業の最大の成果は、船着き場跡の調査である。平成8年度は農道と排水路工事にかかる部分のみの調査であり、遺構の範囲の確定にまでには至らなかった。したがって今年度の調査はその範囲の確定と、詳細な遺構の構造を調べることが主な目的となっていた。

その成果として、一つ目は船着き場が造られた河川の幅が確認されたことがある。約35mの幅があり他の調査区で確認された川幅よりも一段と広いため、船着き場を築造する条件を十分に満たしている。二つ目は船着き場が水路をまわりにめぐらす島状の地形であったことである。東側には約9m、深さ約1.2mの素掘りの水路があり、南側にまわると人頭大の礫石を敷きつめた水路が築かれている。三つ目に船着き場の南側には平場があり水路で区画されることである。水路がめぐらされると同時に船着き場の範囲が南北約38mであることがわかり、突堤部から水路まで平場があることが明らかになった。ただ残念なことに西側の状況の確認までは至らず、船着き場が築かれた河川の対岸の状況は十分な調査ができなかった。

不條地区では船着き場跡と同様に、平成15年度に検出した護岸遺構など河川に付随する施設の存在が考慮されるようになり、河川の流路の確認が必要であると判断しての調査であった。その成果として、弥生時代中期前半以降の河川が再確認され、かなり蛇行しながら流れていることと川幅が各時期により変化しており、河川内にテラス状の堆積が確認された部分があることがわかった。河川の埋土は、Ⅰ期が弥生時代中期前葉から後期前葉、Ⅱ期が弥生時代後期中葉から後葉、Ⅲ期が弥生時代終末から古墳時代前半の大きく3時期に分けられている。護岸遺構の周辺では、川幅が狭くなり、集石遺構や溝状の落ち込みなどの小規模な遺構が確認された。一方東西に流れをとる河川（1号河川跡）は、弥生時代後期以降水田造成のために埋められていることが明確となった。埋土中に祭祀関係の土器が集中することも気になる成果である。

高元地区は墓域の確定が主な目的であった。弥生時代後期の甕棺墓2基が検出され、墓域として成立していたことは間違いかなかった。ただそれより以前の溝が3条確認され、丘陵先端部の最も内側をめぐる溝と言える。最下層の土器から弥生時代中期中葉の時期とわかっており、それが埋められて後期の墓域をつくり出していることとなる。これは今後も丘陵部の調査において考慮しないといけない造成であり、さらに詳細な調査が必要である。

今年度から、丘陵部では本格的な遺跡整備が着手されており、当時の集落の状況が復元されつつある。今回の調査の成果が今後の遺跡復元の資料となり、より多くの人々に遺構の重要性を十分に理解してもらい、活用しやすい環境をつくりあげていかなければならぬと考える。

最後に、船着き場跡の調査では、各専門の先生方をはじめ地元地権者の方々、生産組合の方々に多大なご協力をいただいた。この場をお借りして感謝の意を申し上げたい。

付 編

長崎県,平成17年度原の辻遺跡(不條地区)における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I . 原の辻遺跡(不條地区)における放射性炭素年代測定

1 . 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
1	D区, 旧河川内南側サブトレンチ, 8層	樹皮	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
2	D区, 旧河川内南側サブトレンチ, 9層	木製品	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
3	G・H区, 1号河川跡 (SR 1), 5層	杭	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
4	G・H区, 1号河川跡 (SR 1) 下, 8層	樹木	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
5	船着き場跡, 7トレンチ, 7層(石直上)	樹木	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
6	船着き場跡, 8トレンチ, 5層	樹木	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS

AMS : 加速器質量分析法(Accelerator Mass Spectrometry)

2 . 測定結果

試料名	測定 (P L D -)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代(西暦) (1σ : 68%確率, 2σ : 95%確率)
1	5266	- 28.21	1855 ± 20	1σ : cal AD125 ~ 180, 185 ~ 215 2σ : cal AD80 ~ 240
2	5267	- 27.18	1890 ± 20	1σ : cal AD80 ~ 130 2σ : cal AD50 ~ 210
3	5268	- 29.47	2225 ± 20	1σ : cal BC370 ~ 350, 300 ~ 200 2σ : cal BC390 ~ 200
4	5269	- 25.96	2485 ± 20	1σ : cal BC760 ~ 730, 700 ~ 540 2σ : cal BC770 ~ 510
5	5270	- 27.88	1860 ± 20	1σ : cal AD90 ~ 100, 120 ~ 220 2σ : cal AD80 ~ 230
6	5271	- 27.53	2605 ± 20	1σ : cal BC805 ~ 785 2σ : cal BC815 ~ 770

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

(2) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25(%) に標準化することによって得られる年代である。

(3) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。 1σ (68%確率) と 2σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

3. 所見

加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定の結果、No.1 では 1855 ± 20 年 BP (1σ の曆年代で AD125 ~ 180, 185 ~ 215 年)、No.2 では 1890 ± 20 年 BP (同 AD80 ~ 130 年)、No.3 では 2225 ± 20 年 BP (同 BC370 ~ 350, 300 ~ 200 年)、No.4 では 2485 ± 20 年 BP (同 BC760 ~ 730, 700 ~ 540 年)、No.5 では 1860 ± 20 年 BP (同 AD90 ~ 100, 120 ~ 220 年)、No.6 では 2605 ± 20 年 BP (同 BC805 ~ 785 年) の年代値が得られた。

このうち、No.3 と No.4 では曆年代の年代幅がかなり大きくなっているが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。

文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2), 425 - 430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43 (2A) 355 - 363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3 - 20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Sounthor, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029 - 1058.

Ⅱ. 原の辻遺跡(不條地区)における珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2. 試料

試料は、不條(船着き場跡)において7トレンチの7層(護岸石直上)および8トレンチの5層から採取された計2点である。

3. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm³を秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晚放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗(5~6回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1500倍行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

(1) 分類群

表1に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図1-2に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は、Lowe(1974)や渡辺(2005)等の記載、陸生珪藻は小杉(1986)、環境指標種群の海水生種から汽水生種は小杉(1988)、淡水生種は安藤(1990)によった。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔中-真塩性種〕

Navicula peregrine, *Thalassionema nitzschiooides*

〔貧-中塩性種〕

Rhopalodia gibberula

[貧塩性種]

Achnanthes lanceolata, *Amphora copulata*, *Coccconeis placentula*, *Cymbella cuspidata*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella tumida*, *Diploneis elliptica*, *Diploneis* spp., *Diploneis yatukaensis*, *Eunotia minor*, *Eunotia praerupta*, *Eunotia soleirolii*, *Fragilaria capucina*, *Fragilaria construens*, *Gomphonema acuminatum*, *Gomphonema clevei*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula contenta*, *Navicula elginensis*, *Navicula mutica*, *Navicula pusio*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia* sp.1, *Synedra ulna*,

(2)珪藻群集の特徴

1) 7トレンチ(図1)

7層では、珪藻密度は32,000個/cm³と低い値である。ほとんどが貧塩性種(淡水生種)で占められ、中-真塩性種(汽-海水生種)もわずかに出現する。貧塩性種(淡水生種)では、止水性種の割合が高く、次いで流水不定性種、流水性種と続く。止水性種では、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema acuminatum* などが出現する。流水不定性種では *Fragilaria capucina*, *Gomphonema* spp., *Amphora copulata*, *Eunotia soleirolii* が出現し、流水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の *Coccconeis placentula* や *Gomphonema parvulum* などが出現する。中-真塩性種(汽-海水生種)では、内湾環境指標種群の *Thalassionema nitzschiooides* がわずかに出現する。

2) 8トレンチ(図2)

5層では、珪藻密度は36,000個/cm³と低い値である。ほとんどが貧塩性種(淡水生種)で占められ、貧-中塩性種(淡-汽水生種)も低率に出現する。貧塩性種(淡水生種)では、陸生珪藻の割合が高く、流水不定性種、止水性種、流水性種と続く。陸生珪藻では、*Diploneis yatukaensis* が、*Navicula mutica* などが比較的高率に出現し、*Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia schroederii* などが伴われる。流水不定性種では、*Diploneis* spp., *Pinnularia* sp.1, *Amphora copulata* などが出現する。止水性種では、*Pinnularia microstauron* や *Eunotia minor* などが低率に出現する。

5 . 珪藻分析から推定される堆積環境

8トレンチの5層から出土した木材では、放射性炭素年代測定で2605±20年BPの年代値が得られている(第I章)。同層では、陸生珪藻が優占し、流水不定性種、止水性種、流水性種が伴わることから、止水域や流水域の影響を受ける湿潤な陸域の環境が示唆される。なお、貧-中塩性種(淡-汽水生種)は認められるものの、中-真塩性種(汽-海水生種)が検出されないことから、直接的な海水の影響はなかったと考えられる。

7トレンチの7層から出土した木材(護岸石直上)では、1860±20年BPの年代値が得られている。同層では、止水性種が多く、流水不定性種、陸生珪藻、流水性種と多様な生態性の珪藻が出現し、沼沢湿地付着生環境指標種群の割合が比較的高いことから、河川からの流れ込みのある水生植物の繁茂

する淀んだやや浅い水域で、陸域の湿地へと連なる環境が推定される。また、内湾環境指標種群を含む中 - 真塩性種(汽 - 海水生種)が認められることから、内湾の海水の影響が示唆され、海とつながっていた可能性が考えられる。

文献

- Asai,K.& Watanabe,T . (1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom ,10 p 35 - 47 .
- Hustedt,F . (1937 - 1938)Systematische und ologische Untersuchungen über die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda - Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl .15 p .131 - 506 .
- Lowe,R.L . (1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh - water diatoms 333p., National Environmental Reserch.Center.
- Patrick, R.eimer, C. W (1966)The diatom of the United States, vol .1 Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No .13 ,The Academy of Natural Sciences of Philadelphia 644p.
- Patrick, R.eimer, C. W (1975)The diatom of the United States, vol .2 Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No .13 ,The Academy of Natural Sciences of Philadelphia 213p.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 東北地理 , 42 , p .73 - 88 .
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 珪藻学会誌 , 6 , p 23 - 45 .
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義 - わが国への導入とその展望 - . 植生史研究 , 第 1 号 , 植生史研究会 , p 29 - 44 .
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 , 27 , p .1 - 20 .
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIpO, pH 耐性能 . 内田老鶴園 , pp 666 .

表1 原の辻遺跡、不條(船着き場跡)における珪藻分析結果

分類群	7トレンチ		8トレンチ	
	7層	5層	7層	5層
貧塩性種(淡水生種)				
<i>Achnanthes inflata</i>	1			
<i>Achnanthes lanceolata</i>	1	1		
<i>Amphora copulata</i>	5	4		
<i>Caloneis hyalina</i>		1		
<i>Caloneis</i> spp.		1		
<i>Cocconeis placentula</i>	7			
<i>Cymbella cuspidata</i>	1	1		
<i>Cymbella lanceolata</i>	1			
<i>Cymbella naviculiformis</i>	1			
<i>Cymbella silesiaca</i>	2			
<i>Cymbella tumida</i>	8	1		
<i>Diploneis elliptica</i>	2			
<i>Diploneis</i> spp.	1	7		
<i>Diploneis yatukaensis</i>		24		
<i>Eunotia minor</i>	12	3		
<i>Eunotia praerupta</i>	1	2		
<i>Eunotia soleirolii</i>	5	1		
<i>Eunotia</i> spp.	1			
<i>Fragilaria brevistriata</i>	1			
<i>Fragilaria capucina</i>	6			
<i>Fragilaria construens</i>	4	1		
<i>Fragilaria oldenburgiana</i>	1			
<i>Gomphonema acuminatum</i>	4			
<i>Gomphonema clevei</i>		1		
<i>Gomphonema gracile</i>	5			
<i>Gomphonema minutum</i>	3			
<i>Gomphonema parvulum</i>	5	1		
<i>Gomphonema</i> spp.	6			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	2	7		
<i>Navicula confervacea</i>	3			
<i>Navicula contenta</i>	2			
<i>Navicula cuspidata</i>		1		
<i>Navicula elginensis</i>		2		
<i>Navicula mutica</i>		17		
<i>Navicula pusio</i>		1		
<i>Navicula radiosa</i>	1			
<i>Nitzschia brevissima</i>	1			
<i>Orthoseira roeseana</i>		1		
<i>Pinnularia appendiculata</i>		1		
<i>Pinnularia microstauron</i>		5		
<i>Pinnularia schroederii</i>		2		
<i>Pinnularia</i> sp.1		6		
<i>Pinnularia viridis</i>	1	1		
<i>Stauroneis anceps</i>	1			
<i>Stauroneis lauenburgiana</i>		1		
<i>Stauroneis</i> spp.	1			
<i>Synedra ulna</i>	2			
貧 - 中塩性種(淡 - 汽水生種)				
<i>Rhopalodia gibberula</i>	1	7		
中 - 真塩性種(汽 - 海水生種)				
<i>Navicula meniscus</i>	1			
<i>Navicula peregrina</i>	2			
<i>Thalassionema nitzschioides</i>	2			
合 計	104	101		
未同定	2	18		
破片	118	132		
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	3.2	3.6		
	× 10 ⁴	× 10 ⁴		
完形殻保存率(%)	47.3	47.4		

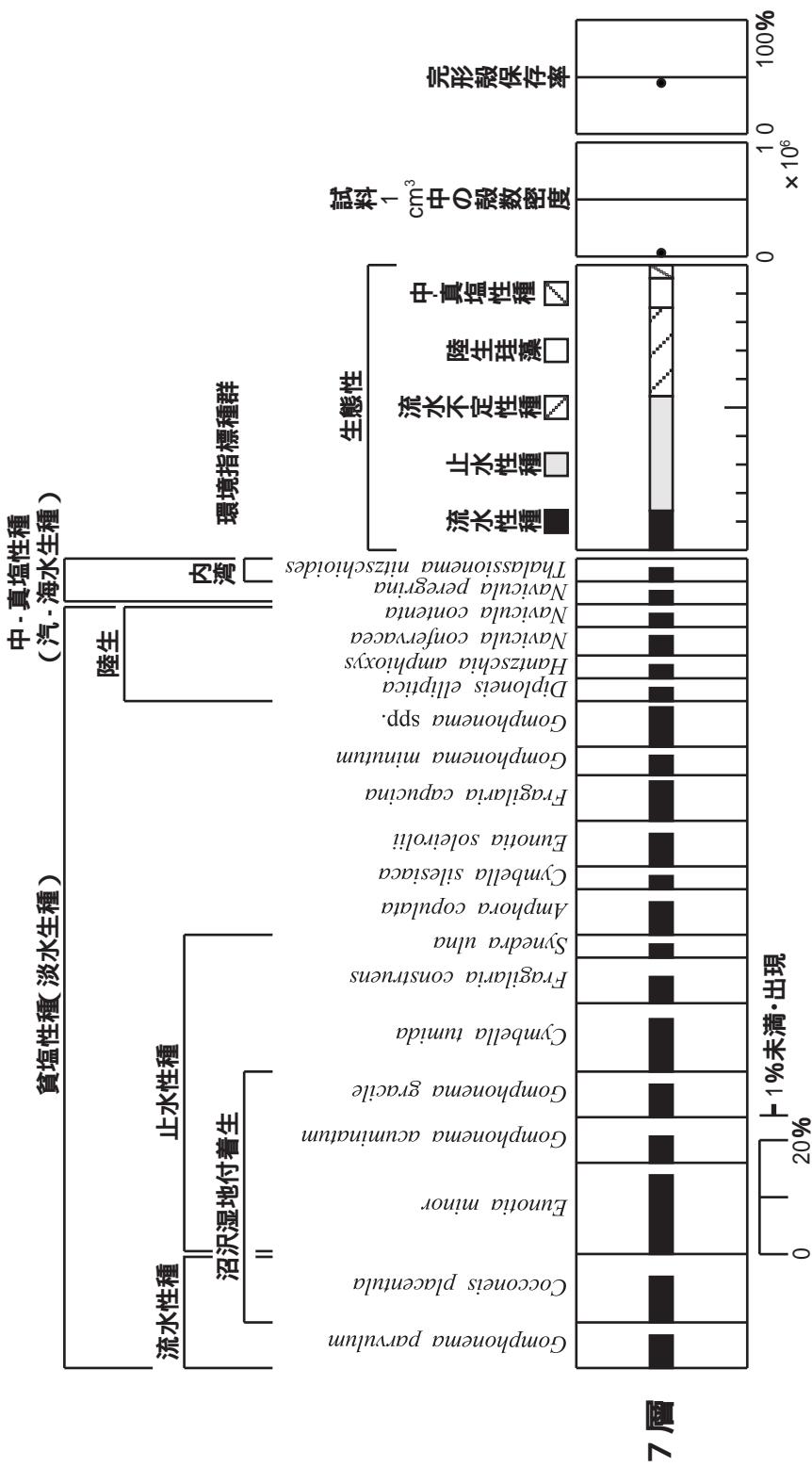


図1 原の辻道跡、不條（船着き場跡）7トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム

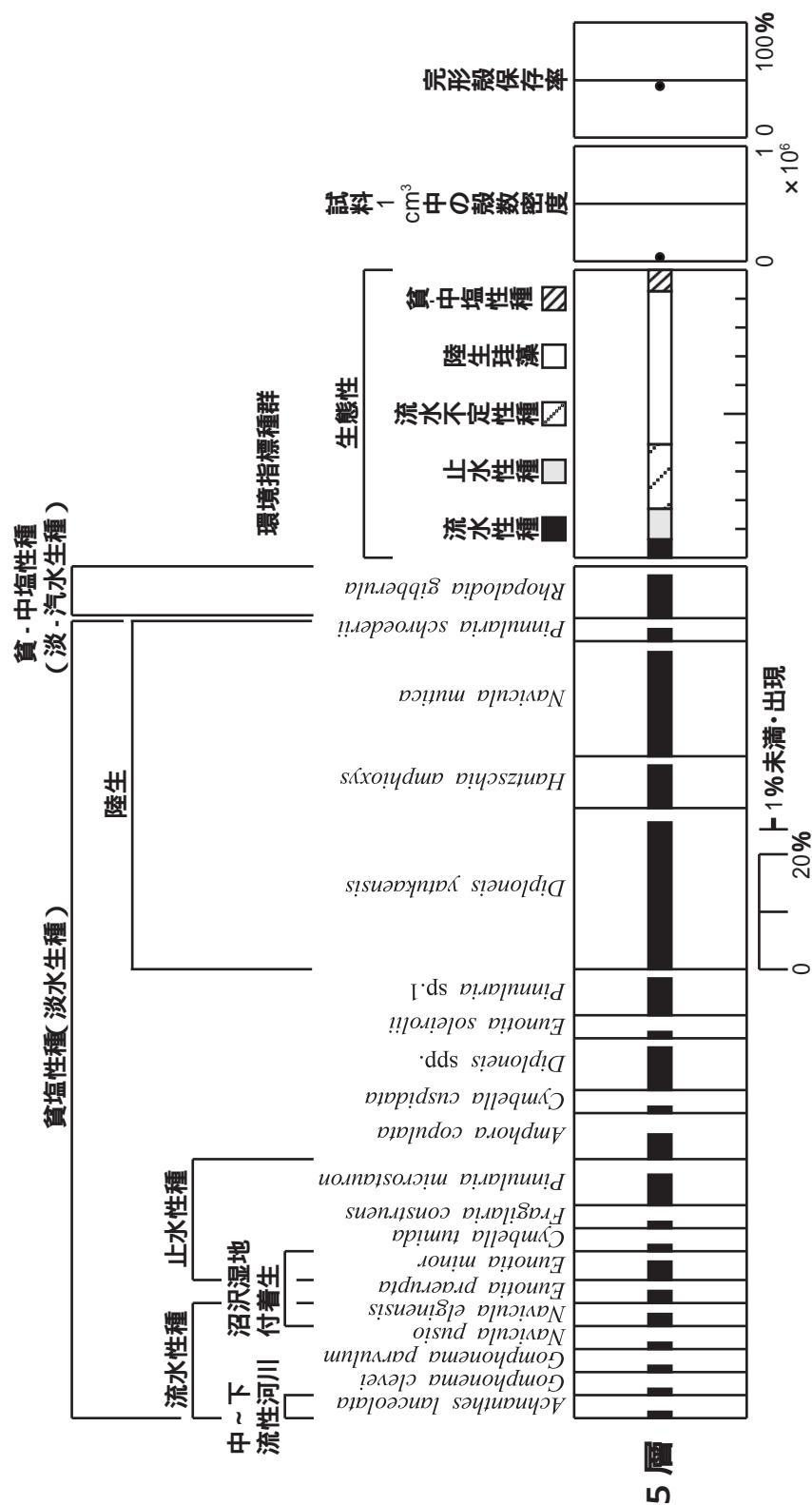
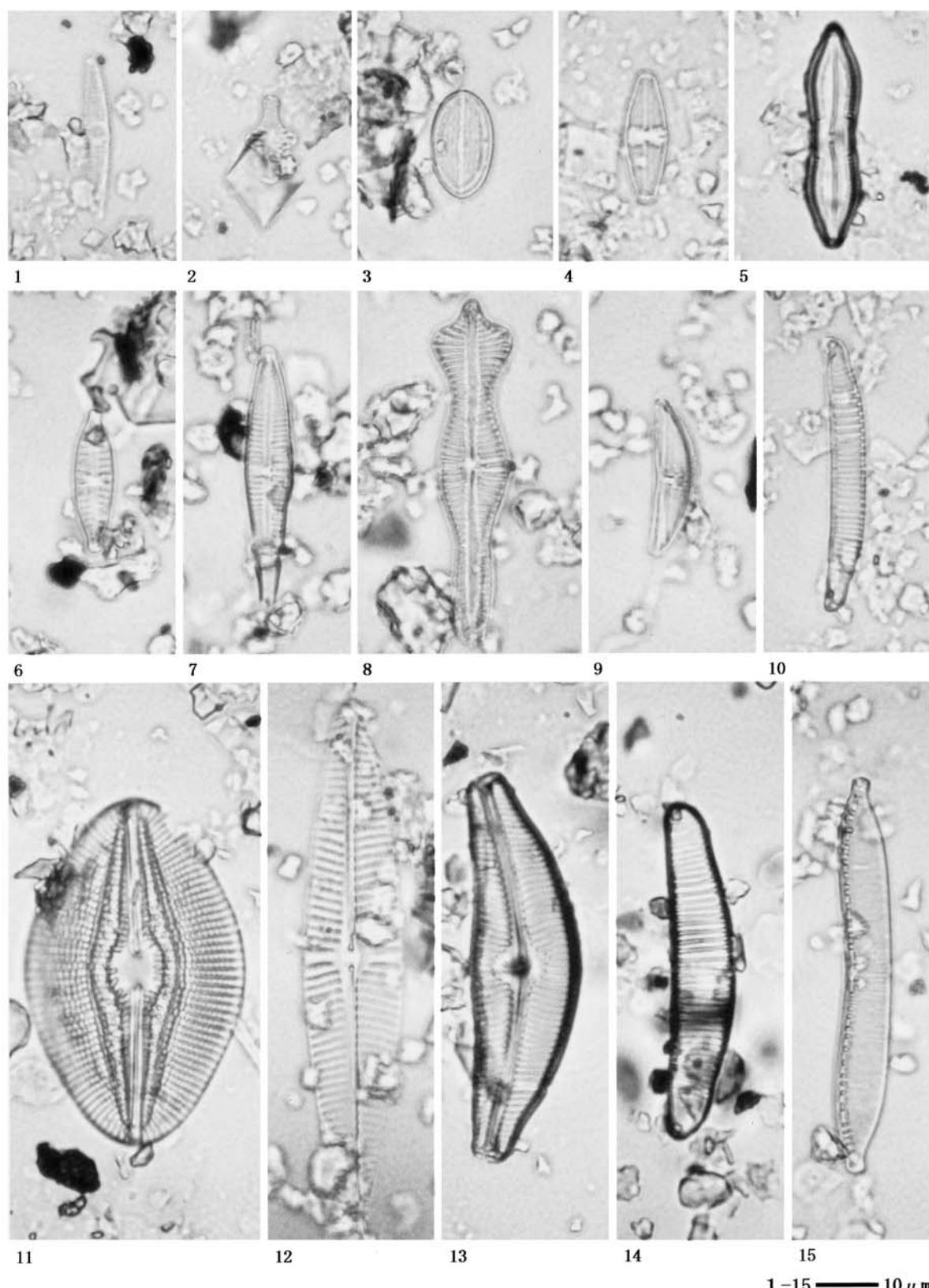


図2 原の辻遺跡、不條（船着き場跡）8トレンチにおける主要珪藻ダイアグラム

原の辻遺跡の珪藻



1-15 ————— 10 μm

- 1 . *Fragilaria capucina*
- 2 . *Fragilaria construens*
- 3 . *Cocconeis placentula*
- 4 . *Navicula mutica*
- 5 . *Pinnularia* SP. 1
- 6 . *Gomphonema parvulum*
- 7 . *Gomphonema gracile*
- 8 . *Gomphonema acuminatum*
- 9 . *Amphora copulata*
- 10 . *Eunotia minor*
- 11 . *Diploneis yatukaensis*
- 12 . *Navicula peregrina*
- 13 . *Gymbella tumida*
- 14 . *Eunotia soleirolii*
- 15 . *Hantzschia amphioxys*

III . 原の辻遺跡(不條地区)における植物珪酸体分析

1 . はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2 . 試料

分析試料は、G・H区の1層～8層から採取された8点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3 . 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスピーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4 . 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量

を行い、その結果を表1および図1に示した。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科・タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科・その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1 gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

G・H区では1層（試料1）から8層（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、1層（試料）～5層（試料4）では、密度が4,800～5,900個/gと高い値である。したがって、これらの層準では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。

7層（試料6）～8層（試料8）では、密度が800～2,100個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稻作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。

1) 植物珪酸体の検出状況

8層から7層にかけては、ヨシ属、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。また樹木（照葉樹）のクスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、ブナ科（シイ属）など

も検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山，1999）。5層から2層にかけては、前述のようにイネが多量に検出され、ヨシ属や樹木は減少している。1層にかけては、メダケ節型が大幅に増加している。おもな分類群の推定生産量によると、5層より上位ではイネが優勢であり、1層ではメダケ節型が多くなっている。

2) 植生と環境の推定

弥生時代前期前半とされる8層（SR-3の埋土）から7層にかけては、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、調査地点もしくはその近辺では稻作が行われていたと推定される。また、遺跡周辺にはクスノキ科、イスノキ属、シイ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

弥生時代中期前葉～後期初頭とされる5層（SR-1の埋土）から弥生時代後期とされる2層にかけては、継続的に稻作が行われていたと考えられ、イネ科の野草・雑草はあまり見られなかつたと推定される。弥生時代中期～後期とされる1層の時期には、近隣にメダケ属（おもにメダケ節）の竹林が分布していたと考えられる。メダケ節のメダケは高さ7m、直径3cmにもなり、建築用材や竹細工の材料などとして有用である（室井、1969）。

6.まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、弥生時代中期前葉～後期初頭とされる5層（SR-1の埋土）から弥生時代中期～後期とされる1層にかけての各層では、イネが多量に検出され、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、弥生時代前期前半とされる8層（SR-3の埋土）から7層にかけての各層でも、調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていた可能性が認められた。

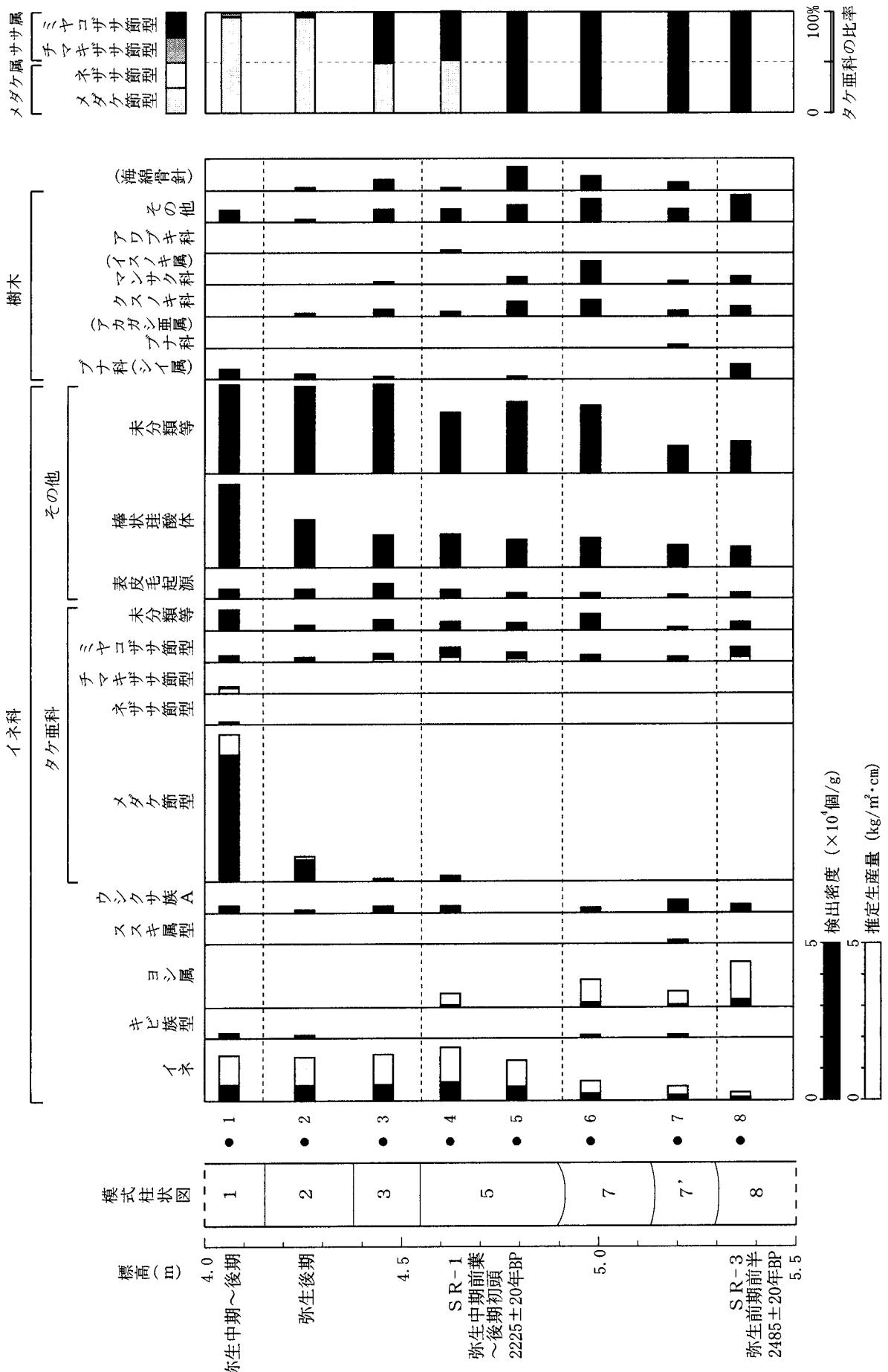
8層～7層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科、イスノキ属、シイ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。5層～2層の堆積当時は、集約的な稻作が行われていたと考えられ、イネ科の野草・雑草はあまり見られなかつたと推定される。1層の時期には、近隣にメダケ属（おもにメダケ節）の竹林が分布していたと考えられる。

文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70-83.
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究 38(2), p.109-123.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 - . 考古学と自然科学，9，p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 - . 考古学と自然科学，17，p.73-85.
- 室井綽（1969）竹・笹の話 - よみもの植物記 - , 北隆館 .

表1 長崎県原の遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料							不條G・H区
		1	2	3	4	5	6	7	
イネ科	Gramineae (Grasses)								
イネ	Oryza sativa	50	48	51	59	44	21	15	8
キビ族型	Panicet type	14	7		7		7	8	
ヨシ属	Phragmites						14	8	23
ススキ属型	Miscanthus type							8	
ワシクサ族 A	Andropogoneae A type	21	7	19	20		14	38	23
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	421	69	6	13				
メダケ節型	Pleoblastus sect. Nipponocalamus	7							
ネザサ節型	Pleoblastus sect. Nezasa	21	14	26	46	29	21	15	
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	21	14	32	26	22	21	15	45
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	64	14				50	8	23
未分類等	Others								
その他イネ科	Husk hair origin	29	28	45	26	15	14	8	15
表皮毛起源	Rod-shaped	264	151	102	105	87	92	68	53
棒状珪酸体	Others	279	275	281	191	225	213	84	98
樹木起源	Arboreal								
ブナ科(シイ属)	Castanopsis	29	14	6		7			45
ブナ科(アカガシ属)	Quercus subgen. Cyclobalanopsis		7	19	13	44	50	15	
クスノキ科	Lauraceae			6	22	71	71	8	30
マンサク科(イスノキ属)	Distylium								23
アワブキ科	Sabiaceae								
その他	Others	36	7	38	39	51	71	38	83
(海綿骨針)	Sponge	7	32	7	73	43	43	23	
植物珪酸体総数	Total	1257	640	633	553	545	638	327	465
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m ² ・cm): 試料の仮比重を1.0として算出									
イネ	Oryza sativa	1.47	1.42	1.50	1.74	1.28	0.63	0.45	0.22
ヨシ属	Phragmites				0.42		0.90	0.48	1.42
ススキ属型	Miscanthus type							0.09	
メダケ節型	Pleoblastus sect. Nipponocalamus	4.89	0.80	0.07	0.15				
ネザサ節型	Pleoblastus sect. Nezasa	0.03							
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.16							
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.06	0.04	0.08	0.14	0.09	0.06	0.05	0.14
タケ亜科の比率(%)									
メダケ節型	Pleoblastus sect. Nipponocalamus	95	95	49	52				
ネザサ節型	Pleoblastus sect. Nezasa	1							
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	3	5	51	48	100	100	100	100
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	1							



報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき							
書名	原の辻遺跡							
副書名	原の辻遺跡調査研究事業報告書							
巻次								
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	福田一志・寺田正剛・溝上貴稔							
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所							
所在地	〒811 5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地 1 TEL0920(45)4080							
発行年月日	西暦2006年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東經 °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
はる つじ 原の辻遺跡	長崎県壱岐市 芦辺町 深江鶴亀触	市町村	遺跡番号	33 45 30	129 45 55	20050509 20051227	1,965 m ²	原の辻遺 跡調査研 究事業 (国庫補 助事業)
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
原の辻遺跡	集落・墓地	弥生時代 古墳時代	河川跡・溝・ 集石遺構・船着 き場跡・水路・ 甕棺墓	弥生土器・土師 器・敲石・石鎌・ 銅鏡・袋状鉄斧・ 刀子・短甲(札 甲)・ガラス小 玉・ねずみ返し・ 建築部材				

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第33集

原の辻 遺跡

2006 . 3 . 24

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町 2番13号

印刷 株式会社 昭和堂